新富町文化財調査報告書　第70集

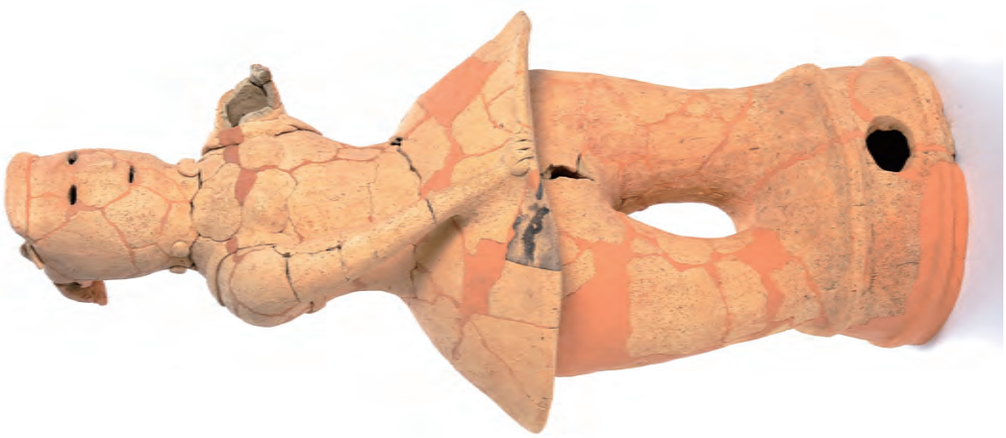
国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備に伴う発掘調査報告書（２）

百足塚古墳(新田原58号墳)
新田原62・63・209号墳

遺物編

２０１５・３

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会



1　女性埴輪

2　女性埴輪

１　男性埴輪（跪く人）

２　盾持ち人形埴輪

1　人物埴輪集合

2　鳥形埴輪集合

1　家形埴輪

2　柵形埴輪集合

序　文

新富町は宮崎平野の北部にあって、太平洋を望む自然豊かな町です。町の南部には九州山地を源とする一ツ瀬川が西から東へと蛇行しながら太平洋へと流れています。

この一ツ瀬川流域には旧石器時代から連綿と続く多くの遺跡群が存在し、人々の生活の痕跡は３万年以上も前に遡ることが分かっています。とくに古墳時代には日向地方でも多くの古墳が築かれたことで知られ、新田原古墳群も江戸時代から文献に登場するなど、対岸の西都原古墳群とともに早くから多くの研究者が訪れるようになりました。昭和 19 年に国の史跡に指定され、その後は現在にいたるまで地元の方々の手によって保護されています。

町ではこの重要な遺跡を後世にわたって保存し、生涯学習の場として活用するため、史跡整備計画を立案し、祇園原古墳群内の百足塚古墳の調査を平成９年度から開始しました。

百足塚古墳は今回の調査で西日本でも有数の形象埴輪群や、県内では最古となる横穴式石室など貴重な発見が相次ぎ、日向地方の古墳時代後期を代表する首長墓であることが分かりました。そして本書では埴輪群の内容を報告することができました。

これらの成果を学術研究はもとより郷土学習の素材として活用しており、整備が終了した百足塚古墳は多くの町民の方に、憩いの場として利用されることを期待しています。

最後になりましたが、調査に際してご指導を賜った関係機関や多くの有識者の方々、快くご協力いただいた地元の方々に深く感謝を申し上げます。

平成２７年３月

新富町教育委員会
教育長　米良　郁子

例　言

1．本書は国指定史跡新田原古墳群のうち、百足塚古墳（58 号墳）とその周辺に展開する 3 基の円墳（62･63･209 号墳）の整備に伴い発掘調査を行った報告書の第 2 分冊（遺物編）である。遺構については平成 25 年度刊行の第 1 分冊で報告しているので、そちらを参照いただきたい。

2．発掘調査は平成 9 年度から 16 年度までの 7 年間行った。その後平成 20 年度から 24 年度まで墳丘復元工事を行い、それに伴う補足調査を実施している。整理作業は平成 9 年度以降継続して実施した。

3．本事業は文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金の採択・交付を受けて実施された。

4．本事業は、文化庁記念物課および宮崎県教育庁文化財課の指導を受けて実施した。

5．本事業のための指導組織は以下のとおりである。調査方法・整備方針などは委員会の指導により決定した。

【新田原古墳群史跡整備検討専門委員会】

委員　小田富士雄（考古学　福岡大学名誉教授）
　　柳沢　一男（考古学　宮崎大学名誉教授）
　　森本　幸裕（修景学　京都学園大学教授）

【特別指導】

　　高橋　克壽（奈良文化財研究所平城宮調査部文部技官）

【宮崎県文化財課】

　　重山　郁子
　　松林　豊樹
　　飯田　博之
　　和田　理啓
　　東　　憲章
　　今塩屋毅行

6．本事業にかかわる事務・調査組織は次のとおりである。

新富町教育委員会

総　　括　　清　　郁雄（教育長　平成 9 ～ 15 年度）
　　下村　喜秋（教育長　平成 15 ～ 19 年度）
　　米良　郁子（教育長　平成 19 年度～）
　　図師　　勉（社会教育課課長　平成 9 ～ 11 年度）
　　比江島年見（社会教育課課長　平成 12 ～ 17 年度）
　　斉藤　久明（社会教育課課長　平成 18 年度）
　　馬渡　和規（生涯学習課課長　平成 19 年度）

後藤　博己（生涯学習課課長　平成 20 ～ 22 年度）
川口　弘克（生涯学習課課長　平成 23 年度）
河野　博敏（生涯学習課課長　平成 24 年度）
太田　　功（生涯学習課課長　平成 25・26 年度）
高正　静夫（社会教育課課長補佐　平成 9 年度）
富田　次男（社会教育課課長補佐　平成 10 ～ 13 年度）
松浦　新一（社会教育課課長補佐　平成 14 ～ 15 年度）
河野　　裕（社会教育課課長補佐　平成 16 ～ 18 年度）
福原　広一（生涯学習課課長補佐　平成 18 ～ 19 年度）
金丸　雅裕（生涯学習課課長補佐　平成 20 ～ 21 年度）
有田　辰美（生涯学習課課長補佐　平成 22 ～ 23 年度）
有馬　義人（生涯学習課課長補佐　平成 24 年度～）

庶　　務　　山崎　和子（社会教育課副主幹　平成 9 ～ 11 年度）
杉田　伸子（社会教育課副主幹　平成 12 年度）
若木家えつこ（社会教育課主幹　平成 13 ～ 14 年度）
松本美奈子（社会教育課主任主事　平成 15 ～ 18 年度）
※平成 19 年度以降は調査担当者が庶務を行った。

調査担当　　有馬　義人（生涯学習課課長補佐　平成 9 ～ 21 年度）
樋渡将太郎（生涯学習課係長　平成 22 ～ 26 年度）

調査補助　　新森　美穂（社会教育課嘱託員　平成 10 ～ 12 年度）
松永　幸寿（社会教育課嘱託員　平成 13 年度）
鈴木　資子（社会教育課嘱託員　平成 15 年度）
玉谷　鮎美（生涯学習課嘱託員　平成 23 年度）

参加学生　　藤本貴仁　松尾茂樹　長友俊博　芝原知行　杉岡栄治　古屋美樹　松野圭太
河畑健一　黒木誠也　師富国博　当房祐理　宮崎恵一　藤原理恵　児玉健作
富田綾　落合健一　小森昌子　山本紗弥香　鈴木資子　塩冶琢磨　森山潤一
上村広道　大園幸輝　本部裕美　野村碧里　新納弘子　中村有花　斉藤優子

作業員　　滝口則雄　滝口恵美子　岩下ヨシ子　野尻富子　日野君代　岩本栄
杉尾美千子　新恵トシ子　大原一彦　日野仁美　小守容子　吉野大
宝崎忠昌　倉永喜　土屋信好　河野隆子　出井クニ　宮ヶ中千穂
江口栄子　長友幸枝　寺原利雄　甲斐晴子　上原咲子　栗野聖子
坂本貞夫　土師美智子　甲斐直美　有田具子　椎春子　宮本昭男
森晃一　守部牧子　清美貴子　満尾智美　入江智仁　古川友昭
田口太郎　柳田弘　長友利子　平尾ミズエ　佐々木エリ子
日高里子　那賀ミチ子　石川紋子　溝口敦子　高家武男　本部定臣
上山途枝子　黒木啓子　橋口哲男　和田啓子　東美津子　野添敏信
福島将太　沼口未菓　清久夫　芳野弘征　岩本勉　興梠宝　高山一
高山政雄　米谷房喜　税田道人　図師満坦　宇都宮正臣

7．遺物実測は樋渡・玉谷・吉永・古荘・甲斐（直）が行った。

8．遺物の写真撮影は主に樋渡が行い、完形埴輪については一部東憲章氏、藤木聡氏（宮崎県立西都原考古博物館）に撮影・指導して頂いた。

また、巻頭図版に使用した写真の一部は東憲章氏、牛嶋茂氏（独立行政法人奈良文化財研究所：当時）に撮影・ご協力を頂いた。

9．整理作業は樋渡、杉尾、甲斐、清、溝口、吉永で行い、トレースは樋渡が行った。

10. 本書の編集は樋渡が行い、第Ⅲ章の第１節は株式会社パレオ・ラボに、第２節は株式会社古環境研究所が分析と執筆を行い、それ以外はすべて樋渡が行った。

11. 出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会生涯学習課に保管してある。

12. 発掘調査および本書の作成にあたり下記の方々、機関のご協力を賜った。

近藤　義郎　杉井健　田中祐介　岸本圭　中村耕治　高橋克壽　古屋毅　大久保徹也
広瀬和雄　宮元香織　橋本達也　森下章司　今田治代　石野博信　林田和人
金山尚志　置田雅昭　平嶋文博　高橋美久二　池田榮史　藤丸詔八郎　岸本直文
岡村道雄　沢田むつ代　中居さやか　日野宏　村上恭通　永山修一　桑原久男
西園勝彦　小原弘巳　藤本貴仁　上原真人　望月幹夫　清喜裕二　松本岩雄
塚本敏夫　吉田和彦　大塚初重　吉留秀敏　肘岡隆夫　渡辺誠　若松良一
高島忠平　犬木努　山中章　藤沢敦　杉山晋作　辰巳和宏　藤井幸司　石川悦雄
筌瀬昭宏　津曲大祐　丹俊詞　竹中克繁　稲岡洋道　山内英樹　甲斐貴光
小橋健司　福間元　諸墨和義　井上裕一　太田博之　加部二生　志村哲　秋元陽光
賀来孝代　青山博樹　石橋充　長井正欣　江原昌俊　山田俊輔　米澤雅美　川口雅之
（順不動：敬称略）

本文目次

第Ⅰ章　遺物の出土状況

第１節　百足塚古墳の遺物出土状況……1

（１）円筒埴輪

（２）形象埴輪

（３）須恵器

第２節　62 号墳の遺物出土状況……13

（１）円筒埴輪

（２）形象埴輪

（３）須恵器

第３節　63 号墳の遺物出土状況……13

（１）円筒埴輪

（２）須恵器

第４節　209 号墳の遺物出土状況……14

（１）須恵器

第Ⅱ章　遺物の特徴

第１節　円筒埴輪……15

（１）円筒埴輪の特徴

（２）各調査区出土の円筒埴輪の特徴

第２節　形象埴輪の特徴……33

（１）家形埴輪

（２）器材埴輪

（３）柵形埴輪

（４）人物埴輪

（５）動物埴輪

第Ⅲ章　分析

第１節　百足塚古墳ほか出土埴輪・須恵器の胎土分……141

（１）はじめに

（２）試料と方法

（３）結果

（４）まとめ

第２節　出土埴輪の赤色顔料分析……144

（１）はじめに

（２）試料

（３）分析方法

（４）分析結果

（５）考察

第Ⅳ章　考察……149
第１節　円筒埴輪
（１）円筒埴輪の特徴
（２）円筒埴輪列について
（３）周辺古墳との関係について
第２節　形象埴輪……153
（１）形象埴輪の特徴
（２）形象埴輪群の配置状況について
第３節　百足塚古墳の築造時期について……159
第４節　まとめ……159

挿図目次

図版１　新富町位置図……１
図版２　トレンチ配置図……２
図版３　Ⅱ・Ⅲ区調査図……３
図版４　Ⅱ区南側形象埴輪出土状況……４
図版５　Ⅲ区周堤外側遺物出土状況……５
図版６　Ⅲ区周堤外側形象埴輪出土状況拡大①……６
図版７　Ⅲ区周堤外側形象埴輪出土状況拡大②……７
図版８　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況……９
図版９　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況拡大①……10
図版 10　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況拡大②……11
図版 11　Ⅲ区遺物出土状況（墳丘側）……12
図版 12　出土遺物の各部名称……16
図版 13　百足塚古墳出土の円筒埴輪①……19
図版 14　百足塚古墳出土の円筒埴輪②……20
図版 15　百足塚古墳出土の円筒埴輪③……21
図版 16　百足塚古墳出土の円筒埴輪④……22
図版 17　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑤……23
図版 18　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑥……24
図版 19　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑦……25
図版 20　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑧……26
図版 21　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑨……27
図版 22　62 号墳出土の円筒埴輪①……30
図版 23　朝顔形円筒埴輪……31
図版 24　62 号墳出土の円筒埴輪②……32
図版 25　家形埴輪①……35 ～ 36
図版 26　家形埴輪②……37 ～ 38
図版 27　家形埴輪③……41 ～ 42
図版 28　家形埴輪④……43 ～ 44

図版 29　家形埴輪⑤……45
図版 30　家形埴輪⑥……46
図版 31　家形埴輪⑦（堅魚木）……47
図版 32　甲冑形埴輪①……49
図版 33　甲冑形埴輪②……50
図版 34　盾形埴輪①……52
図版 35　盾形埴輪②……54
図版 36　盾形埴輪③……55
図版 37　太刀形埴輪（上）・太鼓形埴輪（下）……56
図版 38　62 号墳出土形象埴輪 ……57
図版 39　柵形埴輪①……60
図版 40　柵形埴輪②……61
図版 41　柵形埴輪③……62
図版 42　柵形埴輪④……63
図版 43　柵形埴輪⑤……64
図版 44　柵形埴輪⑥……65
図版 45　人物埴輪①……66
図版 46　人物埴輪②……67
図版 47　人物埴輪③……70
図版 48　人物埴輪④……71
図版 49　人物埴輪⑤……72
図版 50　人物埴輪⑥……73
図版 51　人物埴輪⑦……75
図版 52　人物埴輪⑧……77
図版 53　人物埴輪⑨……78
図版 54　人物埴輪⑩……80
図版 55　人物埴輪⑪……81
図版 56　人物埴輪⑫……82
図版 57　人物埴輪⑬……83
図版 58　人物埴輪⑭……85
図版 59　人物埴輪⑮……86
図版 60　人物埴輪⑯……87
図版 61　人物埴輪⑰……89
図版 62　人物埴輪⑱……90
図版 63　人物埴輪⑲……91
図版 64　人物埴輪⑳……92
図版 65　動物埴輪①（鳥）……95
図版 66　動物埴輪②（鳥）……96
図版 67　動物埴輪③（鳥）……97
図版 68　動物埴輪④（鳥）……98
図版 69　動物埴輪⑤……100

図版 70　動物埴輪⑥……101
図版 71　動物埴輪⑦……102
図版 72　動物埴輪⑧……103
図版 73　動物埴輪⑨……104
図版 74　動物埴輪⑩……105 ～ 106
図版 75　百足塚古墳出土須恵器①……108
図版 76　百足塚古墳出土須恵器②……109
図版 77　百足塚古墳出土須恵器③……110
図版 78　百足塚古墳出土須恵器④……111
図版 79　62･209 号墳出土須恵器① ……112
図版 80　62･209 号墳出土須恵器② ……113
図版 81　63 号墳出土須恵器 ……114
図版 82　209 号墳出土須恵器① ……115
図版 83　209 号墳出土須恵器② ……116
図版 84　209 号墳出土須恵器③ ……117
図版 85　各元素分布図……143
図版 86　Na2O-Mgo 分布図……144
図版 87　百足塚古墳出土埴輪付着赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 ……147
図版 87　祇園原古墳群の分布図……152
図版 88　形象埴輪の出土位置……158

表目次

表 1　円筒埴輪観察表……119
表 2　朝顔形円筒埴輪観察表……124
表 3　家形埴輪観察表……125
表 4　器材埴輪観察表……126
表 5　柵形埴輪観察表……127
表 6　人物埴輪観察表……127
表 7　動物埴輪観察表……130
表 8　須恵器観察表……132
表 9　分析対象一覧……141
表 10　蛍光 X 線分析結果 ……142
表 11 百足塚古墳出土埴輪付着赤色顔料の蛍光 X 線分析結果……149
表 12 祇園原古墳群内で埴輪をもつ古墳一覧 ……151

写真図版目次

巻頭図版１　１．女性埴輪
　　２．女性埴輪

巻頭図版２　１．男性埴輪（跪く人）
　　２．盾持ち人形埴輪

写真図版１　円筒埴輪①
写真図版２　円筒埴輪②
写真図版３　円筒埴輪③
写真図版４　円筒埴輪④
写真図版５　円筒埴輪⑤
写真図版６　円筒埴輪⑥
写真図版７　円筒埴輪⑦
写真図版８　円筒埴輪⑧
写真図版９　円筒埴輪⑨
写真図版 10　円筒埴輪⑩
写真図版 11　家形埴輪①
写真図版 12　家形埴輪②
写真図版 13　家形埴輪③
写真図版 14　家形埴輪④
写真図版 15　家形埴輪⑤
写真図版 16　家形埴輪⑥
写真図版 17　器材埴輪①
写真図版 18　器材埴輪②
写真図版 19　器材埴輪③
写真図版 20　器材埴輪④
写真図版 21　柵形埴輪①
写真図版 22　柵形埴輪②

巻頭素版３　１．人物埴輪集合
　　２．鳥形埴輪集合

巻頭図版４　１．家形埴輪
　　２．柵形埴輪集合

写真図版 23　柵形埴輪③
写真図版 24　柵形埴輪④
写真図版 25　人物埴輪①
写真図版 26　人物埴輪②
写真図版 27　人物埴輪③
写真図版 28　人物埴輪④
写真図版 29　人物埴輪⑤
写真図版 30　人物埴輪⑥
写真図版 31　人物埴輪⑦
写真図版 32　人物埴輪⑧
写真図版 33　人物埴輪⑨
写真図版 34　人物埴輪⑩
写真図版 35　人物埴輪⑪
写真図版 36　動物埴輪①
写真図版 37　動物埴輪②
写真図版 38　動物埴輪③
写真図版 38　動物埴輪③
写真図版 39　動物埴輪④
写真図版 40　動物埴輪⑤
写真図版 41　須恵器①
写真図版 42　須恵器②
写真図版 43　須恵器③

第Ⅰ章　遺物の出土状況

墳丘については遺構編で報告しているため、ここでは概略にとどめる。

百足塚古墳は２段築成の前方後円墳で、築造時の推定墳長 82 m、後円部径 38.5 m、後円部最高点は標高 82.3 m、前方部幅 51 m、前方部最高点は標高 81.7 mである。後円部をほぼ真北に向け、周囲には盾形の周溝が巡る。さらにその周囲に周堤が巡り、その外方には周堤を区画するための外周溝が確認されている。ただし外周溝については、全周していたかどうか判然としない。周堤まで含めた古墳の全長は 120 mである。周辺には３基の円墳（62・63・209 号）が存在する。いずれも百足塚古墳の陪塚と考えられ、62・63 号墳は百足塚古墳の北西側に隣接している。209 号墳は百足塚古墳前方部の東側に位置し、墳丘が掘削され周溝のみが検出された円墳である。

これらの古墳から出土している遺物は円筒埴輪、形象埴輪、須恵器である。以下、古墳と遺物ごとに出土状況を報告する。

遺物は円筒埴輪列など、原位置もしくはそれに近いと判断される場合は、出土位置の記録作成を行ったのちに取り上げを行っている。百足塚古墳のⅡ区とⅢ区を中心に大量の出土した形象埴輪については、周堤上に樹立していたものが周溝内や周堤外側に転落したものであり、原位置から大きく動いているが、本来の配置を復元するうえで必要と判断し、記録作成を行ったのちに取り上げを行っている。ただし、出土量が膨大だったため、取り上げはグリッド単位で実施した。そのため図面上で個々の破片を完全に照合することができない。

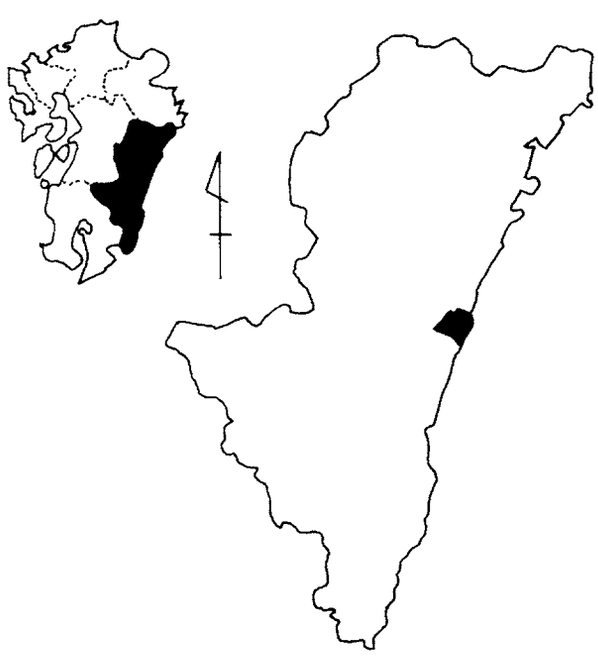
第１節　百足塚古墳の遺物出土状況

（１）円筒埴輪

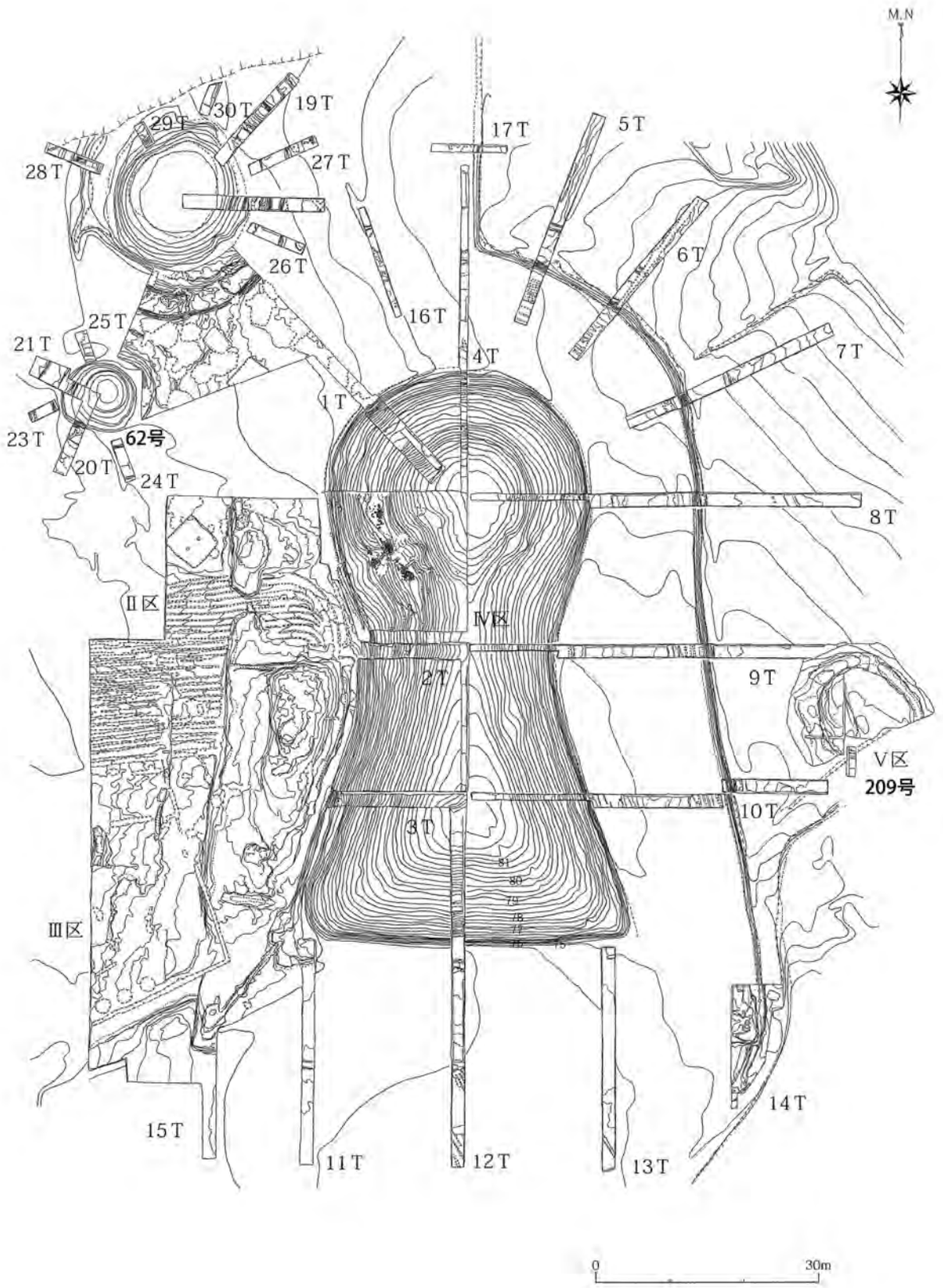
中段テラス上では埴輪列がほぼ原位置のまま検出できた場所もあるが、多くが後世の攪乱や土砂流出の影響を受けている。今回の調査結果から配置状況を報告する。

①　墳頂部

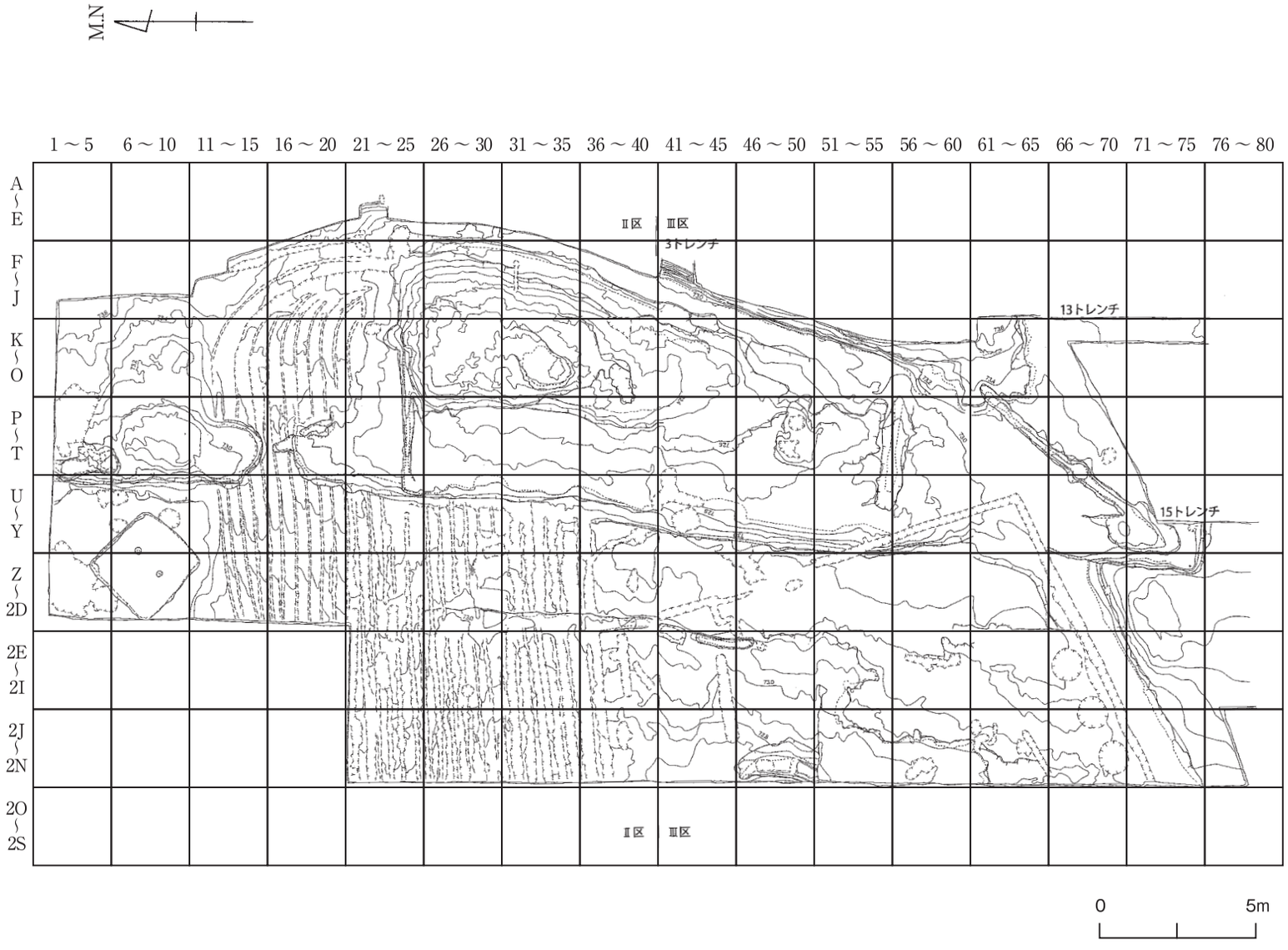
遺存状態は良くないものの、８・９トレンチでは埴輪列の痕跡が確認できることから、後円部頂、前方部頂ともに埴輪列があったことが確実である。どの程度の密度で並べられていたかは判然としないが、中段テラスより上の堆積土内には多量の埴輪片が含まれている。また、後述するテラス上の埴輪列はかなり近接した状態であったことから、墳頂部にも相当数の樹立があったと思われる。埴輪は円筒埴輪が大半をしめるが、朝顔形円筒



図版１　新富町位置図

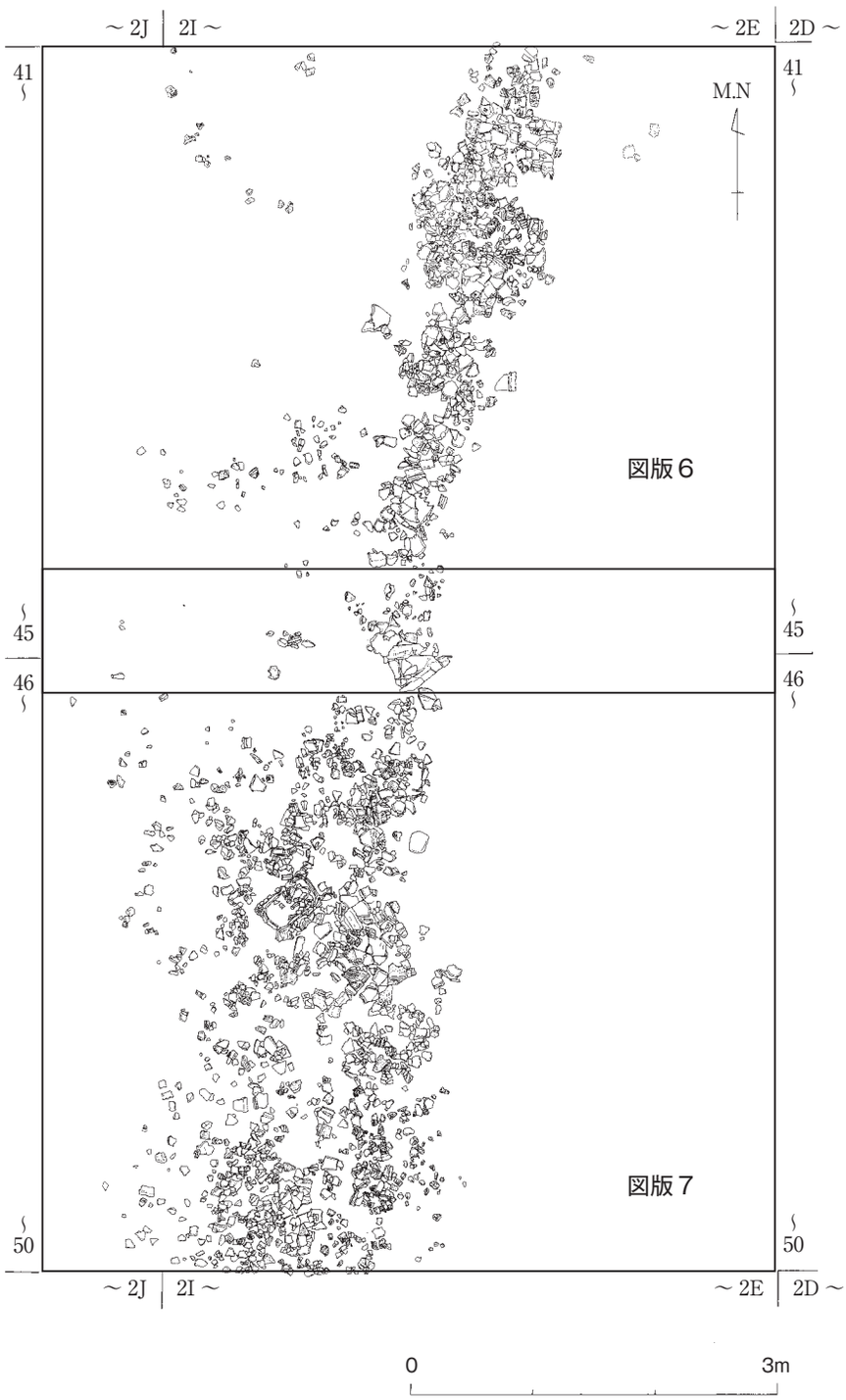

M.N
1T
2T
3T
4T
5T
6T
7T
8T
9T
10T
11T
12T
13T
14T
15T
16T
17T
19T
20T
21T
23T
24T
25T
26T
27T
28T
29T
30T
62号
209号
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅳ区
Ⅴ区
0
30m

図版２　トレンチ配置図


M.N
1～5
6～10
11～15
16～20
21～25
26～30
31～35
36～40
41～45
46～50
51～55
56～60
61～65
66～70
71～75
76～80
A～E
F～J
K～O
P～T
U～Y
Z～2D
2E～2I
2J～2N
2O～2S
Ⅱ区
Ⅲ区
3トレンチ
13トレンチ
15トレンチ
0
5m

図版３　Ⅱ・Ⅲ区調査図

図版４　Ⅱ区南側形象埴輪出土状況



図版５　Ⅲ区周堤外側形象埴輪出土状況

図版６　Ⅲ区周堤外側形象埴輪出土状況拡大①

図版７　Ⅲ区周堤外側形象埴輪出土状況拡大②

埴輪や盾形埴輪片も含まれる。円筒埴輪に対してどの程度の割合で立てられていたかは不明である。

②テラス

テラスにおいても土砂流出を受けているが、東側に設置した８・９トレンチでは上部からの土圧により外方へ傾いているものの、基部が残存しほぼ原位置を留めて検出されている。幅１ｍのトレンチから２～３本の円筒埴輪が口縁部を接着するような状態で検出されている。西側のトレンチでは遺存状態が悪く樹立状態が確認できないものの、密着した状態でテラス上を全周していたと考えられる。このような状況ではあるが、埴輪を設置した際の堀方を観察してみるといわゆる布堀ではなく、個別個体ごとに堀方を行っている。

③墓道

横穴式石室へと至る墓道では、埋葬儀礼に伴う供献土器の存在を予想していたが、堆積土からは、埴輪片が少量出土しているのみで、埋葬儀礼に伴うような状況ではない。

④周堤

周堤上からは円筒埴輪は出土していない。しかし、西側周溝隅角の検出を目的に設定した15トレンチで、円筒埴輪１個体が出土している。状況から周堤上に樹立されていたとみてよいだろう。また、14トレンチでは周堤外方で埴輪片が出土することから、周堤上にも円筒埴輪の樹立があったことは疑いない。その他のトレンチでも、周堤寄りの周溝内から埴輪片が出土する。墳丘上のように近接して樹立されていたわけではないが、要所に樹立されていた可能性が高い。

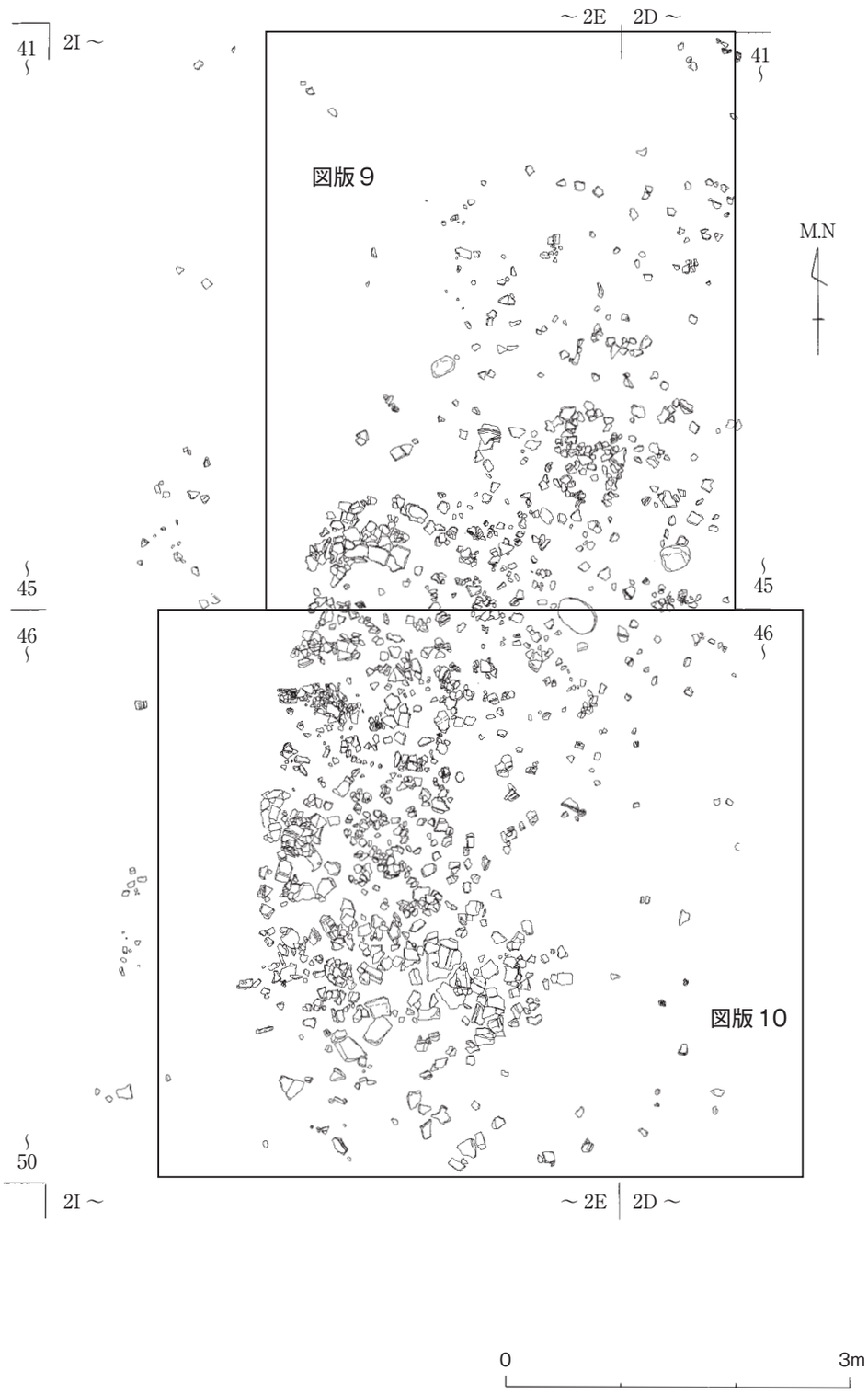
（２）形象埴輪

出土地点はⅡ・Ⅲ区（百足塚古墳の西側周溝内と周堤の外側）、Ⅳ区（後円部西側）、12トレンチ（前方部南側）、62号墳周溝内である。このうちⅣ区と12トレンチで確認されたものは盾形埴輪のみである。墳頂もしくはテラス上に樹立していたものが転落したと考えられ、原位置を保ってはいない。おそらく円筒埴輪列のなかに一定の間隔をもって配置された可能性が高い。

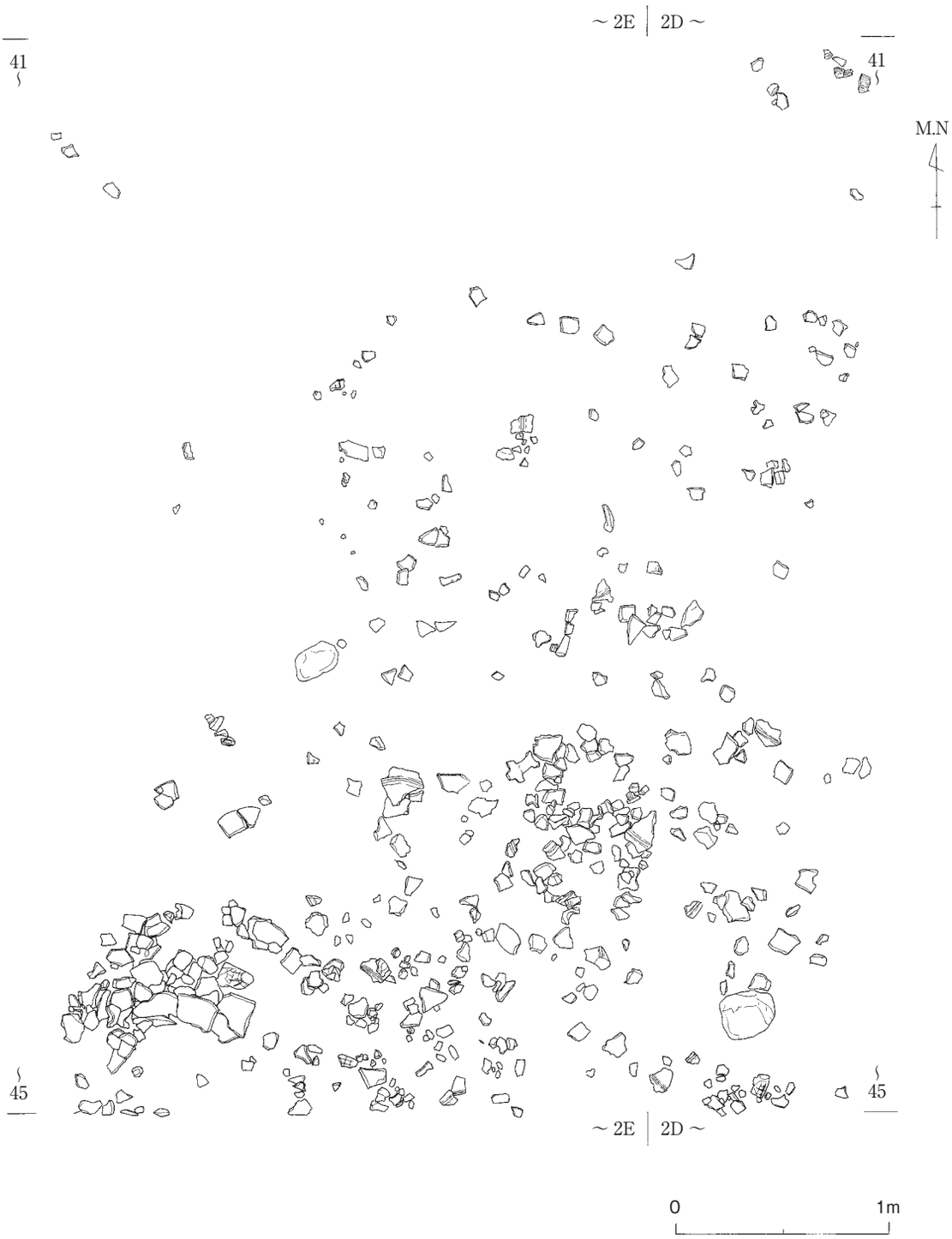
62号墳の周溝内からは盾持ち人形埴輪と、盾形埴輪片が出土している。盾持ち人形埴輪は、百足塚古墳周溝内から出土した破片との接合関係があったことから、本来の樹立位置は百足塚古墳の周堤上であった可能性が高い。盾形埴輪は破片資料だが、62号墳の墳頂にあった円筒埴輪列に混じって樹立された可能性がある。

Ⅱ区とⅢ区からは大量の形象埴輪が出土した。西側の周堤上に樹立していたものが、周溝や周堤外方に転落したものである。築造当初の周堤には地山の上に盛土がなされ、そこに形象埴輪を配置したと考えられる。しかし、調査時は上部が大きく掘削され、アカホヤ火山灰層やその下位のローム層が検出面となった。そのため、原位置を留めた資料は存在しない。これらは周堤を基準として周溝内（東側）と周堤外方（西側）に分かれて出土する。転落した埴輪も破片が広範囲に拡がっており、資料によっては周溝内と周堤外方の破片が接合する場合がある。人為的な投げ込みがあったことが想定されるが、そのときにはある程度破砕していた可能性が高い。その一方で周溝下端付近にほぼ一個体まとまって出土する個体もあることから自然転落もあったと思われる。埴輪片は13世紀に降灰した霧島山系の火山灰によって覆われており、これ以前に埴輪が投げ込まれたことはまちがいない。

形象埴輪は周堤から後円部にのびる土橋周辺から前方部側に向けて、40ｍの長さにわたって



図版８　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況



図版９　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況拡大①

図版 10　Ⅲ区周溝内形象埴輪出土状況拡大②

図版 11　Ⅲ区遺物出土状況（墳丘側）

出土する。このうち土橋の南端からの距離が 20 ～ 35 m付近が最も集中する場所である。さらにここでは後世の攪乱をあまり受けていないことから、遺存状態が良好で、個々の埴輪の残存率も高い。これより北側になると包含層が攪乱を受けている頻度が高く、残存率も低くなる。

このように形象埴輪群の配置復元は極めて困難であるが、出土位置からそう離れていないと考えるならば、大まかではあるが配置復元を想定することができる。復元案については第Ⅲ章の考察編を参照いただきたい。

（3）須恵器・土師器

埴輪の出土量に対して須恵器の出土は極めて少ない。おそらく形象埴輪群のなかに須恵器が混在することはなかったと思われる。Ⅱ区ないしⅢ区で墳端に近い場所から大甕片や横瓶片がまとまって出土しているが、全形が復元できるほどではない。石室に向かう墓道に近い位置からの出土であり、埋葬行為に伴う祭祀等に使用された可能性がある。

このほかトレンチや調査区内の埋土中から破片が出土しているが、配置位置が不明で、古墳の築造もしくは埋葬行為に関係するものか判然としない。

土師器の出土も少ない。墓道から小片がわずかに出土するが器種や部位は不明である。

第 2 節　62 号墳の出土遺物

（1）円筒埴輪

墳端は大きく削りとられ、残った墳丘も土砂流出が激しく、墳頂面が判然としない状況にある。

墳頂まで延長した 20・21 トレンチでは、墳丘上の堆積土から埴輪片が出土する。原位置を留めている個体はないものの本来存在していた墳頂平坦面に樹立されていたとみてよいだろう。

周溝内にも墳丘から転落したとみられる埴輪片が多数出土する。全調査区から出土しており、２m幅の 20 トレンチで３～５個体分の破片が確認できることから、50 本以上が埴輪列として墳頂に樹立され全周していた可能性が高い。また、円筒埴輪だけでなく朝顔形円筒埴輪も出土している。

（2）形象埴輪

円筒埴輪に混じって、盾形埴輪と盾持ち人形埴輪片が含まれている。周溝内に転落しているため、本来の樹立位置については不明である。このうち盾持ち人については出土位置が百足塚古墳の周堤に近いため、ここから 62 号墳の周溝に転落したと考えたい。盾形埴輪は円筒埴輪片に混じって出土していることや、墳丘上のトレンチからも出土していることから、円筒埴輪列に混じって樹立されていた可能性が高い。このほか器種不明だが器材埴輪と思われる破片が出土している。

（3）須恵器

周溝内には埴輪片に混じって須恵器が出土している。坏蓋や甕が出土している。完形に近いものもあり、墳丘上に供献されていたと考えたい。

第 3 節　63 号墳の出土遺物

（1）円筒埴輪

本古墳には全周する周溝と、北から東側にかけて半周する二重目の周溝の存在が明らかになっている。周溝内には円筒埴輪片が出土しているが、数が少なく、一部は 62 号墳や百足塚古墳の

埴輪との接合関係が明らかとなった。墳丘からも円筒埴輪は出土しないことから、本古墳は埴輪を採用しなかった可能性が高い。

（2）須恵器

周溝内や墳丘埋土から須恵器片が出土している。全体的に数が少ないなか、西側の埋土中から甕片を中心に出土している。ただし、この付近は後世の攪乱によって土が相当動いていると考えられることから、63 号墳に属するものか判然としない。

第 4 節　209 号墳の出土遺物

（1）須恵器

本古墳は百足塚古墳の前方部東側に位置し、墳丘が完全に破壊され、周溝のみが残存した状態で検出されている。よってすべての遺物が周溝内に転落した状態でみつかっている。遺物のほとんどを須恵器が占め、埴輪や土師器の小片がわずかに含まれるが、本古墳にあったものではないだろう。特筆すべきは出土位置で、すべて百足塚古墳側に集中して検出された。樹立の際に百足塚古墳を意識したとみてまちがいないだろう。

第Ⅱ章　遺物の特徴

本稿では円筒埴輪と形象埴輪、須恵器を掲載した。円筒埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪をそれぞれ調査区ごとに掲載した。形象埴輪は器種別に、家形埴輪、器財埴輪、柵形埴輪、人物埴輪、動物埴輪の順に掲載した。

第１節　円筒埴輪

（１）円筒埴輪の特徴

円筒埴輪は百足塚古墳と 62 号墳から出土している。62 号墳は原位置を保って出土した例こそないものの、周溝の広範囲が調査対象となったため、比較的復元率が高い。一方の百足塚古墳は、埴輪列がほぼ原位置を保っていた事例こそあったものの、底部から口縁部まで復元できた個体が少なかった。しかし、破片の量は膨大であったため、全ての資料を掲載することは不可能であった。このため、復元率が高い個体や、埴輪列など原位置に近いと思われる場所から出土したもの、口縁部や底部、線刻などの特殊な特徴をもつものを選抜して掲載した。

実測は、（有）スカイサーベイ社のマイブンスコープを使って素図を作成、これを基に細部の修正、補足を行い完成させている。器面の調整は手書きを基本としたが、破片資料については拓本で表現した。

①全体形状・法量

全体形状が把握できた個体は全部で９個体、うち６個体が 62 号墳からで百足塚古墳からは３個体のみである。

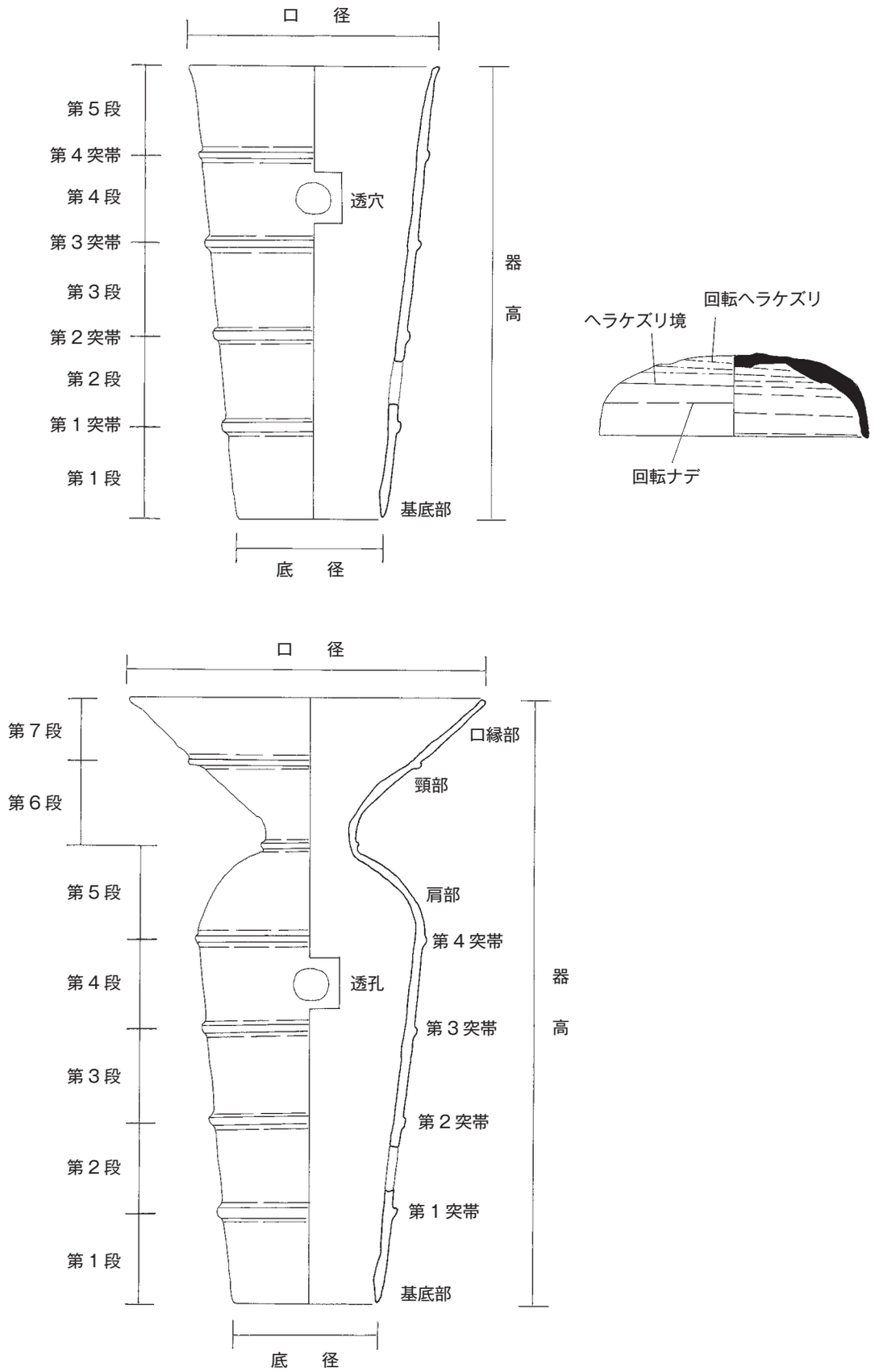
これらの資料から知り得る法量は、器高 55.4 ～ 61.8㎝、ばらつきは少なく大型品、小型品といった規格の違いはないと考えたい。すべての個体が４条突帯５段で構成され、２段目と４段目に透孔をもつという特徴も共通している。

詳細は後述するが、底径は 20㎝前後で、少しずつ径を広げながらたちあがり、口径は 30㎝前後になる。その間特定の部位が大きく変化することはない。

②基底部

完形品を含め、基底部の形状を確認できた資料は 28 点あり、底径は 16.7 ～ 23.9㎝におさまるが、18 ～ 21㎝前後が多い。円筒埴輪の製作工程の中で、反復的に粘土紐を積み上げていくと、粘土は自重により潰れていく。本古墳の円筒埴輪は粘土紐の積み上げ作業をある程度の高さまで一気に行っていたと考えられ、全体的に歪んでいる個体も少なくない。とりわけ底部は最も影響を受けるはずだが、観察してみると自重により肥厚していない資料があり、断面観察では底面から５㎝前後の器壁はその上部より薄く仕上げられている。これは基底部調整が行われているからであり、その方法は、外面を板状工具により押圧し、内面を指ナデ、指オサエによって成形するものが一般的である。一部に内外面とも指ナデ、指オサエですませるものも存在する。内面は底面ぎりぎりまで成形されており、調整方向などからも個体を倒立させて行っていたことはまちがいない。また、外面は板オサエののち、ナデ調整が行われているものが多いが、これらの調整も倒立したまま行っている個体が多い。

基底部調整を全く行わない資料もある。この場合、底部は自重により大きく潰れ、粘土が内側か外側のどちらかにはみ出すことになり、断面形状は長靴のようになる。さらに歪みによる凹凸



図版 12　出土遺物の各部名称

を修正するためか、器面の上から粘土を貼り付ける資料も確認できる。

③口縁部

完形品を含め、口縁部の形状が確認しえた資料は 12 点ある。口径は 15.6 ～ 35.4㎝とバラツキが大きいが、これは口形が焼き歪みによって楕円形化している個体があるためである。実際は 30㎝前後を目指して作られたと思われる。口縁部は摘み出しによって端部がわずかに外反して立ち上がるものが多い。また、口縁端部に薄く粘土を貼りつけることによって肥厚させる個体もある。また、端部を指ナデすることによって直線的に立ち上がるものもある。

口唇部の成形には指ナデが行われ、断面形状は平坦もしくは中央がわずかに凹んだ形状を呈することが多い。

④突帯

突帯はすべて４条で構成されている。段間が均等になるように貼り付けた場合、幅 11 ～ 12㎝におさまるはずだが、完形品だけの観察でも 7.7 ～ 13.9㎝とバラツキがある。突帯設定技法を行っている痕跡は確認されない。突帯そのものも直線状ではなく、水平を欠くものや波打った形状を呈しているものが多い。貼り付けも粗雑で突帯と器面との間に隙間が生じているものもある。断面形状は中央がくぼんだ M 字形を呈するか、低台形や崩れた台形を呈するものが多い。幅は上端で１～１.5㎝、下端で２～ 2.5㎝と幅広が多いが、細く突出度の低い突帯を貼り付けるものもある。

⑤透孔

２段目と４段目にそれぞれ２孔を施す。対向する位置に設定されるべきだが、ずれている個体も多く、孔ひとつ分以上ずれた個体もある。形状は正円を志向したと考えられるが、実際には楕円形を呈するものが多い。穿孔後にはナデ調整を行っているが丁寧ではなく、凹凸が解消されないままとなっているものもある。

⑥器面調整

外面の調整はタテ方向のハケメが主体である。ハケメ調整には１㎝につき 10 ～ 12 本ほどの木目をもつ木板を使用することが多いが、個体によっては７本程度のやや粗めの木板を使用しているものもある。

内面はタテ方向の指ナデが主体である。ただし口縁部には、外面のハケと同様に木目が密な木板を使用したヨコ方向のハケメが施される。

⑦製作

粘土板を製作し、筒状に丸めることで基底部を成形する。底面には木目状の圧痕が残る場合があり、製作は板状の工作台で行われたと思われる。その後は基底部を基礎として粘土帯の積み上げを行っていくが、60㎝近い高さまで一気に積み上げるのは困難だったはずである。器面を観察してみると３段目もしくは４段目に外面タテハケの上から、指ナデを加えている個体が存在する。おそらくこの段階で、積み上げを中断し、タテハケを施し、ある程度の乾燥を待って積み上げを再開したと思われる。また、倒立による基底部調整もこの段階で行われた可能性が高い。下部の突帯の貼り付けや透孔の穿孔も行われた可能性があるが確証はない。粘土積み上げ後はタテハケ、口縁部の成形、突帯の貼り付け、透孔の穿孔の順に行われたと考えられる。

⑧線刻

外面に線刻が施される資料が存在する。確認できるものはすべて５段目に施されており、×や

半円形が多い。何らかの物を表現したというよりも、製作工程で個体を区別するのに施されたと考えたい。

⑨朝顔形円筒埴輪

全体形状が把握できた資料は皆無であった。１段目から頸部まで復元できた 118 や 120 と普通円筒埴輪と比較しても、同様の法量で、４段目までの形状も同じであることから、朝顔形を呈する資料の基底部から胴部残存資料の場合、普通円筒との識別が困難であり、必然的に資料の掲示が頸部より上の部位に限定されてしまう。

口縁部が残存している 117 と 119 を参考にして、頸部までの高さが普通円筒埴輪と同規模であったと仮定すると、全高 80㎝前後が推定される。口径は 48㎝前後となる。

底部の形状が把握できる 118 と 120 では基底部調整が行われていない。このため底面付近が肥厚しているが、器形が歪むほどではない。ある程度の乾燥をまって、粘土の積み上げが行われたと思われる。また、これによって朝顔形では基底部調整が行われなかったと言えるものではない。

５段目の形状は、突帯直上から内傾するものと、５段目の中位付近から内傾するものとがある。

（２）各調査区出土の円筒埴輪の特徴

①１トレンチ（１～８）

テラス上で円筒埴輪列の基底部のみが残存している状態で検出されたため、口縁部まで復元できた個体は皆無だった。基底部から２段目まで残存した資料が多い。

すべての個体に基底部調整の痕跡が残っている。表面の摩滅が激しい場合は、外面の痕跡が確認できない場合があるが、内面の指オサエは顕著に残っている。外面は板オサエ、内面は指オサエが一般的なやり方だが、３は内外面とも指ナデ、指オサエのみで行っている。２のように器壁が厚いものや、５や７、８のように薄く仕上げるものもある。３は突帯の一部が剥離し、その箇所の器面は大きく凹んでいる。突帯の貼り付けによる押圧だけとは考えにくく、貼り付け前に指で押圧した可能性もある。５は底面から第１突帯までの間隔が 16.9㎝あり、今回の報告分では最も長い。

②２トレンチ（32・33）

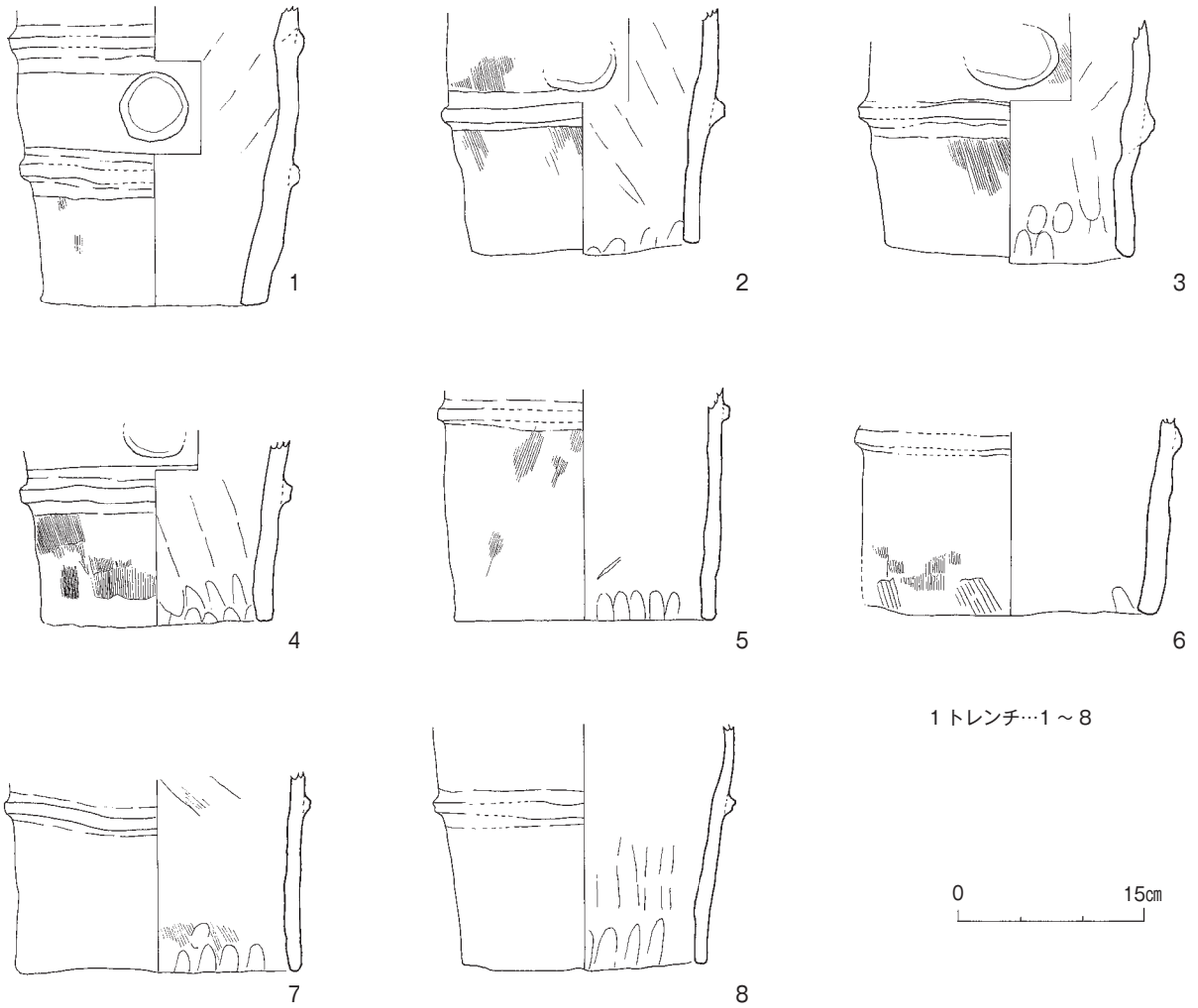
円筒埴輪列は遺存していなかったため、出土位置は不明である。32 と 33 は底部片で基底部調整を行っている。32 は表面に板痕が残り、33 には板を押圧したときの木目痕が残っている。裏面はともに指オサエを施す。

③４トレンチの円筒埴輪（25・26）

25 は２段目から口縁部まで残存している資料である。器面の状態は良好で、調整痕のほか一部に朱が残っている箇所がある。外面にはタテハケが口縁部の先端まで施されている。また、突帯が剥離した箇所ではその下からハケメを確認することができ、ハケメを施したあとに突帯を貼り付けたことは疑いない。内面は口縁部がヨコもしくはナナメのハケメを施し、内面は指ナデを施す。口唇部は指ナデが施されており中央部がわずかに凹んでいる。

26 は２段目から口縁部までが残存した資料である。焼き歪みが激しく口縁部を上からみた形状は長楕円形を呈している。失敗作ともいえるがそのような埴輪を採用するのも本古墳の特徴の一つといってよい。調整方法は 25 と同じである。

④８トレンチの円筒埴輪（９～12・34）



図版 13　百足塚古墳出土の円筒埴輪

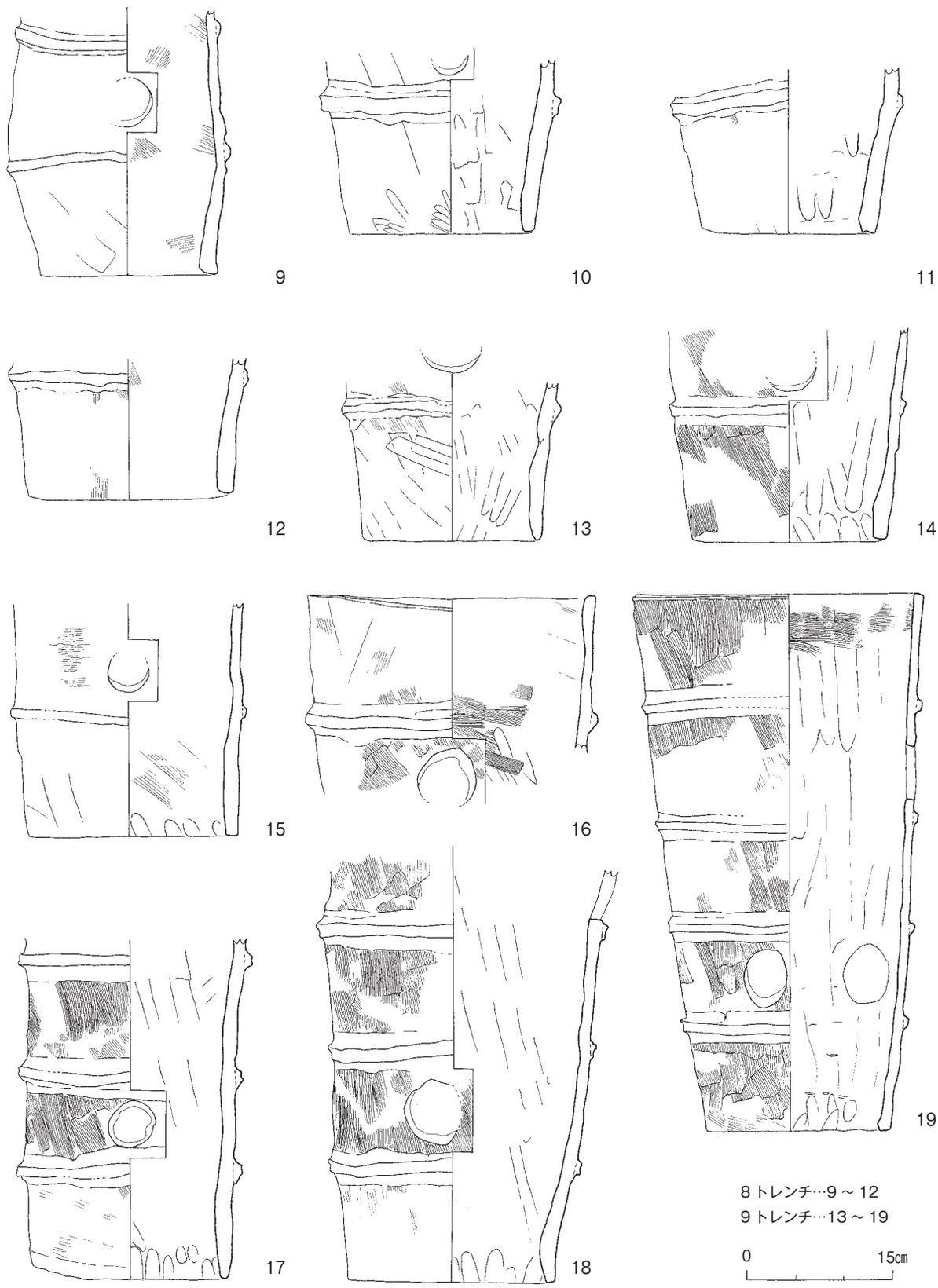
8トレンチではテラス上の円筒埴輪列が検出されている。土圧により外方に傾いているものの、原位置に近いと思われる。ただし、上部は欠損している資料が多い。

9は基底部から3段目まで残存している資料で、自重のためか、第1突帯付近で大きく形状が変化している。基底部調整の痕跡もほとんど認められない。10は器壁が厚く堅びな作りである。タテハケに使用した木板の木目は、1㎝につき7本とやや粗めなものを使用する。11と12も基底部が残存した資料だが、基底部調整は外面が板状工具による押圧、内面は指オサエや指ナデが中心となる。また外面にはその後ナデが加えられている。34は底部片で、外面には板を押圧したときの木目が横方向に残る。内面は指ナデと指オサエを施す。

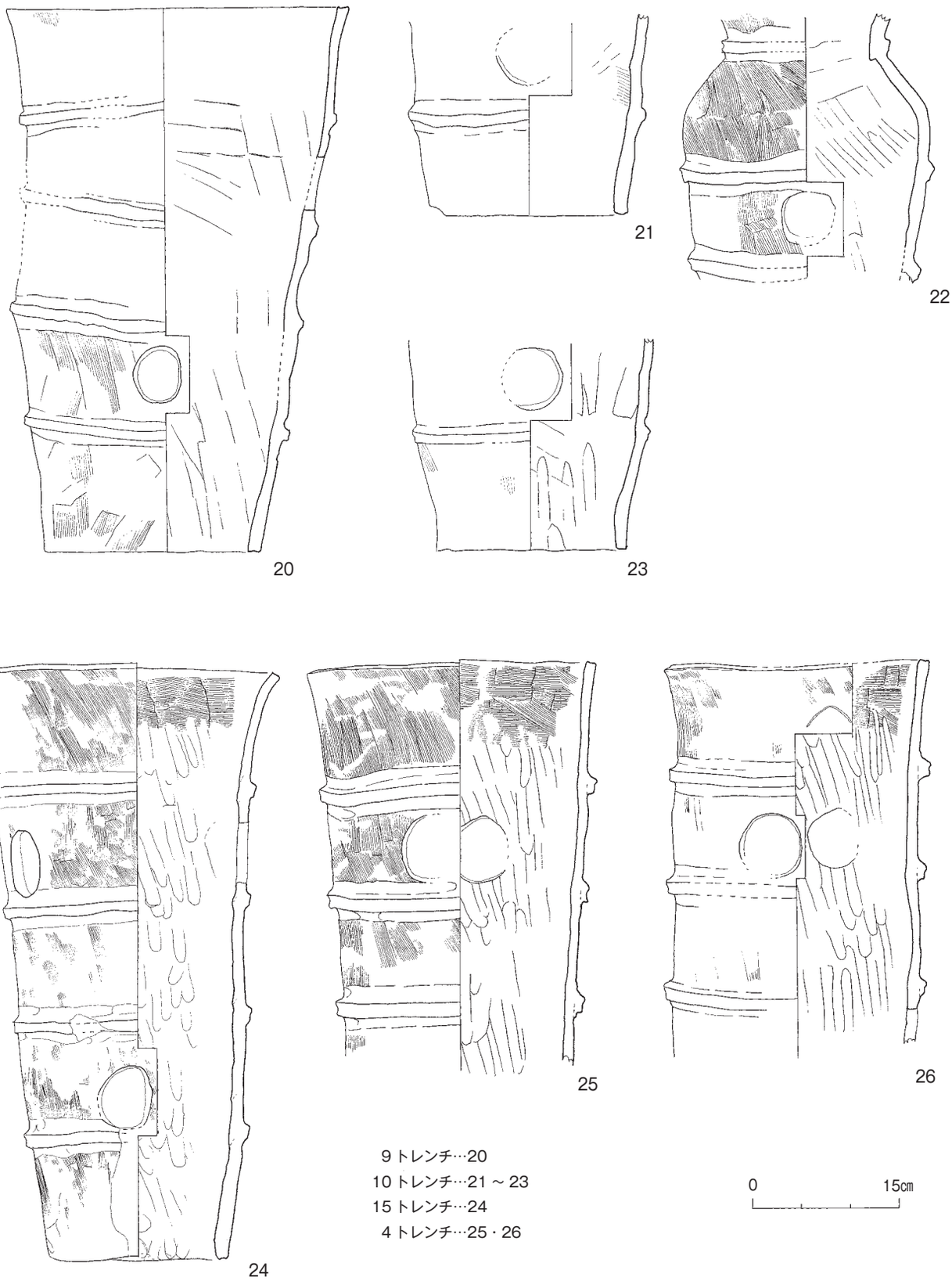
⑤9トレンチ（13～20・35）

9トレンチでは墳頂とテラスで円筒埴輪列の痕跡が確認されている。墳頂での遺存度はあまりよくないが、テラスでは土圧により外方に傾いているものの、原位置に近い位置で出土している。

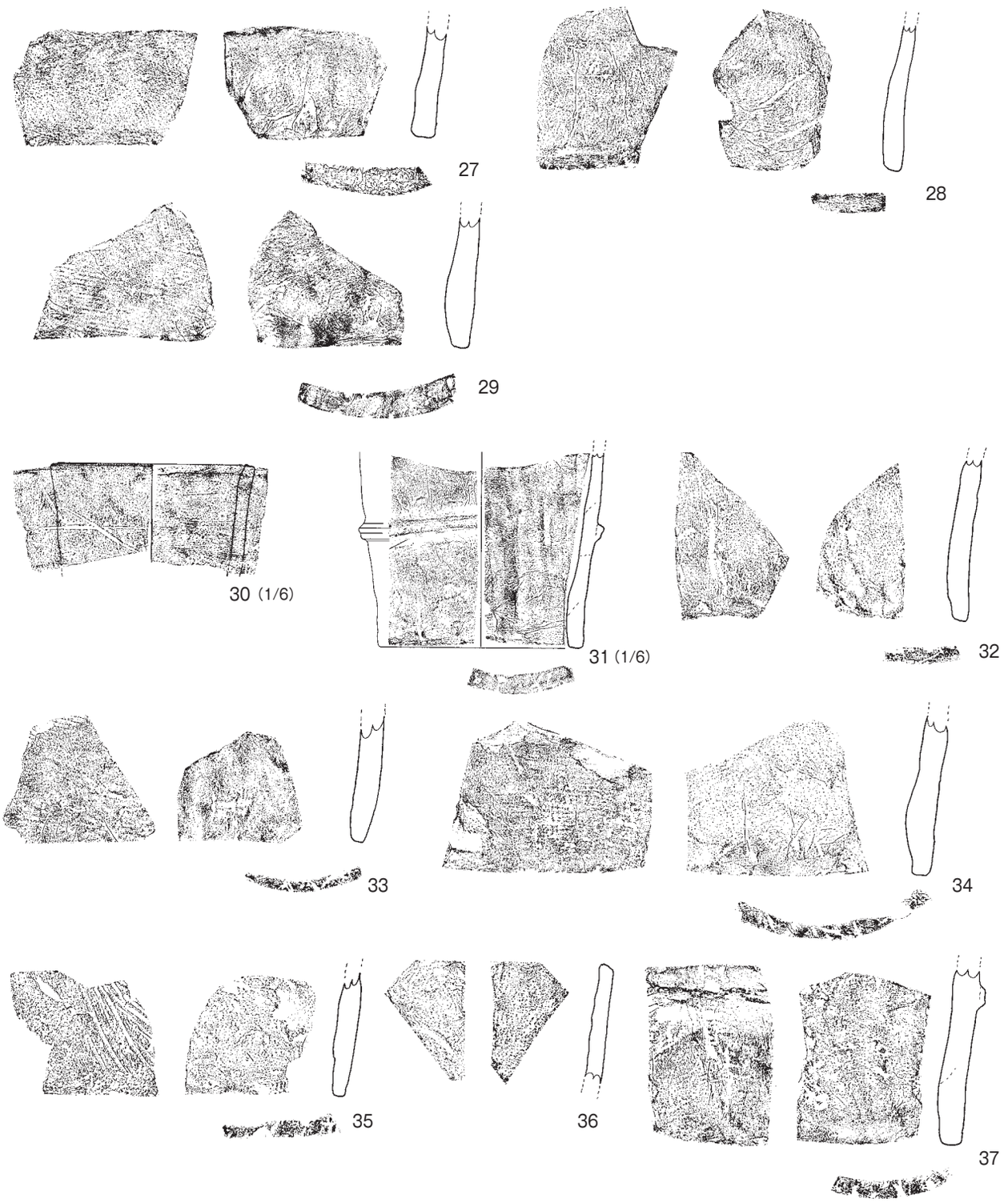
13から15は基底部から2段目まで残存した資料である。13と14は器壁が薄く仕上げられる。15は突帯の幅が狭く、突出度も低い。いずれも基底部調整を行っている。16は4段目から口縁部が残存した資料で、口縁部にはわずかに線刻が確認できる。口縁部の内面にはヨコハケが施されるが、4段目の透孔付近にまで及ぶ。19は基底部から口縁部まで復元できた個体で全体的に器



図版 14　百足塚古墳出土の円筒埴輪②



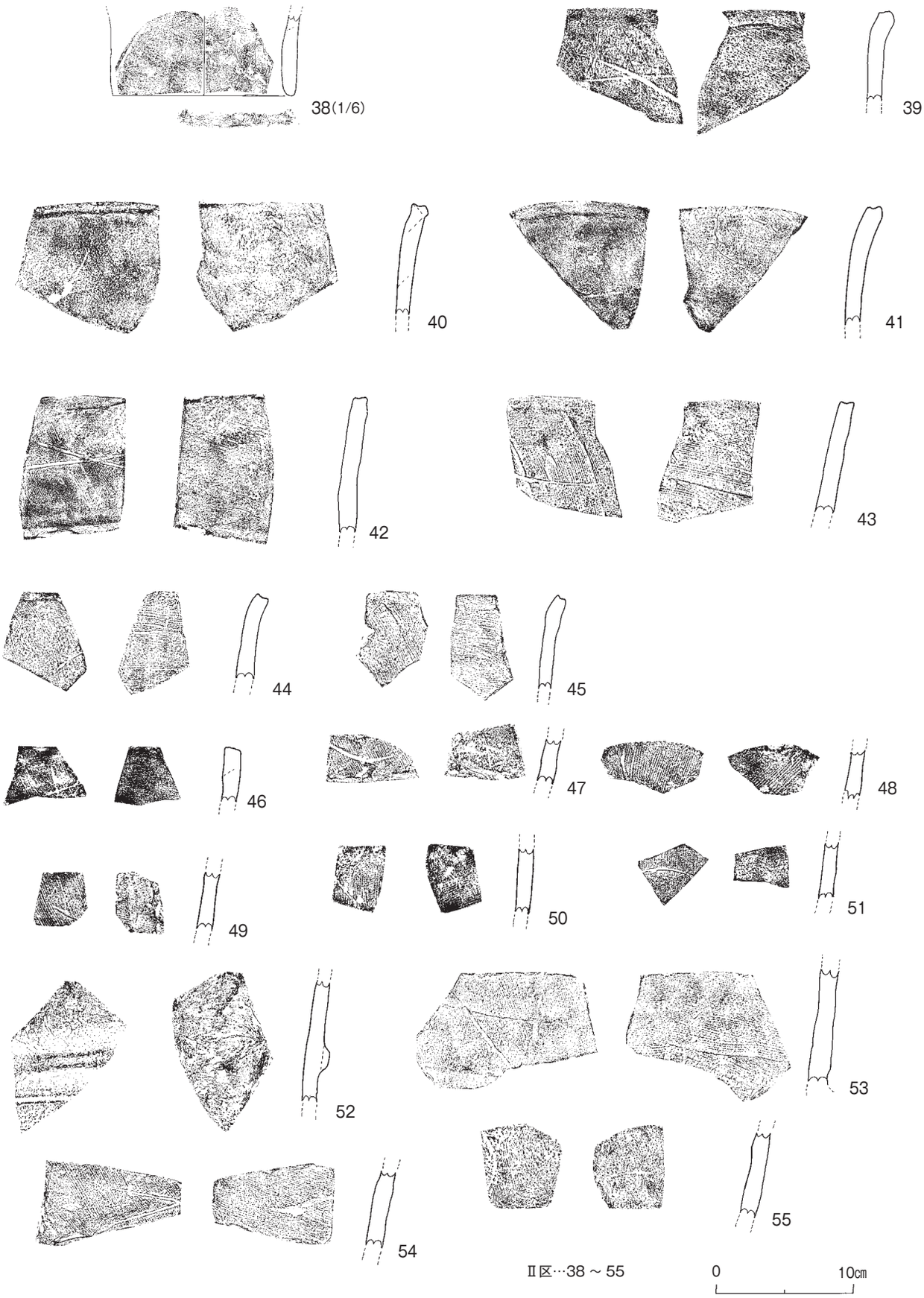
図版 15　百足塚古墳出土の円筒埴輪③



Ⅳ区…27 ～ 29
2 トレンチ…32・33
8 トレンチ…34
9 トレンチ…35
10 トレンチ…30
12 トレンチ…31・36・37

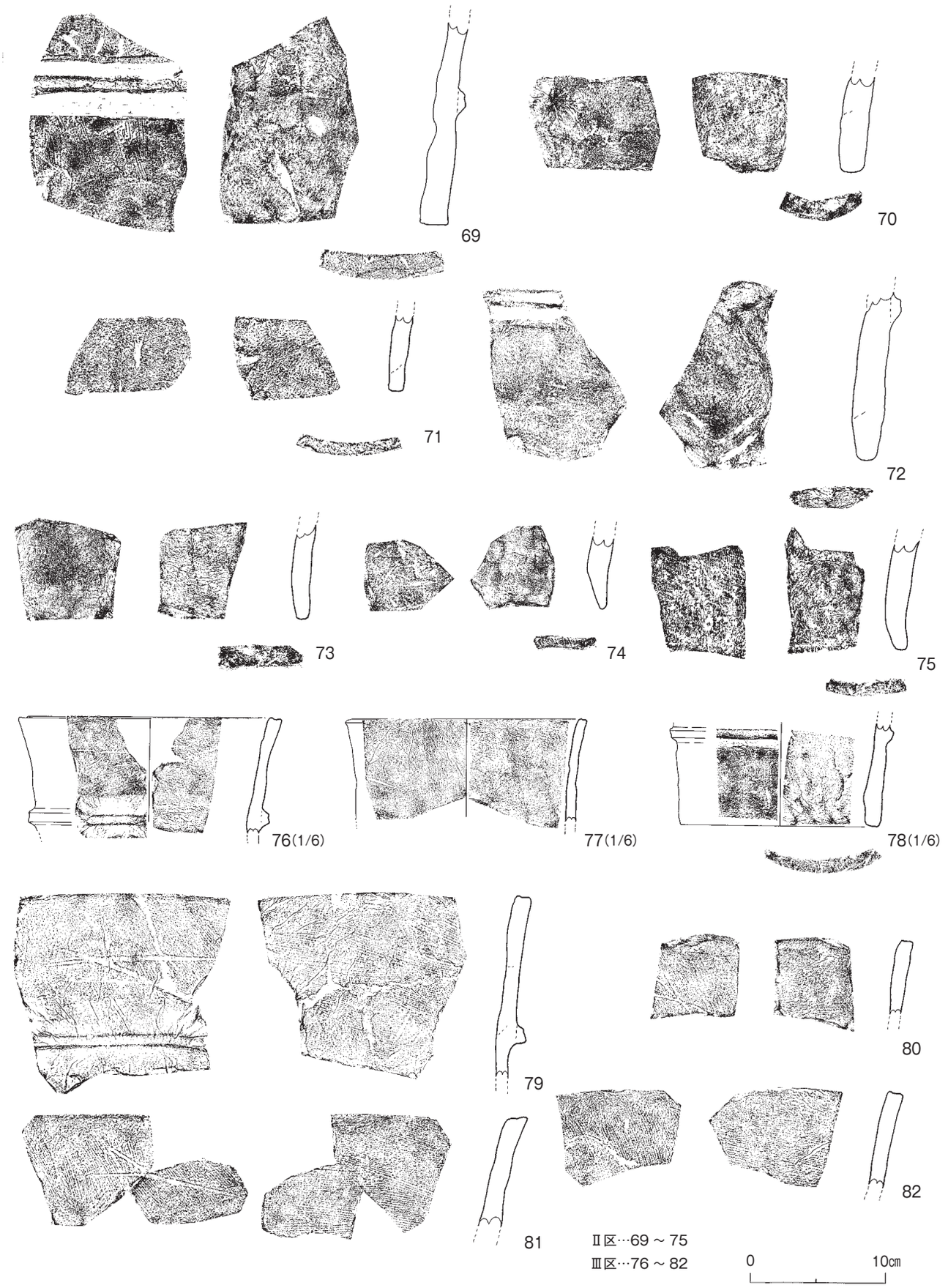
0　10㎝

図版 16　百足塚古墳出土の円筒埴輪④

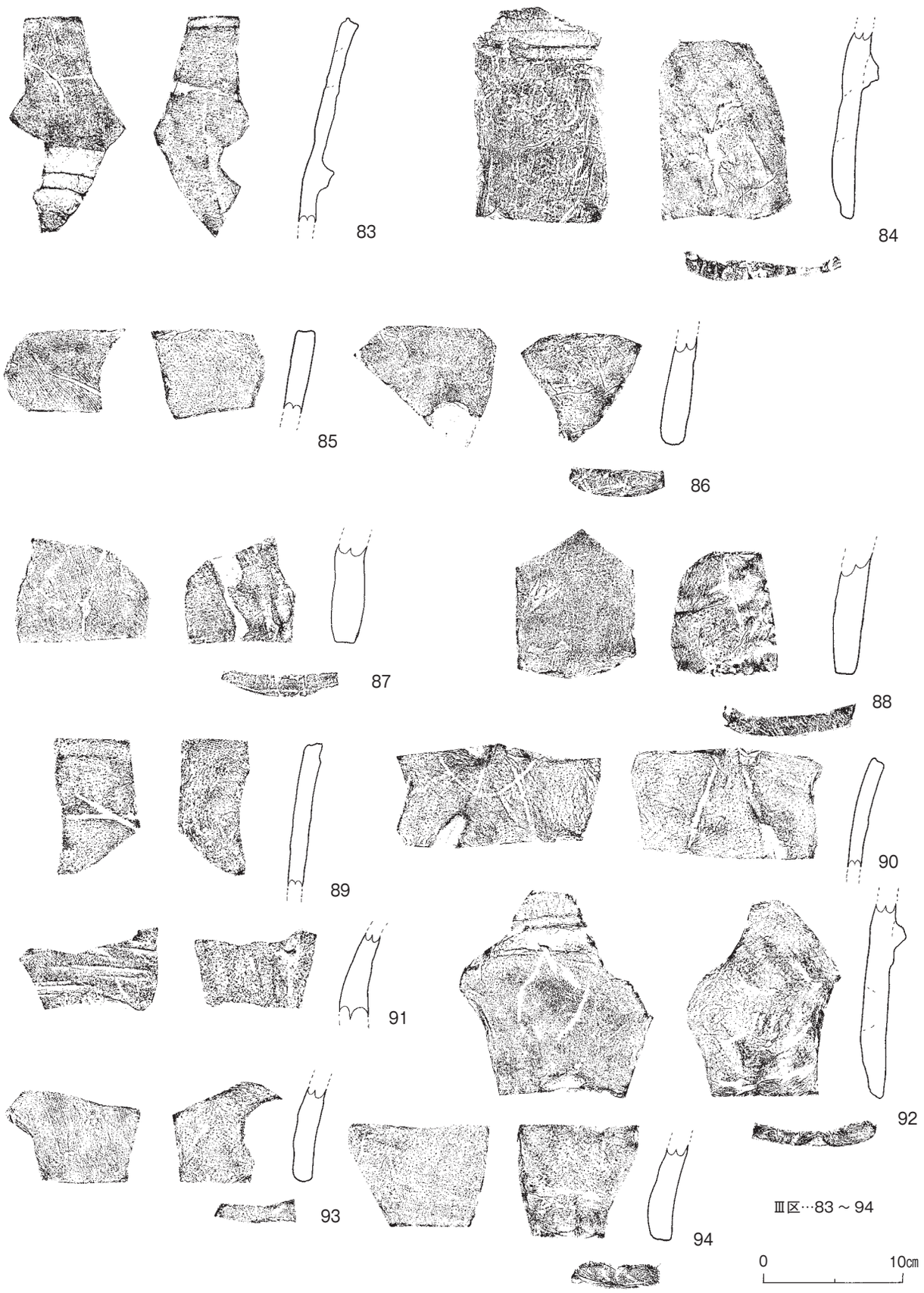


図版 17　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑤

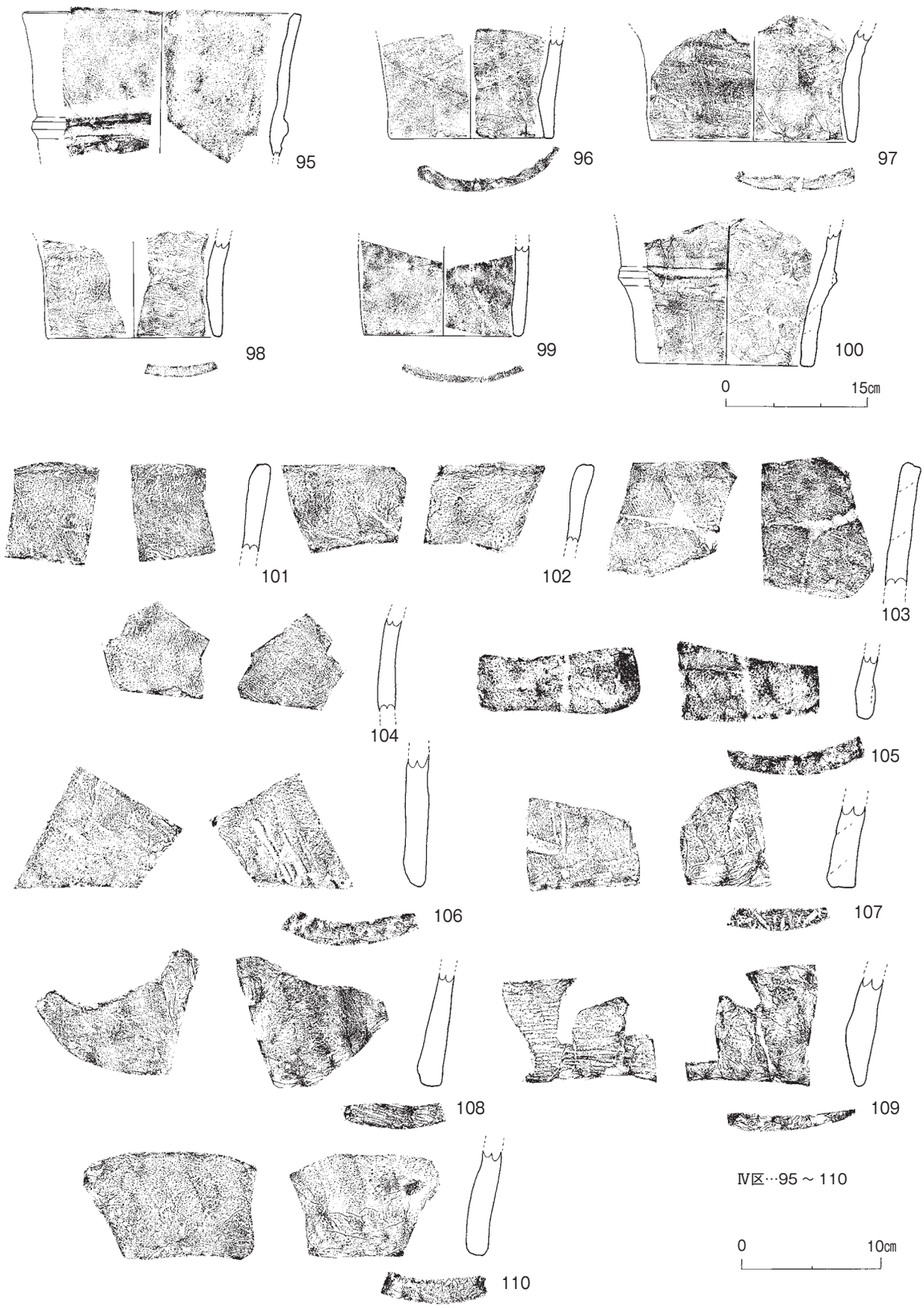
図版 18　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑥



図版 19　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑦



図版 20　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑧



図版 21　百足塚古墳出土の円筒埴輪⑨

壁が薄く仕上げられており、突帯も細く低く仕上げられている。４段目の途中で一旦タテハケを行い、その後上部を積んでいる状況が分かる。17 は基底部から３段目までが残存している資料で、須恵質化しており、器壁が厚い。突帯も太く突出度が高い。３段目の外面にはタテハケの上からナデが確認できる。ここで積み上げを一旦中断したのであろう。また、ハケの起点となる箇所を複数確認できるが、それによると幅4.5㎝の木板を使用していたようだ。20 は個体が歪んでいるが、焼き歪みではなく製作の際の自重によるものと思われる。18 は基底部から４段目までが残存している資料で、３段目に指ナデの痕跡が認められる。ここで粘土の積み上げを一旦中断したのであろう。底部調整には外面に木板を使用したと考えられるが、横方向に動かしながら作業を行った痕跡が確認できる。35 は底部片。底面から 1.5㎝程上に接合に伴うナデが施されており、その上には斜め方向の粗目の条痕が施される。底部調整のときに粘土を積み足している可能性もある。内面は指オサエと指ナデを施す。

⑥ 10 トレンチの円筒埴輪（21 ～ 23）

21 は１段目と２段目が残存している。透孔がそれぞれ確認できるものの、完全に対向していない。内外面とも摩滅が激しいが、底部調整の際の内面の指ナデ、指オサエは顕著に残り、外面には板状工具を当てたと思われる。器壁は薄目に仕上げられる。

23 は１段目と２段目の一部が残存している資料である。全体的に摩滅が激しい。底部調整を行っているのはまちがいないが、内面の指ナデ、指オサエにたいして、外面の調整は不明である。器壁は薄く仕上げられる。

22 は朝顔形円筒埴輪で４段目から頸部までの資料である。５段目の中段あたりから内傾し、頸部へと至る。

⑦ 12 トレンチ（31・36・37）

ここでは円筒埴輪列は確認されておらず、墳頂やテラスからの転落が考えられる資料となる。31 は底部片で推定底径 20.5㎝を測る。外面は板、内面は指ナデと指オサエによる基底部調整が行われているが、器壁が全体的に厚い。36 は口縁部で弧状の線刻が施される。37 は底部で外面は板状工具、内面は指ナデ、指オサエによる基底部調整が施される。

⑧ 15 トレンチ（24）

周堤隅角に近い周溝内から検出された資料で、周堤上に樹立されていた数少ない円筒埴輪である。底部から口縁部まで復元できた。器高 61.8㎝で完形品のなかでは最大となる。底部は外面に板状工具、内面には指オサエと指ナデによる基底部調整が施される。各突帯間は 11.6 ～ 13.5㎝で、大差はない。口縁部は先端で角度を変えて外反する。外面はやや摩滅しているが、底部付近をのぞけばハケメが充填される。内面は口縁部付近の横方向のハケメが顕著に残り、それより下位では指ナデが施される。

⑨Ⅱ区（38 ～ 75）

西側周溝の後円部に近い調査区で、もともと墳頂やテラスに樹立していたものが転落したものである。このため、原位置をとどめた資料はなく、小片が多い。全体形状を把握できる資料はないため、線刻のある口縁部や底部を掲載した。

口縁部は直線状に立ち上がるものと、端部付近で外反するもととがある。40 は端部に薄い粘土紐を貼り付ける。42 や 43 は上端に強い指ナデを施しているものもあるが、口唇部のみにナデを施すものもある。線刻は×と弧状があるが、ここでは×が多い。56 は口縁部径が復元できた

資料で 28.4㎝を測る。

底部は基底部調整を行うものと、行わないものがある。57 と 65、66 は行っていないため、底面の粘土が自重により潰れ、肥厚している。ここまで肥厚する資料はここだけでしか確認されていない。基底部調整を行っている資料のうち、59 と 60、63、74、75 は底面に向かって器壁が薄くなる。内面の強い指ナデと指オサエによるものである。

⑩Ⅲ区（76 ～ 94）

西側周溝の前方部に近い調査区で、墳頂やテラスに樹立されていたものが転落したものである。このため、原位置をとどめた資料はなく、全体形状を把握できる資料はないため、線刻のある口縁部や底部を掲載した。

口縁部は直線状に立ち上がるものが多い。80 や 89 は口縁端部に強い指ナデを施すことによって、凹みが発生する。線刻は×と弧状のものとがある。

底部はすべての資料が基底部調整を行っている。内面に強い指ナデや指オサエを施すことによって、底面に向かって器壁が薄くなるものと、ほとんど変わらないものとがある。

⑪Ⅳ区（95 ～ 110）

後円部西側の調査区で、横穴式石室を確認するために設定した調査区である。96 ～ 100 はテラス上で底部が潰れた状態で検出された資料である。円筒埴輪列を構成していたと考えられるが、遺存状態が悪く、原位置から動いていると思われる。全体形状を把握することはできないが、底径は 17.5 ～ 22㎝に復元できる。いずれも基底部調整を行っており、96 ～ 98 は底面に向かって器壁が薄くなる。

95 は口縁部で、口径 30㎝で復元できた。101 ～ 103 も口縁部で 101 と 103 は直線状に立ち上がる。102 は口縁端部に粘土を貼り付けることによって肥厚する。105 ～ 110 は底部。106 と 109 は底面に向かって器壁が薄くなる。105 は端部の外面に薄い粘土を貼り付ける。

⑫ 62 号墳の円筒埴輪

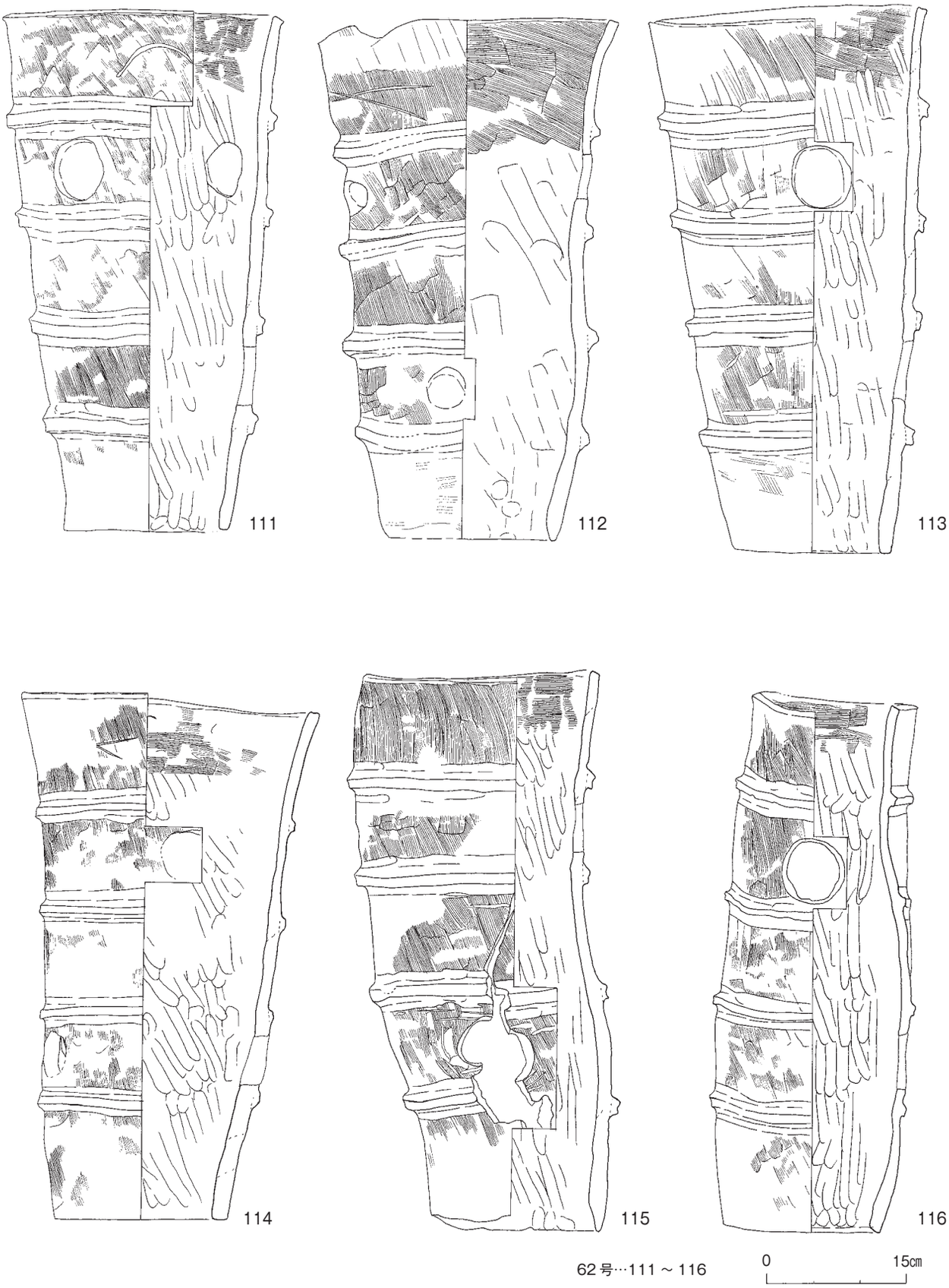
62 号墳は周溝すべてが調査対象となったため、復元率が高く 6 体が基底部から口縁部まで復元できた。

ここで採用されている埴輪は百足塚古墳と比べて焼き歪みによる変形が多いのが特徴である。

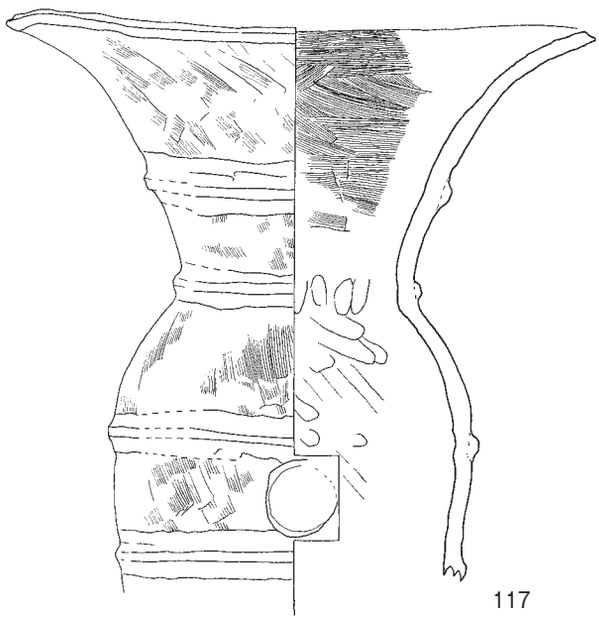
111 ～ 116 は底部から口縁部まで復元できた資料である。111 は 3 段目まで積み上げた段階で一度タテハケを施し、その後 4 段目以降を積み上げている。理由は、3 段目と 4 段目の境目（3 条目の突帯の直下）で、粘土帯を指ナデにて接着し、下の面に上からの新たな粘土を接着させるが、接着面が一部剥離し、その下からタテハケが確認できるからである。115 は 4 段目で、116 も 3 段目上部まで積み上げた段階でタテハケを施している。112、115、116 須恵質化しており焼き歪みが大きい。とくに 116 はタテ方向に完全に割れている個体である。111、112、114 には 5 段目外面に×や弧状の線刻が施される。

121 ～ 124 は口縁部の破片資料。122 は口縁端部がわずかに外反する。124 は端部に粘土を貼り付けて肥厚させる。

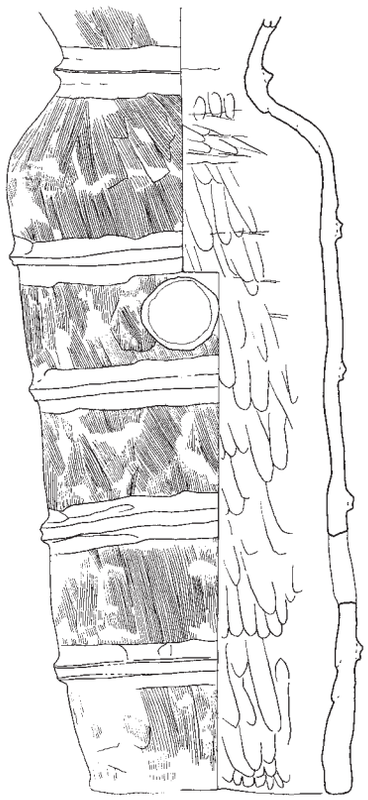
125 ～ 131 は底部の破片資料。127 と 129 は基底部調整により、底面に向かって器壁が薄くなる。131 は内面が指ナデと指オサエによって調整を行っているものの、外面が不十分で端部の粘土が外側に潰れている。



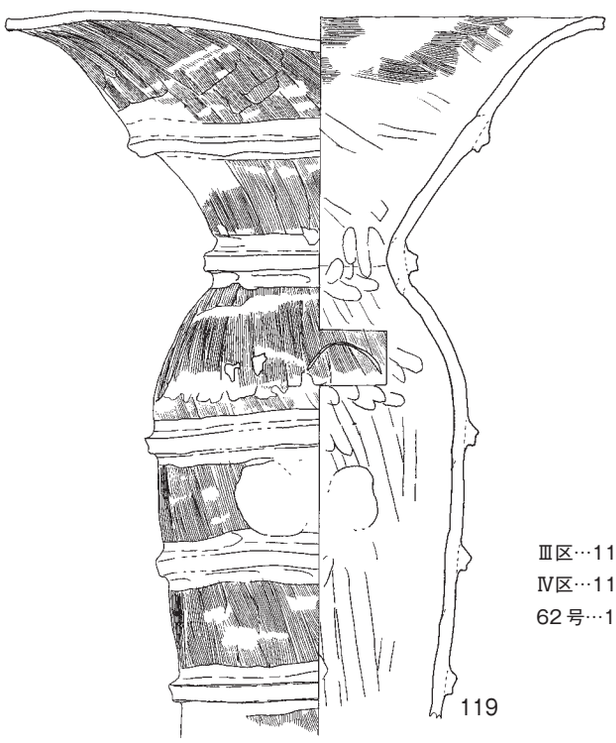
図版 22　62 墳出土の円筒埴輪①



117

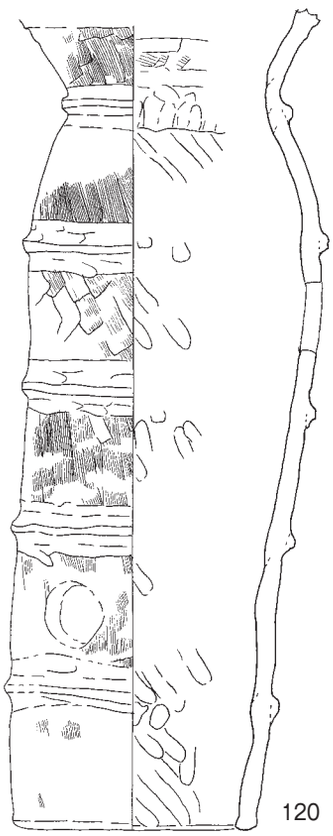


118



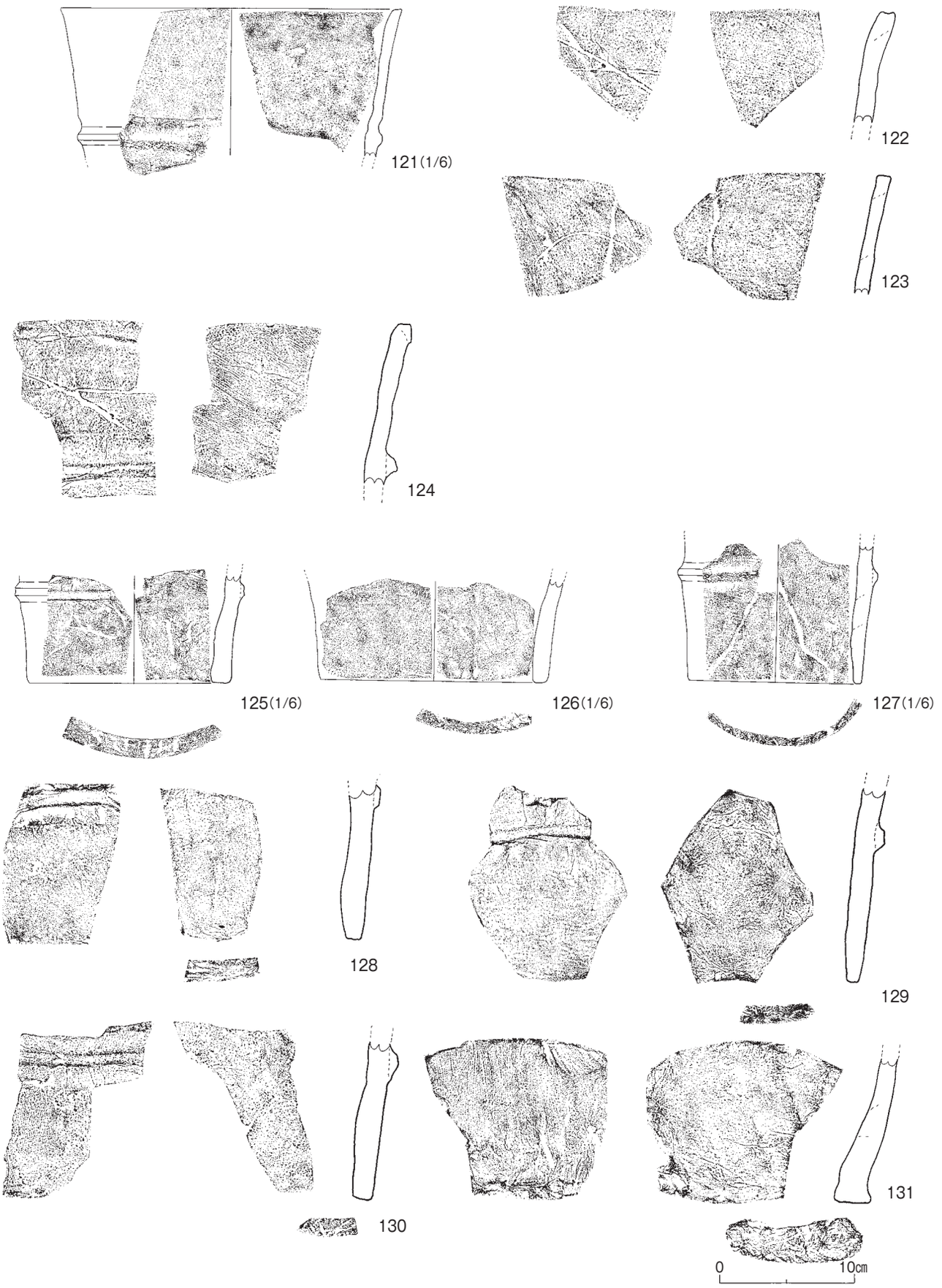
119

Ⅲ区…118
Ⅳ区…117
62号…119・120



120

図版 23　朝顔形円筒埴輪



図版 24　62 号墳出土の円筒埴輪②

⑬朝顔形円筒埴輪

４点を掲載した。

22 は朝顔形円筒埴輪で４段目と５段目それに頸部が残存している資料である。外面には頸部へ至るために内傾するラインで粘土の継ぎ目が明瞭に残っている。ここで粘土を継いだあとにタテハケを行っている。内面は指ナデが行われているが、頸部になると横方向のナデとなる。

118 は朝顔形円筒埴輪で基底部から頸部まで残存している資料である。器面の状態が良好で、調整痕が明瞭に残っている。制作に伴う小工程を確認していくと、基底面と２段目、４段目そして頸部へと至る内傾の始点で確認できる。基底面と２段目という低い位置で確認できるのは、普通円筒埴輪よりも重量があるために、下段はある程度乾燥させてから上部を積み上げていく必要があったからであろう。また、底部倒立調整を施しておらず、そのために基底面はより乾燥させる必要があったと思われる。ちなみに頸部までの高さは普通円筒埴輪の器高とほぼ等しい。

120 は基底部から頸部までが残存している資料である。表面は摩滅により調整が不鮮明な箇所もある。このため制作に伴う小工程の抽出が困難だが、３段目と４段目および頸部直下にその痕跡をみることができる。基底部は整形を行っているが、倒立した状態での整形ではなかった可能性が高い。

117 は４段目から口縁部が残存した資料である。やや摩滅しているものの、器面の調整痕は確認できる。頸部から口縁部にかけては最低でも４回の小工程をえていることが分かる。とくに大きく外傾する口縁部は、細かい小工程をえないと制作が困難だったはずである。

119 は２段目から口縁部まで残存している資料。５段目に線刻がある。

第２節　形象埴輪の特徴

本古墳から出土した形象埴輪の種類は、家形埴輪、器財埴輪、柵形埴輪、人物埴輪、動物埴輪がある。器財埴輪は盾、甲冑、太刀、太鼓がある。盾持ち人については人物埴輪として掲載する。動物埴輪は鹿、馬、犬、鳥のほか種類を確定し得なかった資料がある。このうち盾は墳丘の円筒埴輪列のなかに樹立されていたと考えられる。盾持ち人は周堤上の樹立の可能性が高いが、ほかの形象埴輪とは離れた単独樹立であったと思われる。

実測は円筒埴輪と同様に、主にマイブンスコープを使って素図を作成し、これを基に細部の修正、補足を行った。なお、一部の資料については、実測よりも本体復元を優先したために、内面観察ができないものがあった。このため、断面や内面の調整、製作時の痕跡などを掲載できなかったことをお詫びしておく。また、ほとんどの資料が平成９年度から 10 年度にかけての調査で出土したものであり、取り上げ後すみやかに洗浄、注記を行っているが、その作業から 15 年以上が経過し、擦れなどから、注記が読み取れないものがあったことは反省しなければならない。

（１）家形埴輪

４種類６個体を掲載した。ほとんどの破片がⅢ区からで、周溝内と外堤外方から出土している。

家形埴輪（132：入母屋造）

主にⅢ区の周堤外方から出土した。

入母屋造で、上屋根と下屋根から身舎（壁）部分が分割して成形・焼成されたと考えられる。残存率は悪く、とくに身舎や下屋根は大半が後補によるものである。上屋根の残存率は５割ほどである。基底部の破片を確認することができなかったが、後述する 133 を参考にして、高さ 109㎝、

最大幅はいずれも下屋根下端部で長辺 74.2㎝、短辺 59.2㎝に復元された。

身舎の基底面は後補によるものだが、平面形は隅丸長方形に復元した。壁面は平側の中央部で外側に張り出している。基底面における計測値は平側で 59.5㎝、妻側では 43㎝である。壁は柱が表に現れない大壁で、４方向のうち平側と妻側のそれぞれ１方向が完全に後補による復元である。残存している平側には、向かって左側に窓あるいは入口の表現があったと考えられる切り込みがある。１辺 14㎝前後で方形に近いと想定され、周辺には赤色顔料の塗布が認められる。また、その周囲には細い工具による沈線が施される。縦方向には２条、横方向では１条となる。切り込みの上部には上端幅１㎝の突帯が巡っており全周していたと考えられる。また、基底部直上にも同様の突帯が巡っていたと想定される。妻側には２条目突帯と下屋根との間に、直径６㎝前後の円形の透孔が配されている。

下屋根も残存率は半分以下である。身舎と同様に平側の軒先中央部が外側に張り出す形状を呈する。軒先は幅４～５㎝ほどに粘土を張り付け肥厚させる。傾斜は平側、妻側とも 42 度で復元した。途中で角度を変えることはない。上屋根との受け部は残存していなかったが、他の資料を参考にすると、上面を平坦に成形して上屋根をのせていたと考えられる。

上屋根は平側の下端で幅 42.8㎝、上端（破風の上端）で 80.2㎝となる。妻側では下端 31.5㎝、上端は 19㎝で、この部分での最大幅は破風の下端で 37㎝となる。高さは 43㎝を測る。平側の下端には幅４㎝の粘土板を貼り付けて肥厚させている。また、２本１単位とする沈線が格子状に３段に描かれている。下位と中位は４区画、上位のみ５区画に区切られ、１マスごとに縦の沈線が充填される。沈線は幅や太さが一定ではなく、区画をはみ出すものもあり、丁寧ではない。屋根を覆った網代の表現だろうか。上部は両平側から幅３㎝の粘土板が突き出しており、障泥板の表現と考えた。ここには半円形の窪みがあり、堅魚木をのせたと思われる部分が５箇所ある。直径４～５㎝の大型の堅魚木の存在が予想される。すべて欠いた状態ではあったが、138 ～ 140 がこれに該当する堅魚木であった可能性が高い。妻側では端部を折り返すように粘土板を貼り付けて破風を強調する。上端部は多くが欠損しているが、方形の粘土板をそれぞれ左右に貼り付ける。これによって中央部はＵ字形にくぼみ、左右両端が斜め上方に突き出すような形状になる。他の事例では千木にあたる部分となる。破風の貼り付け部付近には幅３㎝で、平面が平行四辺形に近い粘土板が張り付けられる。欠損している部分も多いが、上部に１箇所、左右に３箇所、計７箇所あったと考えられる。上部は軒先、左右は桁先の表現と考えられる。妻側には径７㎝の円形透孔が対向するように配されている。また、妻側には赤色顔料の塗布が一部に認められる。

残存状態が悪く、内面観察も十分でないため、成形の復元は完全ではないが、身舎部は粘土板をほぼ垂直に積み上げることによって成形している。下屋根は身舎に粘土板を張り付け、積み上げることによって成形するが、傾斜が 40 度以上あり、一度に積み上げるのは困難だったはずである。破片の状況を観察すると最低でも３工程を経ていた可能性が高い。上屋根は中心となる部分を粘土板によって成形し、妻側に三角形の粘土板を接合する。その後、破風や障泥板などの突出する部分を貼り付けていったと考えられる。

器面調整は摩滅部分も多いが、身舎と下屋根にはタテ方向のハケメが残っている。上屋根にはハケメの痕跡はなく、指によるナデが施されている。

家形埴輪（133：入母屋造）

破片は主にⅢ区の周堤外側から出土している。132と同じ形状であることから、詳細については割愛するが、身舎の基底部隅角の破片が残存しており、これによって基底部の平面形が隅丸長方形であることが分かる。器高は93㎝と132より低いが、下屋根の軒先部の長辺は87.5㎝、短辺63㎝で、こちらは大きくなる。同規格を目指しながらも、法量までのこだわりがなかったか、もしくは大型品であることから、製作途中の歪みなどが要因として考えられるかもしれない。

家形埴輪（134：高床建物①）

破片はⅡ～Ⅲ区そして周溝内や周堤外方と広範囲から出土しているが、Ⅲ区の周溝内が中心となる。寄棟造屋根の高床建物である。６割ほどの破片を確認することができた。

高床部は柱間２間×２間、総数８本の円柱が床を支えている。すべての柱で基底部が欠損しているが、器高85㎝、平側の最大幅63.5㎝、妻側54.5㎝で復元した。最大幅となる屋根の軒先が欠損していることから、実際はこの数値より大きくなることは確実である。柱は径８～10㎝の中空造りで床面を超えて屋根下まで続いている。高床と身舎との境の外面には幅3.5㎝で粘土の剥離痕があることから粘土帯の貼り付けがあったと考えられるが、ほとんど欠損しており判然としないが裾周り突帯と思われる。

身舎は柱間が吹き抜けとなっている。吹き抜けの下辺には左右に粘土を張り付けることによって段をつくり中央が凹んだ形状を呈している部分が少なくとも４箇所確認できる（欠損が１箇所）。他の事例から出入り口を表現していると考えられるが、平側の片面では２箇所設けられている。妻側では片方で１箇所設けられるが、対面側では設けられていない。復元された基底部から15㎝上に厚さ１㎝の粘土板を水平に貼り付けて床面を形成しているが、柱と壁面付近のみで中央には設けられていない。空いた部分は長楕円形を呈する。

屋根は寄棟造りで平側、妻側ともに上部ほど傾斜がつく。下部では40～50度だが、最上部では70度以上となる。頂部は長方形を呈し、その周囲には幅４㎝の粘土板を貼り付けているが大半は欠損している。軒先はすべて欠損していることから端部の状況は判然としないが、現状より10～15㎝ほど斜め下方に向かって伸びていたと思われる。

成形は、まず柱をそれぞれ別作りで行う。粘土板の積み上げで行い、35㎝ほどまで積み上げて、それぞれの位置に配置する。そして床面や吹き抜け周辺に粘土板を貼り付けて形成したと考えられる。屋根も細かい粘土板を貼り付けて成形しているが、数回の乾燥を繰り返しながらの作業だったはずである。また、屋根下方の稜線部では肥厚させるために２重の粘土貼り付けを行っている。

器面調整は屋根部ではタテ方向のハケメ充填されている。身舎および高床部は柱と壁面ともに指ナデが主体だが、一部にタテもしくはヨコのハケメが確認できる。床面も同様に指ナデとハケメが認められる。また、身舎には赤色顔料の痕跡がわずかに認められる。

家形埴輪（135：平屋寄棟造）

主にⅢ区の周堤外方から出土しているが、破片は広範囲に広がっている。

寄棟造の平屋建物で、残存率は３割ほどだが基底部から屋根頂部までの破片を確認することができた。器高92㎝、最大幅は屋根の軒先部で平側72.5㎝、妻側49㎝で復元した。屋根と身舎ともに高さを強調している。

身舎は残存率が悪い。とくに基底部は平側の一部しか残っていないが、平面形は隅丸長方形と考えられる。基底部における計測値は推定で平側56.8㎝、妻側35.4㎝、軒先までの高さ46㎝であ

る。壁面には上端幅１㎝の突帯が基底部直上の下段、中段、上段の３条巡っている。妻側の上段突帯の上には円形の切り込みがあり、透孔が対向するように配されていたものと考えられる。平側の片面には向かって左側、中段突帯と上段突帯との間に、１辺 12 ～ 13㎝の方形に近い切り込みがある。入口にしては高すぎるので、窓の表現と想定される。平側のもう片面は後補の部分が多いため、入口については判然としない。

寄棟造の屋根は高さ 46㎝を測ることから身舎と屋根が同じ高さであることが分かる。傾斜は平側の下端では 50 度、妻側の下端は 60 度程度で、上位にいくほど急となり、平側では 70 度、妻側では 85 度と垂直に近くなる。頂部の平面は長方形で、周囲には幅４㎝の粘土板を貼り付けているが、装飾表現はない。

身舎部分の成形は粘土板の積み上げによるもので、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。屋根も粘土板の積み上げで行い、乾燥を繰り返しながらの作業だったと思われる。

器面調整は摩滅が激しいが、身舎、屋根ともにタテ方向のハケメが主体で、一部に指ナデが加わっている。

家形埴輪（136：高床寄棟造建物）

主にⅢ区の周溝内から出土した。

寄棟造の高床建物で、残存率は６割以上で、家形埴輪では最も残りがよい資料である。器高 80㎝、平側の最大幅は軒先にあり 63.5㎝、妻側の最大幅は後述するネズミ返しの下端部にあり、57.4㎝を測る。

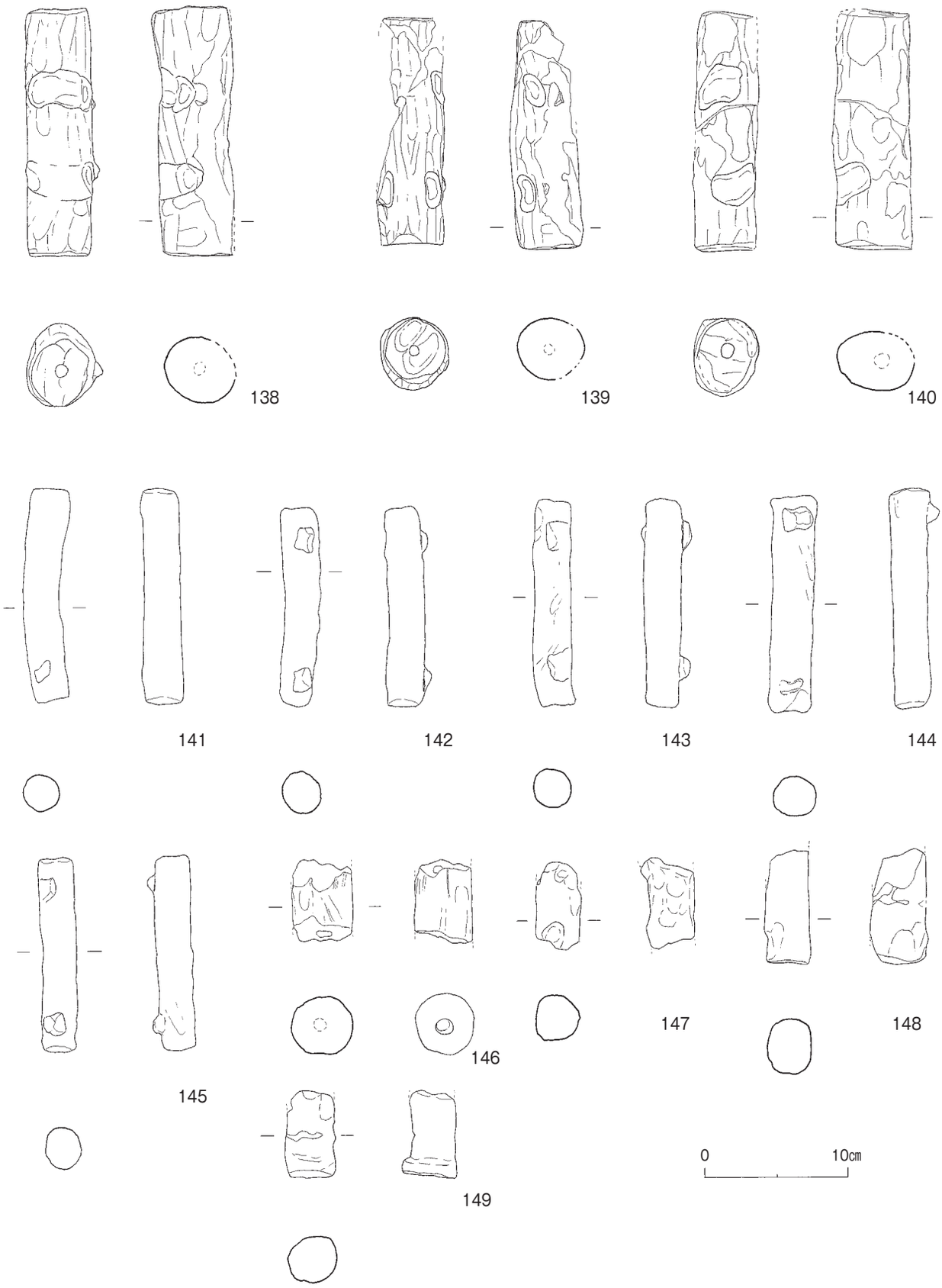
高床部は柱の表現がなく、板壁もしくは土壁を意識していたと想定される。基底部は隅丸の長方形で平側 52.6㎝、妻側 48㎝、ネズミ返しの下端までは 15㎝、身舎の基部までは 21.5㎝を測る。基底部直上には上端幅 1.5㎝の突帯が巡っており、各辺とも２箇所ずつ方形の透かしを設ける。大きさはややばらつきがあるが、１辺７～９㎝を測り、それぞれ対向するように配されている。湿気を防ぐための通気孔と考えたい。

身舎は軒先までの高さが 24㎝で幅は基底面とほとんど変わらない。妻側の中段より上に径６㎝の透孔が対向するように配されているが、これ以外で開放されている部分はない。身舎の基部からは幅９㎝の粘土板が斜め下方に伸び１周しているが、ネズミ返しの表現だろう。平側の片面には中央のやや上部に幅１㎝、長さ３㎝の粘土塊を貼り付ける。そして両側には幅 3.5㎝の粘土帯が縦に貼り付けられる。そしてそれぞれに径２㎝ほどの粘土塊を、先述した粘土塊と横１直線になるように配される。また、上部には一部欠損しているが、幅１㎝の粘土帯を横方向に貼り付ける。そして下部には向かって左側の粘土帯の下端をＬ字状に曲げている。これらの施設は扉を表現していると考えられる。横に並んだ粘土塊は閂だろうか。左右はそれぞれ閂をかける鎹を表し、中央は閂穴もしくは取手と考えたい。上部と下部の粘土帯は扉を受けるための楣と蹴放しの可能性があるが判然としない。左右の粘土帯は小脇板か方立柱の可能性があるが断定できない。また左右の粘土帯の軒先に隠れる部分にも粘土塊の貼り付けがあるが、これも用途不明である。他の３面には壁面を４分割するように幅 3.5㎝の粘土帯をタテに貼り付ける。柱の表現だろうか。いずれも軒先の直下に粘土粒を貼り付けるが用途が判然としない。

屋根は軒先から頂部までの高さが 34.5㎝で妻側の最大幅が 55.8㎝を測る。傾斜は平側、妻側ともに下端は 50 度ほどで上部に向かって徐々に急になり上端は 60 度になる。軒先には幅３㎝ほどに粘土帯を張り肥厚させる。頂部は平側 15㎝、妻側が 12㎝の長方形を呈する。周囲には粘土の

図版 29　家形埴輪⑤（136）

図版 30　家形埴輪⑥（137）



図版 31　家形埴輪⑦（堅魚木）

剥離痕があり、幅６㎝の粘土板が巡っていたと考えられる。

透孔以外では完全に閉鎖された建物であることから、成形の詳細な復元は困難だが、他の家形埴輪と同様に基本は粘土板の積み上げと乾燥を繰り返しながら成形される。とくに本資料は壁面が厚いためかなりの重量がある。自重による歪みは一部に認められるものの、基底部が大きく歪みはほとんどないため、十分な乾燥を行って次の工程を行っていた可能性が高い。

器面調整は摩滅により観察が十分ではないが、屋根はタテ方向のハケメがよく残っている。身舎および高床部は指ナデが主体で、一部にハケメが残っている。

家形埴輪（137：寄棟造建物）

主にⅢ区の周溝内からの出土と考えられる。屋根と身舎の壁の上部のみしか確認できなかったが、136 と同じ形状と考えて復元を行った。このため詳細については割愛する。残存している資料から 136 よりやや小型になる可能性が高い。

家形埴輪（138 ～ 149：堅魚木）

138 ～ 149 は断面が円形の棒状製品で堅魚木と考えられる。138 ～ 140 は全長 16 ～ 17㎝、最大径５～６㎝の大型品である。長軸側の両側面に径１㎝弱の孔が穿たれる。貫通はしておらず、左右それぞれ別工具によって穿孔されている。円柱部には粘土の貼り付けが認められるが、屋根との接着に使用されたものだろう。出土位置は周堤外方で 132･133 に近く、形状からもこれに付属していたと考えてよいだろう。141 ～ 145 は全長 14㎝、最大径 2.5 ～３㎝の小型品である。それぞれ２箇所に粘土の貼り付けがあり、本体との接続部と考えられる。146 ～ 149 は破片資料で、146 は１～３と同じく穿孔を施す大型品と考えられる。147 ～ 149 は最大径が４㎝前後の中型品である。

（２）器財埴輪

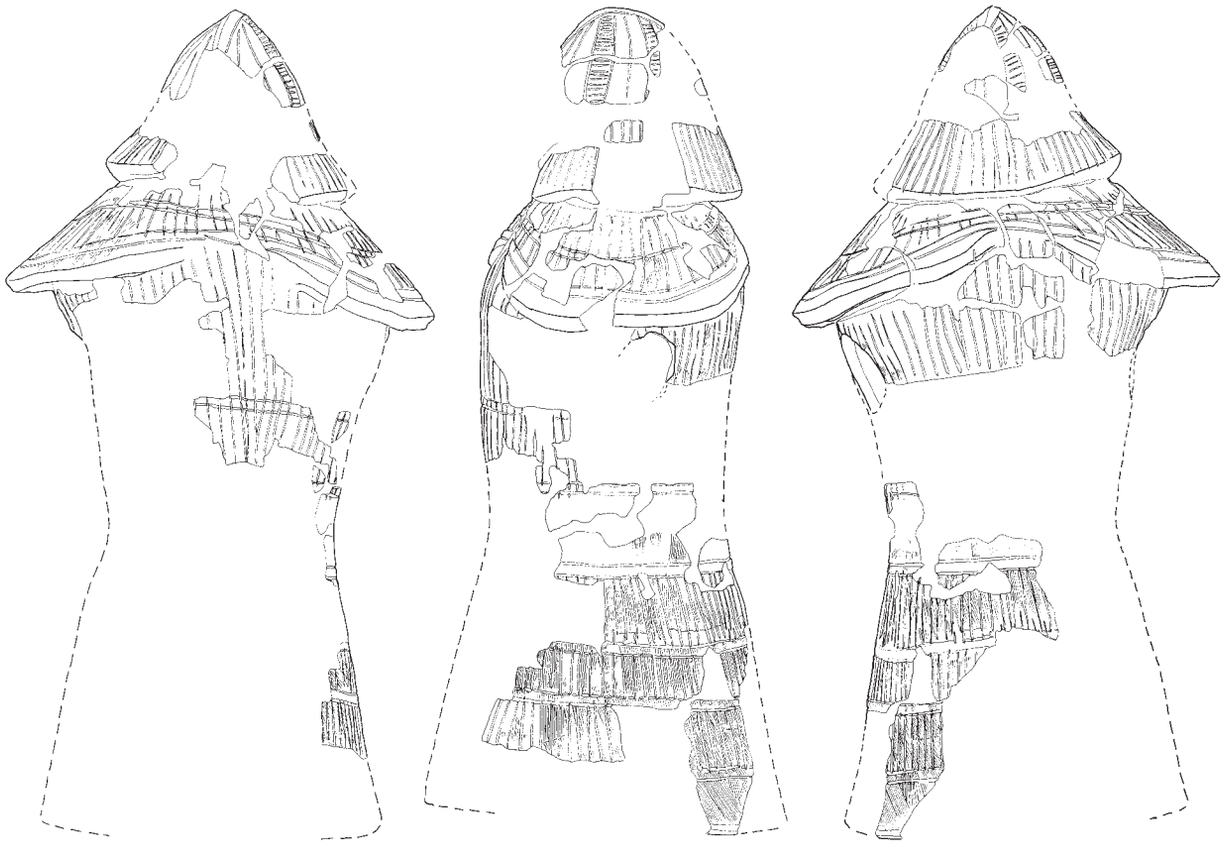
甲冑形埴輪（150）

Ⅱ区からⅢ区の周溝内から出土した。かなりの広範囲で破片が出土している。当初は武人埴輪を想定していたが、体部の表現がなく、甲冑形埴輪と判明した。基底部は完全に失っており、残る部分も残存率は４割ほどで、残りは後補であるが、冑から草摺の端部までの接点を確認することができた。残存高は 67㎝、最大幅は肩甲にあり 34㎝を測る。

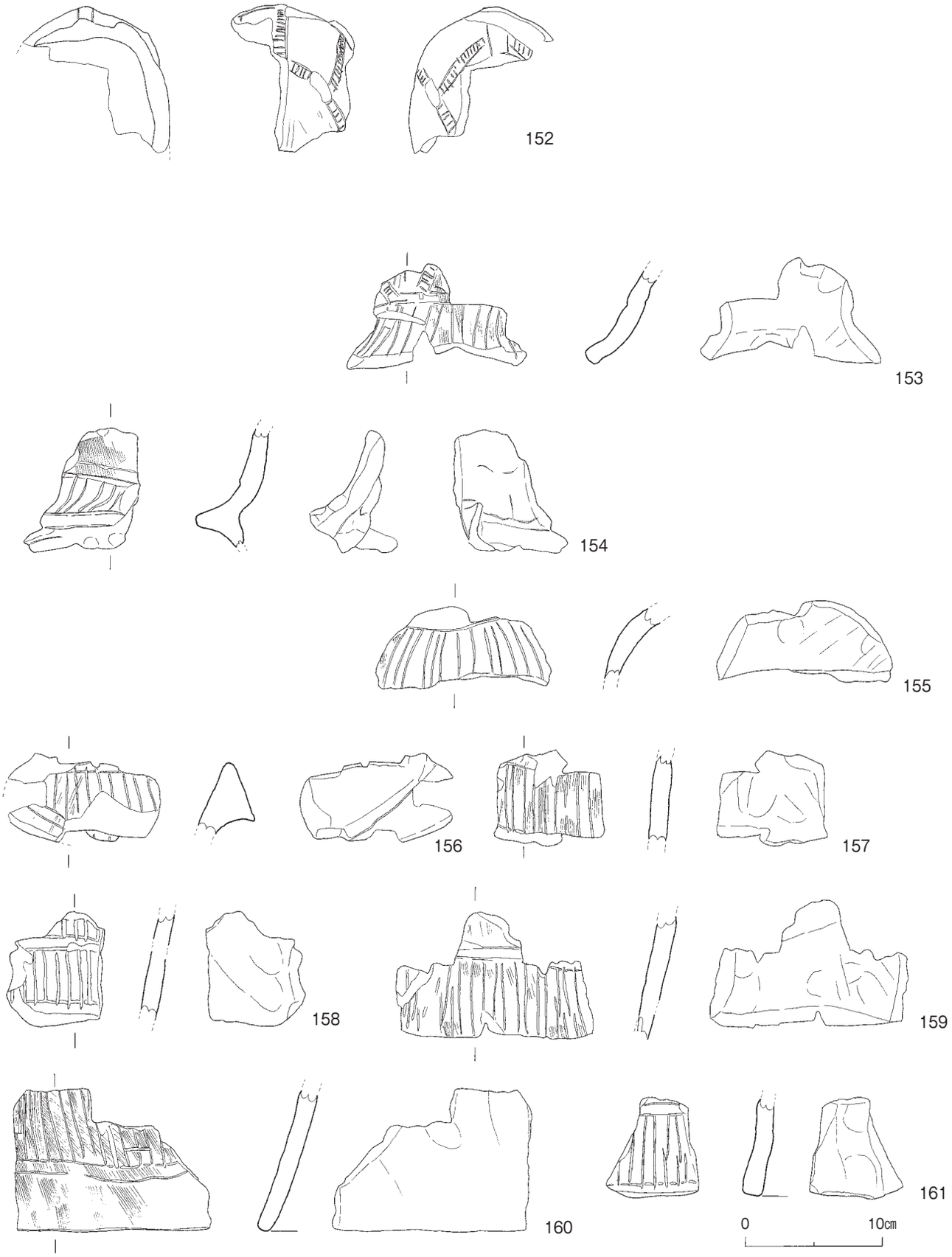
冑は形状から衝角付冑を表現していると思われる。ただし縦方向の沈線が中心となっており、横矧板ではなく竪矧板もしくは小札を表現したと思われる。また縦方向の沈線間に横方向の沈線を施す箇所が４か所認められる。綴も縦方向の沈線がなされており、横綴ではなく小札綴の表現だろうか。線刻間は１㎝前後だが、太さや間隔も統一性がなく、途中で二股に分かれるものもある。全体の印象も実際の冑を忠実に再現したものとは言い難い。本来顔にあたるは空洞ではなく粘土で覆われており、冑や綴はその上から粘土板を張り付けることによって形成される

肩甲は上腕部を覆うようなものではなく、肩だけを守る短いものである。縦と横の沈線によって小札を表現したと思われるが、冑と同様に粗雑なつくりである。横方向の沈線は２本１単位が基本となっているが、途中で途切れる部分もある。

挂甲も縦と横の沈線によって表現される。ただし１段の長さや幅は部位によって異なっており、小札一つ一つを丁寧に再現したものではない。横方向の沈線は２本１単位である。透孔が肩甲の下に対向するように２か所に施される。後補による部分も多いが径は６㎝ほどで円形を呈している。けいこうと草摺の間には幅６㎝ほどにわたって何の表現もなされていない。あるいは腰札を



図版 32　甲冑形埴輪①



図版 33　甲冑形埴輪②

表現しようとしたのかもしれない。

草摺は４段で表現されている。縦と横の沈線によって小札が表現されているが、各段によって長さにバラつきがあり、もっとも上段の４段目は６㎝、３段目は3.5㎝、２段目は4.5㎝となっている。幅は各段とも 0.8 ～１㎝ほどだがバラつきがある。最下段には何の表現もなされない。

器面の調整はタテハケがほぼ全面にわたって施されている。草摺部分は良好に残っているが、上部にいくほど残りが悪くなる。綴までは確認できるが、胄本体ではまったく認められないことから、この部分には施されなかった可能性がある。沈線はハケメの後に施されている。

基部を失っていることから作業単位を見出すことが難しいが、草摺、挂甲、肩甲、胄がそれぞれ別造りの可能性が高い。

甲胄形埴輪破片資料（151 ～ 161）

Ⅱ区から出土した甲胄形埴輪と考えられる資料である。151 は挂甲から草摺の基部にいたる部位である。150 と同タイプと考えられる。上部が欠損しているが、円形の透孔が対向して穿たれている。小札は縦と横の沈線によって表現されるが、縦の沈線間は一定ではない。挂甲と草摺の間には不規則な線刻が施される。爪もしくは細い工具によるものと考えられるが、意図的なものか判然としない。器面にはハケメが充填されており、こののちに沈線を施している。152 ～ 155 は胄と思われる資料である。このうち 152 ～ 154 は同一個体と考えられる。152 は鉢部と考えられる。形状から衝角付胄を表現している可能性が高い。衝角部分はやや尖っており、伏板が２本の沈線によって表現されている。さらに２本１単位の沈線が縦と横方向に施され、沈線間には別方向の短い沈線が充填される。ただし、これらの沈線は幅や長さが一定ではない。153 と 154 は綴で、縦方向の沈線が施される。154 は顔に近い部位で内側の下位には粘土紐を別に貼り付けており頬当を表現した可能性がある。155 は丸みを帯びた形状を呈しており、胄の一部と考えた。152 ～ 154 とは色調や胎土が異なっており、別個体と思われる。鉢の頂部に近い部位で、横方向の沈線の下に向かって縦方向の沈線が伸びている。竪矧板もしくは小札の表現だろうか。内面は灰色であることから空洞ではなかったと考えられる。156 は肩甲と考えられる資料で、先端は楕円形を呈する。肩部だけを覆うような長さであったようだ。157 ～ 161 は草摺と考えられる資料で、横の沈線のなかに縦の沈線を充填させることによって小札を表現したと考えられる。沈線の幅や長さには一定性を欠く。160 は草摺の下端で端部と沈線間には３㎝程の空白帯がある。

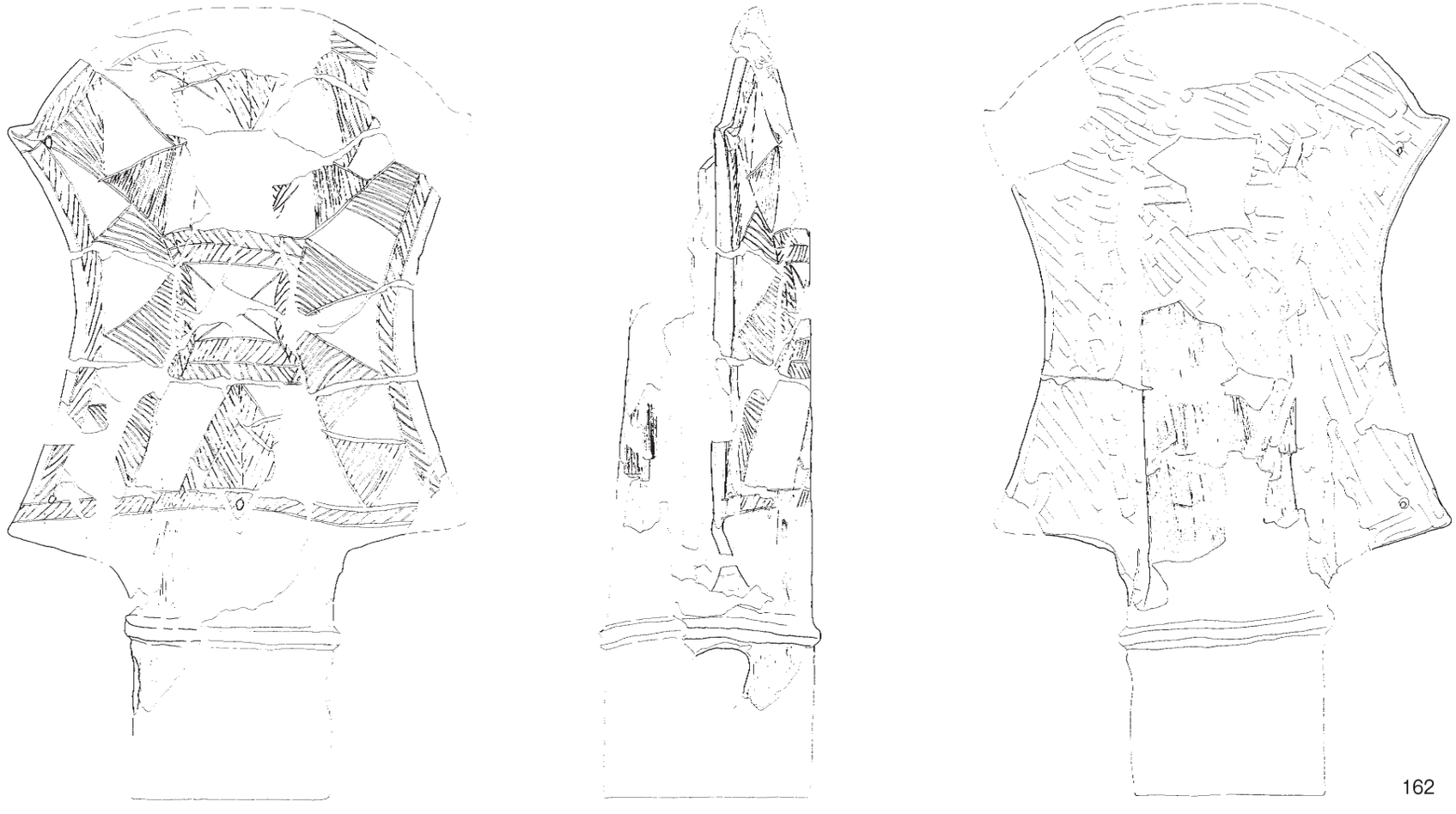
盾形埴輪（162）

Ⅳ区から出土した。墳頂から転落した可能性が考えられる。基台部を失っているが残存高 66.5㎝、最大幅は推定 43.5㎝を測る。

盾面の残存は良好である。盾面は高さ 52.5㎝、上位の幅 43.5㎝、下端幅 43㎝と推定される。形状は縦長の長方形で木製盾を模したと思われる。側面は中央がくびれた弧状をなしている。上辺は山形に弧を描き、両端は外側に跳ねるように外反する。

器面には所々にタテハケが認められる。もともと円筒部には全面にタテハケが施されたが、盾面はその成形の際に、ハケメのち粘土の貼り付けを行ったと思われる。左右のヒレにはハケメは施されず、指ナデが行われる。後面のナデは粗雑で単位が明瞭に残っている。

器面調整後に沈線による文様が描かれる。外区のヒレ状部分には２本１単位とする沈線が描かれている。器面を周回するように描かれており、沈線間にはさらに斜めの短い沈線が連続して描かれている。さらにその内側には三角文が連続して描かれている。三角文のなかに斜めの沈線を



図版 34　盾形埴輪①

充填するものもあるが、それぞれの三角形の大きさや位置には規格性を見出すことができない。基面の中心には内区が存在し、側面は盾の形状と同様に中央がくびれた弧状を呈している。上辺は３本の直線状は剥離しているものの、２本の沈線が中央で交わり×印を描いているが、４つの三角文を表現したともとれる。これらの沈線にはヘラ状の工具が用いられたと思われるが、太さや長さなどがあいまいで、歪んだり、単位をはみだしているものも多い。

文様を描いた後には穿孔が施される。位置は盾面の下辺の左右と中央に合わせて３か所が確実に施されている。上辺は後補による部分が多いが、下辺同様に３か所施された可能性が高い。穿孔は楕円形を呈しており、長軸の大きさは１㎝弱。表面から裏面に向けて穿孔されて貫通している。基台部は盾面の直下に突帯が一部残存し、突帯の下には円形の透孔が施される。その下は完全に欠損しているが、基台が復元できた盾３では、３条の突帯を施し基台だけの高さが35㎝に及ぶことから、この資料も器高は90㎝前後になることが予想される。円筒部の上部は空洞のままである。

盾形埴輪（163）

Ⅳ区から出土した。テラスか墳頂に樹立したものが転落したと思われる。残存高は80㎝、盾面は上辺、下辺ともに欠損部分があるが上位幅は38㎝、下辺は33㎝と推定する。基台は底面を失っており、仮に164と同様に３条突帯であれば復元高は90㎝以上となる。

盾面の形状は側辺が中央でくびれて弧状をなし、上辺は山形を描く、両端は欠損しているが、跳ね上がるように外反すると思われる。下辺の両端は盾面右側（盾に向かって左側）が完全に欠損しており、左側も一部後補である。

器面の調整は一部にタテハケの痕跡が残るが、表面は丁寧にナデが施され、器面が滑らかになっている。裏面はハケメやナデの単位がそのまま残る箇所が目立つ。

器面の文様は、外区のヒレ部には２本１単位とした沈線が周回していると思われる。沈線間には斜めの短い沈線が充填される。その内側には三角文を中心とした文様が描かれるが、最上部の文様は方形である。盾面の真ん中には縦方向に１本の沈線が描かれている。この線を中心線とし、文様は左右対称を志向したと思われるが、実際にはかなりいびつである。ただし文様の数は一致する。器面の中心には内区が存在し、側面は中央がくびれた弧状を呈し、上辺は２本の直線状の沈線が描かれ、それぞれ沈線間には斜めの短い沈線が描かれる。

162と同様に文様の後に穿孔を施される。上辺の穿孔は３か所とも確認できるが、下辺は中央の１か所し残存していないが、左右にも穿孔されていたと思われる。

基台部は最下段が欠損しているものと思われるが２条目と３条目の突帯は残存している。２条目と３段目との間は14.5㎝で、３条目と盾面との間は14㎝を測る。透孔は３条目突帯の下に穿孔し、いびつな円形を呈する。

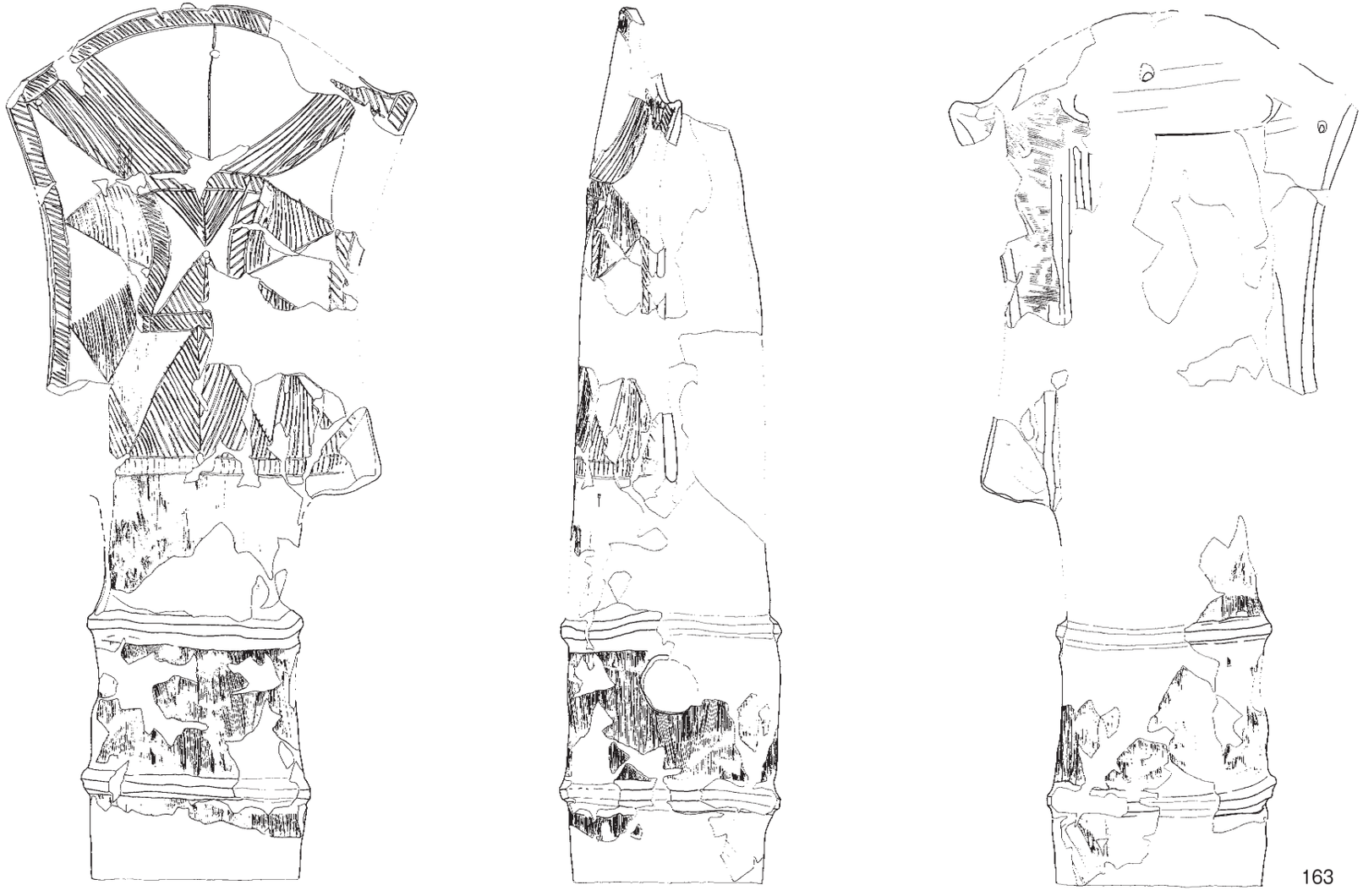
成形はほかの資料と同様に基台部の粘土板の積み上げから始まる。３条目の突帯と盾面との間に作業単位を示すわずかな凹凸があり、ハケメの単位もここで変わる。

盾形埴輪（164）

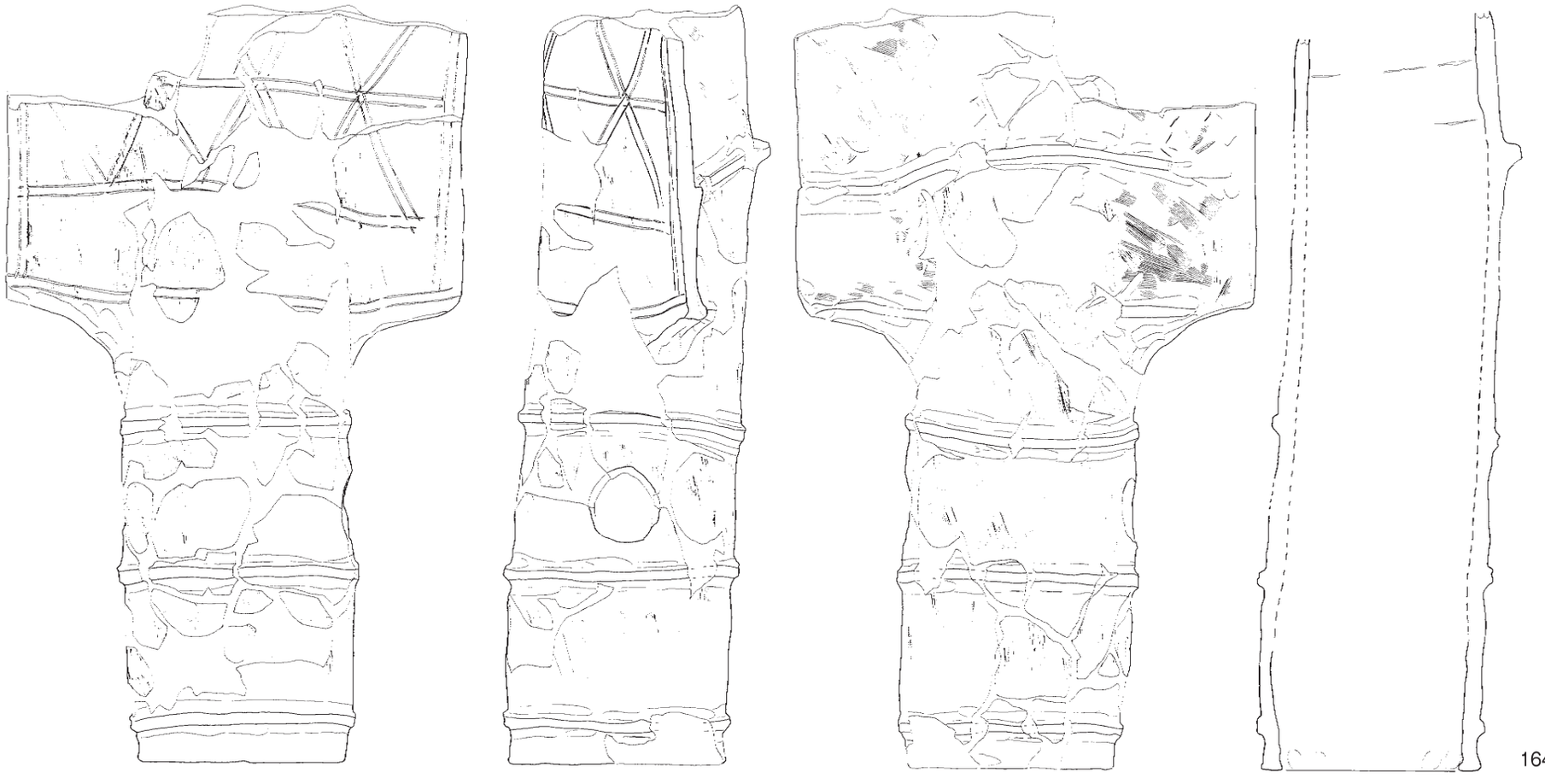
12トレンチのテラス上で出土したが、テラスに樹立されていたものではなく、墳頂に樹立されていたものが、転落した可能性が高い。

基台部の残存状態は良好だが、盾面は上半分が欠損している。残存高は75㎝、盾面の下位幅は43㎝、基台部の底径は39.5㎝を測る。

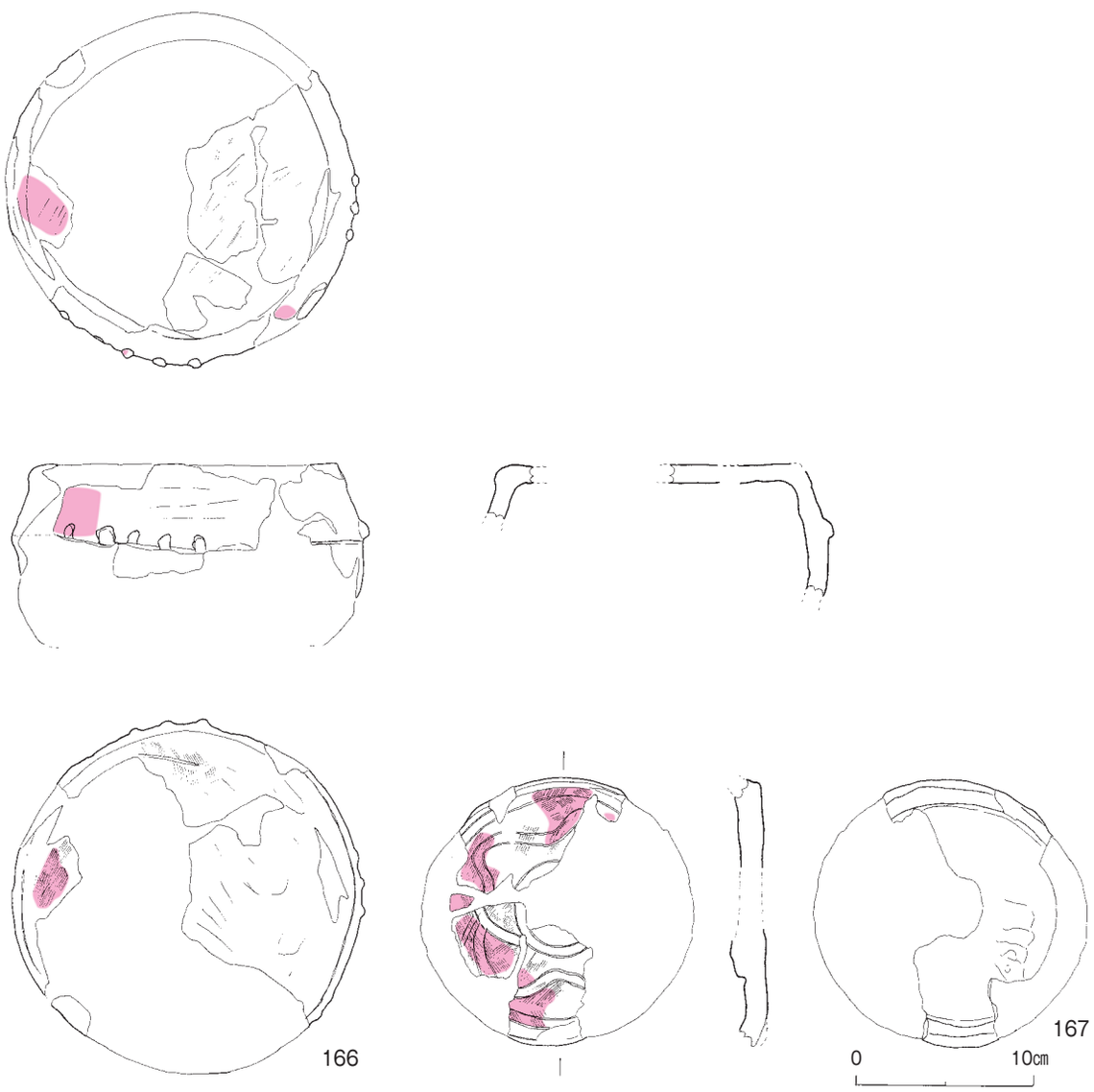
盾面の形状は縦長の長方形と推定される。側辺の中央はくびれることなく直線的である。裏面



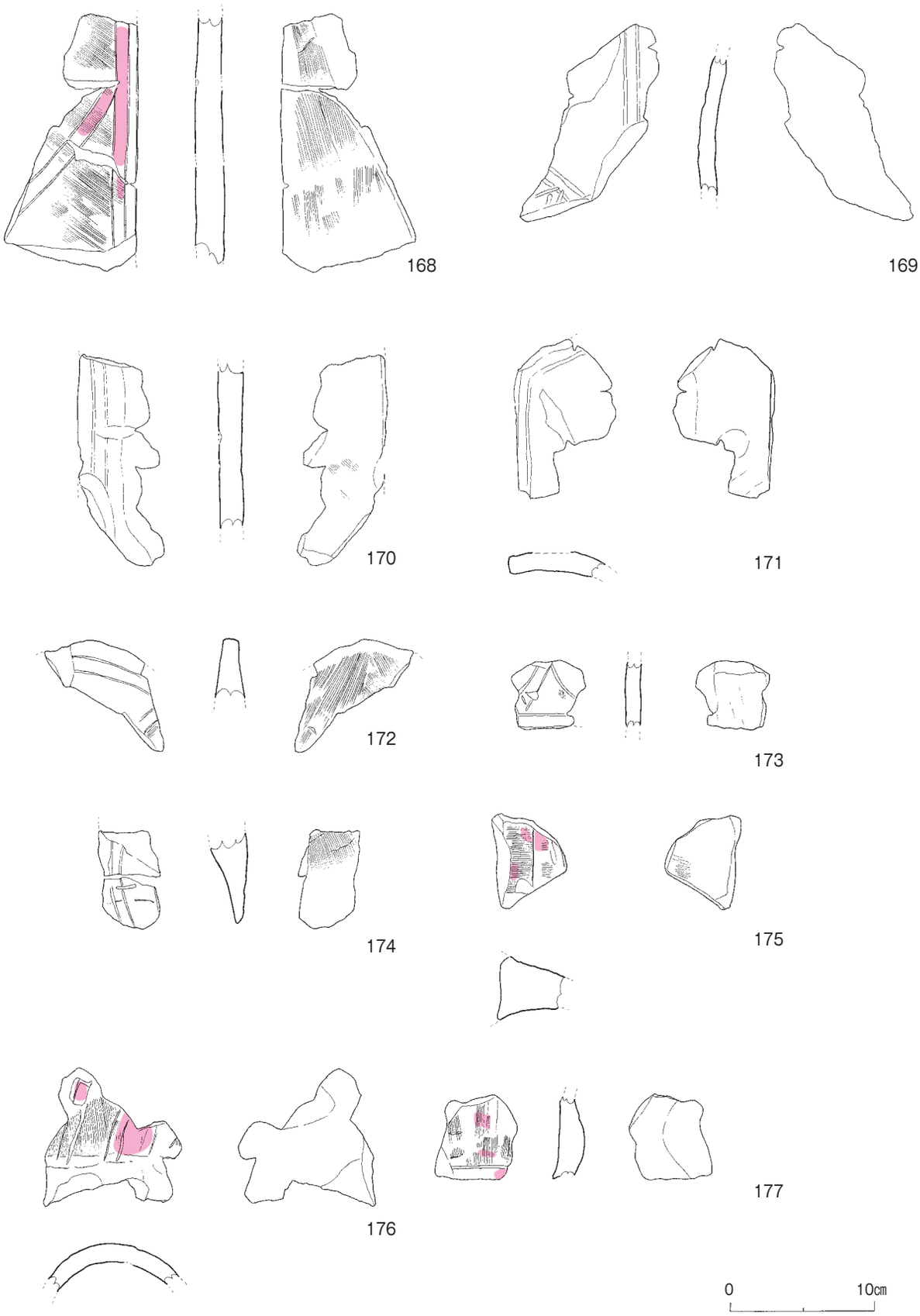
図版 35　盾形埴輪②



図版 36　盾形埴輪③



図版 37　大刀形埴輪（上）・太鼓形埴輪（下）



図版 38　62 号墳出土形象埴輪

には突帯を巡らしている。現状で確認できるのは２条で、下位と中央に巡らすが、その上位にもあった可能性がある。突帯は太く、幅と突出度はともに２㎝前後で、突帯間は11㎝である。

器面は摩滅が激しいものの表裏ともタテハケが施される。ハケメは盾面のヒレ部にも及んでおり、163や盾持ち人との相違点といえる。

文様は外区に２本１単位の沈線が全周すると推定される。その内側にはやはり２本１単位で横方向に沈線を描き、沈線間には同じく２本１単位で連続三角文が描かれている。沈線の描き方はやはり粗雑で、はみ出しや歪みが目立つ。盾面には赤色顔料がわずかに残っている。２本の沈線間で顕著に残っており、特定の場所のみに塗布された可能性が高い。

基台には３条の突帯が巡っている。１段目は底面から3.5㎝上位に設置し、１条目と２条目間は14㎝、２条目と３条目間は16㎝を測る。突帯幅は１㎝で断面は低いM字かいびつな台形を呈している。２条目と３条目の間には透孔が対向するように穿たれている。楕円形を呈し、径は７㎝を測る。

円筒部の成形は円筒埴輪と同様に、粘土板の積み上げによって行われる。自重の歪みによる底部調整を行った痕跡がないことから、どこかで乾燥期間を設けた可能性が高い。３条目の突帯の上部つまり盾面との境で、作業単位と思われるわずかな凹凸があるが、器面の荒れもあって判然としない。おそらく基台部を成形後に器面調整と突帯の貼り付け、透孔の穿孔を行い、その後一定の乾燥期間を設けて盾面の円筒部の積み上げを行い、積み上げ後にヒレ部を貼り付けたと思われる。

大刀形埴輪（165）

Ⅲ区の周堤外方から出土した資料で大刀形埴輪と考えられる。細長い円筒形で成形されているが、柄は完全に欠損し、鞘も先端は欠損している。残存長37㎝、径14.5㎝を測る。鞘の側面には幅９㎝、高さ６㎝の三角に成形した粘土板を貼り付けて鰭状とする。片側は欠損しているが、剥離痕が残っており、対向して貼り付けられたことは確実である。これはもともと盾の表現が退化したと考えられるものである。鰭状突起の上部には上端幅１㎝の突帯を２列貼り付ける。さらにそこから7.5㎝上部に２列の突帯を貼り付けている。その間には径2.5㎝の粘土粒を貼り付ける、何を意図するかは不明で、おそらく反対側にもあったと思われるが本体ごと欠損している。

器面は摩滅しているが、タテのハケメが施されている。鰭状突起にもハケメが施される。

太鼓形埴輪（166・167）

166と167は形状から太鼓形埴輪と考えた。人物埴輪に付属する可能性もあるが、大きさなどから単体品として扱うことにした。Ⅲ区の周堤外方から出土している。ともに同一個体と考えられるが、接点を見出すことができなかった。

166は叩面から胴と思われる資料である。叩面は推定径24.5㎝で、装飾表現はないが、赤色顔料の塗布が認められる。叩面から胴部にかけて徐々に径が広がっていく。叩面から７㎝下がったところが最大径となり29.5㎝を測る。またこの部分には1.5 × １㎝の粘土粒をほぼ２㎝間隔で、横に貼り付けている。叩面を綴じるための鋲の表現と考えたい。その下はほとんど欠損しているが、裏面に向かって再び径が小さくなっていくようである。そして２本１単位とする沈線が施される。おそらく連続半円文を描いたと思われる。また、胴部にも赤色顔料の塗布が認められる。内面はもともと完全に密閉された状態で焼成されていたと考えられ、灰色化している。にもかかわらず赤色顔料が付着している。ただしごく一部であることから、外面を塗るときに付着した可

能性もある。167 は裏面と考えた。直径は 22.5㎝を測る。２本１単位とする沈線によって文様が描かれている。文様は円文があり、外縁に沿うように描かれるものと、中心付近に描かれる同心円文がある。２つの円の間には、別の文様が描かれる。半分近くが欠損しているため全形は判然としないが、浪打ような形状を呈する。またこの面にも赤色顔料が塗布されている。

２つを同一個体と考えた場合、成形時には本来の叩面を基底部として製作されたと考えたい。その後粘土板を積み上げていくが、鋲打ち表現の箇所は粘土帯を貼り付けることによって肥厚させ、最大径としている。167 との接合については判然としないが、おそらく別造りで成形され、最後に蓋をするように接着したと想定される。

器面調整は、製作時に基底部となった叩面には、おそらく製作台としていた板の板目が残っており、一部は指ナデが行われる。胴部は指によるヨコナデが主体で、文様のある面にはハケメと指ナデが施されている。内面は主に指ナデ、指オサエが行われるが、叩面の裏側にはハケメ（板状工具によるナデ）が残る。

62 号墳出土器財埴輪（168 ～ 177）

62 号墳の墳丘に樹立されていたと考えられるもので、ほとんどは盾形埴輪と考えられるが一部に器種が不明なものもある。

168 は盾形埴輪の盾面側部の破片と考えられる。残存長 17㎝、厚さ 1.8㎝を測る。２本１単位の沈線が側面に沿って直線状に描かれ、そこから斜下方に向かう別の沈線が描かれる。鋸歯文を表現したと思われる。表には赤色顔料が塗布される。裏表ともにタテもしくはナナメのハケメが施される。169 ～ 173 も盾形埴輪の盾面と考えられる破片で、胎土や色調、出土位置から同一個体と考えられる。２本１単位とする沈線が描かれており鋸歯文を表現したと考えられる。器面の摩滅が激しいが、172 は裏面にナナメのハケメが残っている。174 と 175 も同一の盾形埴輪と考えられる破片で、円筒部に近い部分であると思われる。175 の表面には赤色顔料が塗布されている。176 と 177 は器種が不明だが、器財埴輪と思われる。176 は円筒状に成形され、外面には２本１単位とする沈線が横と斜めに描かれ、赤色顔料の塗布も認められる。器面調整は外面が斜めのハケメで内面はナデ調整。177 は１本の沈線が描かれ、赤色顔料の塗布が認められる。外面はハケメ、内面はナデ調整である。

（３）柵形埴輪（178 ～ 189）

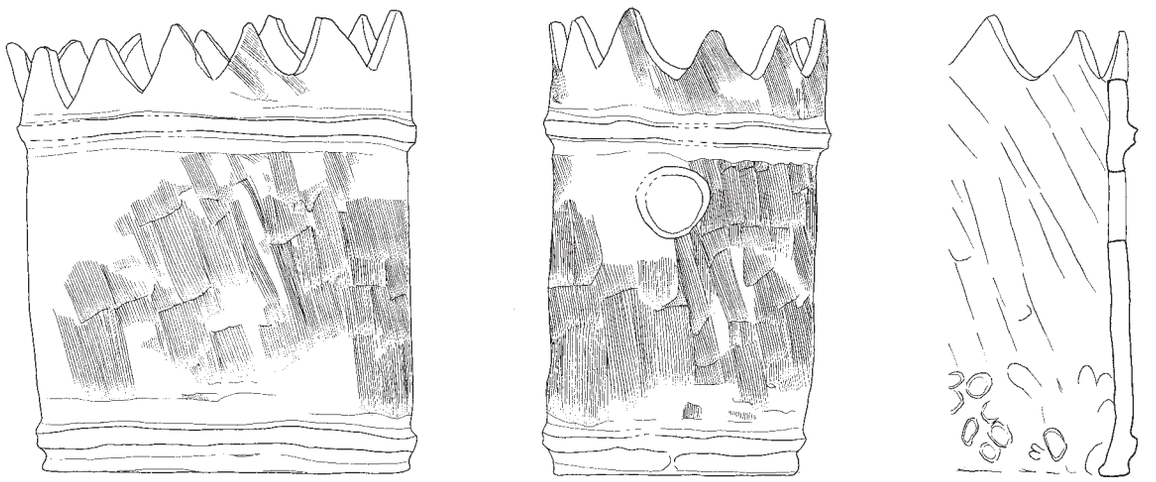
出土位置はほとんどがⅢ区の周堤外側で 187 だけが周溝内からの出土である。今回は 12 点を掲載した。

①器形・法量

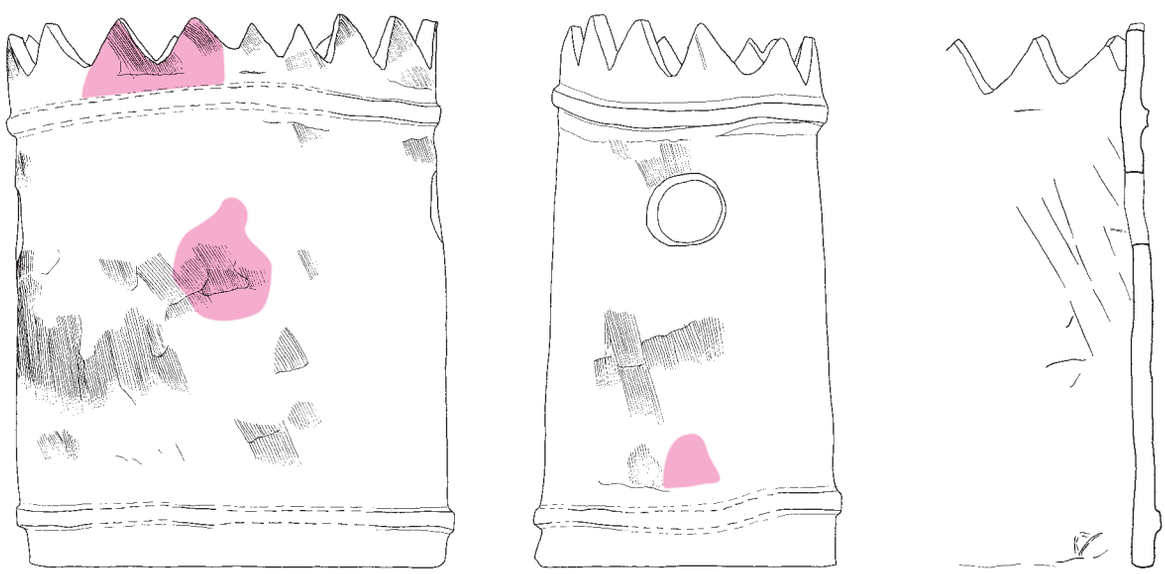
底部は楕円形を呈し、径をほとんど変えることなく、直線状に立ち上がって口縁部に至る。突帯は底面から２㎝程の上部と、鋸歯の直下に２条設けるものがほとんどだが、189 のみが３条突帯で、別に胴部中央に設けている。突帯の形状は断面がM字形を呈し、突出度は低いが幅は広い。貼り付けも直線状ではなく、波打ったり水平を欠くことが多い。長軸側の胴部上部に透孔を一対穿孔する。形状はいびつな円もしくは楕円形を呈し、このあたりは円筒埴輪と同じ特徴といえる。

器高は推定を含めて 34.6 ～ 44.6㎝とバラツキが大きい。とくに偏っているわけではなく、この数字内にまんべんなく分布しており、大型・小型といった規格を見出すことはできない。

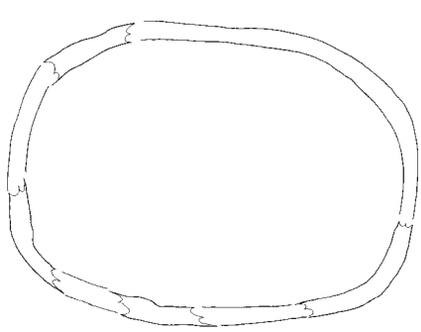
口縁部が鋸歯状を呈することが最大の特徴である。鋸歯の数は 12 ～ 16 個で、器高が 42㎝を

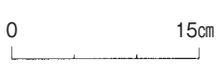


178

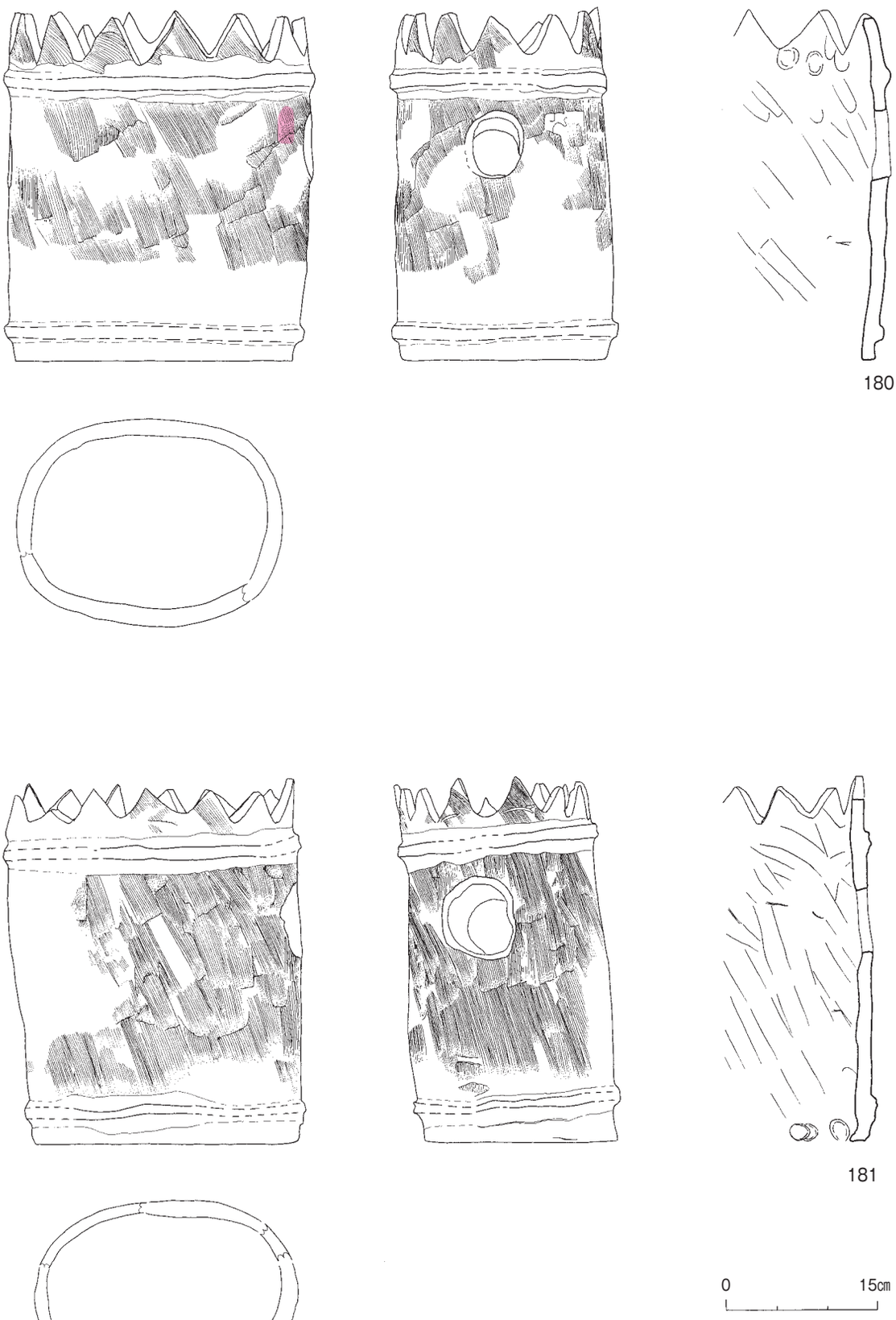


179

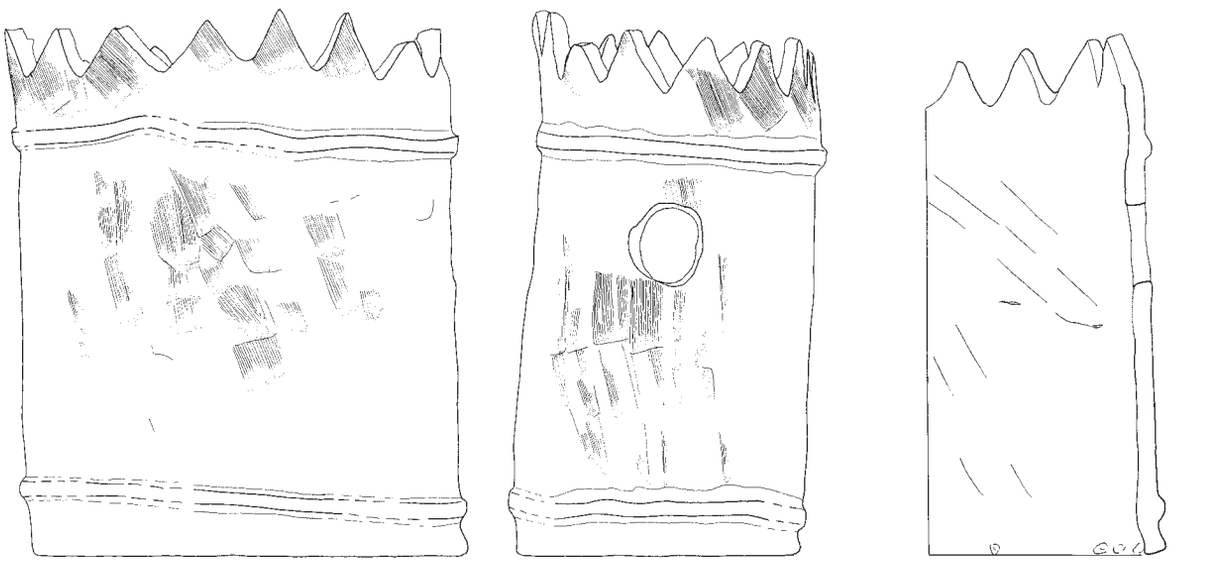




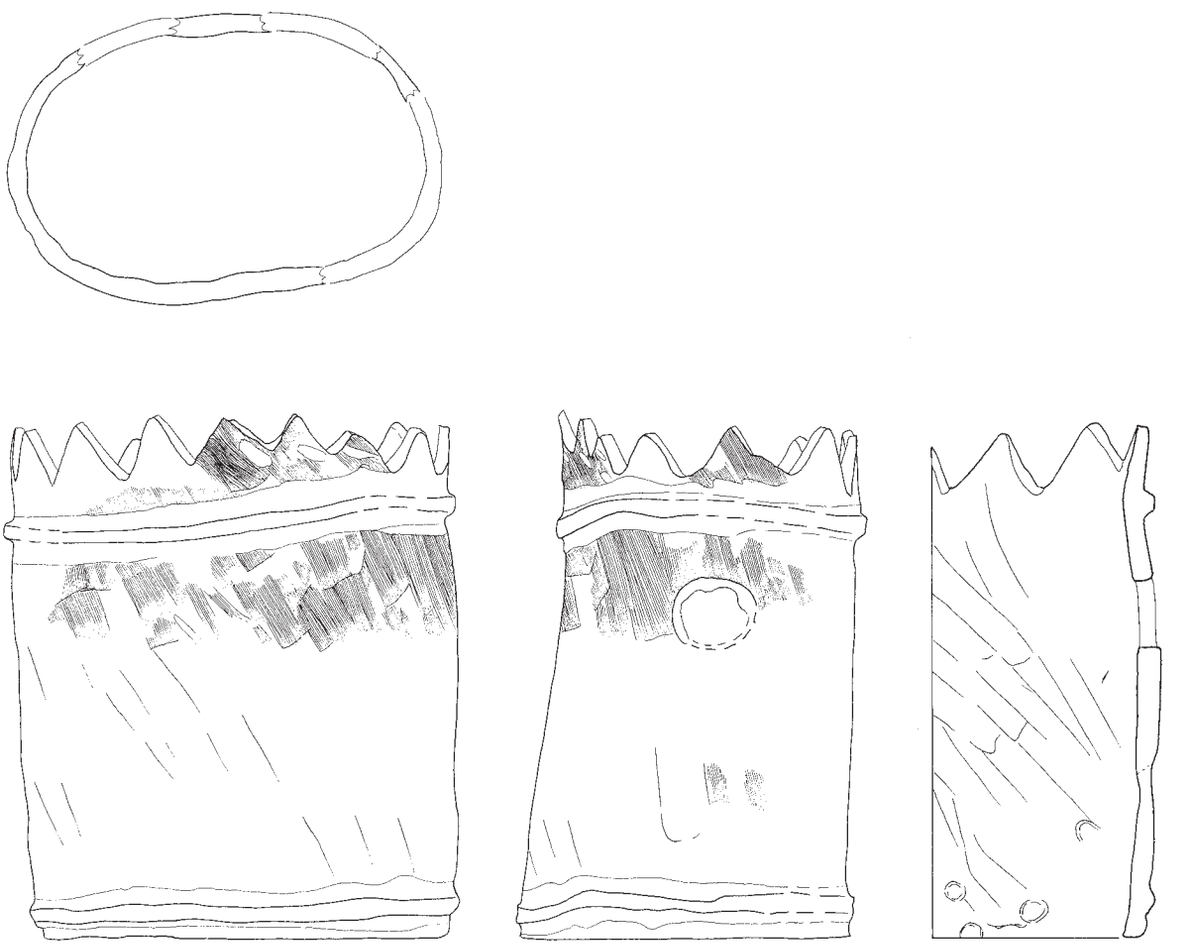
図版 39　柵形埴輪①



図版 40　柵形埴輪②



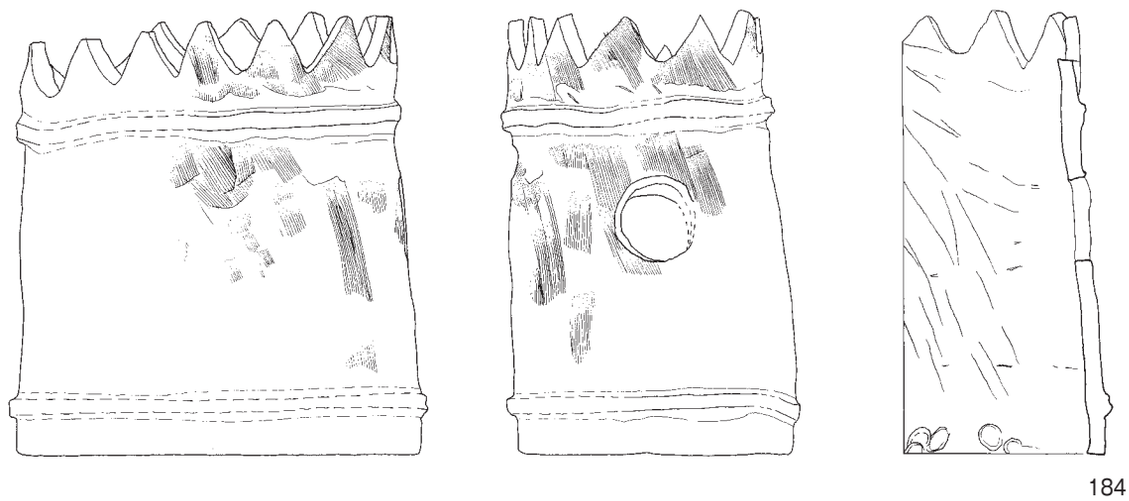
182

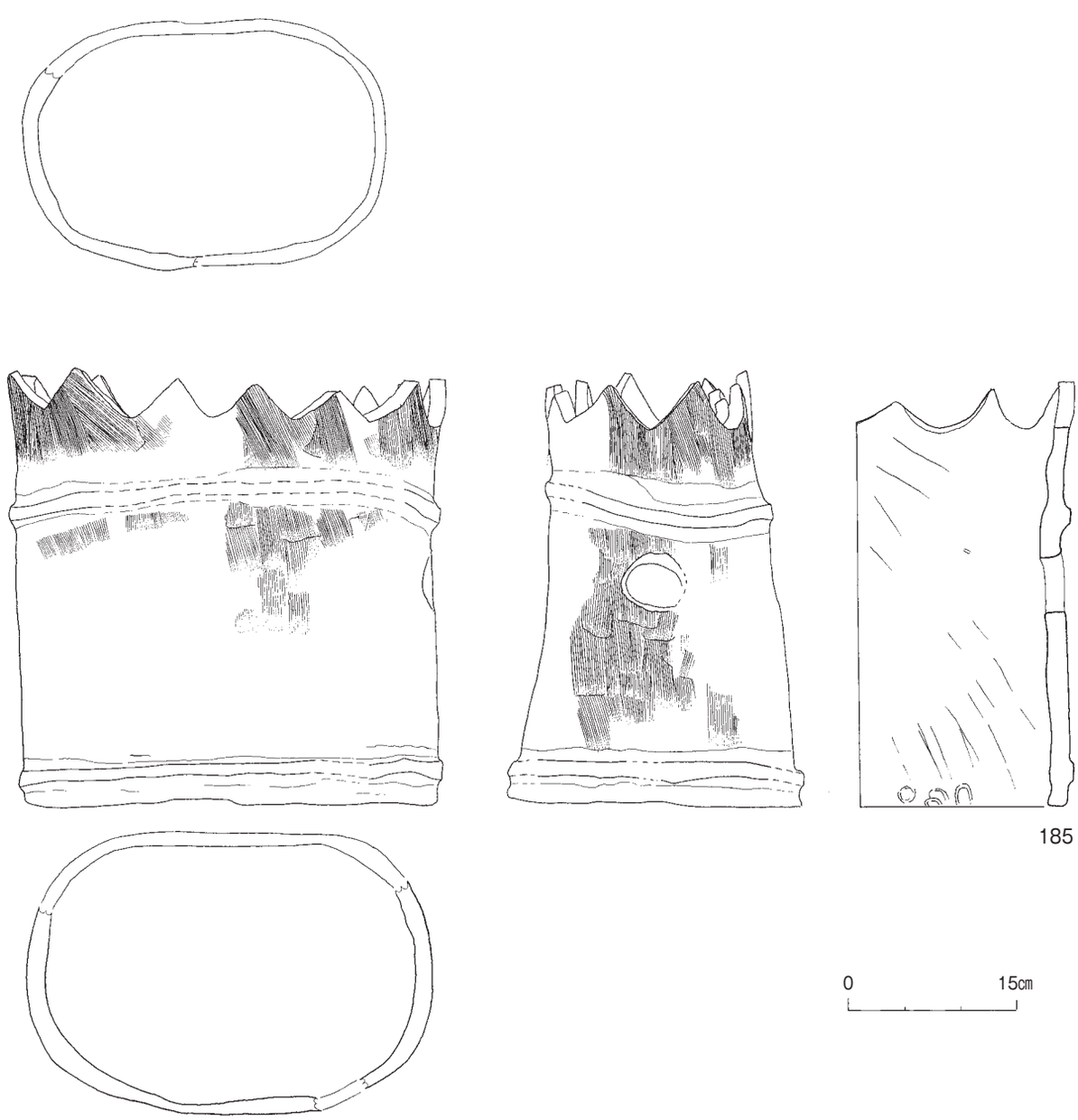


183

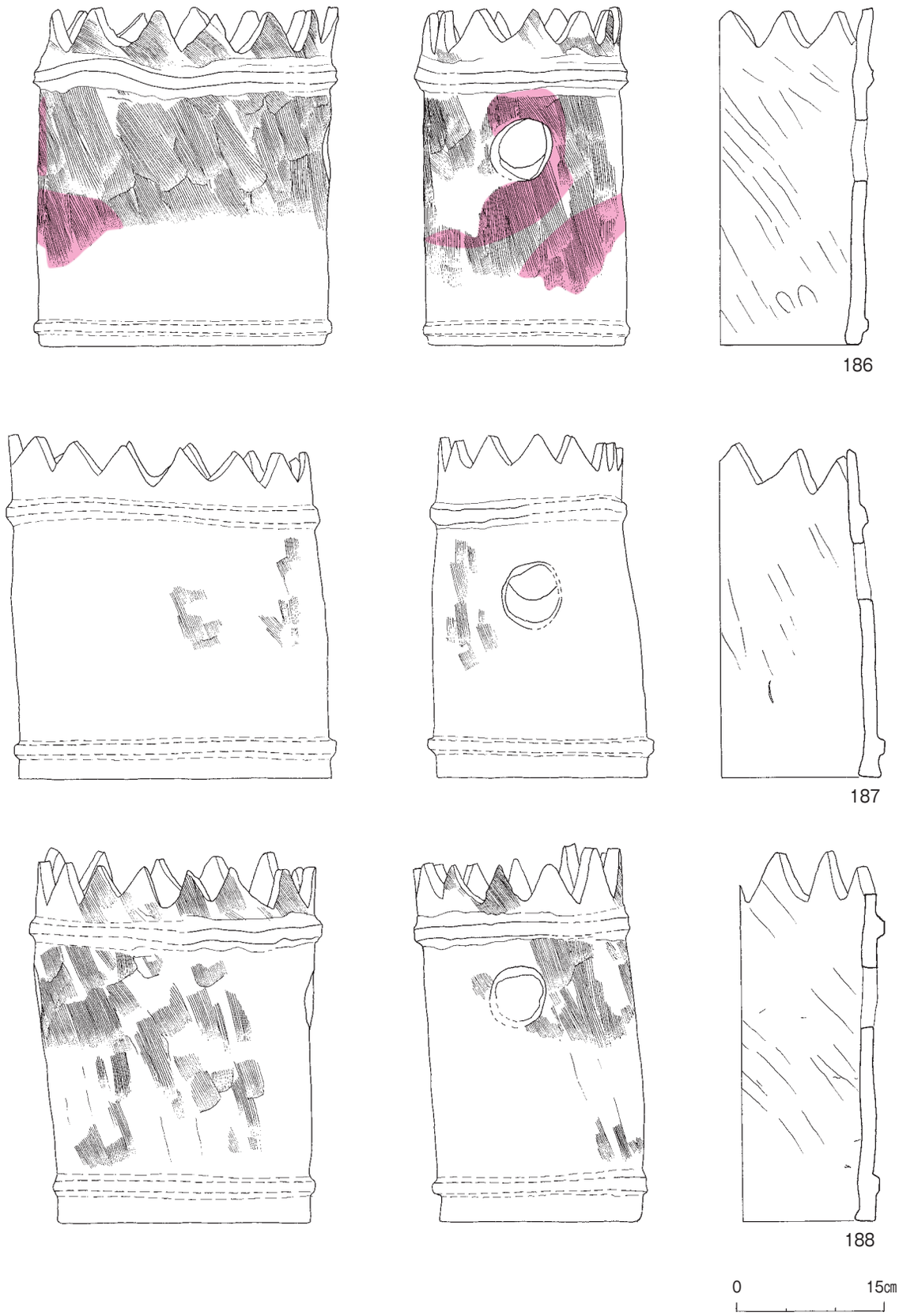
0 15cm

図版 41　柵形埴輪③

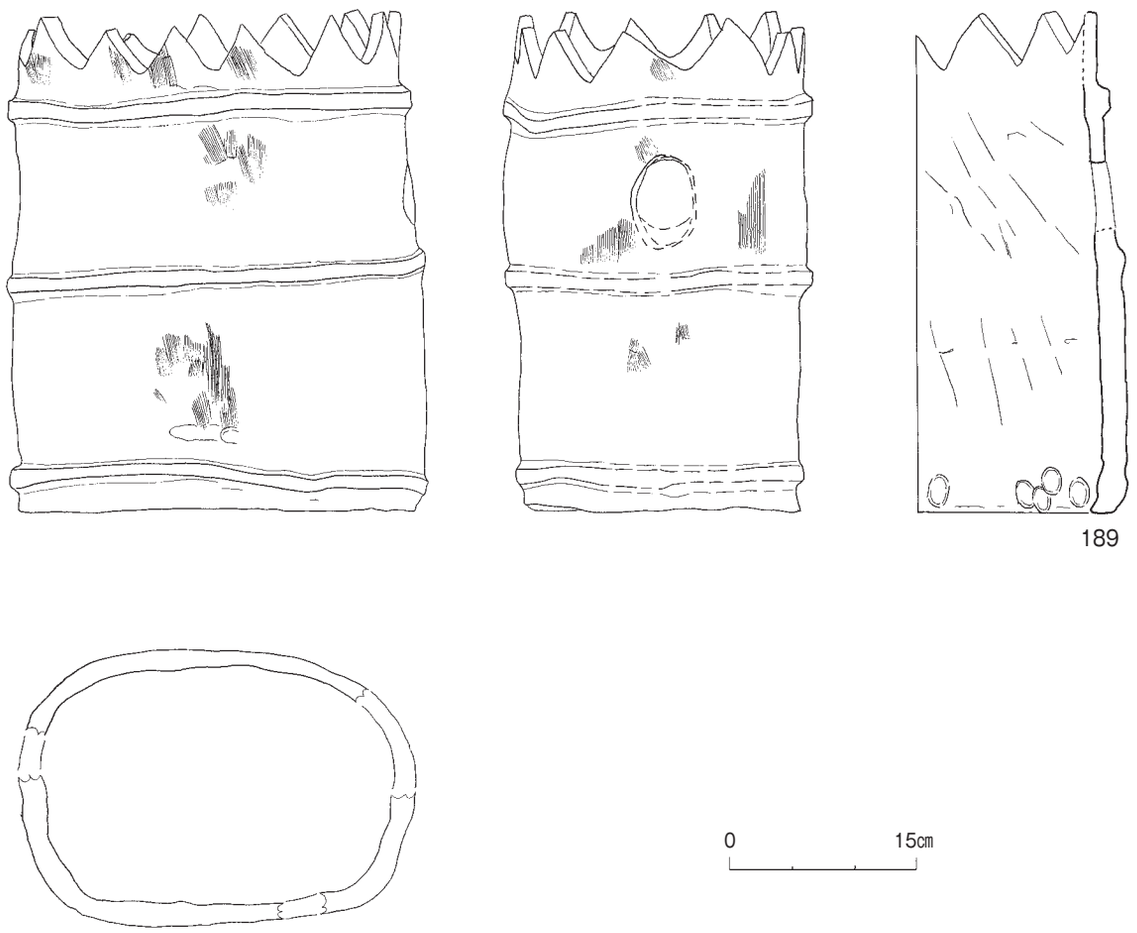




図版 42　柵形埴輪④



図版 43　柵形埴輪⑤



図版 44　柵形埴輪⑥

超える 178 ないし 182 と 183 は 15 個以上となっている。また同一個体であっても鋸歯の幅や高さ、鋸歯の間隔にはバラツキがあり、規格性を見出すことができない。

②成形・調整

粘土板で基底部を成形し、その後も粘土板の積み上げを繰り返している。粘土板は幅５～７㎝が多い。円筒埴輪のように積み上げを一旦中断してタテハケを施すというような行為は確認できず、積み上げ終了後に、外面は基底部から口縁部までタテハケを施している。内面は指ナデが主体で工具調整は行っていない。底面付近では指オサエを行いほぼ全周しているが、これは自重により肥厚した部分を成形するためと考えられる。ただし円筒埴輪のように個体を倒立させたり、外面に板を当てたりといった行為は確認できない。円筒埴輪より器高が低く、径が広がりながら立ち上がるわけではないことから、自重による変形は少なかったためであろう。タテハケ終了後に突帯の貼り付けと透孔の穿孔、鋸歯の成形を行っている。鋸歯の成形はヘラ状工具による切り出しによって行われる。切り出した部分は逆三角形を呈することが多いが、間隔が空きすぎて半円形になるものもある。同じ個体であっても場所によって器高に差があり、鋸歯を成形する前に、口縁の高さを揃えるといった調整は行っていないことが分かる。

図版 45　人物埴輪①

（4）人物埴輪

Ⅱ区ないしⅢ区からの出土がほとんどである。器種が特定できる個体については個別に行い、破片については部位もしくは出土位置ごとに記述を行う。

女性埴輪①（190：性器を露出する女性埴輪）

双脚が表現された女性埴輪でⅢ区の周溝内から出土した。残存状態は良好で、基台部から頭頂部まで復元できた。ただし左腕とスカート部の４分の１は欠損している。全高 95㎝、最大幅はスカート部の下端にあり 39.2㎝を測る。復元できた人物埴輪のなかでは最大を誇る。

頭部は長さ 15㎝、最大幅 12.4㎝を測る。頭頂部は別造りで、額は１㎝ほど斜め上部に盛り上が

図版 46　人物埴輪②

る後頭部も斜め下方に向かって４cmほど粘土板が突き出している。さらにその上にもう一枚粘土板を貼り付けている。髪を折り返した髪の表現だろうか。ただ２段に粘土を貼るのは、本古墳から出土しているほかの女性埴輪にはみられない特徴であり、上部の粘土板は髪ではなく装飾品の可能性も考えられよう。本稿ではほかの女性埴輪を含めてこのような髪型を「つぶし島田」と呼称するが、これは後世の髪形からの連想である。また頭頂部に幅 2.5cm、厚さ 1.5cm、残存長 12.5cmの粘土板を貼り付け、後頭部よりの端部では粘土を輪状に成形する。元結紐を蝶結びに結んだ表現と考えられる。顔はやや面長で、目と口はヘラ状工具による穿孔によって形成され、鼻は下端の幅が広くなり、鼻筋が明確に表現されている。鼻孔の表現はない。耳は表現されていない。

顔全体の印象としては優しく微笑んでいるように見える。首には径 1.5cm前後の粘土粒の貼り付け首飾りを表現している。欠損している箇所もあるが、残存箇所はほぼ密着しており、20 個

前後あったと推測される。

衣装は上半身では腕の付け根から肩にかけて、たすきがかかっており、背中で十字に交わっている。タスキは幅1.5㎝の粘土紐が貼り付けている。胸部には径５㎝、高さ1.5㎝の粘土塊によって乳房が表現されている。右腕は上衣の裾部をつかんでいる。５本の指が表現されているが、自分でめくったのか、それともめくりあがった衣装を押さえる仕草なのかは判然としない。めくられた部分では性器が露出している。性器はヘラ状工具によって切れ込みをいれて形成されている。長さ５㎝、最大幅は１㎝を測り、端部には粘土板を貼り足して外側が盛り上がっている。左腕は完全に欠損しているが、残存状況から前に突き出すような仕草であった可能性がある。

臀部から脚部は上半身に比べるとかなりボリュームがあり、腰回りの幅は32㎝で、胸囲の倍近くになる。脚部は直立した状態となっており、足先の表現はない。

基部は底面が楕円形を呈し、長軸29.5㎝、短軸24㎝を測る。２条の突帯が施される。１条目は底面直上に、そこから10㎝程上部に２条目を巡らす。突帯間の長軸側中央部には円形の透孔が対向するように穿孔されている。

成形はまず基部の形成から始まる。粘土板の積み上げを行いその後タテハケと突帯の貼り付け、透孔の穿孔を行う。脚部はそれぞれ別造りされていると考えられる。粘土板の積み上げで脚の付け根まで成形し、その後タテハケを施して基部との接合を行ってようである。接合の際には指ナデを行い、ハケを消している。性器部から腰部にかけても広範囲で指ナデによってハケが消されている。別造りで行われその後接合を行っていた可能性と、脚部成形のち時間をおいてこの部分の成形が行われた可能性とがある。性器周辺のナデは比較的丁寧に行われており、やはりこの部分を強調したかったのであろう。後部のナデはやや粗いが本来この部分はスカート状の上衣の裾部で隠れるため、丁寧に行う必要はなかったと思われる。腰のクビレまで成形し腹部から胸部の製作を行う前に、スカート状の上衣の裾部の成形を行ったと思われる。その後くびれから胸部そして肩部まで粘土板による積み上げを行い、タテハケ調整を行っている。その後上衣裾部の端部は幅１㎝前後の指ナデが丁寧に行われている。タスキはタテハケののちに接合され、首飾りは頭部との接合ののちに接着している。頭部と腕は別造りでの成形後に接合されているが、右腕の肩から上腕の途中までタテハケが残っている。この部分は中空技法によって成形され、そこから手首と指先は中実となっている。中空部と中実部はソケット状の差し込みによって接合され、ナデによって調整されている。手首から指先まではスカート状の裾部と接合しており、その周辺部は接合ナデによりハケが消されている。

女性埴輪（191：器を捧げ持つ女性埴輪）

Ⅲ区の周溝内から出土した。女性の半身像である。体の前で両手に一つの器捧げ持つ所作が表現されている。頭頂部が欠損しているものの、残存高78㎝、最大幅42.5㎝を測る。

後頭部には幅８㎝の粘土板を貼り付け、下方に向けて斜めに折り曲げており、つぶし島田を表現したと思われる。目と口は工具による切り込みで形成され、鼻は粘土の貼り付けで表現する。鼻孔は表現されない。耳たぶは粘土を輪状にして貼り付ける。耳孔は穿孔されない。左耳の下には耳環を装着している。右耳には痕跡だけが残っている。

幅１㎝、長さ2.3㎝で管玉を表現したと思われるものがあるが、大半が欠落しており、全体が判然としない。背中には垂下した玉が２個確認できる。

両手は水平方向に肘を張り、体の前で器を捧げ持つ所作をしているが、指の表現は省略されて

いる。両手首には小さな玉が巻かれた表現があるが、左右の手で異なっている。右手には欠落部分を含めると２連で各５個、計 10 個が甲側に巻かれている。左手は手のひらに近い所に径１㎝前後の玉が現状で２個残存し、そこからやや離れて径 0.5㎝前後の小さな玉が２連巻かれているが大半が欠落している。右手と同様に甲側だけに巻かれた可能性が高い。器は幅４㎝ほどで、手づくね作りである。

胸部は粘土を貼り付けて乳房のふくらみが表現されている。径は 3.5㎝で、１㎝突出している。

上半身には袈裟状の衣装が表現されている。体部の両側面に粘土板を貼り付け、長さ 13㎝前後のヒレ状に成形し、これを前後に装着する。ヒレ部の頂点の高さは、埴輪からみて右から左へ下がっている。また、左側は下部を粘土でつないでおり、この衣装が１枚の布からできいていることを示している。衣装の前面には鋸歯文を描かれる。１辺が５～６㎝の大きさで、２段に描かれている。段間および文様の境は２本の沈線によって区画されている。また文様は衣装にそって右上から左下に描かれる。文様は前だけで後ろにはない。右の袈裟の間、ちょうど人物の右脇下にあたる部分には径 3.5㎝の円形の透孔が穿孔されている。対向する左側には確認できない。また、袈裟状衣装の下に着衣しているはずの上衣の表現は省略されている。

袈裟状衣装の下にはスカート状の衣装が径を拡げながら伸びている。長さは 17㎝、最大径 29.5㎝を測る。後面の腰の部分には、粘土紐を巻くことによって段が設けられ、上衣との境を表していることから、裳を表現したと思われる。ここには文様等の装飾は施されない。

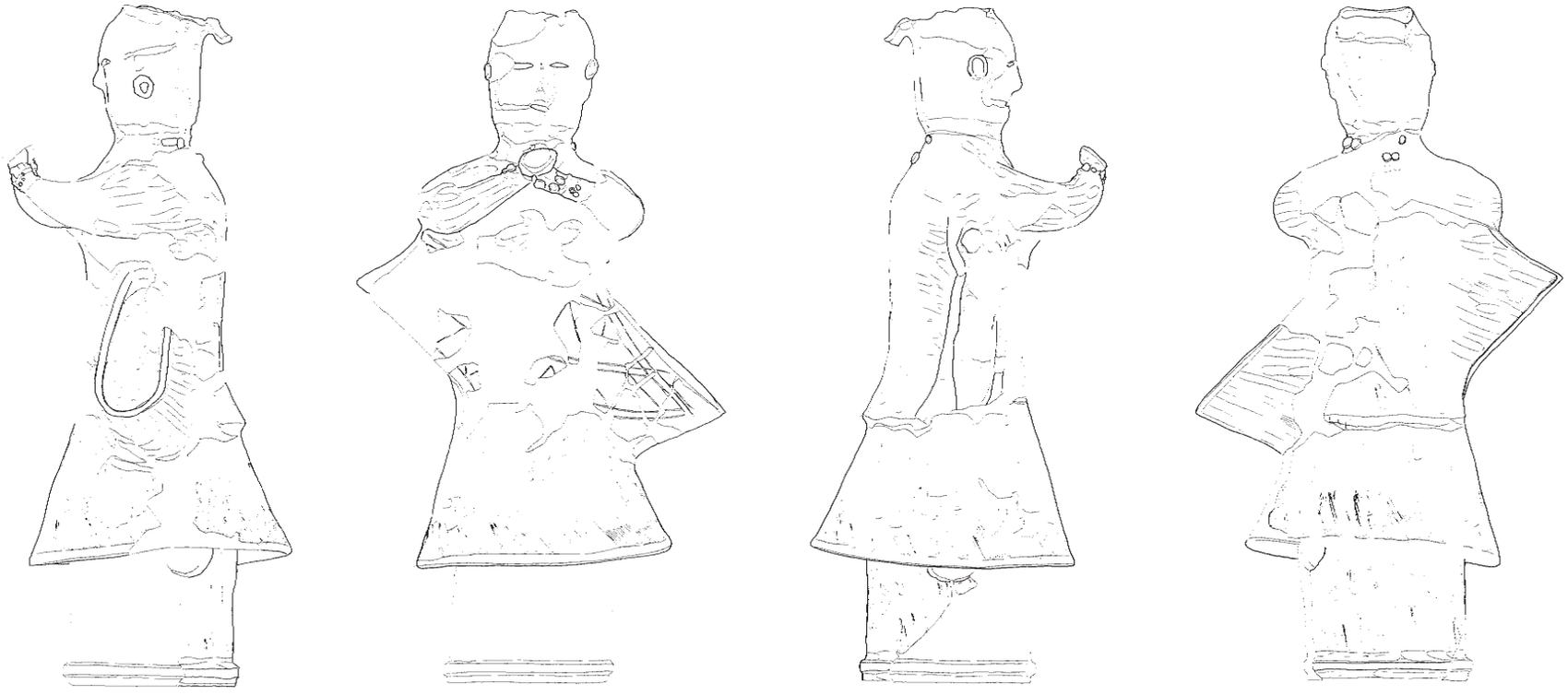
基台部は上半分が裳によって隠れているが、実際の長さは 35㎝に及び、底径は 18㎝と推定される。底面直上とそこから 17㎝上位にそれぞれ幅１㎝の突帯を巡らしている。透孔は２条目の突帯の直下、人物を基準にすると側面に対向するかたちで穿孔されている。径は２条目突帯までは底径とほぼ同じだが、そこから上位に向けて減じている。

成形は基台を製作する。裳との接着部分では径が最も小さくなり 13㎝測る。そこから上位に向けて径と形状を変化させながら粘土板を積み上げていく。裳は基台部に重ねるように粘土板を繋ぎ下方に向けてのばしていくが、径が広がるにつれて連続して作業行うことが困難だったためだろうか、粘土の繋ぎ目が目立つ箇所が多い。袈裟状衣のヒレ部や、腕、頭部は別作りと考えられる。腕は肩から肘までが中空となっており、そこから先が中実となっている。中実部分を空洞に差し込んで製作したと考えられる。

器面調整は全体的に摩滅しており、明瞭ではない。基台部と裳にはタテハケが施されているがそれ以外は判然としない。おそらく別作りの部位以外は基本的にタテハケが施されていたと思われる。別作りの腕部は指ナデによって成形、調整がなされている。袈裟状衣のヒレ部の前面は判然としないが、後面や前後面との間には指ナデが残る。頭部も摩滅が激しいが、一部にやや粗目の条線が残っている。

女性埴輪（192：袈裟状衣を着る女性埴輪）

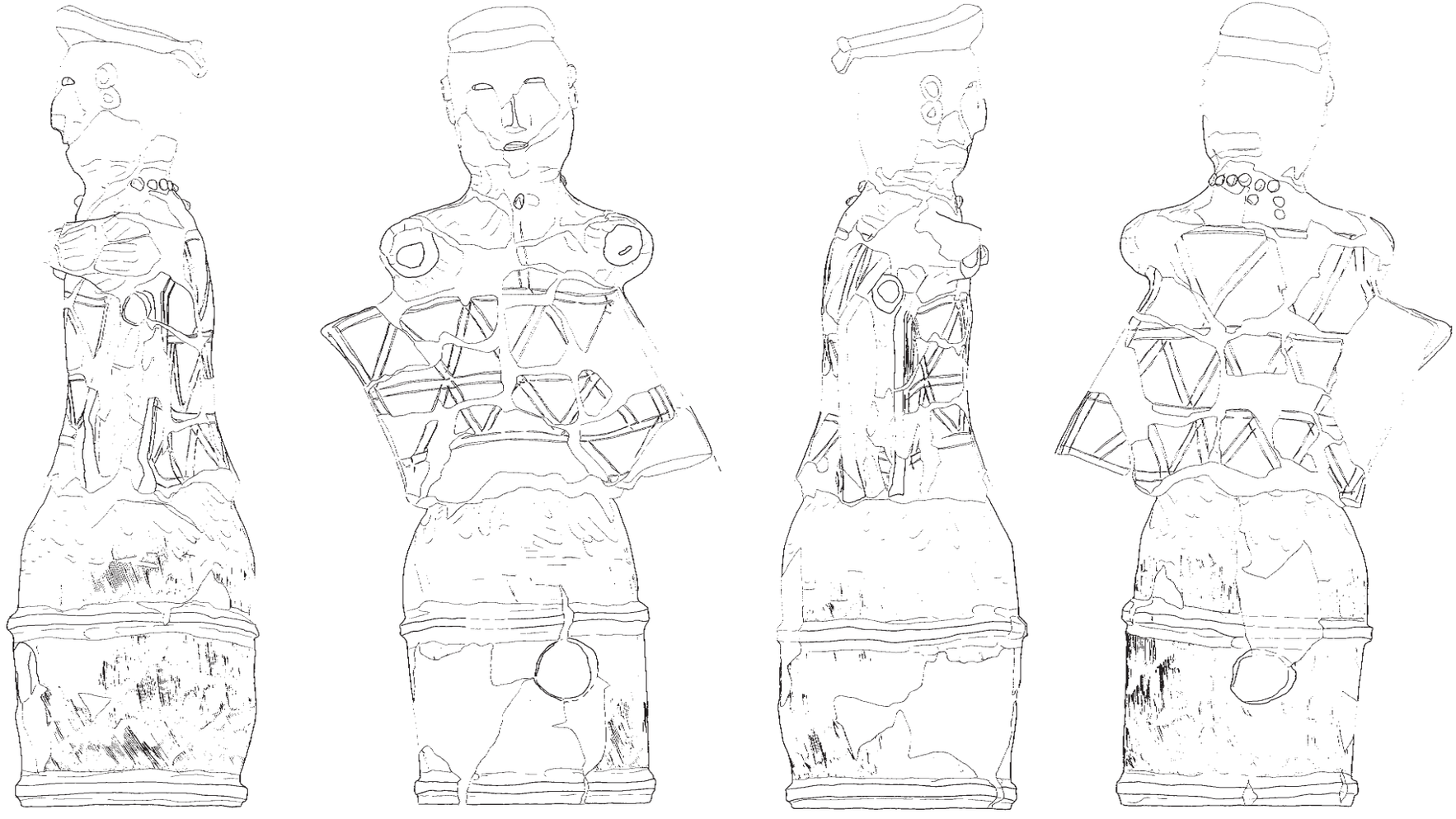
Ⅲ区の周溝内から出土した。袈裟状の衣服をまとった半身像である。頭頂部と両腕、そして衣服の下位はスカート状を呈していたと思われるがほとんど欠損している。復元高 78㎝、最大幅は袈裟状衣の左右両端にあり 38㎝を測る。



191

0　15cm

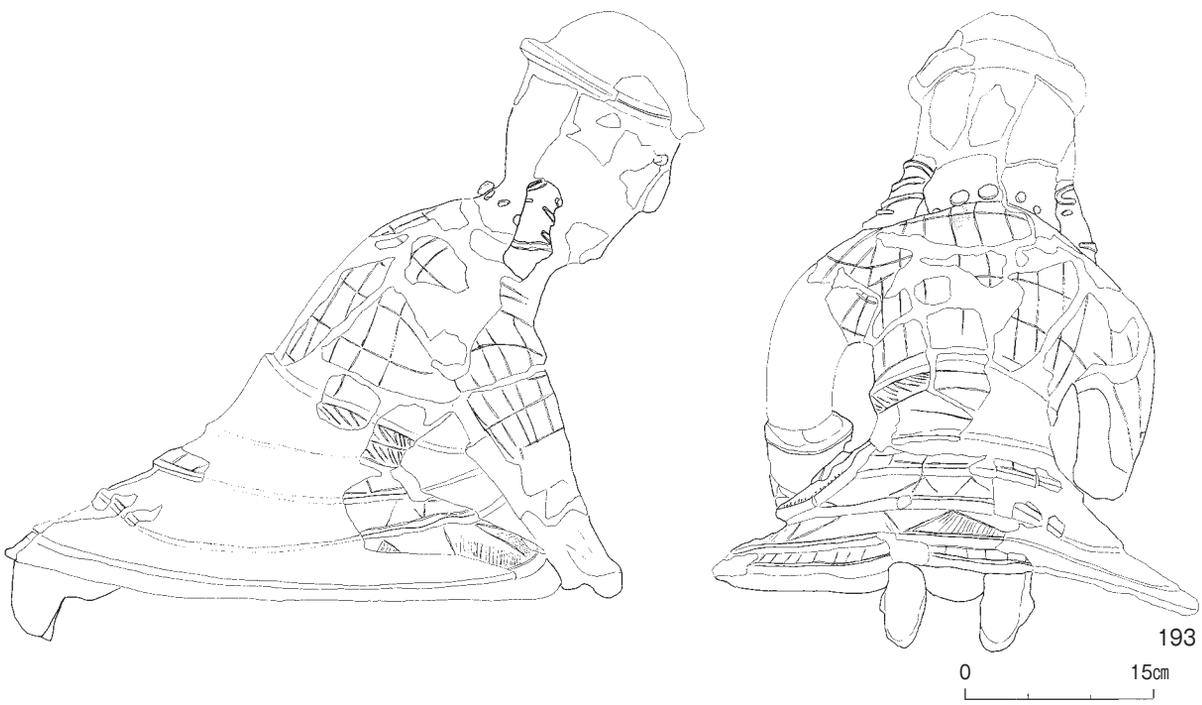
図版 47　人物埴輪③



192

0　15cm

図版 48　人物埴輪④



図版 49　人物埴輪⑤

頭部は上目と頭頂部、後頭部が欠損している。表情や衣服から女性と判断し、髪はつぶし島田に、耳には耳環を後補で復元した。目は下半分のみが残存しており、工具による切り込みで表現する。口も切り込みで、長さ 2.5㎝、幅 0.5㎝と小さく横一文字に開いている。鼻は粘土を貼り付けている。上部が一部欠損しており、下位の幅は３㎝。高さは 1.2㎝を測る。

首には丸玉を模した径１㎝前後の粘土を貼り付け首飾りを表現している。残存しているのは左側面から後面にかけてだが、付着の痕跡は全周しているのが確認できる。また、背中で端部が２連垂下している。頸部径は 8.5㎝を測る。

両腕は先述のとおり上腕部を除いて欠損している。肩と同じ高さで前に出している可能性が高く、191 と同様に何かを捧げ持つ所作を表現していると推測できる。残存部分は中空で、ここに中実の前腕部を差し込んでいたと思われる。

胴部は喉元に径 1.5㎝の粘土が貼り付けてある。首飾りより１段下がった位置にあり、上衣につけた装飾の一部の可能性がある。その下には２本の沈線が縦に引かれ、袈裟状衣の線と接続する。着衣の合わせ目というよりも、袈裟状衣とその下に着ていたはずの上衣とを繋ぐ紐の可能性がある。袈裟状衣は粘土を三角の板に形成し、それを胴部の側面に２連貼り付けている。三角の端部は右が高く、左が低くなり、全体形状は平行四辺形に近い。また、191 が斜めに垂れ下がるのに対して、本資料は真横にまとっている。左端部が欠損しており、袋状を呈していたかは判然としない。前後の袈裟状衣間には左右に円形の透孔が施されている。文様も衣装に合わせて施される。前面は鋸歯文が２段にわたって施される。左端のみもう一段施されているようだが、欠損

図版 50　人物埴輪⑥

により判然としない。後面には３段にわたって同じく鋸歯文が施される。段間および鋸歯間は２本１単位の沈線で区画され、鋸歯は上段ほど大きく描かれている。

袈裟状衣の下位からは裳がスカート状に伸びていたと思われるが完全に欠損している。

基台部は径 22.5㎝、高さ 30㎝を測る。２状の突帯を巡らし、１条目は底面直上、そこから 16㎝上に２条目を巡らす。また２条目の直下に円形の透孔を設けている。孔の位置は人物の正面と後面で対向している。

器面調整は、基台部ではタテハケを施す。胴部は摩滅により判然としないが、袈裟状衣の別作り部分を除けば、ハケのちナデを行い、文様を施したと推測する。肩や首には指ナデの痕跡が残るが、腕や頭部は別作りで製作されており、接合する際のナデが残っているものである。

男性埴輪（193：ひざまづく人）

Ⅲ区から出土した。挂甲をまとい、ひざまずく所作を表現した男性埴輪である。器高 47㎝、最大幅は草摺りの下段で 46㎝、頭頂部から踵までの長さは 68㎝となる。

頭部は鍔のついた帽子を被っている。帽子は径 16㎝、高さ６㎝で鍔は全周しているが残存率は悪い。帽子本体との接点部分には２条の沈線が巡っているようである。帽子本体にも沈線を施していたようだが、残存率や器面の状態も悪いため判然としない。顔は半分が後補である。帽子の鍔下から顎まで 11㎝、頭頂部からだと 17.5㎝となる。最大幅は 12.5㎝でこめかみから頬まではほとんど径が変わらない。目と口は工具による切り込みによって形成される。目は横２㎝、縦１㎝で、口は横 2.5㎝、縦２㎝となり、丸く小さく開いた表情である。耳の表現はないが、耳の位置から

肩にかけて美豆良が表現されている。左右とも残存しており、長さ7.5㎝、径３㎝の棒状粘土で表現されている。下端はやや径が広がり、肩に直接貼り付けられる。その上には幅0.4㎝、厚さ0.2㎝の薄い粘土板を巻いている。一部欠損しているが髪を束ねる紐を飾りのように表現しており赤色顔料が付着している。

首には径1.5㎝前後の扁平な粘土粒を貼り付けており、１連の首飾りを表現している。

腕は右手の前腕部が欠損している。左手は上腕から肘まで欠損しているが、右手を参考にして復元を行った。前腕には籠手が装着されている。籠手は中空作りで腕の差し込むように装着する。上端には列状の刺突文を施し、次に横位の沈線を入れ、その下には斜めの沈線を充填させる。手首には幅0.5㎝の薄い粘土をつけている。籠手を手首に巻く際の締め紐を表現している。籠手と手首の境は小さな段を設けることによって区別する。指の表現はないが、側面からの観察では開いた手を地面についていると想定できる。右腕は籠手が欠損しているが、籠手との接合部分の観察が可能である。この部分も中空作りとなっていることが分かる。また、肘部分まで小札を表現した格子状の沈線が描かれており、籠手に接する部分まで肩甲をまとっていたことを表現している。

胴部には、幅１mm 前後の細い沈線を、前面と背面に格子状に描くことによって小札を表現しているが、肩甲や頸甲との境は区別されていない。合わせも省略されている。格子の大きさにも統一性がなく、線そのものも歪んでいることが多い。

腰部には幅３㎝の粘土紐が巻かれ、長側との境に段が設けられる。背面では前面と右側面では段や沈線によって２段に区画され、間には短い斜めの沈線が充填される。背面と左側面では同じく斜めの沈線が充填するものの１段しかない。おそらく帯を表現したと思われ、１段しかない部分が存在するのは帯の重なりを意味するのかもしれない。

本来であればこの位置には腰札が表現されるはずである。前面では表現されていないが、背面には帯と草摺との間に幅５㎝ほどのわずかに内湾する部分が存在するが、あるいはこれが腰札の表現かもしれない。沈線が１本あるが何の表現かは不明である。

草摺は４段で構成されている。下から粘土板を重ねながら成形されたと考えられ、各段それぞれに違った文様が施される。端部の裾札にあたる１段目は幅２～2.5㎝で、縦と横の沈線で長方形が描かれる。大きさは不均等で、線が途中で途切れる箇所もある。２段目は幅が５㎝前後あり、鋸歯文が描かれる。鋸歯文内には斜めの沈線が描かれる箇所がある。３段目も鋸歯文が描かれるが鋸歯内には沈線は施されない。４段目は長方形が描かれるがここは欠損も多く判然としない。草摺の左側面には縦５㎝、横７㎝の粘土板を貼り付けており、端部に列状の刺突文を施す。また粘土板の上に下端が二股に分かれた粘土を貼り付けている。革製の袋を表現したのであろうか。ここから幅２㎝程の細い粘土板を上部に伸ばしている。腰の帯に接続する可能性が高いが欠損により判然としない。

脚は踵を上げた表現となっている。長さ７㎝、幅５㎝、厚さ４㎝前後の粘土を草摺の裏に貼り付けて製作され、指先の表現はなく、沓を履いていると思われる。

台座となる基台部はもともとなかったと考えたい。

成形は内面観察が不十分なため判然としない。

男性埴輪（194）

Ⅲ区周堤外側で出土した男性の半身像である。両腕先と下半部の衣装の大半が欠損している。

図版 51　人物埴輪⑦

基底面も欠損しているが、ほかの人物埴輪との比較から器高 87㎝に復元した。残存高は 82.5㎝で最大幅は肩部となり 27.5㎝を測る。

頭部は鍔のある帽子を被っている。帽子は高さ４㎝と浅い。鍔は後頭部が欠損しているが、全周しており、径は 16㎝を測る。頭部成形後に、粘土紐を巻きつけ周回させている。額の中心から後頭部に向けて指による幅１㎝ほどの凹線を引き、この線を中心に工具による沈線を左右に連続して施している。顔は面長に成形され帽子まで含めた長さは 20㎝を測る。目と口は工具による切り込みによって成形される。目は横 2.5㎝、縦 0.8㎝と小さく、口は横 3.5㎝、縦 0.5㎝で、横一文字に開く表情となる。鼻は粘土の貼り付けを行っている。下位の幅３㎝、高さ 2.5㎝とかなり高く鼻筋の表現も明瞭である。耳の表現はないが、顔の側面には剥離痕があり、美豆良があったようである。近くで美豆良が出土しており、明確な接点を見出せなかったが、この同一個体と考えている。美豆良は上部の一部が欠損している。残存長 7.5㎝、太さ 2.5㎝で、下端は前方にかえり幅 5.5㎝と幅を増している。かえりの部分に径２㎝の粘土を貼り付けて、束ねるための紐を表現している。

首には径１㎝の扁平な粘土粒を貼り付けている。残存しているのは１個だが痕跡が残っており、１連の首飾りがあったようである。

腕は前腕部が欠損しているが水平に肘を張り、何かを捧げだす所作を表現していると思われる。

胴部には着衣の表現はなされていない。腰部はくびれ、そこに突帯を巡らす。突帯幅は１～ 1.5㎝とやや太く、帯を表現していると思われる。帯から下には袴をスカート状に表現していたと思われるが、右側面の一部を除いて大半が欠損している。袴の下端は、基台部の２条目突帯とほぼ同じ高さとなり、帯からの長さは 20㎝を測る。

基台部は基底部から１条目の突帯まで欠損しているが、推定径 21㎝で復元した。

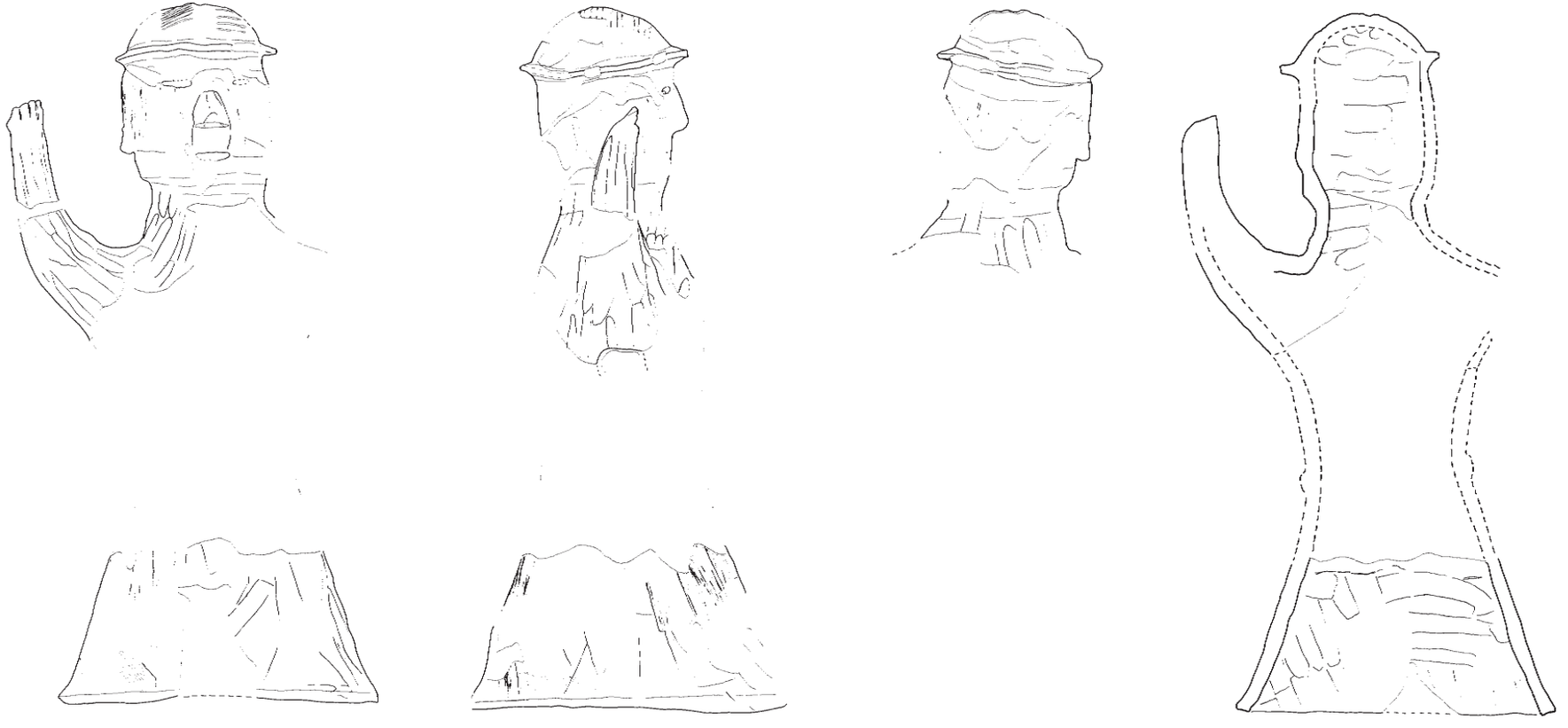
成形は粘土板の積み上げによって基台を製作し、そのまま人物の腰までは径をほとんど変えることなく積み上げを行っている。そして胸部に向けて径を拡げながら積み上げを継続する。袴は帯となる突帯を貼り付け、その下部に粘土を上から貼り付けながら、スカート状に下方に広げて製作する。頭部と腕は別作りで製作される。腕は上腕部まで中空で作り、欠損している前腕部は中実で接合部分をソケット状にしてはめ込んだと思われる。頭部は粘土板の積み上げで形成し、最後は頭頂部を外から粘土で塞いで閉塞する。

器面調整は基台部と右胸部、それに頭部にタテハケが認められる。全体的に器面が荒れているが、基本はタテハケで、腹部はナデにより消されていると思われる。

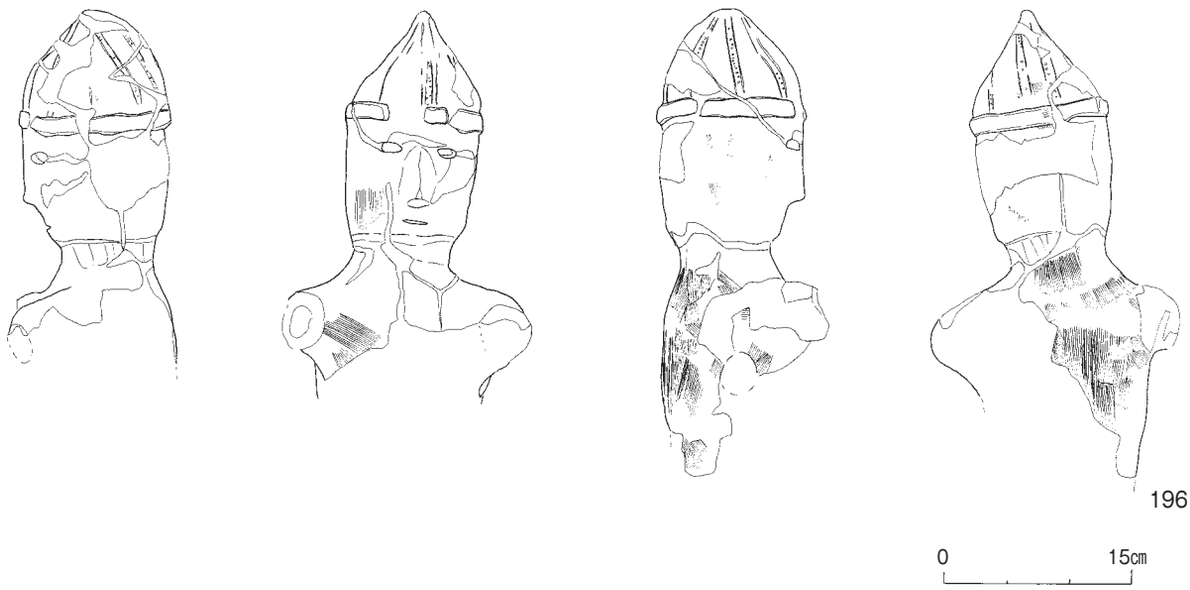
男性埴輪（195：馬を曳く人）

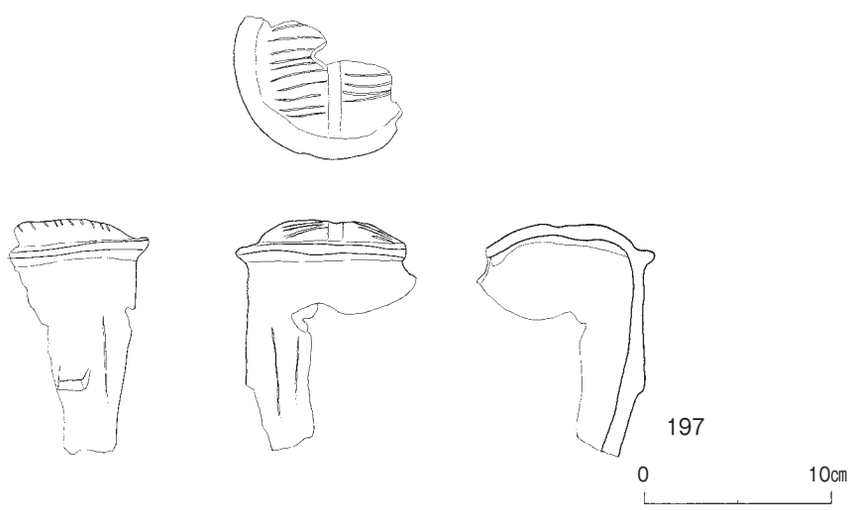
Ⅲ区の周堤外側から出土した。右手を上げる所作をした男性埴輪である。頭部と右手そして、スカート状の衣装以外は欠損している。右肩からスカートまではすべて後補によるもので、左手も見つかっていない。

頭部は鍔のある帽子を被っている。帽子は高さ 5.5㎝、鍔は幅 1.5㎝と浅く、径は 15㎝を測る。頭部成形後に、粘土紐を巻きつけ周回させている。額の中心から後頭部に向けて指による幅１㎝ほどの凹線を引き、この線を中心に工具による沈線を左右に連続して施している。凹線部には赤色顔料が一部残る。線の長さは 3.5 ～ 4.5㎝で頭頂部ほど長い傾向にあるが、欠損による後補の部分が多く判然としない。線間も 0.4 ～ 0.8㎝とバラつきがある。目と口は工具による穿孔によって形成される。口は小さく開く表情である。鼻は粘土の貼り付けによるもので、長さ 4.5㎝、下の幅 3.5



図版 52　人物埴輪⑧





図版 53　人物埴輪⑨

cm、高さ 1.5cmで女性埴輪よりも高く大きいのが特徴である。鼻孔と思われる表現も認められる。また鼻先にも赤色顔料が残っている。鼻と口の間にも粘土の剥離痕があり、人中を表現したのかもしれない。右側面には長さ 4.5cmの粘土を貼り付け、下部を肥厚させる。美豆良か耳たぶを表していると思われる。左側は後補のため不明である。首には径 1 cmほどの丸玉が 1 個だけ残存している。ただし剥離痕が複数認められることから、全周していた可能性が高い。頭部の成形は粘土板を巻きながら行い、最後に頭頂部に外から粘土板で蓋をするように仕上げている。器面の摩滅が激しいが、右頬や頭頂部にハケメが施されるのが残っている。

腕は肩からまっすぐ顔の横に上げる所作である。指は 4 本の線刻によって表現され、親指だけが独立して造られている。成形は肘まで中空で、そこから指先までは中実となり、ここをソケットのように差し込むことで製作されている。器面調整は指ナデを施す。

肩には 1 cmほどの粘土を貼り付けているが何の表現かは不明である。

胴部は完全に欠損しており後補である。スカート部は袴か上衣の裾を表現したものだろう。径は 29.5cmを測る。器面の摩滅が激しいが、タテハケがわずかに残る。内面の接合痕は指ナデによっ

て丁寧に消している。

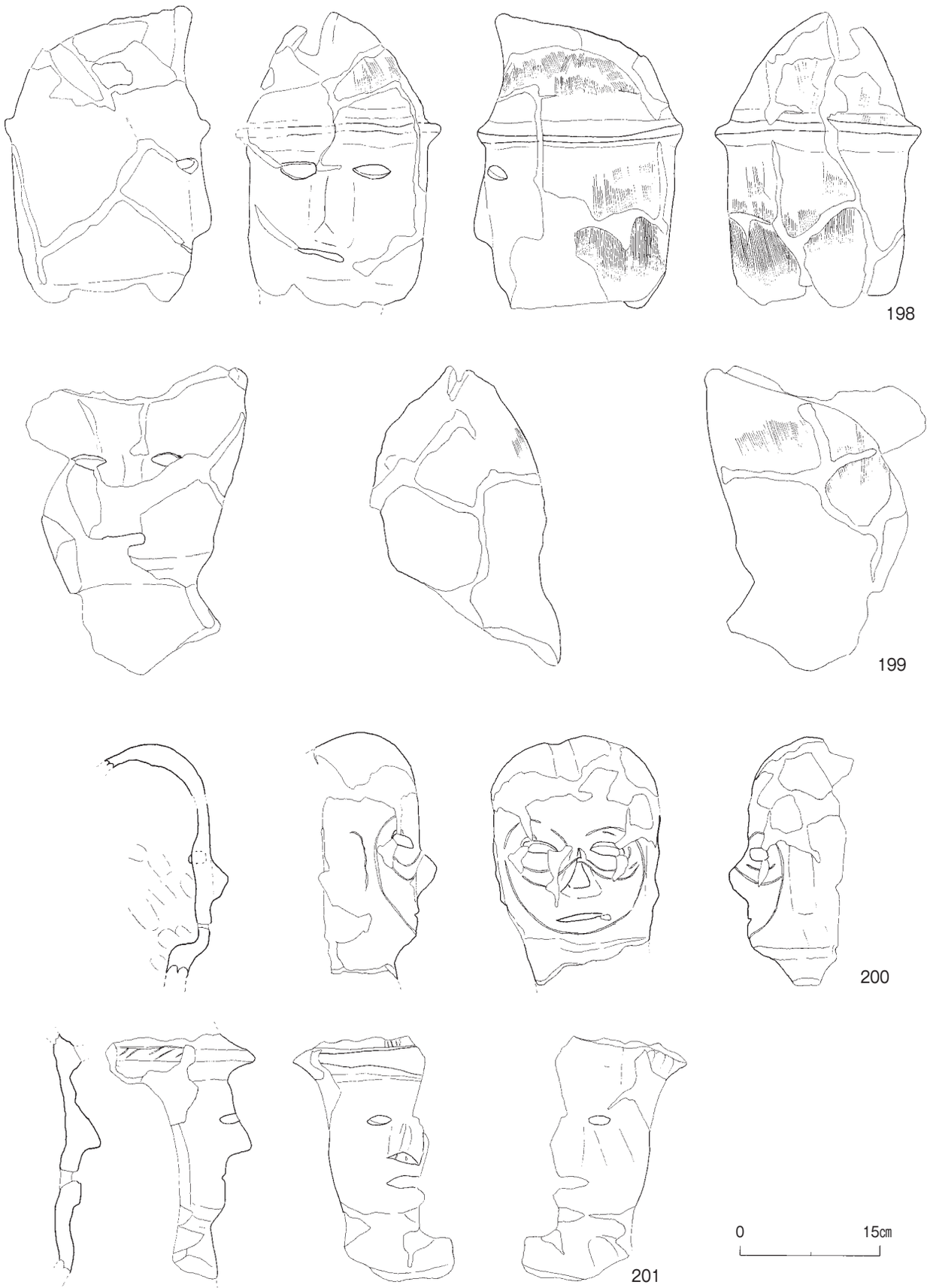
基台部が存在したはずだが、内面には接合跡が認められない、おそらく人物の腰あたりが基台部との接点だったと思われる。

男性埴輪（196）

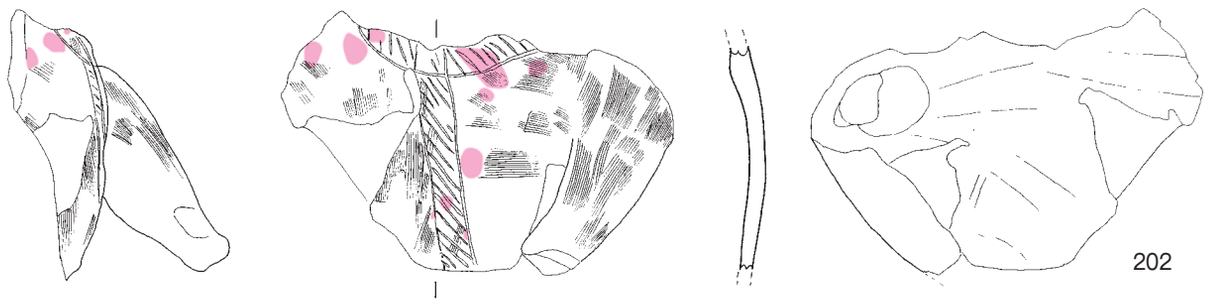
Ⅲ区の周溝内から出土した資料で、頭部から胸部まで復元できた男性埴輪である。頭部は後頭部の一部を除けばほぼ完全に復元できた。被物まで含めた頭部長 24.2㎝、最大幅 14㎝を測る。頭頂部を頂点に三角形の被物をしている。高さは 10㎝を測る。２本１単位とする沈線が頭頂部に向かって９列伸びており、沈線間には列点文が施されるが、正面の１列のみ４本の沈線が描かれ真中の沈線間に列点文が施される。額には幅２㎝の粘土帯が巻かれ、鉢巻もしくは被物の端部を表現している。目と口は工具の切り込みによって成形され、目は横 2.5㎝、縦１㎝、口は横 2.7㎝で横一文字にわずかに開く程度である。鼻は粘土の貼り付けによって成形し、高さ 1.5㎝を測る。鼻孔の表現はない。耳や美豆良の表現もないが欠損した可能性もある。腕は付け根を除き欠損しているが両腕とも前に出す仕草と推定できる。胸部には衣服の表現はない。

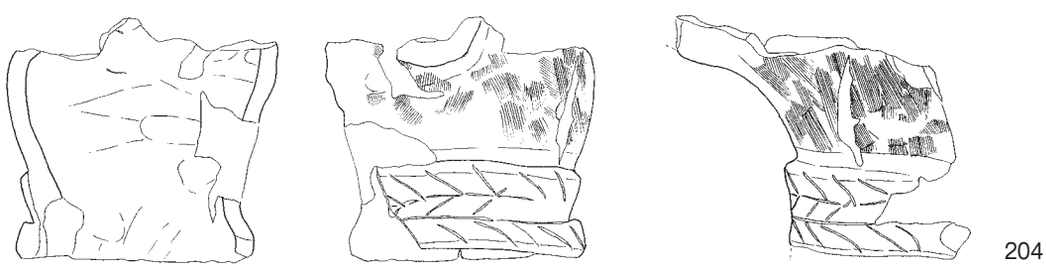
人物埴輪頭部（197 ～ 201）

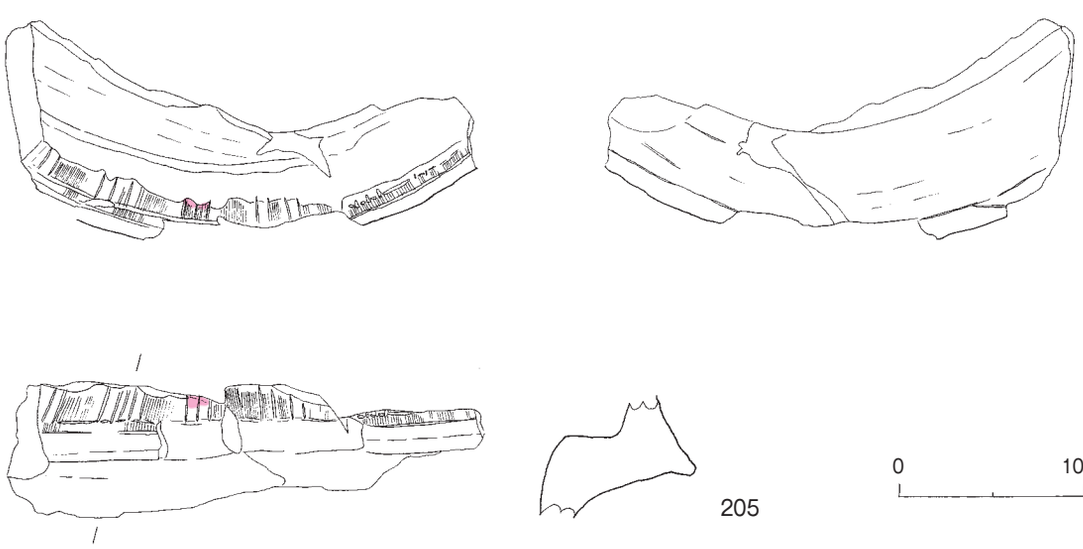
197 は鍔付きの帽子を被った人物埴輪の頭部で男性埴輪だろう。帽子には中央に強い指ナデによる凹線が施され、それを中心に横の沈線が左右に施される。顔面は完全に欠損しているが、側頭部には欠損箇所があり美豆良があったと思われる。198 はⅢ区の周溝内から出土した男性埴輪の頭部である。残存長 20.8㎝、最大幅は鼻のあたりで 14㎝を測る。頭頂部は欠損しているが、鍔のついた被物をしている。鍔は幅２㎝の粘土紐を貼り付けて全周する。高さは 1㎝。目と口は外側からの工具によって切り込まれて成形する。口は小さく横一文字に開けている。鼻は粘土を貼り付けており、高さは 1.5㎝、鼻筋のとおった形状である。耳の表現はないが、右側頭部には剥離痕が残り、耳もしくは美豆良の表現があったと考えられる。器面はやや摩滅しているが、タテのハケメが一部に残り、鍔や鼻の貼り付けはハケメ後に行っている。199 はⅢ区の周溝内から出土した。頭頂部は一部欠損しているが、正面からみると左右が尖っており、頭巾状の被物をした男性埴輪と思われる。ただし被物と体部との境の表現はない。残存長 22㎝でこのうち頭部長は 14.5㎝を測る。目と口は外側から工具による切り込みで成形する。口は大半が欠損しているが、１㎝程開いていると思われる。鼻は粘土の貼り付けで、下部が欠損しているが１㎝に満たない高さである。鼻の内面には凹みがあり、鼻の成形は頭頂部を塞ぐ前に行われた可能性が高い。耳の表現はない。全体的に摩滅が激しいが、後頭部にはタテのハケメが残る。200 はⅡ区の周堤外側から出土した人物埴輪の頭部で男性と思われる。後頭部は欠損している。被物等の表現はないが、頭頂部から額にかけて指による幅 1.5㎝の強いナデが、タテに１条施される。目と口は外側から工具による切り込みで成形し、右目はわずかに目尻が吊り上がる。口は小さく横一文字に開いている。鼻は粘土の貼り付けで成形し、下幅は 3.2㎝、高さは 1.5㎝を測る。左右の側頭部には幅２㎝程の粘土を貼り付けている。下部は欠損しているが、徐々に厚みを増す形状を呈しており、美豆良の表現ではないかと思われる。顔には細い工具による沈線が施される。頬から鼻の上部ととおりものと、目上から口下にかけて顔面を１周するものがある。入れ墨の表現だろうか。器面状態は良好で内外面とも指によるナデやオサエで調整する。最大の特徴として、本古墳出土の埴輪のほとんどが、浅黄橙系の色調であるのに対して、本資料は暗めの橙を呈することにある。201 は頭部から顔面にかけての資料だが､左側が欠損している。残存長は 14.2㎝。鍔付きの被物を被っ



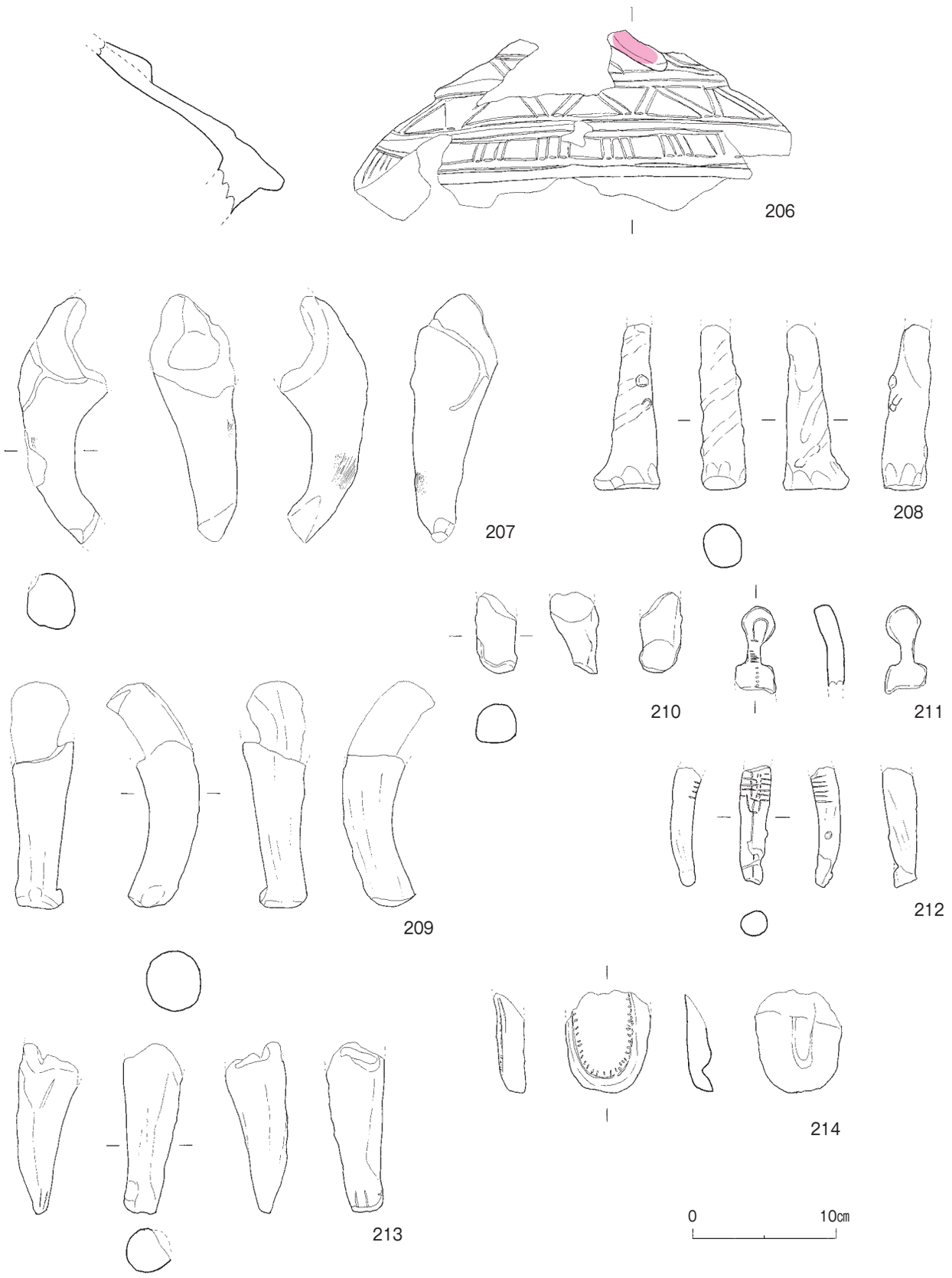
図版 54　人物埴輪⑩



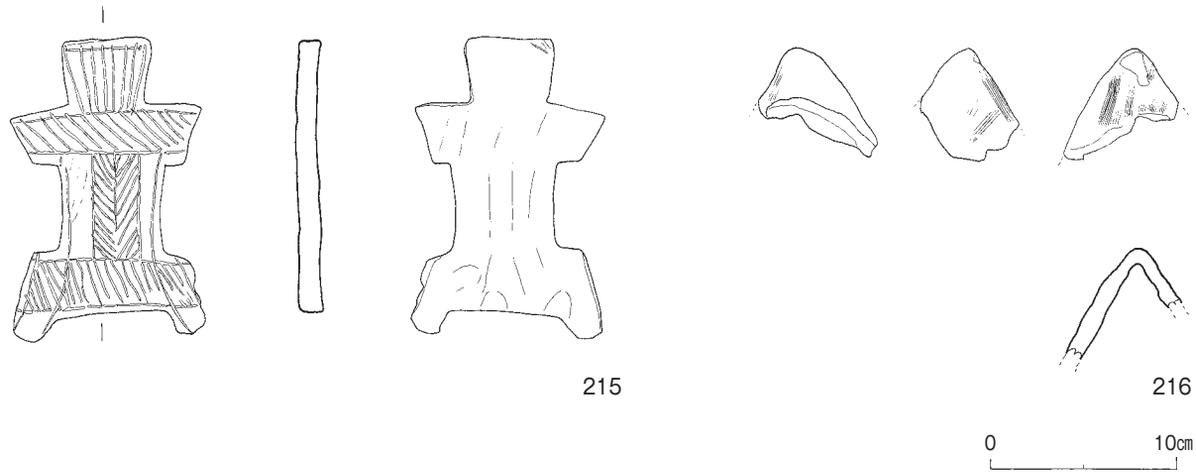




図版 55　人物埴輪⑪



図版 56　人物埴輪⑫



図版 57　人物埴輪⑬

た男性埴輪と思われる。頭頂部が欠損しているため被物の形状は不明だが、鍔には斜方向の短い沈線が残っている。目と口は外部からの工具による切り込みで成形され、口は最大で 0.7㎝開いている。鼻は粘土の貼り付けで成形され、高さ 1.5㎝を測る。鼻筋はよく通り、鼻孔の表現が工具による線刻によって加えられる。鼻上から額そして頬にかけて赤色顔料が良好に残っている。首から顎にかけては粘土を上から貼り付けて段をつけることによって境としている。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、焼成も良好である。身分の高い特別な人物を表現した可能性がある。

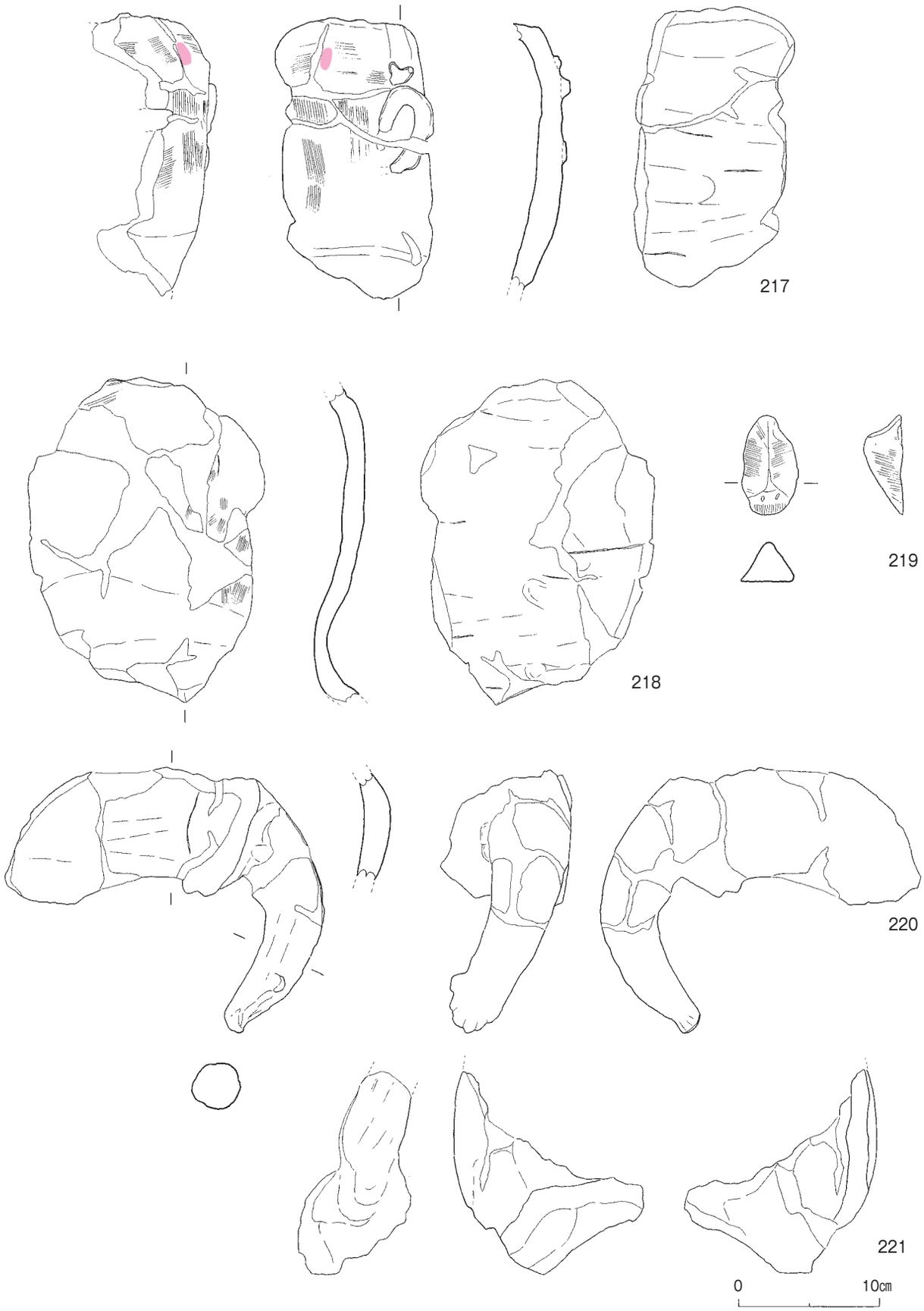
人物埴輪胴部（202 ～ 206）

202 は人物の胸と左腕にかけての資料である。喉元には横方向の沈線を施す。上部が欠損しているが、おそらく２本ありその間には斜方向の短い沈線を充填していると思われる。そして胸部の中央には縦方向に２本の沈線があり、沈線間は幅 1.7㎝、間には斜方向の短い沈線を充填する。これらの沈線は着衣表現と考えられる。縦の沈線は上衣の合わせの部分と考えられるが、合わせは通常斜めになるはずである。腕の長さは 11㎝で、斜め下方に向かって伸びている。個々の指の表現はなされないが指を曲げ、掌を上にしている。腕は手首までが中空に作られ、手先だけが中実作りである。胸部にはさまざまな方向のハケメが施されている。腕にもタテのハケメが残る。腕を含めて所々に赤色顔料が残っている。表面観察からハケメ→赤色顔料→沈線の順であることは確実である。203 はⅢ区の周堤外側から出土した資料で、人物埴輪の胴部や衣装が残存している。脇から腹部には着衣表現はないが、腰には幅５㎝の薄い粘土板を貼り付けている。帯の表現だろうか。大半が剥離しているが残存部分には２本１単位の沈線が上下に施され、その間には斜や横の沈線を矢羽状に施している。またこの部分にのみ赤色顔料が残っている。その下には粘土板をスカート状に貼り付け、２条１単位の沈線が縦や円状に残存している。長めの上衣もしくは裳の表現だろうか。段をつけながら伸びていったと思われるが、上部の１段のみしか残存していない。また、下ではなく横方向に伸びることから、この人物が立位ではなく座位の所作であった

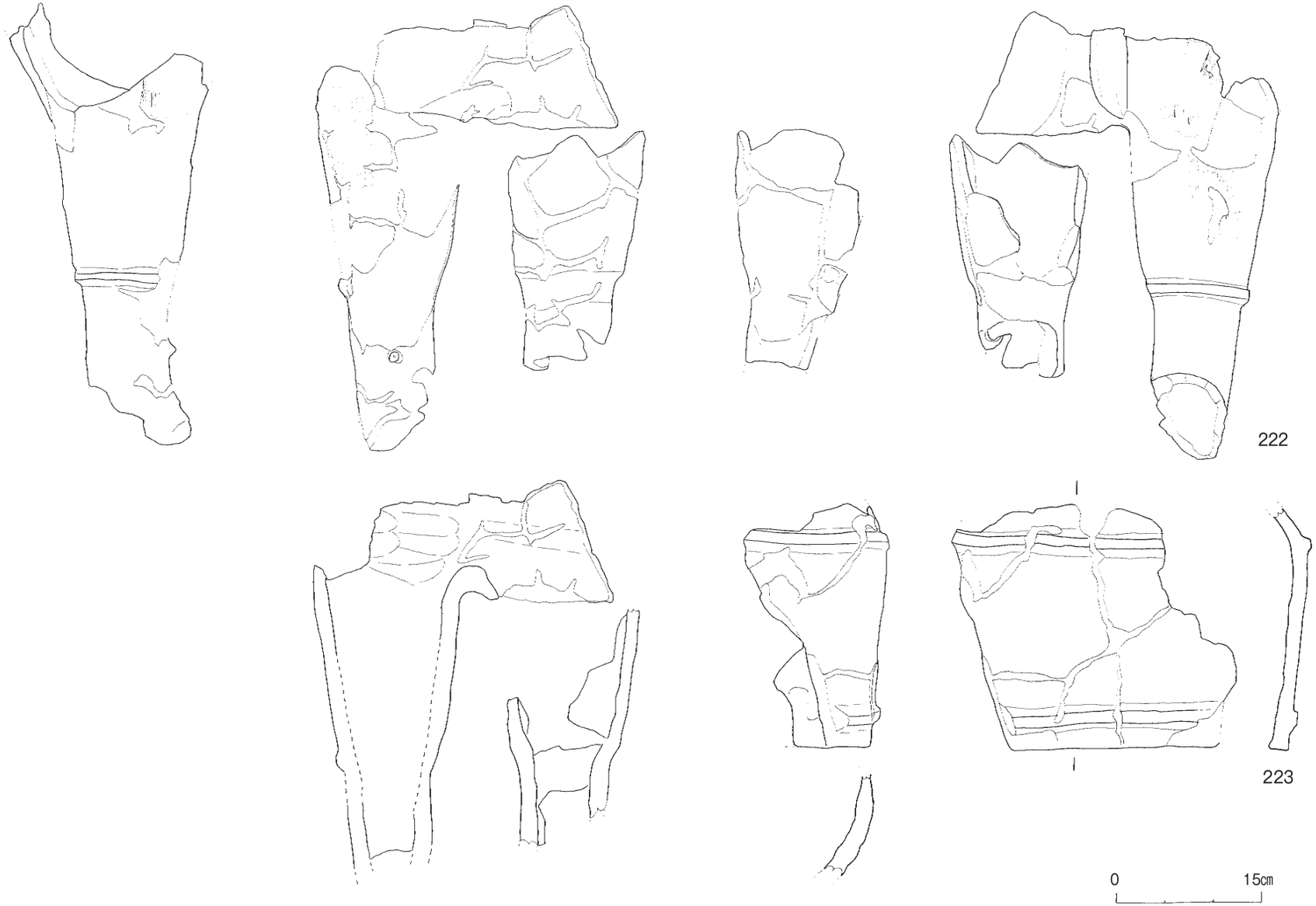
ことを伺わせる。外面にはタテのハケメが施される。腰帯の剥離部分にもハケメの痕跡があるため、ハケののちに腰帯の貼り付けが行われている。内面は指ナデによる調整が施される。204 は主にⅢ区の周堤外側から出土した破片で構成された資料で、人物埴輪の腹から腰にかけての部位で、腕の一部も残存する。前後が判然としないが、右腕として掲載した。腕は脇の付け根のみで、横に開いた表現だろうか。着衣表現はないが、腰には幅 4.5㎝、厚さ１㎝の粘土帯を貼り付けて、腰帯を表現したと考えられる。帯には斜めの短い沈線が３段にわたって施される。長さは２㎝程で、段ごとに方向が変わり、そこには横方向の沈線で区画されるが、帯の上端と下端にはなされない。帯の剥離部分にはハケメが残り、ハケののちに帯の貼り付けが行われている。また帯にはわずかだが赤色顔料が残っている。205 と 206 はスカート状に伸びる上衣端部と考えられる資料である。互いに接点はないが同一個体の可能性が高い。残存部分は３段に構成され、それぞれ違った文様が施される。上段は残存状態が良くないが、幅５㎝程で、２条１単位の沈線が半円状に施されている可能性が高い。また幅２㎝の薄い粘土板を貼り付けている。刀子の表現だろうか。赤色顔料が残っている。中段には２条１単位の横線が上下に施され、その間には同じく２条１単位の斜行線による鋸歯文が配されている。所々に赤色顔料が残る。下段は２条１単位の横線が上下に施され、その間には４条１単位の縦線が施されることから、上段は円形、中段は鋸歯、下段は方形の文様が描かれていることになる。下段の端部には厚さ１㎝の粘土紐を貼り足している。ハケののちにナデを施しており、ハケは大半が消されている。文様はそののちに施されている。全体的に器壁が厚く、３㎝以上に及ぶ箇所もある。焼成も良好である。また、下というよりもむしろ横に広がっていることから、これを装着していた人物は立位ではなく座位の可能性が高い。

人物破片（207 ～ 216）

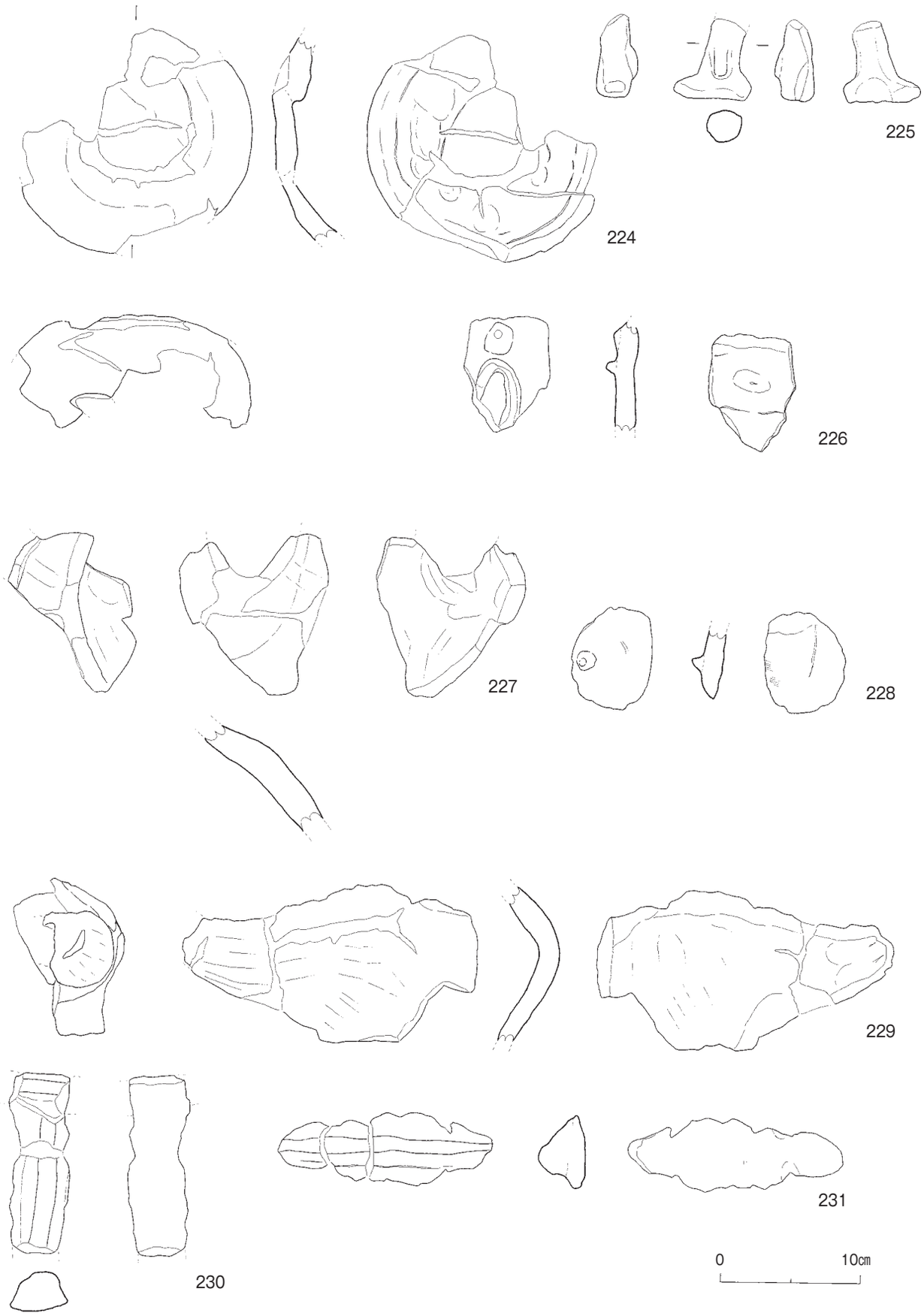
207 は腕の破片である。肩部分は中空で中間から中実となる。208 は美豆良で残存長 11.5㎝。左側にあたる。中実作りで肥厚する下端には粘土を追加で貼り付ける。表面にも粘土の貼り付けがあり、大半が剥離しているが、細い粘土をらせん状に巻きつけている。髪を束ねる紐を表現したと考えられる。209 は人物の腕でソケット状に差し込んで形成する。手先は欠損しているが、粘土粒の貼り付けがある。親指の表現だろうか。210 は腕先の破片で２つの粘土を貼り合わせている。手先は指オサエによって扁平となり、掌の表現だろうが、指先の表現はない。211 は人物の腰に付ける装備品と考えられる。残存長 5.9㎝、厚さ１㎝。上部は円形を呈し、沈逆Ｕ字形に施される。持ち手だろうか。その下は細い棒状粘土で繋ぎ、細い横線が施される。下部は方形を呈するが下端が欠損しており全形は判然としない。工具による小さな刻み目が縦１列に施される。212 は棒状の粘土に横線や縦線を加えたもので、細かい粘土粒の貼り付けもある。残存長 8㎝。湾曲する形状を呈する。沈線は荒いがナデは丁寧である。人物の付属品もしくは美豆良の可能性がある。213 は人物の腕の破片で、手先が扁平となり、指は線刻によって表現される。２枚の粘土を貼り合わせて成形している。214 は人物の履の表現で残存長は７㎝。全体の平面形は楕円形を呈している。外縁に沿って沈線を施し、その内側に刺突を連ねている。外面には丁寧なナデを施す。215 は人物の頭頂部と考えた。三角形の頭巾を被っている。216 は靱で全長 16㎝、最大幅 10㎝、厚さ１㎝の扁平な粘土板で成形されている。内外面ともに丁寧なナデを施し、製作時の痕跡が確認できないが、１枚の粘土板に背板を接着させて作った可能性が高い。全体の形状は人形のようである。矢や矢筒の表現はすべて同じ工具による沈線で行われている。矢には鏃の表現はない。表面にはわずかだが赤色顔料の痕跡が残る。人物埴輪に背負われていたと考えられるのが



図版 58　人物埴輪⑭



図版 59　人物埴輪⑮



図版 60　人物埴輪⑯

一般的だが、裏面は上部に粘土の剥離痕が一部あるものの、接着していた痕跡はない。靱単独の可能性も否定できない。

人物埴輪（217 ～ 223：力士①）

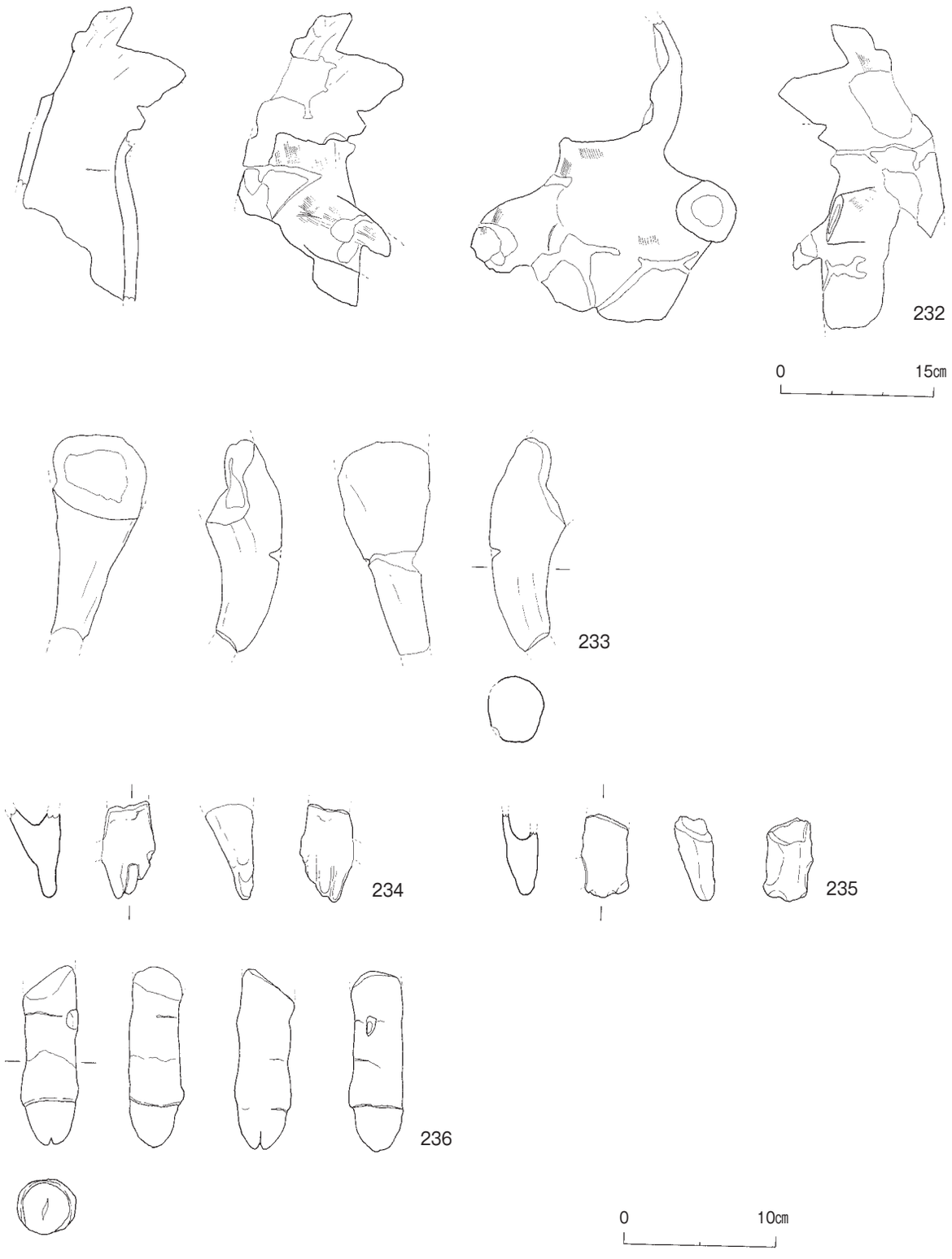
217 ～ 223 は力士を表現した資料である。破片が少なく、各部位を接合することができなかったが、残存状態から２個体あったことは確実である。217 ～ 223 は同一個体と考えられ、頭部から基底部までの破片を確認することができた。217 と 218 は頭部である。217 が左側頭部で工具の切り込みによって形成された目がわずかに残存する。耳は幅 1.5㎝程の粘土紐を楕円状に貼り付けて表現する。耳の上部には大部分が剥離しているが、粘土紐を貼り付けた痕跡があり、何らかの髪型を表現したものと思われる。218 は後頭部から頸部の資料である。これにより頭頂部から頸部までは 30㎝以上あったと推定される。219 は鼻で、鼻筋と鼻孔がはっきりと表現されており、断面は三角形を呈する。220 は背中から左腕の資料である。胸部は欠損している。器面は摩滅しており調整は不明瞭。左腕は下方に向かって曲げられ、腰付近に近づいている。親指は粘土粒を貼り付けて成形され、ほかの指は線刻によって表現されるが、親指を含めると７本の指が表現されている。腕は中実作りで、ソケット状に差し込んで形成される。221 は肩から右腕にかけての資料で、前腕部は完全に欠損しているが、上に向かって手を挙げる所作と考えられる。残存している上腕部は中空だが、内面は灰色化しており、はめ込んだ前腕部が抜けてしまった可能性がある。222 は腰から脚にかけての資料である。残存長 46㎝を測り、脚部は足先が欠損しているが 30㎝以上になる。右足は臀部と接合したが、左足は付け根の破片を欠いている。臀部には幅４㎝の粘土紐が貼り付けられ、まわしを表現している。足は中空で、粘土帯を積み上げることによって成形される。腿から足先に向けって径を小さくする。膝には突帯が施される。左足は欠損しているが、突帯がはがれた剥離痕がある。脛には径１㎝の粘土粒を貼り付け、装飾品もしくは履物を表現したと考えられる。内外面とも摩滅しているが、外面にはハケメが残り、内面は指ナデが行われる。223 は基台と考えられる。残存長は 25㎝を測る。２条の突帯を施す。１条目は基底面から 2.5㎝、２条目は 20.5㎝に巡らす。基底面形は楕円形を呈すると考えられる。

人物埴輪（224 ～ 231：力士②）

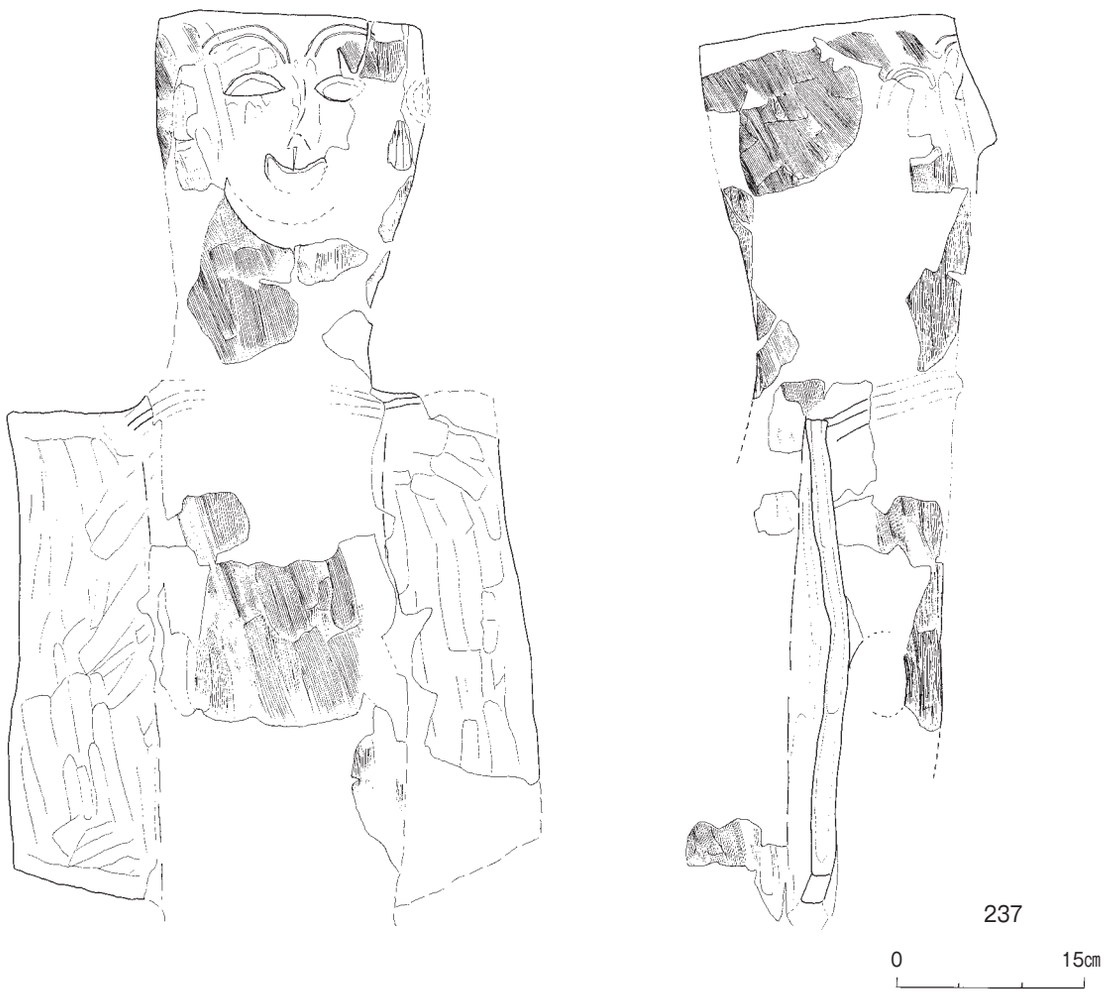
224 ～ 231 も同一個体の力士と考えられる資料である。224 は頭部で径 17㎝を測る。工具で切り込まれた右目が残存する。頭頂部には剥離痕が認められ、何らかの髪型を表現したと思われるが、判然としない。成形は粘土板の積み上げによって行われ、頂部は径９㎝程の円形の粘土板で塞いでいる。このため内面は接合ナデが施されていない。225 は中実作りの美豆良で、下部は前後に肥厚する。中位には幅２㎝の粘土粒を貼り付けて、結うための紐の表現と考えられる。226 は耳で、粘土紐を楕円形に貼り付けて耳たぶを表現する。上部には径２㎝の粘土粒を貼り付ける。227 は肩から右腕と考えた。腕を斜め上方に上げている所作を表現している。229 は左腕から肩にかけての資料で、腕は前に突き出す表現で掲載したが、力士①のように腰に向かって伸ばしていた可能性も否定できない。228 も力士の一部と考えた。径１㎝の粘土粒を貼り付けており、内面はきれいに剥離している。粘土紐を折り曲げて成形し、本体に貼り付けたと考えられる。230 と 231 はまわしと考えられる資料である。230 は縦と横のまわしが交わる部位になる。ともに幅４㎝前後の粘土紐で成形する。

Ⅱ区出土の人物埴輪（232 ～ 236）

232 は人物埴輪の上半部の資料である。頭部は顔面の一部が残存するが、欠損と剥離が著しい。



図版 61　人物埴輪⑰

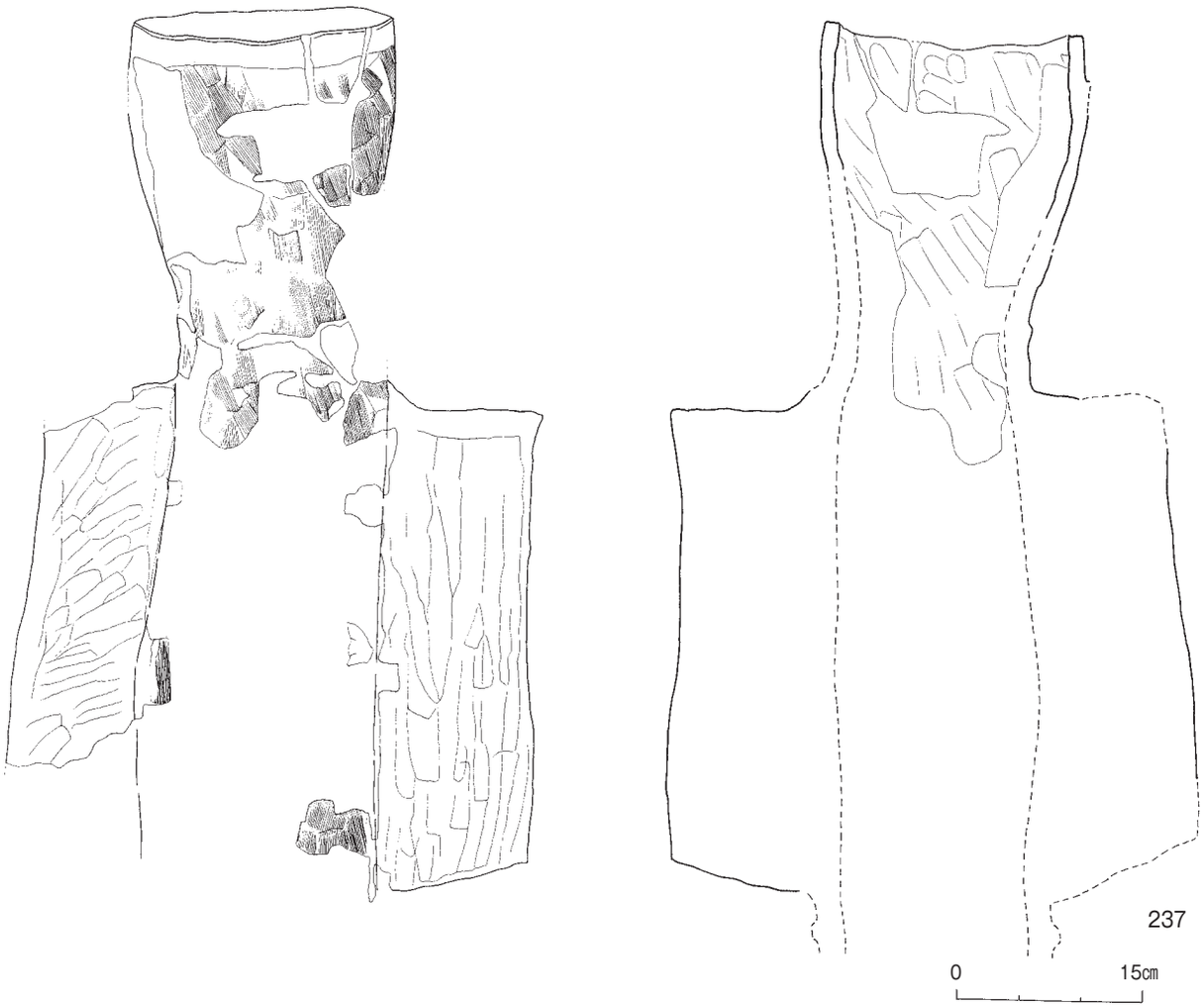


図版 62　人物埴輪⑱

わずかに口と思われる切り込みが確認できる。これによると、人物は体を半身にして、顔を左に向けていることが分かる。首には粘土紐が新たに巻かれており、頭部を支えるための補強と考えられる。この粘土の剥離痕にはハケメが施されている。腕は基部のみで大半を欠損しているが、左腕は半身になった体の前方に水平に伸ばし、右腕はそれとは逆方向に引くような動作をしている。弓を曳く所作を表現していると思われる。233 は腕の破片で、上腕は中空で、中実作りの前腕を接着されて成形する。手先は欠損している。磨滅が激しいがナデ調整と思われる。234 は人物の手先の破片である。前腕部との接続部分は窪んでおり、はめ込んで接着させたと思われる。指は工具による切り込みで成形され、切り込みが深いため、１本１本が独立しているようにみえる。親指は欠損している。235 も手先の破片で、232 と同じように前腕部との接続部分が窪んでいる。指先は不明瞭だが、親指だけが粘土粒の貼り付けで成形されたが、剥離していると思われる。236 は男根を表現した破片で、残存長 11.5㎝、最大径 3.8㎝を測る。１本の棒状の粘土を基本とし、亀頭の先端には工具の切り込みがなされ外尿道口を表現する。亀頭冠と亀頭頚との境には薄い粘土を貼り付け包皮を表現している。基部近い部分には１㎝程の粘土粒を貼り付けるが、何を意味するか判然としない。

盾持ち人（237）

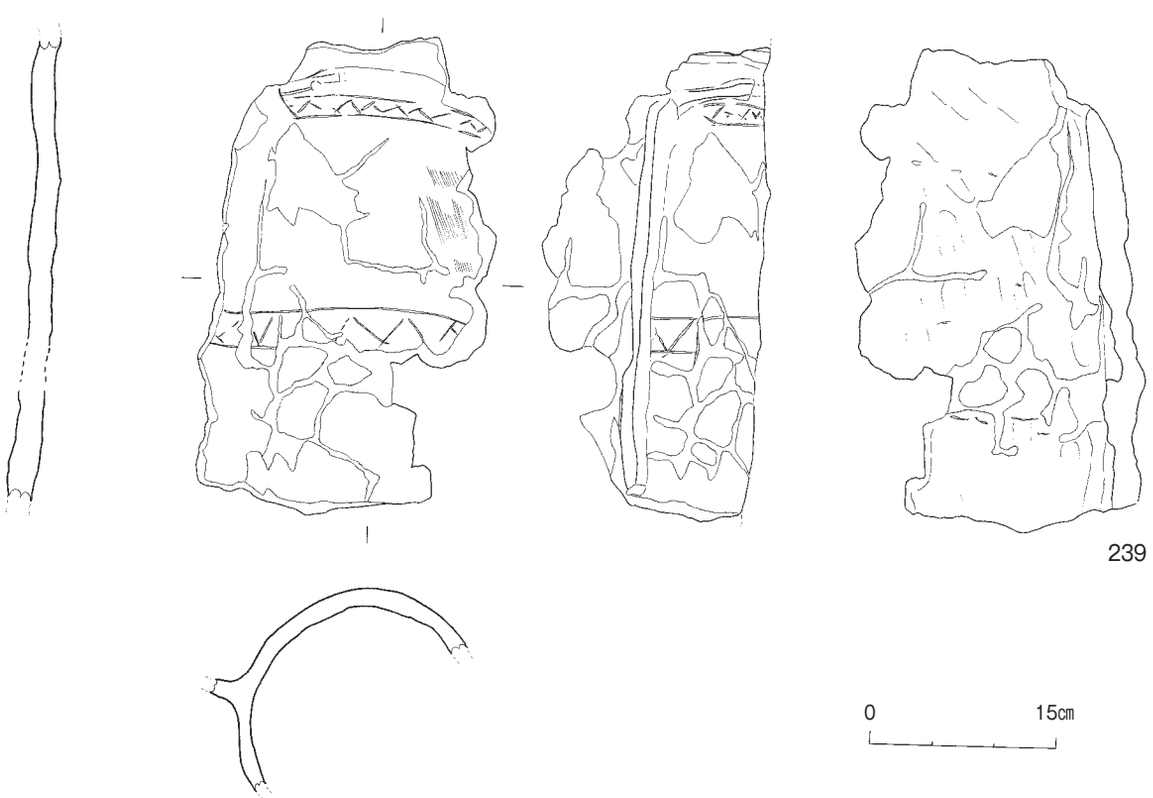
Ⅲ区の周堤外方から出土した。ほかの形象埴輪群から離れた位置から出土した。盾の翼状部と



図版 63　人物埴輪⑲

頭部以外はほとんど後補によるもので、とくに基底部は完全に失っており、器高は不明。確実な残存高は 70.3cm、最大幅は 43.5cmを測る。ほかの形象埴輪の状況から基底部は 20 ～ 30cmが予想されることから、器高は１ｍ近くに及ぶ可能性がある。頭部と盾の中心部は円筒状を呈し、粘土紐の積み上げによって形成される。おそらく盾部と頭部は別造りではなく、継続した粘土帯の積み上げによって形成された可能性が高い。径は頸部でやや狭まり、頭頂部に向けて緩やかに広がり、盾部のそれとほぼ同じ径となる。頭頂部径は 21.3cmである。積み上げ後にタテハケを施し、盾部のヒレ部との接着部分に透孔を設ける。透孔は対向するものではない。盾部と頭部との境には突帯を設けることにより境としている。顔は眉毛が線刻によって表現される。目と口は工具による切り込みで、目は大きく見開いた状態である。口は下唇の大半が後補によるものだが、左右がつり上がっている状態ではないかと推測される。全体的には不気味に微笑んでいる表情といってよいだろう。鼻と耳は粘土の貼り付けで表現されている。鼻は大きく鼻根は眉毛まで達している。鼻と口に間には人中が１本の沈線で表現される。耳は輪状の粘土紐を貼り付けて形成する。

盾の側部は円筒部の左右に幅 10cmほどの板状の粘土を貼り付けて表現している。左の側部下位は後補によるものだが、右はほぼ完全に残存している。形状は長方形ではなく台形を呈する。側部のラインは直線的でなくやや波打っており、成形は丁寧とは言い難い。ハケは施さず指ナデに



図版 64　人物埴輪⑳

よる調整を施す。

盾持ち人（238）

Ⅱ区の周堤外側や62号墳周溝内から破片が出土した。百足塚古墳の周堤上に樹立していたものが、外方に転落したと考えられ、他の形象埴輪群とはやや離れた位置にあったと思われる。上部のみの資料で、下半部は欠損している。残存高は31㎝、幅27.5㎝、円筒部の径は最大21.5㎝を測る。粘土板を円筒状に積み上げて体部の中心とし、側面には粘土板を貼り付けてヒレ状にすることで盾部を表現している。頸部には前面にのみ幅２㎝、高さ2.5㎝の太い粘土紐を貼り付けている。237のように頸部の径が小さくなることはない。顔面は口のみが残存。外からの工具による切り込みによって成形され、幅6㎝、高さ1.4㎝となる。鼻は粘土の貼り付けで成形されたと考えられるが、剥離している。剥離痕から幅4.5㎝と推定される。目と口は不明である。磨滅が激しいが円筒部にはタテハケが施される。盾部はナデ調整か。内面はナデ調整を施す。

盾持ち人（239）

Ⅱ区の周溝内から出土した資料で、盾持ち人と考えた。残存高37.5㎝、最大幅23㎝を測る。体部の中心は円筒状を呈し、断面は正円に近い。粘土帯の積み上げで成形する。頸部に向かって徐々に径が小さくなると思われる。本体の側面に粘土板を貼り付けて、盾の翼状部を表現したと考えられるが、大半を欠損している。円筒部の盾面には中位と頸部との境に文様を施す。２条の横線の間に短い斜線を加えて鋸歯文を表現する。文様はそのまま翼状部まで続いていたようである。円筒部の後面には透孔が翼状部に近い位置に穿たれている。頸部には幅２㎝の粘土紐を貼り付けて突帯としているが、他の資料同様に前面のみと考えられる。外面は磨滅が激しいが、タテハケがわずかに確認できる。内面はナデ調整で、粘土の継ぎ目が残っている。

（５）動物埴輪

動物埴輪は鳥と獣系に分けることができる。鳥はⅢ区から出土しているのに対して、獣系の多くはⅡ区からの出土である。獣系でⅢ区から出土しているのは馬具を装着した馬だけである。

鳥形埴輪（240）

Ⅲ区の周溝内から出土した。残存率は７割以上を誇るが、表面の摩滅は激しい。器高37.5㎝、全長45.2㎝、底径は18㎝を測る。

基台部は粘土板の積み上げによって成形される。底面形はほぼ正円に近いが、頭部と尾に向かう側は径を拡げながら立ち上がり、胴部に向かう側はほとんど径を変えることなく立ち上がる。２条の突帯が巡り、１条目は底面から2.5㎝上位に設置し、１条目と２条目との突帯間は12.5㎝を測る。突帯間には粘土を貼り付け、横方向に突出させている。幅は5.5㎝で止木を表現したものと思われるが、脚は欠損している。また、右側（鳥に向かって左側）は欠損しており後補である。粘土板積み上げ後に行った器面調整は摩滅のためまったく確認できない。

基台部成形後に、頭部と尾部の成形を行ったと考えられる。それぞれ粘土板を貼り付けながら、端部に向けて伸ばしていったと考えられる。尾部は塞ぐことなく、空洞のまま残している。頭部は径を狭めながら粘土板を足していき、くちばし部分は別造りで形成する。中実造りで、空洞部分に差し込んで形成している。頭部には径2.5㎝のボタン状の粘土を貼り付ける。これは耳朶を表現しているものと思われ、鶏を表現しようとした可能性が高い。鶏冠がないことから雌鶏だろうか。目は径0.5㎝ほどの穿孔によって表現している。羽の表現は認められないが、欠損した可

能性もある。

器面の調整は摩滅により判然としないが、頭部と胴部は指ナデ、尾部付近にはハケメの痕跡が認められる。内面は指ナデ、指オサエが施される。

鳥形埴輪（241）

Ⅲ区の周溝内から出土した。基底部および尾部の先端を欠損しており、法量が見いだせないが、241 より若干大きいのではないかと思われる。

基台部は２条目と思われる突帯と、その直下に成形された止木と脚が残存している。止木と脚は鳥の左側のみに残り、右側は後補である。止木は幅 8.5㎝、高さ２㎝の粘土を貼り付けて形成し、器面からは２㎝ほど突出している。脚は２条目の突帯から止木へと伸びている。足指などの表現はあいまいで判然としない。

体部は基台に粘土板を継ぐことにより、頭部と尾部を成形する。尾部は先端が欠損しているが、筒状に成形し、端部は塞ぐことなく、空洞のまま残していたと思われる。頭部はくちばしが中実の別造りで、最後に差し込みによって形成される。耳朶は径 2.5㎝のボタン状の粘土を貼り付ける。そこから１㎝も離れずに目を表現したと思われる径 0.5㎝の穿孔が施される。目の上には鶏冠を表現した突起がある。突起高は最大でも１㎝ほどで半円形を呈している。この大きさでは雌鶏か雄鶏か判断することはできない。

器面の調整は全体的にハケメを施している。幅１㎝につき 10 本以上の細かい板目をもつ板を使用している。また、ハケ後に背中に沈線を描いているが、おそらく羽を表現したものだろう。わずかだが赤色顔料の痕跡が残る。

鳥形埴輪（242）

Ⅲ区の周溝内で出土した。残存率は５割ほどでとくに基台部の欠損は激しいが、底面までの接合を確認することができた。全長 64.5㎝、器高は頭部側が 48㎝、尾部側が 47㎝、基底部は大半が後補だが、径 19㎝で復元した。

基底から 20㎝は円筒状の基台部で、２条の突帯を巡らしている。１条目は底面から 1.5㎝の高さに設置し、１条目と２条目間は 16㎝である。２条目の突帯直下に対向するように円形の透孔を穿孔する。器面調整はタテハケで、内面は指ナデ、指オサエを施す。

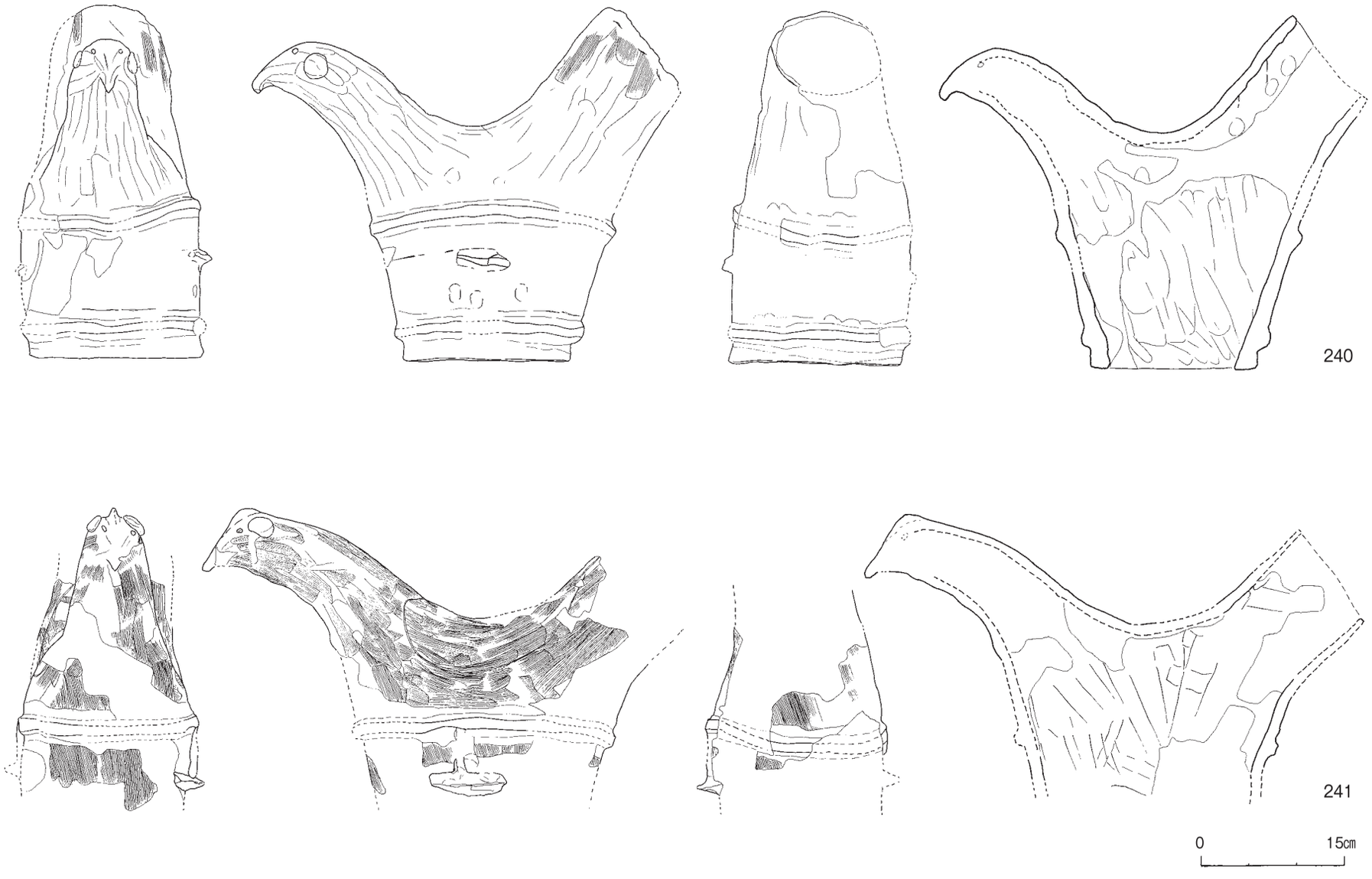
基台成形後に頭部と尾部の成形を行う。尾部は粘土板を継ぎ足しながら成形し、端部は空洞のまま残している。

頭部も粘土板を継ぎ足しながら成形を行う。くちばしは中実の別造りで、最後に差し込んで形成している。頭部には、耳朶を表現したと思われる径 2.2㎝のボタン状の粘土を貼り付ける。目は径 0.5㎝の小さな穿孔によって表現する。

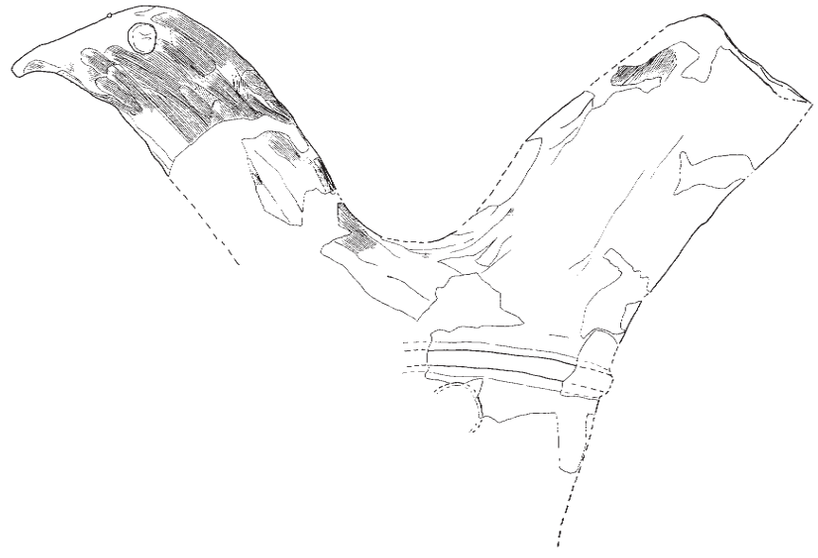
器面調整はハケメによって行われ、内面は指ナデ、指オサエを施す。

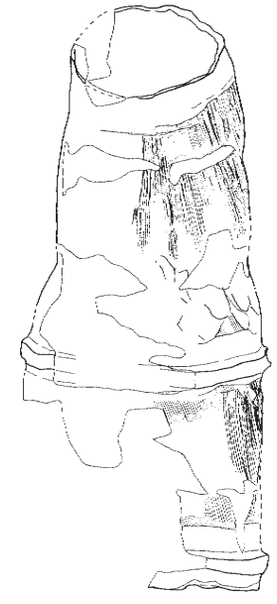
鳥形埴輪（243）

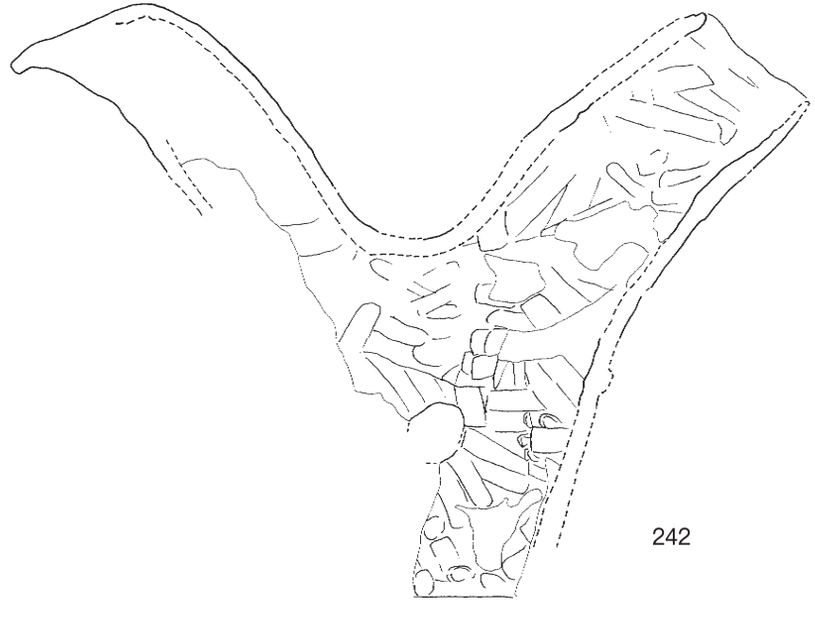
Ⅲ区の周溝内から出土した。鶏を表現した大型品と推測されるが、基底部と尾部は完全に欠損しており、法量は不明。残存部分の最大幅は 25.5㎝を測る。残存しているのは、基台部の２条目と思われる突帯の一部と頸部から頭部である。基台部から粘土板の積み上げで頸部と頭部を形成する。頸部径は 13㎝を測り、そこに幅２～ 2.5㎝、厚さ 0.5㎝の粘土板を貼り付けて全周する。興奮して羽を逆立てる様子の雄鶏を表現したと思われるが、本来は背中に向けて逆立てるはずが頭部に向けている。また、背面には沈線が施されており、羽毛を表現したと考えられる。



図版 65　動物埴輪①（鳥）



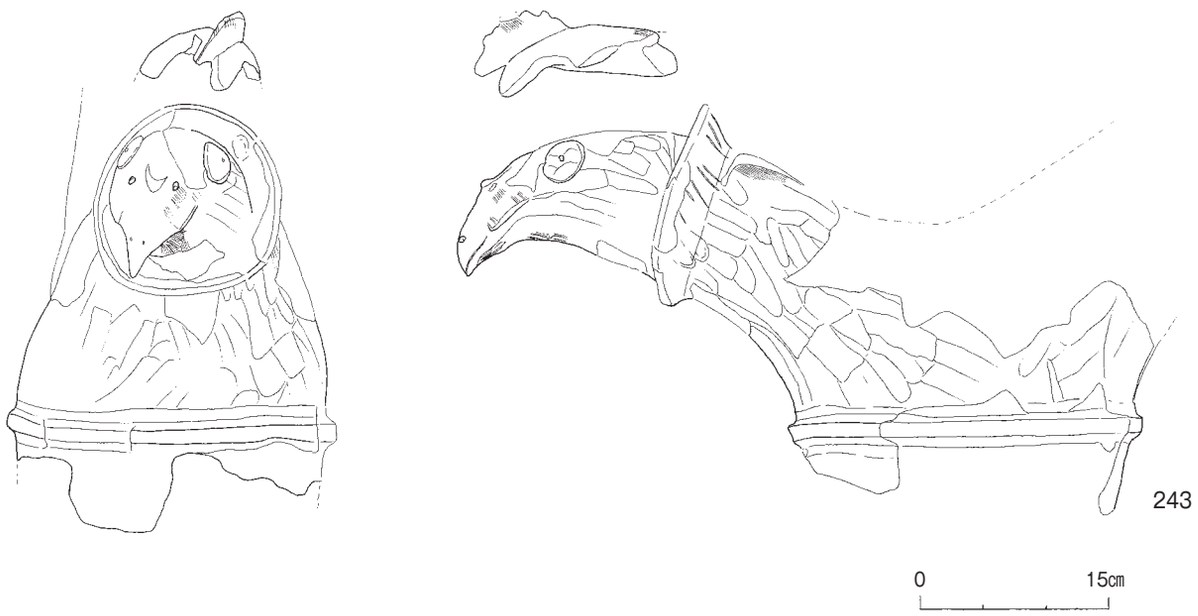




242

0　15cm

図版 66　動物埴輪②（鳥）



図版 67　動物埴輪③（鳥）

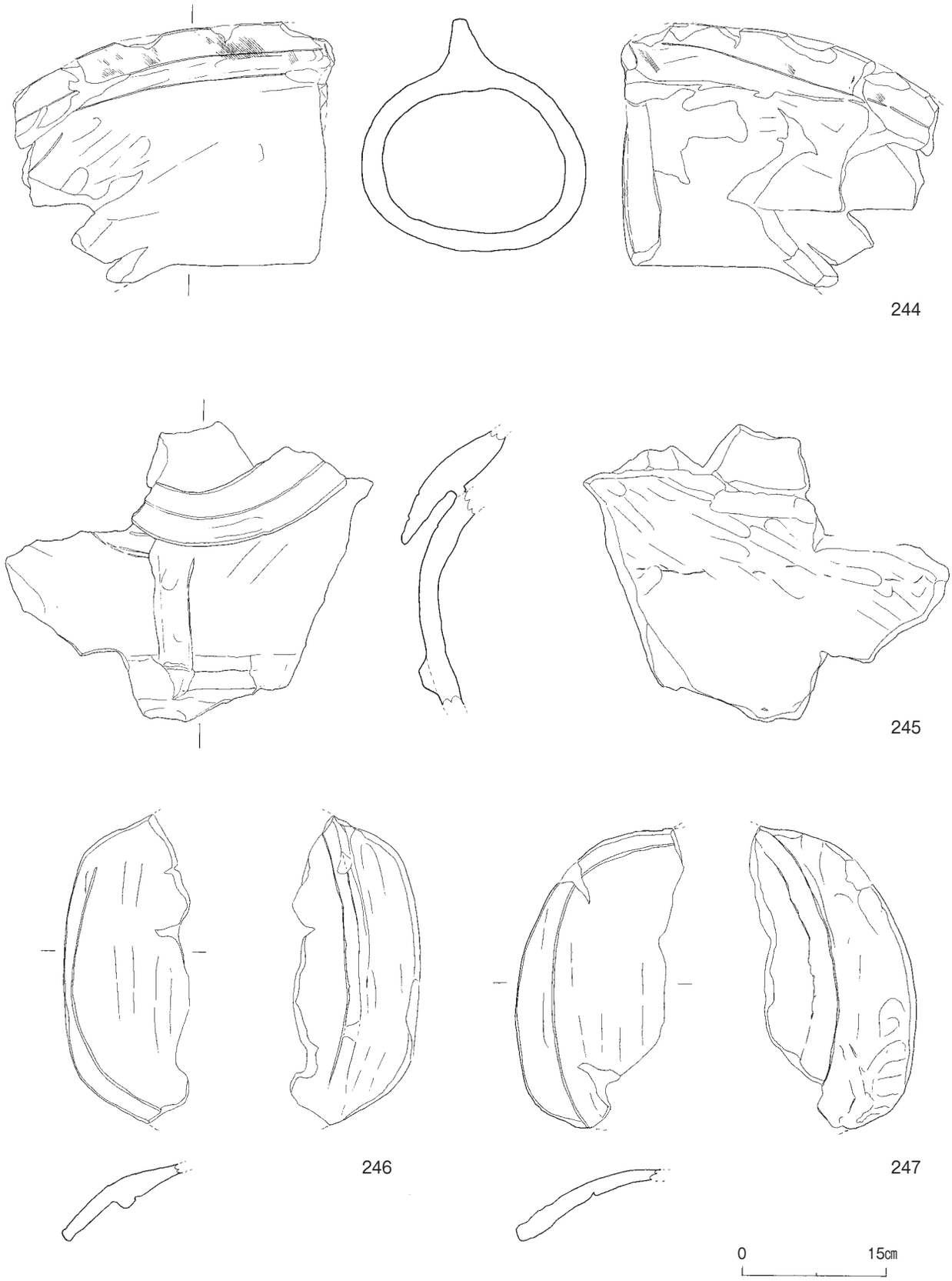
頭部には鶏冠、耳朶、目、鼻孔、くちばしの表現が認められる。鶏冠は長さ 8.5cm、最大高 2.5cm で半円形の粘土を貼り付けている。先端は一部欠損しているものの、ギザギザの表現も施される。耳朶は径 3.5cmのボタン状の粘土を貼り付けている。中心部には径 0.4cmの穿孔が施されている。残存しているのは左側だけで右側は後補によるものである。目は径 0.5cmの貫通した穿孔によって表現される。くちばしには沈線が施され、上下の区別がなされている。くちばしの上部には小さな穿孔があるが鼻孔を表現したと思われる。

器面は摩滅が激しく、判然としない。ハケメの痕跡が一部残る。

鳥形埴輪破片資料（244 ～ 247）

244 は鳥形埴輪の尾と考えられる資料で、鶏と考えられる。243 と出土位置が近く、同一個体の可能性もあるが色調がわずかに異なる。尾の径は 13cmで横方向に広がりながら体部へと至る。背部には高さ 3 cmの粘土板を貼り付けて羽毛を強調し、左右に 2 本ずつ沈線を施す。245 は鳥形埴輪の羽と止まり木を表現した部分の破片である。244 と同一個体の可能性がある。羽は粘土板による別造りで、2 本の沈線を施している。羽の下には幅 3.5cm の粘土板を縦方向に貼り付けて脚とし、その下に同じく粘土板を横方向に貼り付けている。止まり木に止まった表現していると考えられるが、止まり木を掴んでいた脚先は欠損している。また、脚の付け根付近にも細かい 2 本の沈線を施している。内外面ともに指によるナデを施す。

246 と 247 は鳥形埴輪の羽の部分で、内外面ともに丁寧なナデが施されているため、判然としな



図版 68　動物埴輪④（鳥）

いが、複数の粘土板を貼り合わせることによって形成されている。いずれも表面には１本の沈線を施す。裏面には本体との接着部分に沈線を施す。

動物埴輪（248：犬）

Ⅲ区の周溝内から出土した。４本脚の動物埴輪で犬を表現したものと思われる。全長 54㎝、最大高 47㎝、横幅 21.5㎝を測る。

頭部は残存率が低く、後補によるところが大きい。目と鼻は工具による穿孔で表現し、いずれも貫通している。口は細い工具による深めの線刻が施される。耳穴は塞がず、耳たぶは輪状にした粘土を貼り付けて表現する。頸部には突帯を巡らせるが、これは首輪を表現しているものと思われる。頂部には径 1.5㎝のボタン状の粘土を貼り付けている。

頸部から緩やかに曲線を描きながら臀部へと至る。ハケメを施すが、脚部との境では接合によるナデによって消されている。また、脚の付け根には径 3.5cm で円形の透孔がそれぞれ対向するように４箇所施される。臀部には幅２cm 程の粘土紐を貼り付けて尾を表現している。一部欠損しているが、体部に巻きつけるように形成されている。

４本の脚は直立した状態ではなく、重心を後脚にかけている。飛びかかる所作をあらわしている可能性がある。いずれも胴部とは別造りされており、円柱状に仕上げられる。接地面はハの字状に広がっており、爪などの細かな表現はされていない。接地面である基部を成形し、その後は粘土板の積み上げを行っている。外面は指ナデによる調整を施している。

動物埴輪（249）

動物埴輪の頭部から体部にかけての破片で破片である。頭部は耳と目が残存しているが、鼻と口は欠損している。耳は穿孔した部分に輪状の粘土を貼り付けて表現する。目は切り込みによって成形するが、半分は欠損している。体部は肩部と腰の一部が残存している。背中のラインはほぼ直線状で、頸部も寸詰まりで首輪の表現はない。背部にはハケメが施されるが、やや摩滅しており、不明瞭である。全体的な特徴から猪か犬を表現したと考えたい。

動物埴輪（250）

動物埴輪の頭部片である。耳と目、鼻は穿孔によって形成され、口は工具による切り込みである。口の奥には幅１cm 程の剥離痕がある。奥歯もしくは牙の表現の可能性があり、牙だとすれば猪の可能性があるが、口元の形状から犬もしくは鹿の可能性もある。

動物埴輪（251）

動物埴輪の脚部と考えられる資料でⅡ区の周溝内から出土した。底径 6.3㎝、脚部径 4.8㎝を測る。接地面はハの字状に開き、そこから粘土板を積み上げで形成する。

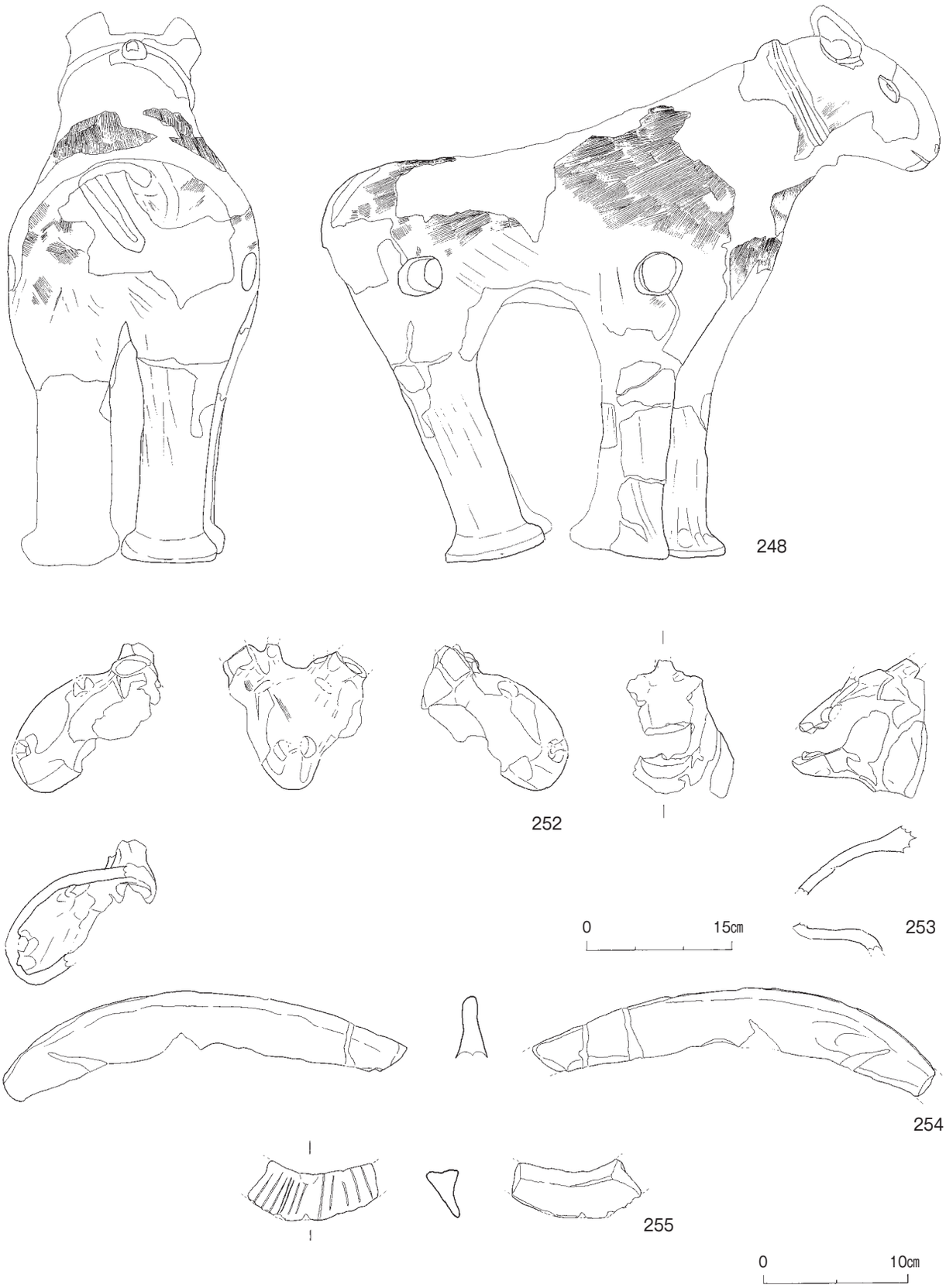
動物埴輪（252：鹿）

動物埴輪で鹿の頭部だろう。耳は穿孔した箇所に輪状の粘土を貼り付けて形成する。両耳の間には円状の欠損部分があり、角があったものと思われる。耳から上顎までのラインは曲線状で、目と鼻は穿孔によって形成されている。鼻が口よりも突き出しており、この部分は最後に粘土板で蓋をして成形されている。下顎は欠損しているが上顎とは別造りだったと思われる。

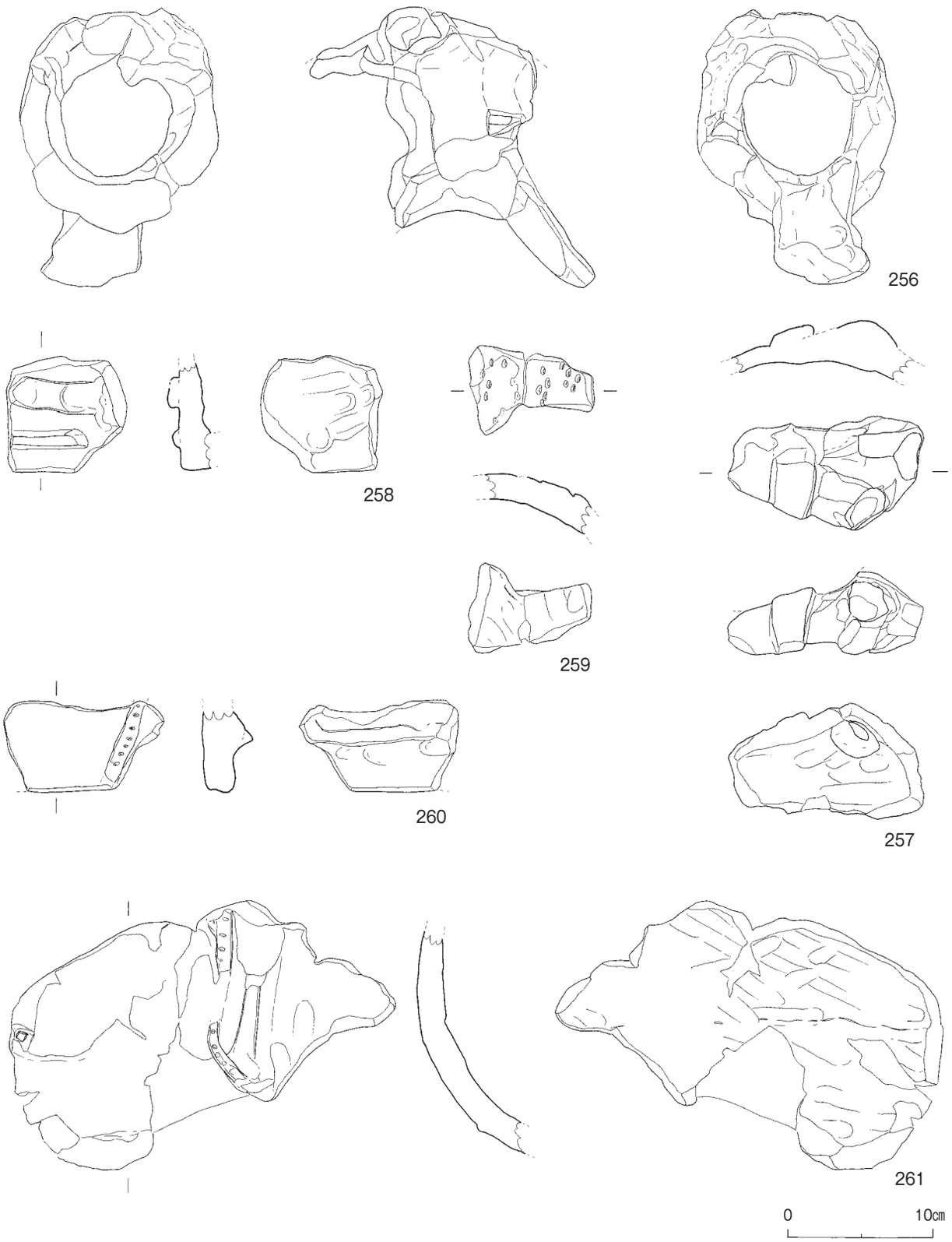
動物埴輪（253：猪）

動物埴輪の頭部から頸部片で、背部には鬣を表現したと考えられる突起があることから猪と考えられる。鬣は径２cm の棒状の粘土を貼り付けている。上部は欠損しているが、斜め後方に向かって伸びている。耳は穿孔箇所に輪状の粘土を貼り付けて形成し、鼻も工具による穿孔である。鼻

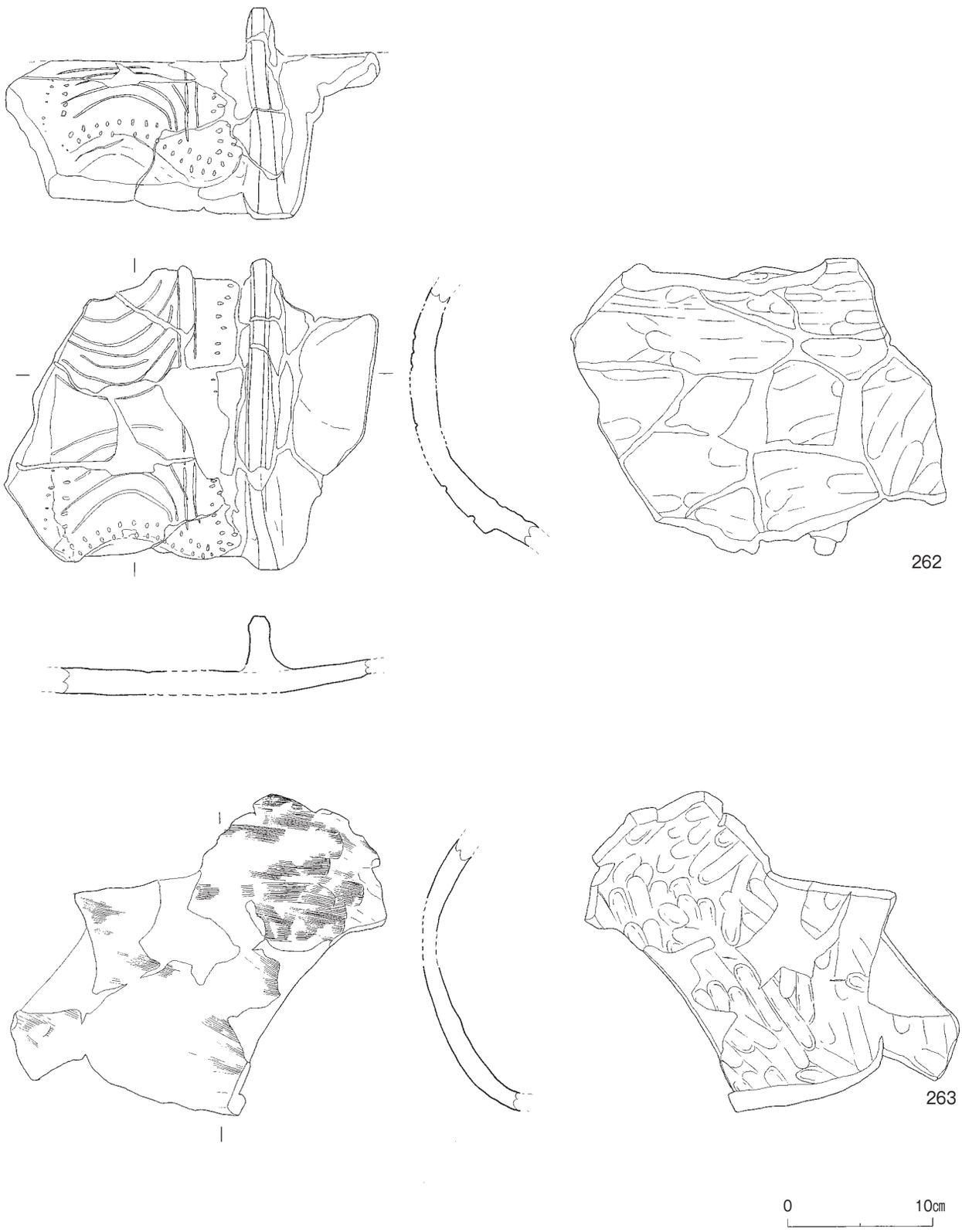
図版 69　動物埴輪⑤



図版 70　動物埴輪⑥



図版 71　動物埴輪⑦



図版 72　動物埴輪⑧

図版 73　動物埴輪⑨

と上顎の一部は欠損している。下顎は別造りで形成されており、歯および牙があったと思われる欠損箇所がある。

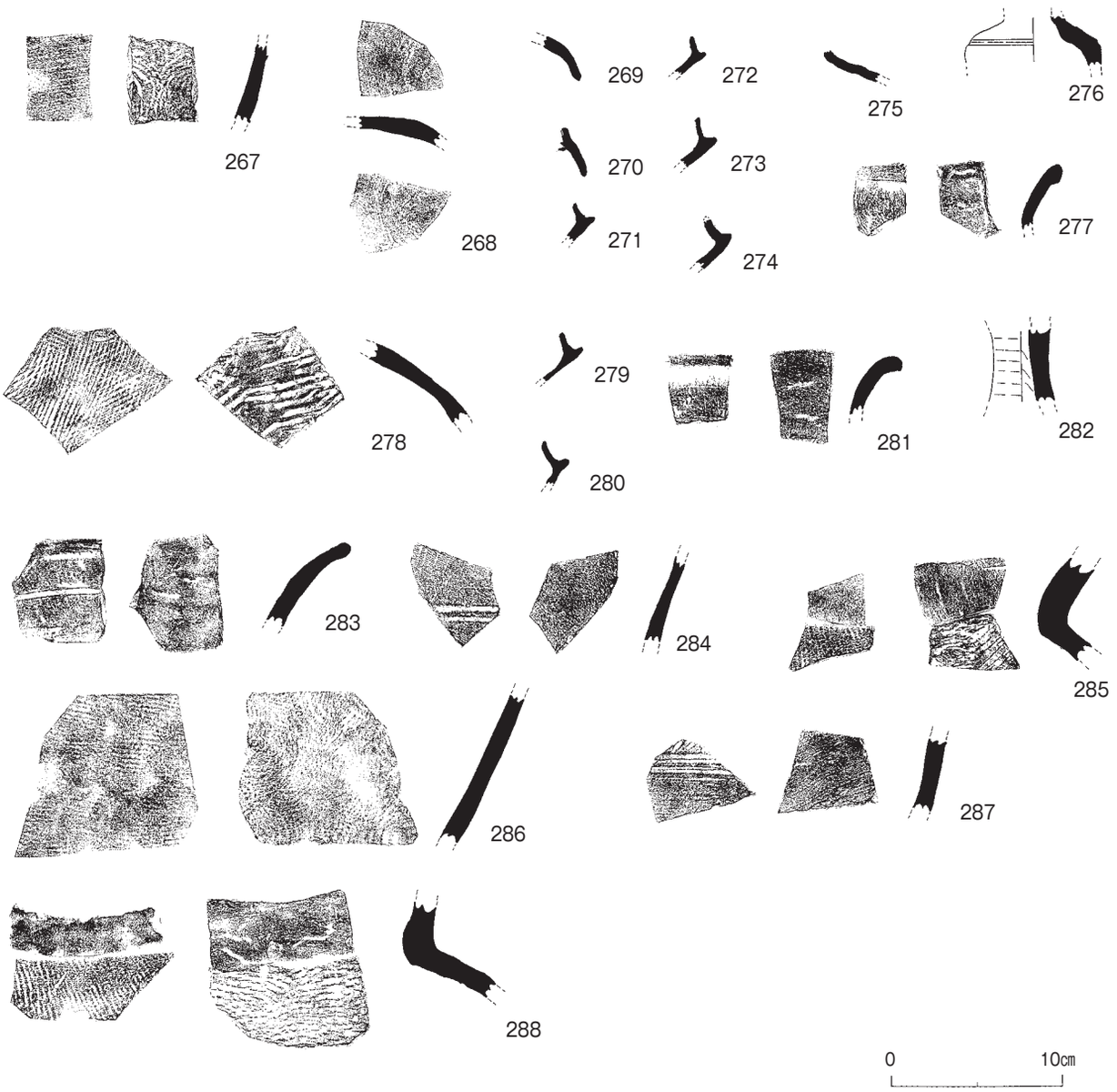
動物埴輪（254・255）

254 はⅢ区の周溝内から出土した資料で、粘土板を弓形に成形したものである。馬か猪の鬣と考えた。残存長 27.7㎝、最大高 4.2㎝を測る。255 もⅢ区の周溝内から出土した資料で動物埴輪の一部と考えられるが、鳥形埴輪（243）の逆立った羽毛にも類似する。動物であれば鬣の可能性がある。器面の片側のみ沈線が施されており、毛か羽毛を表現した可能性がある。

動物埴輪（256 ～ 266：馬）

馬と思われる破片はⅢ区の周溝内と周堤外方、Ⅱ区の周溝内と広範囲から出土している。馬具を装着した飾り馬と裸馬がいると思われる。頭部片と思われる資料には、馬具を装着した痕跡があるものが２頭分あることから、裸馬であっても轡や手綱の装着はあった可能性があるが３頭以上の可能性も否定できない。飾り馬の破片は主にⅢ区で、裸馬は主にⅡ区から出土しているが、混在しており完全に分別することはできなかったことから、まとめて報告する。

256 は耳から首にかけての資料と思われる。耳には径３㎝の孔に粘土を輪状に巻いて表現する。左右の耳の間には幅５㎝にわたって剥離痕があり、首へと続いている。鬣と考えられる。また、耳の下、頬にあたる部分にも幅５㎝の剥離痕があり、轡を装着するための、革帯があったと想定される。257 は耳から鼻へと至る資料である。残存しているのは左耳のみで、内径 2.5㎝の輪状にした粘土を突き刺して成形している。また、鼻との間に幅３㎝の粘土帯を貼り付けており、馬具を装着するための革帯の表現と思われる。258 は馬具の一部で幅 2.5㎝と１㎝の粘土帯を並列して貼り付けている。太側の粘土帯の先端は欠損しているが幅 0.5㎝の粘土紐を楕円に貼り付けていると考えられることから輪鐙の可能性を考えた。また、全体が板状に成形されており、障泥の一部にもなる可能性がある。259 も馬具の一部と考えたい。刺突文が不規則に施されている。260 は板状の粘土に幅１㎝の粘土紐を貼り付けて、その上に１列の刺突文を施す。これも障泥の一部の可能性がある。261 は幅１㎝の粘土紐を貼り付けて、先端を尖らす形状になると考えられる。紐上には刺突による列点文を施している。その内側には粘土塊を貼り付ける。下端から中央に向かって厚くなるように仕上げて立体感をだしており、馬鐸の可能性を考えたい。262 は鞍と考えられる。本体に弧状に成形した粘土板を貼り付けている。前後が断定できないが、残存しているのは後輪と考えたい。頂部では本体からの高さ４㎝を測る。前輪は欠損しているが剥離痕は残存しており、両者の間隔は 16㎝前後となる。居木は粘土を貼り付けて肥厚させるが、端部ほど厚く仕上げている。端部の形状は前後を突出させて中央は弧状に凹ます。文様は居木の外縁に沿うように２列の列点文が施される。その内側には両側にそれぞれ５箇所ずつ弧状文が描かれ、後輪側では列点文と弧状文との間に２本の沈線が描かれる。263 と 264 は動物埴輪だが、馬ではなく他の動物埴輪の可能性もある。264 は脚で接地面の径は 10㎝でハの字状に開く。そこから粘土を積み上げて成形し、腿から付け根にかけて再び径を広げていく。脚本体はナデによる調整で、付け根から本体に至る部分にはハケメが施されている。265 も動物の脚と考えられるが、こちらは馬と考えてよいだろう。脚先はわずかに残存しており、接地面はハの字状に開く、その上に上端幅 0.8㎝の突帯を貼り付ける。そこから粘土板の積み上げで成形し、上部にもう１条突帯を貼り付ける。両者の間隔は 18.5㎝を測る。後述する 266 を参考にすると２条目の突帯から脚の付け根までは 22㎝ほどあることから、脚だけで 45㎝以上あると思われる。器面の調整は外面にはタテ



図版 75　百足塚古墳出土須恵器①

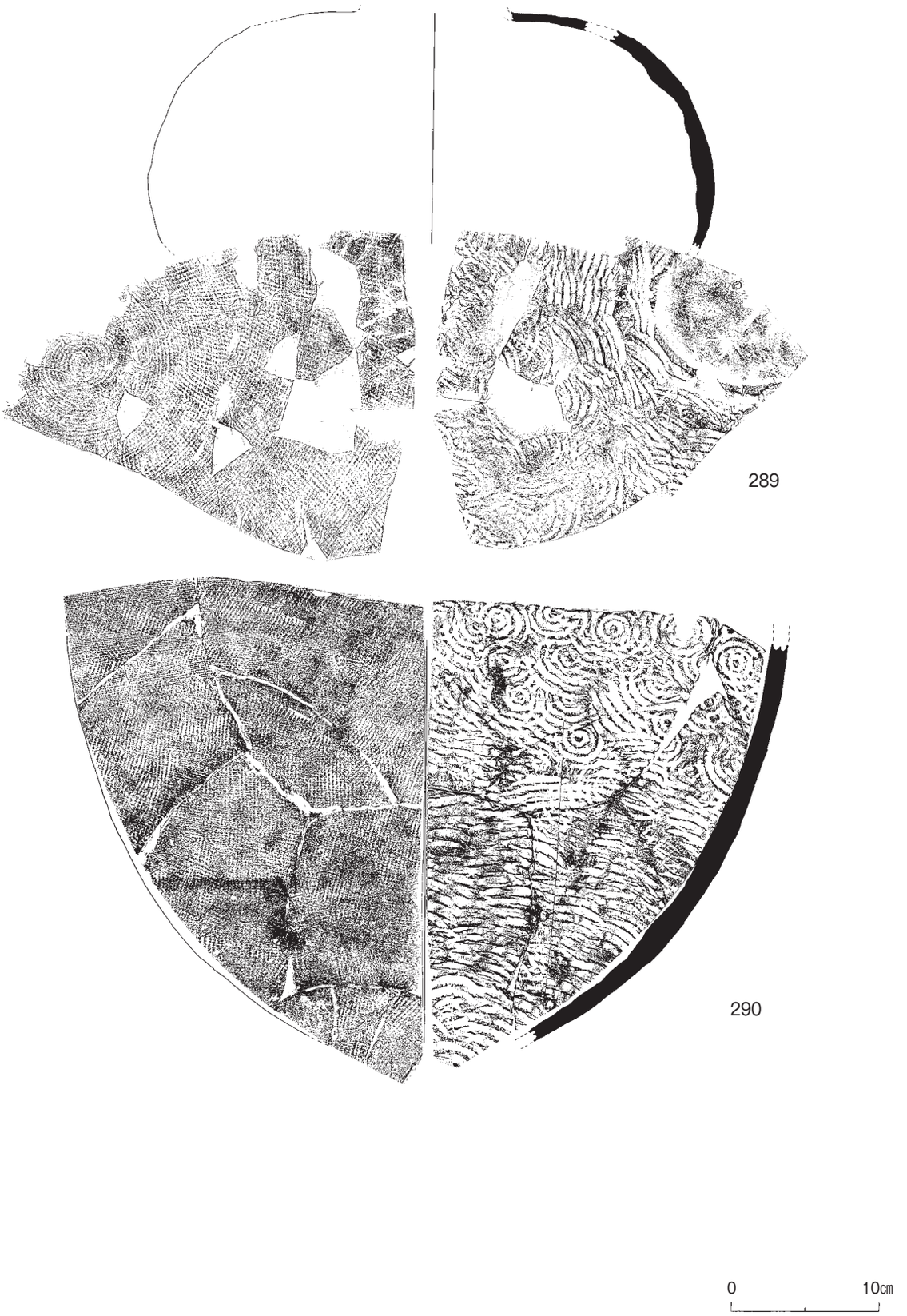
のハケメが充填される。内面は粘土の繋ぎ目が明瞭に残る。266 は下腹から脚にかけての破片である。265 と同一個体と考えられる。後脚の片側の上半部が残存しているが、他は付け根から下が欠損している。前脚と後脚の間隔は 40㎝を測り、脚の付け根付近の径は 15㎝ほどである。これに頭部や尻部を加えると１ｍ以上になることが予想される。両後脚の間、股間部分には径高さともに３㎝の粘土塊を貼り付けている。位置からすると男馬の性器を表現したと考えるのが妥当だが、他の事例から製作者が馬鈴を誤った可能性も考えられる。器面調整は外面には胴部、脚部ともハケメが充填され、内面はナデ調整である。

（6）須恵器の特徴

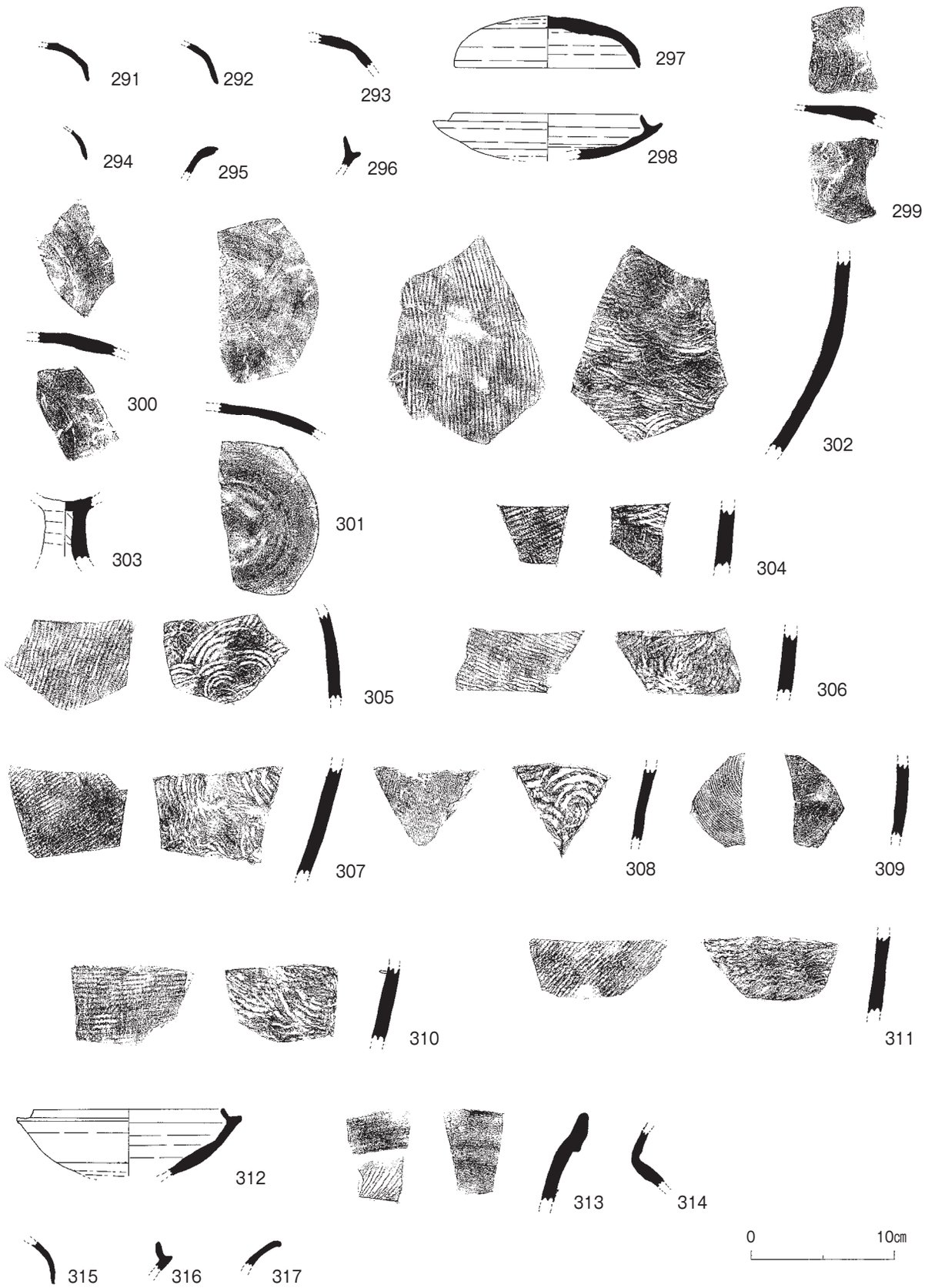
個々の遺物の詳細については観察表に示すので、ここでは特記事項を述べる。

①　百足塚古墳

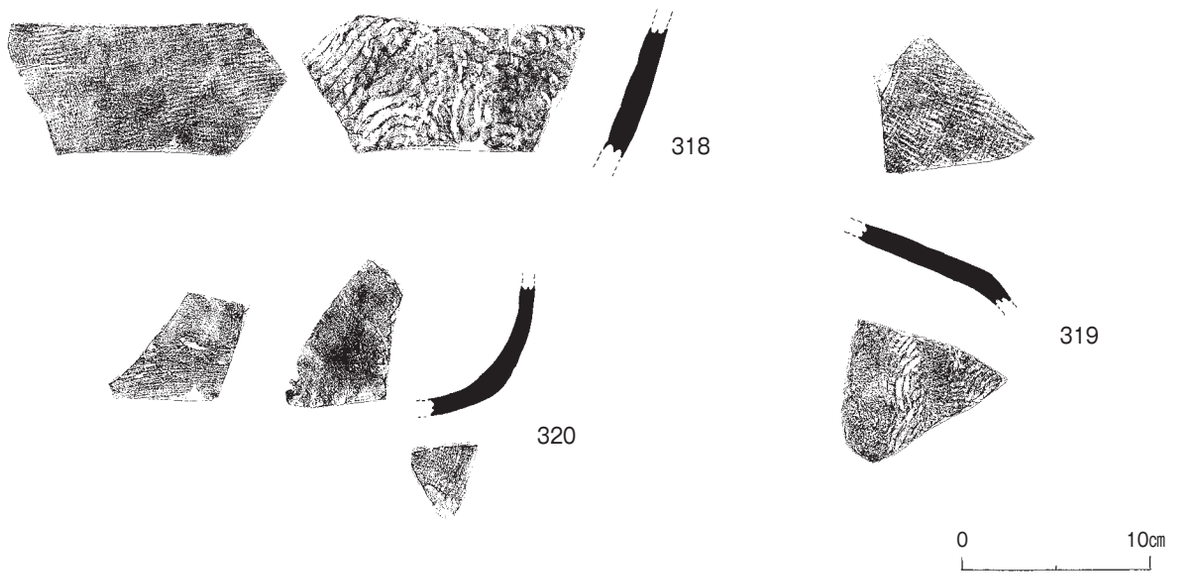
埴輪の多さに対して須恵器の出土量は少なく、トレンチや調査区内の埋土から破片となって出



図版 76　百足塚古墳出土須恵器②



図版 77　百足塚古墳出土須恵器③



図版 78　百足塚古墳出土須恵器④

土していることが多い。そんななか、Ⅱ区から出土した 291 は口縁部が欠損した横瓶で、比較的まとまった状態で出土した。横穴式石室の墓道に近い位置にあるために、埋葬に関連した可能性がある。外面には格子風のタタキ、内面には当て具痕が残る。最大径がある側面を最後に塞いで成形している。292 は中型の甕か壺の胴の下半部で、外面には格子風のタタキ、内面には当て具痕が残る。

299 は坏蓋で口径 13㎝、器高 3.5㎝で復元した。天井部から丸みを帯びながら口縁部へと至る。300 と 314 は坏身で 300 は口径 13.2㎝、314 は口径 13㎝と推定できる。底部は欠損しているが、46 は 5 ㎝前後の器高と推定される。ともに口縁部は短く強く内傾する。

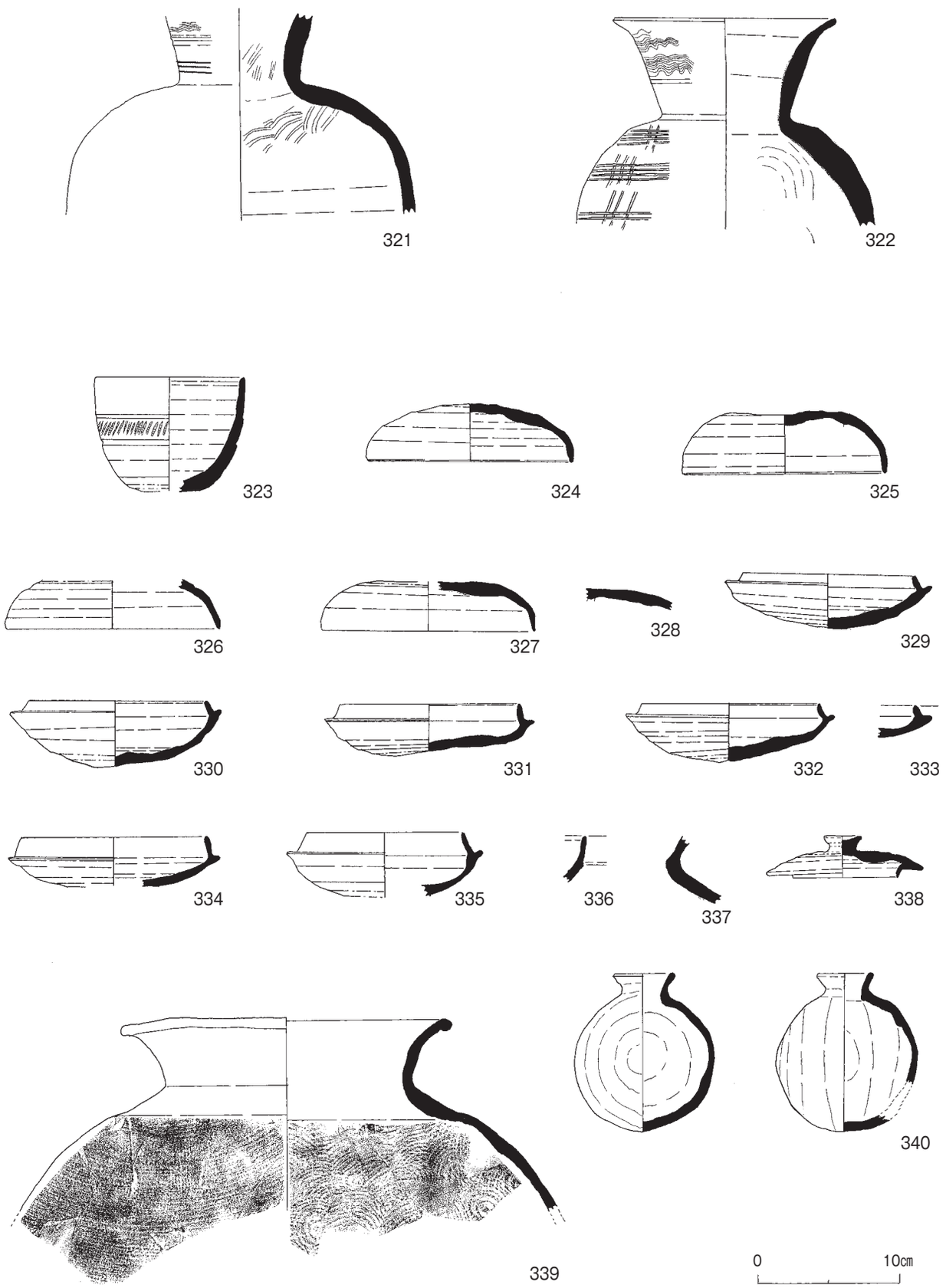
②　62 号墳

323 と 324 は壺で 1 は肩部が張るタイプである。324 は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部はさらに外に屈曲する。ともに口縁部には櫛描き波状文を施している。焼成は悪く、非常に軟質である。

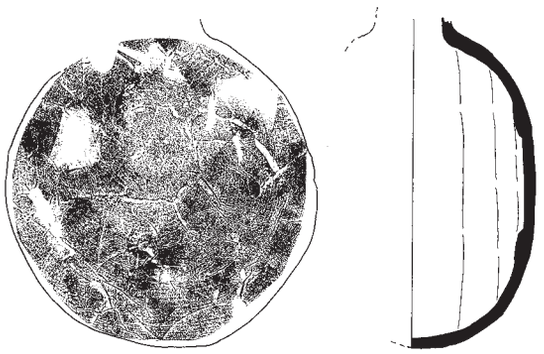
325 は小型の鉢で、胴部の中央に連続刺突文による斜めの沈線を施す。

326 から 330 は坏蓋である。法量は器高が 3.5 ～ 4.2㎝。口径は 14.4 ～ 15㎝となる。天井部と口縁部との境は不明瞭。

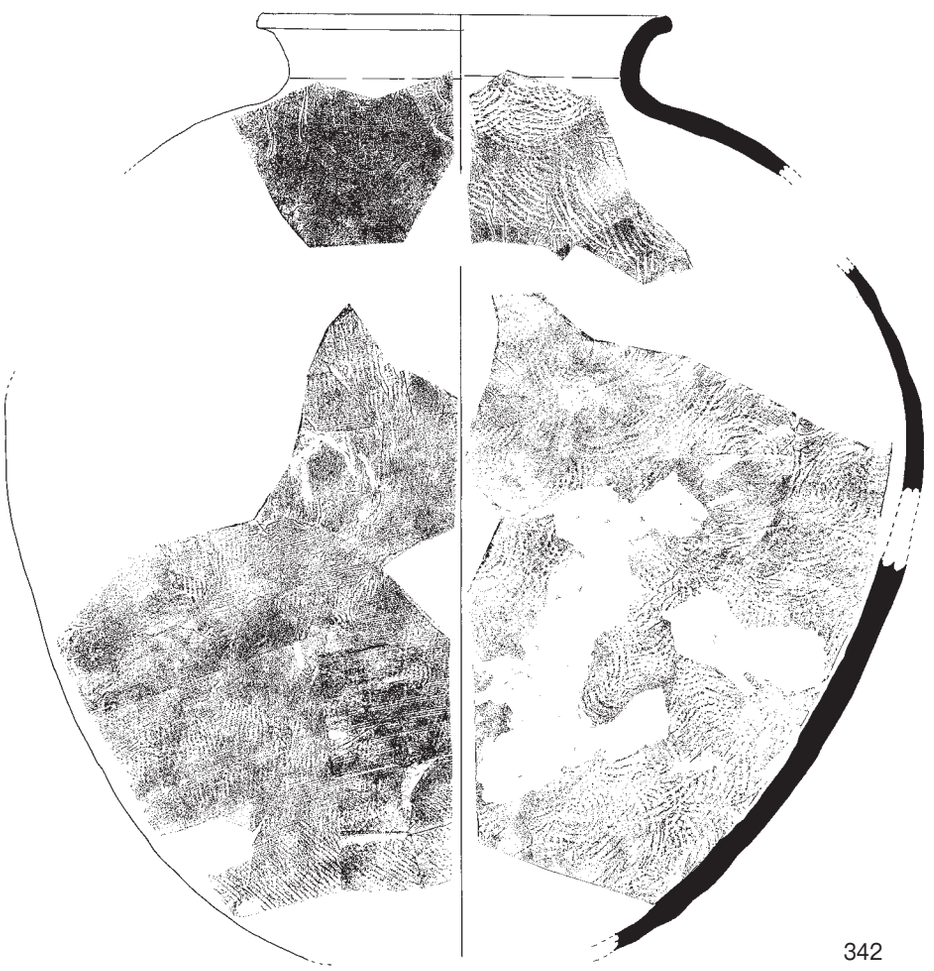
331 から 337 は坏身である。器高は 3.5 ～ 4.7㎝。口径は 11 ～ 12.8㎝におさまる。受部は高さが 1 ㎝以下で短く内傾しながら立ち上がるものと（332 ～ 335）、受部高が 1.3 ～ 1.4㎝と高いもの（336・337）とがある。



図版 79　62・209 号墳出土須恵器①



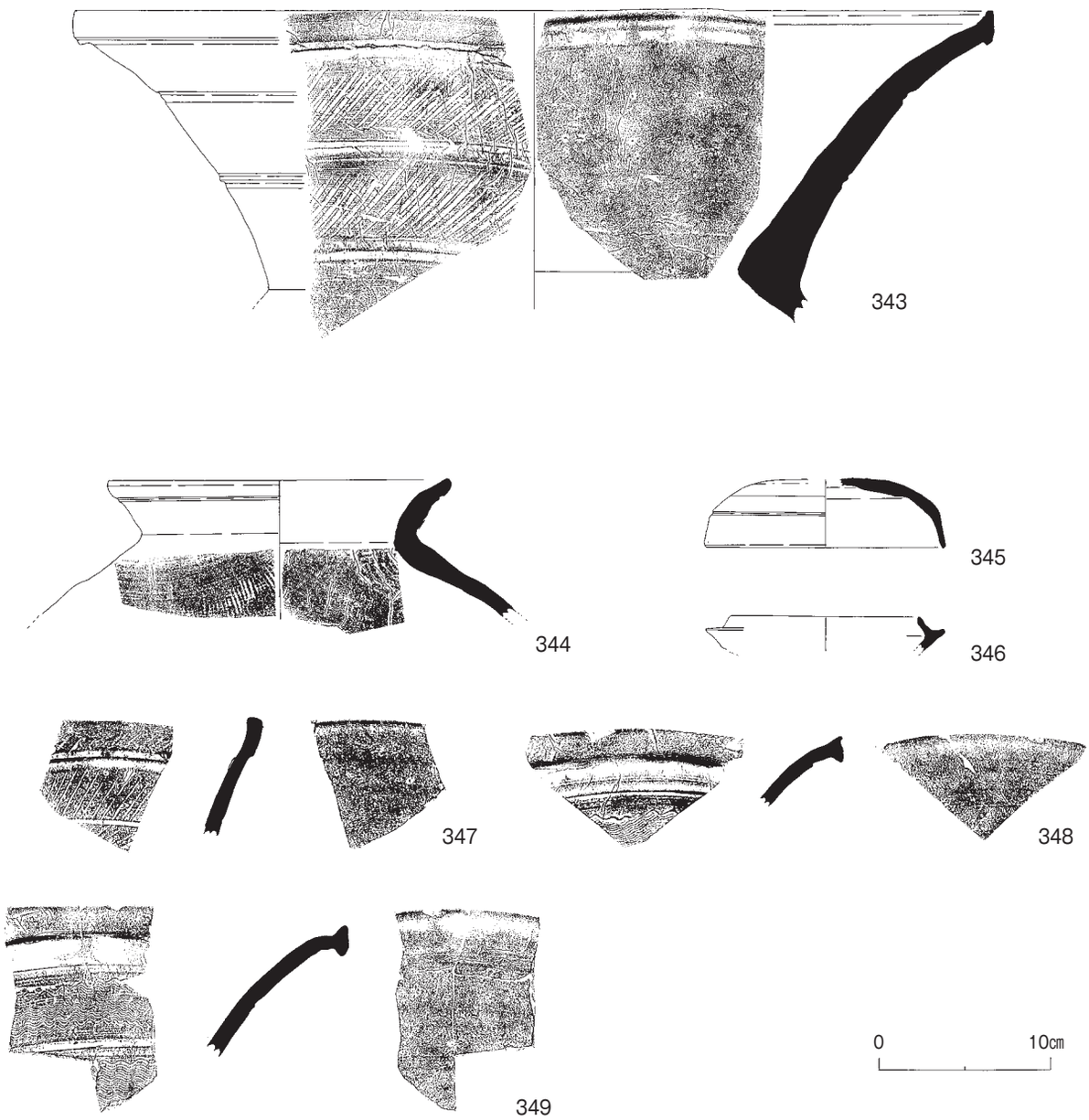
341



342

0 10cm

図版 80　62・209 号墳出土須恵器②



図版 81　63 号墳出土須恵器②

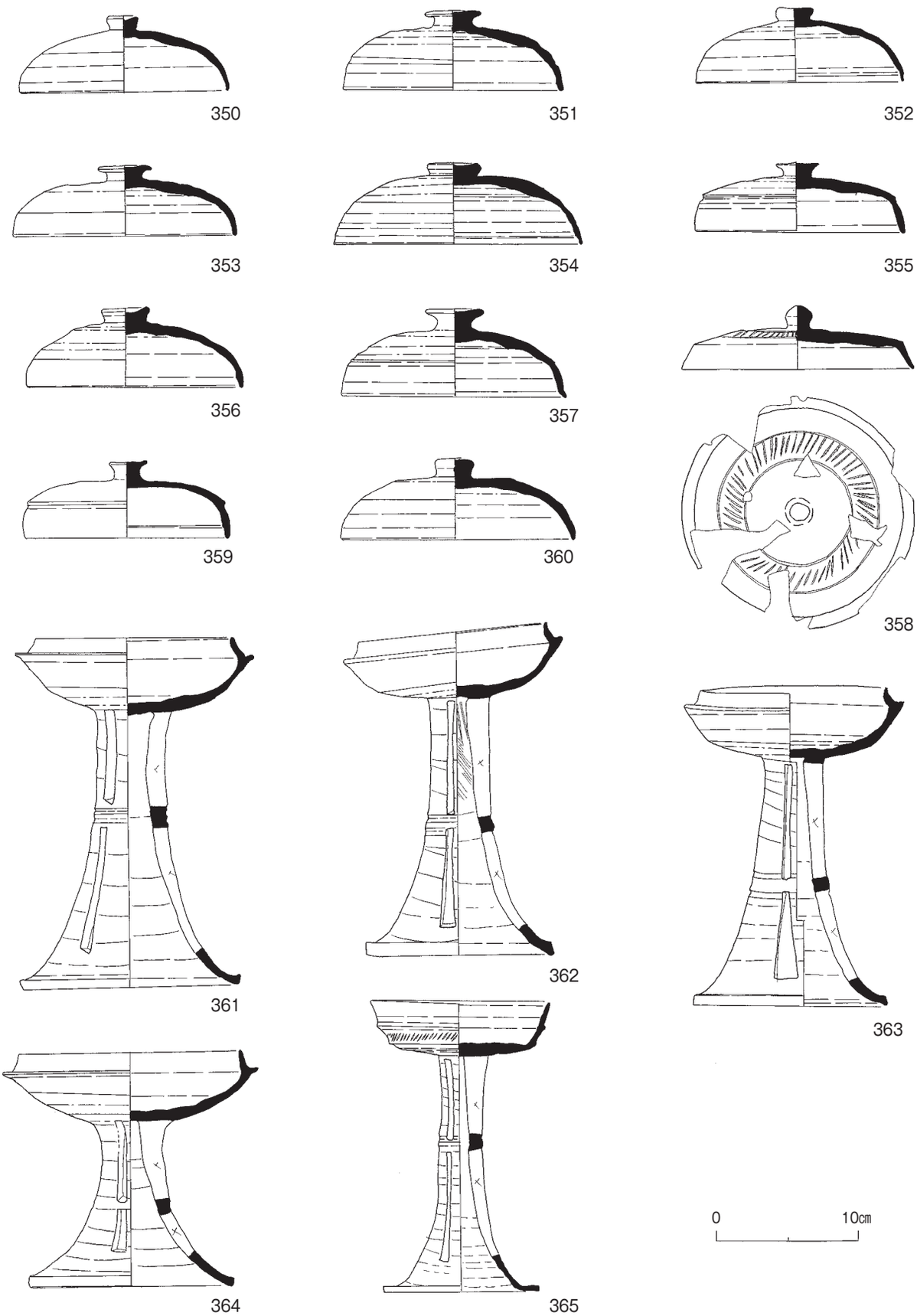
338 と 339 はいずれも小片。338 は口縁部で薄く仕上げられる。339 は頸部片となる。

③ 63 号墳

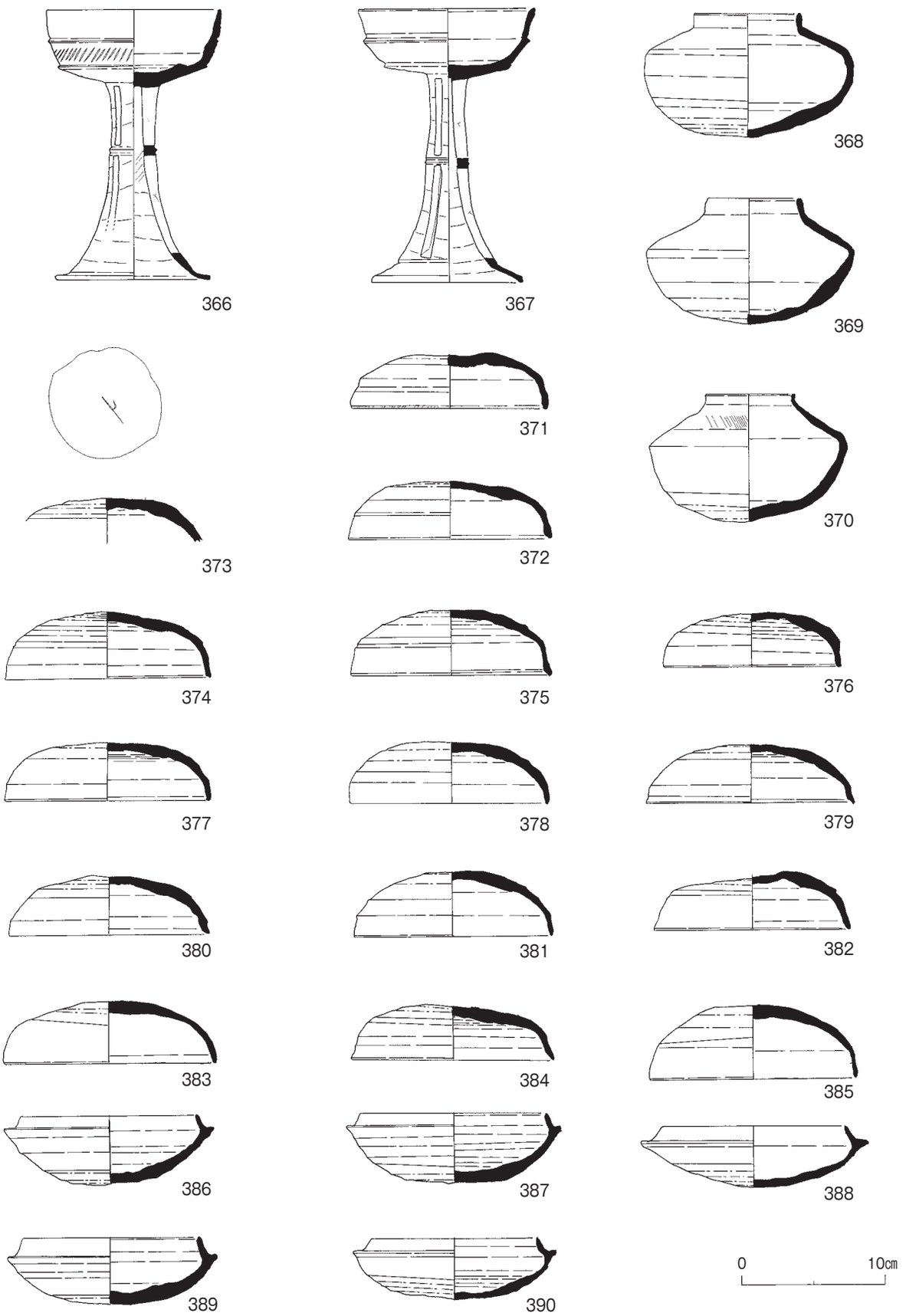
345 は大型壺の口縁部である。口縁部が外反し、端部は肥厚する。２条を１単位とする沈線を施し、その間には斜位の線刻を施す。

346 は中型甕の口縁から肩部片。口縁部は短く外反しながら立ち上がる。頸部はくの字状に強く屈曲する。

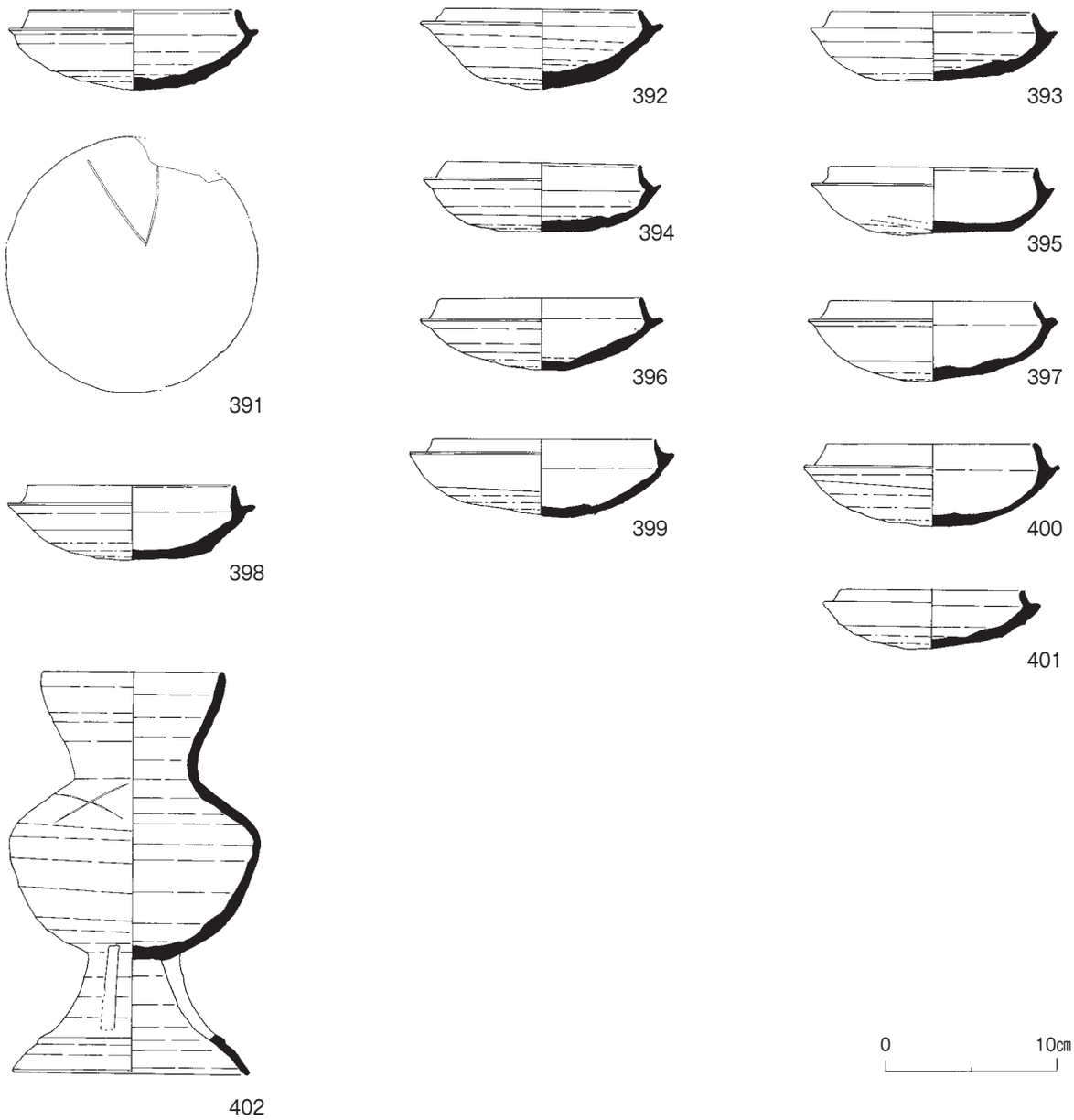
347 は坏蓋で天井部と口縁部との境に段を設け区別している。348 から 351 は小片で、いずれも口縁部片。348 は坏身。349 は口縁端部を肥厚させ、その下に斜位の線刻を施す。350 と 351 は



図版 82　209 号墳出土須恵器①



図版 83　209 号墳出土須恵器②



図版 84　209 号墳出土須恵器③

櫛描き波状文を施す。

④ 209 号墳

出土量が多いため器種ごとに報告する。

有蓋高坏

天井部にはつまみを有する個体を有蓋高坏の蓋とした。11 個体を掲載した。つまみの形状は 360 のみが宝珠形を呈し、あとは輪状を呈する。輪状つまみには上部が大きく開いてかえしを有するもの（353、355、357、359、361）と、基部から上部にかけて外反しながら直線的に立ち上がるもの（352、354、356、358、362）とに分けられる。全体形状は天井から口縁部との境が不明瞭なものと（352、354、355、356、358、362）と口縁部との境に段や凹線を施すものとがある。口径は 14.5 ～ 17.4㎝におさまるが、15㎝前後が多い。器高は 3.5 ～ 6.2㎝で、５㎝前後が多い。360 は高坏の蓋として掲載したが、体部に装飾をもち、シャープな作りである。装飾はつまみを中心として沈線によって２つの円を描く。そしてその中に櫛描による斜め線を施すものである。口縁部は内外面とも強く屈曲する。

高坏本体は４個体を掲載した。363 から 365 は器高が 22㎝以上で、最大の 363 は 24.4㎝を測る。口径はいずれも 13㎝台を測る。366 は器高 16.5㎝と低いが口径は 15.5㎝を測る。脚部は２段に構成され、各段には３方向に透かしを有する。透かしの形状は長方形もしくは台形となる。

無蓋高坏

３個体検出された。長脚２段透かしの高坏で、367 と 368 は坏部に斜位の連続刺突文を施す。369 は無文。坏部は底部、胴部、口縁部との境にそれぞれ段を設けることによって区別される。口径は 11.5 ～ 12.6㎝を測る。脚部には２段３方向に透かしをもち、透かしの形状は長方形を呈する。器高は 18.9 から 20.3㎝で、法量のバラつきは少ない。

短頸壺

３個体検出された。口縁部は短く直立しながら立ち上がる。胴部は 370 が丸みを帯びる形状で、371 と 372 は屈曲する。

蓋坏

蓋は 14 個体検出した。天井部から明瞭は境を設けることなく口縁部にいたる資料がほとんどだが、374 や 376、377 は段や凹線を施すことで境としている。381 や 382、386 は口縁端部が短く外反する。法量は器高が 3.7 ～５㎝、口径は 12.1 ～ 14.6㎝。いずれもバラつきは少ない。24 は天井部のみだが、線刻が施されている。

坏身は 16 個体検出した。器高は 3.5 ～５㎝で、4.5㎝前後が多い。口径は 11.6 ～ 13.4㎝で 12㎝前後が多い。受部高は１㎝前後で、短く内傾しながら立ち上がる。外面は底部から１／３くらいまでに回転ヘラケズリを施す資料が多いが、402 は全体の２／３まで施している。393 は底部から体部にかけて線刻が施される。

脚付壺

404 は脚付の壺である肩部に×の線刻が施される。脚部は１段構成で、長方形の透かしが３方向につく。

表１　円筒埴輪観察表

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				（）は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
1	１Ｔ	１～３段	30%		18.1		11	10.5				浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/3	にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/3	普通 普通	
2	１Ｔ	１～２段	20%		18.9		11.4					浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/4 にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/3	黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6 にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6	普通 やや不良	
3	１Ｔ	１～２段	20%		20.4		12.3					浅黄橙 7.5 Ｙ Ｒ 8/6 にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/4	浅黄橙 7.5 Ｙ Ｒ 8/6	普通 普通	
4	１Ｔ	１～２段	20%		18.8		10.7					にぶい黄橙 10YR7/3 明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	普通 普通	
5	１Ｔ	１～２段	20%		21.6		16.9					橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	普通 普通	
6	１Ｔ	１～２段	20%		23.9		14.7					明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	普通 普通	
7	１Ｔ	１～２段	10%		23		13.5					黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6	黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6	普通 普通	
8	１Ｔ	１～２段	20%		20.2		13.4					黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6	黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6	普通 不良	
9	８Ｔ	１～２段	30%		17.5		11.5	13.7				黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6 浅黄橙 7.5 Ｙ Ｒ 8/6	明黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/6	普通 普通	
10	８Ｔ	１～２段	30%		19.2		13.1					にぶい黄橙 10YR7/4 浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/4	にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/4	普通 普通	
11	８Ｔ	１～２段	20%		18		12.9					浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/4	にぶい橙 7.5 Ｙ Ｒ 6/4	普通 良	
12	８Ｔ	１～２段	20%		21.2		12.6					明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6 にぶい黄褐 10 Ｙ Ｒ 6/4	普通 普通	
13	９Ｔ	１～２段	15%		18.4		13.4					明黄褐 10YR7/6 橙 7.5 Ｙ Ｒ 7/6	橙 7.5YR7/6	普通 やや不良	
14	９トレンチ	１～２段	20%		20		13.5					にぶい橙 7.5 Ｙ Ｒ 7/4 浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/4	浅黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/4	普通 やや不良	
15	９Ｔ	１～２段	25%		21.7		12.8					明黄褐 10 Ｙ Ｒ 7/4 明黄褐 10 Ｙ Ｒ 6/6	橙 7.5 Ｙ Ｒ 7/6	普通 やや不良	
16	９Ｔ	４～５段	15%	30.2							13	にぶい橙 5 Ｙ Ｒ 6/3 褐灰 10 Ｙ Ｒ 6/1	橙 5 Ｙ Ｒ 7/6 橙 5 Ｙ Ｒ 6/8	普通 やや不良	焼き歪み
17	９Ｔ	１～４段	60%		20.2		11	10.4	11.4			にぶい黄橙 10 Ｙ Ｒ 7/4 褐灰 10 Ｙ Ｒ 6/1	明黄褐 10YR7/6	普通 良	
18	９Ｔ	１～４段	50%		21.2		11.7	11.8	12.7			橙 7.5 Ｙ Ｒ 6/6 橙 7.5 Ｙ Ｒ 7/8	橙 5 Ｙ Ｒ 7/8	普通 良	
19	９Ｔ	全形	65%	30	18.9	55.4	10.7	10.3	10.4	12.1	11.9	黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/6 橙 5 Ｙ Ｒ 7/6	橙 5 Ｙ Ｒ 7/6	普通 普通	
20	９Ｔ	全形	60%	35.4	22.2	56	13.8	11.8	11.2	7.7	11.5	明黄褐 10 Ｙ Ｒ 7/6 橙 7.5 Ｙ Ｒ 6/6	橙 7.5 Ｙ Ｒ 6/6	普通 普通	
21	10 Ｔ	１～２段	25%		20.4		10.5					黄橙 10 Ｙ Ｒ 8/8 浅黄橙 7.5 Ｙ Ｒ 8/6	橙 5 Ｙ Ｒ 7/6 橙 5 Ｙ Ｒ 6/6	普通 不良	

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				( ) は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
23	10 T	1～2段	20%		19.8		11.5					黄橙 10 Y R 8/8	黄橙 10 Y R 7/8	普通 普通	
24	15 T	全形	80%	30	18.2	61.8	12.5	11.7	11.6	12	12.5	灰黄 2.5Y6/2 浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	
25	4 T	2～5段	30%	30					11.2	11	13.9	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 良	
26	4 T	2～5段		27.4					11	11.7	11.7	淡橙 5 Y R 8/4 にぶい橙 5 Y R 7/4	橙 5 Y R 7/6	普通 普通	
27	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 2.5 Y 7/3	普通 普通	
28	Ⅳ区	1段	10%以下									褐灰 10 Y R 6/1	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 良好	
29	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 良好	
30	10 T	5段	10%以下	(19)								灰黄褐 10 Y R 6/2	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	普通 良好	
31	12 T	1～2段	10%		(20.5)		11.5					黄橙 10 Y R 8/6	浅黄橙 10 Y R 8/3	普通 やや不良	
32	2 T	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	やや粗 良好	
33	2 T	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 普通	
34	8 T	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 普通	
35	9 T	1段	10%以下									灰黄褐 10 Y R 5/3	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	やや粗 普通	
36	12 T	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 やや不良	
37	12 T	1段	10%以下				10					浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 普通	
38	Ⅱ区	1段	10%以下		(19.4)							浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/6	普通 やや不良	
39	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/6	普通 普通	
40	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 やや不良	
41	Ⅱ区	5段	10%以下									黄橙 10 Y R 8/6	浅黄橙 10 Y R 8/6	普通 やや不良	
42	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/6	黄橙 10 Y R 8/8	普通 普通	
43	Ⅱ区	5段	10%以下									明褐灰 7.5 Y R 7/2	橙 7.5 Y R 7/6	良 良	
44	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/6	やや粗 普通	
45	Ⅱ区	5段	10%以下									褐灰 10 Y R 5/1	褐灰 10 Y R 5/1	普通 良	

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				( ) は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
46	Ⅱ区	5段	10%以下									黄橙 10 Y R 8/6	黄橙 10 Y R 8/6	普通 やや不良	
47	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 10 Y R 8/4	良 良	
48	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 良	
49	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	普通 普通	
50	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 やや不良	
51	Ⅱ区	5段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/4	灰黄褐 10 Y R 6/2	普通 良	
52	Ⅱ区	4～5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	黄橙 10YR8/6	普通 不良	
53	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	橙 7.5 Y R 7/6	やや粗 良	
54	Ⅱ区	5段	10%以下									橙 7.5 Y R 7/6	橙 7.5 Y R 7/6	やや粗 良	
55	Ⅱ区	5段	10%以下									黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	やや粗 やや不良	
56	Ⅱ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5YR 8/3～8/4	浅黄橙 7.5YR 8/3～8/4		
57	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10YR8/6	良 やや不良	
58	Ⅱ区	5段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 良	
59	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10YR8/6	普通 良	
60	Ⅱ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/3	黄橙 10YR8/6	普通 良	
61	Ⅱ区	4～5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10YR8/6	やや粗 やや不良	
62	Ⅱ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	やや粗 普通	
63	Ⅱ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 6/3	褐灰 10 Y R 5/1	普通 普通	
64	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10YR8/6	やや粗 やや不良	
65	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 普通	
66	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 普通	
67	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10YR8/6	普通 やや不良	

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				( ) は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
68	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗やや不良	
69	Ⅱ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/4	黄橙 10 Y R 8/6	やや粗普通	
70	Ⅱ区	1段	10%以下									灰白 10 Y R 8/1	黄橙１０Y R 8/6	普通普通	
71	Ⅱ区	1段	10%以下									灰白 10 Y R 7/1	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗普通	
72	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/4	橙 2.5 Y R 7/8	普通普通	
73	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10YR8/3	黄橙 10 Y R 8/6	やや粗やや不良	
74	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通良	
75	Ⅱ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/3	やや粗良	
76	Ⅲ区	5段	10%以下	(29)							11	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通やや不良	
77	Ⅲ区	5段	10%以下	(27)								浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	良やや不良	
78	Ⅲ区	1段	10%以下		(22)		10					浅黄 2.5 Y R 7/3	浅黄 2.5 Y R 8/4	普通普通	
79	Ⅲ区	4～5段	10%以下								9.8	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通普通	
80	Ⅲ区	5段	10%以下									橙 5 Y R 7/6	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	普通良	
81	Ⅲ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗普通	
82	Ⅲ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通良	
83	Ⅲ区	4～5段	10%以下				11.3					浅黄橙 7.5 Y R 8/4	黄橙 10 Y R 8/6	普通良	
84	Ⅲ区	1～2段	10%以下									灰黄褐 10 Y R 6/2	黄橙１０Y R 8/6	良良	
85	Ⅲ区	5段	10%以下									黄橙 10 Y R 8/6	黄橙 10 Y R 8/6	普通普通	
86	Ⅲ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10 Y R 8/6	やや粗良	
87	Ⅲ区	1段	10%以下									にぶい褐 7.5 Y R 5/3	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	良良	
88	Ⅲ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/4	黄橙 10 Y R 8/6	良良	
89	Ⅲ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通やや不良	
90	Ⅲ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10 Y R 7/6	普通普通	

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				（）は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
91	Ⅲ区		10%以下									にぶい黄橙 2.5 Y 6/3	にぶい黄橙 2.5 Y 6/3	やや粗良	
92	Ⅲ区	1～2段	10%以下				11.5					浅黄橙 7.5 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	やや粗良	
93	Ⅲ区	1段	10%以下									黄橙 10 Y R 8/6	黄橙 10 Y R 8/6	やや粗普通	
94	Ⅲ区	1段	10%以下									淡黄 2.5 Y 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通普通	
95	Ⅳ区	4～5段	10%以下	（30）							12.4	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	普通やや不良	
96	Ⅳ区	1段	10%以下		（17.5）							黄橙 10 Y R 8/6	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	良やや不良	
97	Ⅳ区	1段	10%以下		（22）							浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通普通	
98	Ⅳ区	1段	10%以下		（18.8）							浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	やや粗普通	
99	Ⅳ区	1段	10%以下		（17.5）							浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗普通	
100	Ⅳ区	1段	10%以下		（19）		9.5					浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通良	
101	Ⅳ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	普通良	
102	Ⅳ区	5段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	普通やや不良	
103	Ⅳ区	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗良	
104	Ⅳ区	5段	10%以下									灰黄褐 10 Y R 6/2	浅黄橙 10 Y R 8/3	普通良	
105	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗普通	底面に粘土を貼り付ける
106	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗普通	
107	Ⅳ区	1段	10%以下									にぶい黄橙 10 Y R 7/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	やや粗良	
108	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗良	
109	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 7.5 Y R 8/3	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	普通良	
110	Ⅳ区	1段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通普通	
111	62号墳	全形	70%	30.2	17.5	55.7	11.3	10.4	11.6	10.3	12.3	灰白 10 Y R 8/2 灰黄 2.5 Y R 7/2	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	普通普通	5段目に線刻
112	62号墳	全形	50%	32	18.1	55.6	11.4	9.3	10.2	10.5	14.2	黄橙 10 Y R 8/6	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	普通良	5段目に×の線刻
113	62号墳	全形	60%	27.5～30.1	17	57.3	11.9	11.7	11.6	10.2	11.9	浅黄橙 10 Y R 8/3	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通普通	焼け歪み

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯					色調		胎土焼成	備考
				（）は復元長			段間長					外面	内面		
				口径	底径	器高	①	②	③	④	⑤				
114	62号墳	全形		31.7	18.4	56.1	12.7	9.4	10.9	10.3	12.8	褐灰 7.5 Y R 6/1 浅黄橙 10 Y R 8/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/3 灰黄褐色 10 Y R 6/2	普通 普通	
115	62号墳	全形		26～35	18	59.7	13.3	11.4	12.3	10.4	12.3	褐灰 10 Y R 5/1 褐灰 10 Y R 4/1	褐灰 10 Y R 4/1	普通 不良	焼け歪み
116	62号墳	全形		15.6～38	16.7	57.3	13.9	10.2	11.2	12	10	浅黄橙 10 Y R 8/4 にぶい黄橙 10 Y R 7/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	普通 普通	焼け歪み
121	62号墳	5段	10%以下	(37)							14.2	黄橙 10 Y R 8/6	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 やや不良	
122	62号墳	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	良 良	
123	62号墳	5段	10%以下									浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	普通 やや不良	
124	62号墳	5段	10%以下								10.5	にぶい橙 5 Y R 7/4	にぶい橙 5 Y R 6/4	良 良	
125	62号墳	1段	10%以下		(21)		10					橙 2.5 Y R 7/6	橙 2.5 Y R 7/8	やや粗 普通	
126	62号墳	1段	10%以下		(24.2)							浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	普通 普通	
127	62号墳	1～2段	10%以下		18.8		11.7					浅黄橙 10 Y R 8/4	黄橙 10 Y R 8/6	普通 やや不良	
128	62号墳	1段	10%以下				10.4					浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	やや粗 良	
129	62号墳	1段	10%以下				10.5					灰白 10 Y R 7/1	褐灰 10 Y R 6/1	良 良	
130	62号墳	1段	10%以下				10.2					灰白 10 Y R 7/1	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	普通 良	
131	62号墳	1段	10%以下									黄橙 10 Y R 8/6	黄橙 10 Y R 8/8	やや粗 普通	

表２　朝顔形円筒埴輪観察表

挿図番号	出土地点	部位	残存率	法量			凸帯							色調		胎土焼成	備考
				（）は復元長			段間長							外面	内面		
				口径	底径	頸部径	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦				
22	10 T	4～5段	20%							9.3	13.2			黄橙 10YR8/6 明黄褐色 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	普通 普通	
117	Ⅳ区	4～7段	30%	48						10	12.1	7.9	14.3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
118	Ⅲ区	1～6段	80%		21	16.3	10	11.1	11.4	10.9	15.4			浅黄橙 7.5YR8/6 にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 良好	
119	62号墳	2～7段	40%	48.5					10.2	9.9	14.8	9	11.3	灰黄 2.5YR6/2 浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/3	普通 普通	
120	62号墳	1～6段	70%		19.6	17.4	11.3	12.9	11.1	11.3	11.3			黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	

表３　家形埴輪観察表

挿図番号	出土地点	器種部位	法　　量	色　　調		胎土焼成	備　考
			（）は復元長	外面	内面		
132	Ⅲ区周堤外 G－44～46 I－44～46	家	器高（109cm） 最大幅平側（74.2cm）妻側（59.2cm） 基底面平側（59.2cm）妻側（43cm）	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/3～8/4	浅黄橙 10YR8/3～8/4	普通 良好	平屋入母屋造 赤色顔料
133	Ⅲ区周堤外 H－46・47 I－46	家	器高 93cm 最大幅平側（87.5cm）妻側（63cm） 基底面平側（69.5cm）妻側（42cm）	浅黄橙 10YR8/3 にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	普通 良好	平屋入母屋造
134	Ⅲ区周溝内	家	器高（85cm） 最大幅平側（63.5cm）妻側（54.5cm）	浅黄橙 10YR8/3～8/4	浅黄橙 10YR8/3～8/4	普通 普通	高床寄棟造 赤色顔料
135	Ⅲ区周堤外 H－43～46	家	器高 92cm 最大幅平側 72.5cm　妻側 49cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	平屋寄棟造
136	Ⅲ区周溝内 U～W－ 48～50	家	器高 80cm 最大幅平側 63.5cm　妻側 57.4cm 基底面平側 52.6cm　妻側 48cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/3～8/4	普通 良好	高床寄棟造
137	Ⅲ区周溝内	家		浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/3～8/4	普通 良好	高床寄棟造
138	Ⅲ区周堤外 2H－47	家 堅魚木	全長 15.8cm　径 5 cm	浅黄橙 10YR8/3		良好 良好	大型品 側面に穿孔
139	Ⅲ区周堤外 2I－47	家 堅魚木	全長 16.5cm　径 4.5cm	浅黄橙 10YR8/3		良好 良好	大型品 側面に穿孔
140	Ⅲ区周堤外	家 堅魚木	全長 16.5cm　径 5.8cm	浅黄橙 10YR8/3		良好 良好	大型品 側面に穿孔
141	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	全長 15cm　径 2.6cm	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4		やや不良 普通	小型品
142	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	全長 14.1cm　径 2.9cm	浅黄橙 10YR8/4 黄橙 10YR8/6		やや不良 普通	小型品
143	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	全長 14.1cm　径 2.7cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6		やや不良 普通	小型品
144	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	全長 15.1cm　径 3 cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6		やや不良 普通	小型品
145	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	全長 13.7cm　径 2.8cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6		やや不良 普通	小型品
146	Ⅲ区周堤外 G－46	家 堅魚木	残存長 5.8cm　径 4.1cm	浅黄橙 10YR8/3		良好 良好	大型品 側面に穿孔
147	Ⅲ区周溝内 X－43	家 堅魚木	残存長 6.4cm　径 3.1～3.4cm	黄橙 10YR8/6		やや不良 やや粗	中型品
148	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	残存長 8.2cm　径 3.9cm	浅黄橙 7.5YR8/4		やや不良 やや粗	中型品
149	Ⅲ区周溝内	家 堅魚木	残存長 6.1cm　径 3.7cm	浅黄橙 10YR8/4 黄橙 10YR8/6		やや不良 やや粗	中型品

表４　器材埴輪観察表

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
150	Ⅱ～Ⅲ区 周溝内	甲冑	残存高 67cm　最大幅 34cm 胄高 15.5cm　胄最大幅 20.4cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
151	Ⅱ区 周溝内	甲冑 桂甲～ 草摺	残存高 32.8cm　最大幅 21.5cm	にぶい橙 7.5YR7/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
152	Ⅱ区 周溝内	甲冑 胄	残存高 10.6cm　最大幅 9.6cm	浅黄橙 10YR8/4	オリーブ灰 2.5GY6/1	普通 良好	
153	Ⅱ区 周溝内	甲冑 胄綴	残存高 7.5cm　最大幅 13.2cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	
154	Ⅱ区 周溝内	甲冑 胄綴	残存高 9 ㎝　最大幅 8.4cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 良好	
155	Ⅱ区 周溝内	甲冑 胄	残存高 5.2cm　最大幅 12.8cm	浅黄橙 10YR8/4	オリーブ灰 2.5GY5/1	やや粗 普通	
156	Ⅱ区 周溝内	甲冑 肩甲	残存高 5.2cm　最大幅 11.1cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	
157	Ⅱ区 周溝内	甲冑 草摺	残存高 6.9cm　最大幅 8 ㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
158	Ⅱ区 周溝内	甲冑 草摺	残存高 8 ㎝　最大幅 7 ㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
159	Ⅱ区 周溝内	甲冑 草摺	残存高 9 ㎝　最大幅 14.3cm	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	普通 普通	
160	Ⅱ区 周溝内	甲冑 草摺	残存高 10.3cm　最大幅 14.4cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
161	Ⅱ区 周溝内	甲冑 草摺	残存高 7.2cm　最大幅 6.7cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
162	Ⅳ区 ２段目斜面	盾	残存高 66.5cm　最大幅 43.5cm 盾面高 52.5cm　上辺幅 43.5cm 下辺幅 43cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
163	Ⅳ区 １段目斜面	盾	残存高 80cm 盾面高　上辺幅 38cm　下辺幅 33cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 黄橙 10YR8/6	普通 良好	
164	12 Ｔテラス	盾	残存高 75cm 盾面下辺幅 43cm　底部径 39.5cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	盾面に赤色顔料
165	Ⅲ区周堤外 Ｇ－41	大刀	残存高 33.3cm　最大幅 24.3cm 円筒部最大径 14.5cm	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	
166	Ⅲ区周堤外 Ｇ－42	太鼓 叩面	残存高 11.2cm 叩面径（24.5cm）最大径（29.5cm）	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	普通 良好	赤色顔料
167	Ⅲ区周堤外 Ｇ－42	太鼓 裏面	最大径（22.5cm）	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	普通 良好	赤色顔料
168	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 17cm　最大幅 9.2cm 器壁厚 1.8cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	赤色顔料
169	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 13.6cm　最大幅 9.7cm 器壁厚 1.2cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
170	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 14.5cm　最大幅 5.7cm 器壁厚 1.7cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
171	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 11.1cm　最大幅 7.1cm 器壁厚 1.3cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
172	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 7.7cm　最大幅 8.2cm 器壁厚２㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
173	62 号墳周溝	盾 盾面	残存長 4.8cm　最大幅 5.1cm 器壁厚 1.1cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
174	62 号墳周溝	盾 盾面？	残存長 6.7cm　最大幅 4.1cm 器壁厚 2.6cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
175	62 号墳周溝	盾 盾面？	残存長 6.5cm　最大幅 5.2cm 器壁高 4 cm	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
176	62 号墳周溝	不明	径（11cm） 残存長 9.6cm　最大幅 9.4cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	赤色顔料
177	62 号墳周溝	不明	残存長 5.9cm　最大幅 5.8cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	赤色顔料

表５　柵形埴輪観察表

挿図番号	出土地点	残存率	法量		鋸歯数	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長		残存数 推定数	外面	内面		
			底径（長×短）	器高					
178	Ⅲ区周堤外 ２Ｉ－45～47	80%	33.6 × 24.1	44.6	15 16	にぶい赤褐 7.5ＹＲ５／３ にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	明黄褐 10ＹＲ７／６	普通 普通	赤色顔料
179	Ⅲ区周堤外 ２Ｈ－47	70%	27.8 × 20.7	34.7	12 14	淡黄橙 10ＹＲ８／４ 淡赤橙 2.5ＹＲ８／４	浅黄橙 10ＹＲ８／４	良好 良好	赤色顔料
180	Ⅲ区周堤外 ２Ｈ－45～46	50%	26.3 × 19.3	36.6	7 14	浅黄 2.5Ｙ７／４ 明黄褐 2.5Ｙ７／６	明黄褐 2.5Ｙ７／６	普通 普通	
181	Ⅲ区周堤外 ２Ｇ－42	90%	29.7 × 19.4	37.5	12 13	黄橙 7.5ＹＲ８／８ 黄橙 10ＹＲ８／６	黄橙 7.5ＹＲ８／８	普通 普通	
182	Ⅲ区周堤外 ２Ｇ－43～44	80%	35.1 × 24	43.8	13 16	黄橙 10ＹＲ８／６ 赤褐 10ＹＲ４／４	明黄褐 10ＹＲ７／６	普通 普通	赤色顔料
183	Ⅲ区周堤外 ２Ｇ－41	80%	32.3 × 26.8	42	7 15	黄橙 10ＹＲ８／６ 明黄褐 10ＹＲ７／６	黄橙 10ＹＲ８／６	普通 やや不良	
184	Ⅲ区周堤外 ２Ｈ～２Ｉ －45～46	60%	32.8 × 22.1	35.8	11 13	淡赤橙 2.5ＹＲ７／３ にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	浅黄橙 10ＹＲ８／４	普通 やや不良	
185	Ⅲ区周堤外 ２Ｈ－47	50%	36.4 × 26.4	39.1	8 12	浅黄橙 10ＹＲ８／４ にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	良好 不良	
186	Ⅲ区周堤外 ２Ｉ－48	60%	29.2 × 20.2	34.6	8 13	にぶい黄橙 10ＹＲ７／４ 明黄褐 10ＹＲ７／６	にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	普通 普通	赤色顔料
187	Ⅲ区周溝内	40%	32.1 × 21.6	35.1	4 14	浅黄橙 10ＹＲ８／４ 淡橙５ＹＲ８／３	黄橙 10ＹＲ８／６	普通 やや不良	
188	Ⅲ区周堤外 ２Ｈ－45～46	50%	25.9 × 20.5	38.5	8 14	淡橙５ＹＲ８／４ 明黄褐 10ＹＲ７／６	明黄褐 10ＹＲ７／６	普通 不良	
189	Ⅲ区周堤外 ２Ｇ－42～43	80%	32.2 × 22.4	40.3	8 13	にぶい赤橙 10ＹＲ６／４ にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	にぶい黄橙 10ＹＲ７／４	普通 不良	唯一の３条突帯

表６　人物埴輪観察表

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
190	Ⅲ区周溝内 Ｕ～Ｖ－43～47	人物 全身	全長 95cm　最大幅 39.2cm 頭部長 15cm　最大幅 12.4cm 基底部径　長軸 29.5cm　短軸 24cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	灰白５Ｙ8/2	普通 良好	性器を露出する女性埴輪
191	Ⅲ区周溝内 Ｗ－45	人物 全身	復元高 78cm　最大幅 42.5cm 頭部長 10cm　最大幅 9.7cm 基底部径（14.5cm）	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 淡黄 2.5Y8/3	浅黄橙 7.5YR8/4 灰白５Ｙ8/2	普通 良好	器を捧げる所作の女性埴輪
192	Ⅲ区周溝内	人物 全身	復元高 78cm　最大幅 39cm 基底部径 22.5cm	浅黄橙 7.5YR8/4～8/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	袈裟状衣を着る女性埴輪 両腕欠損

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
193	Ⅲ区周溝内 U～V－45	人物 全身	全長 68cm　器高 47cm　最大幅 46cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4		普通 良好	ひざまづく男性埴輪 赤色顔料
194	Ⅲ区周堤外 2G－42 ～ 43	人物 全身	復元高 78cm　最大幅 27.5cm 頭部長 20cm　最大幅 14.2cm 基底部径（21cm）	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 良好	男性埴輪 両腕欠損
195	Ⅲ区周堤外 2H－46	人物 全身	復元長 62.2cm　裾部径 29.5cm 頭部長 16cm　最大幅（13.5cm）	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	馬を曳く男性埴輪
196	Ⅲ区周溝内 V－46	人物 頭部～胸部	残存長 49.8cm　最大幅 25.2cm 頭部長 24.2cm　最大幅 14cm	黄橙 7.5YR8/8 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	被物をした男性埴輪
197	Ⅲ区周溝内	人物 頭部	残存長 18.2cm　最大幅 14.7cm	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	やや粗 やや不良	男性埴輪
198	Ⅲ区周溝内 U－46 ～ 47	人物 頭部	頭部長 20.8cm　最大幅 14cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	被物をした男性埴輪
199	Ⅲ区周溝内	人物 頭部	残存長 21.9cm 頭部長 15.2cm　最大幅 12.3cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	頭巾状の被物をした男性埴輪
200	Ⅱ～Ⅲ区 周堤外	人物 頭部	残存長 17.6cm 頭部長 14.6cm　最大幅 11.7cm	橙 5 YR7/8	橙 5 YR6/8	良好 良好	顔に線刻を施す男性埴輪
201	Ⅲ区周堤外	人物 頭部	残存長 17.5cm　最大幅 9.4cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	顔面に赤色顔料 男性埴輪
202	Ⅲ区周堤外	人物 胸部 左腕	残存長 13.9cm　最大幅 20.8cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	衣服表現 赤色顔料 男性埴輪
203	Ⅲ区周堤外	人物 胴部	残存長 18.5cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	赤色顔料 座位の人物埴輪か
204	Ⅲ区周堤外	人物 胴部	残存長 12.8cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	赤色顔料 腰帯をまいた人物埴輪
205	Ⅲ区周堤外 2H－42	人物 衣装	残存長 25.6cm　最大幅 8 cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	赤色顔料 上衣の端部か
206	Ⅲ区周堤外 2H－42	人物 衣装	残存長 17.5cm　最大幅 30.8cm	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	良好 良好	赤色顔料 上衣の端部か
207	Ⅲ区周溝内	人物 腕	残存長 17.3cm　最大幅 6.2cm	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	腕先中実
208	Ⅲ区周溝内 T－42	人物 美豆良	残存長 11.5cm　最大幅 4.6cm	浅黄橙 10YR8/4		良好 良好	中実造り
209	Ⅲ区	人物 腕	残存長 15.7cm　最大幅 4 cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 良好	中実造り
210	Ⅲ区	人物 腕	残存長 5.5cm　最大幅 3.2cm	黄橙 10YR8/6		普通 良好	中実造り
211	Ⅲ区周溝内 V－45	人物 付属品	残存長 5.8cm　最大幅 2.7cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 良好	人物埴輪の付属品
212	Ⅲ区周溝内 V－45	人物	残存長 8.3cm　最大幅 2.3cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 良好	人物埴輪の付属品か美豆良
213	Ⅲ区	人物 腕	残存長 10.9cm　最大幅 4.3cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 良好	腕先中実
214	Ⅲ区周溝内	人物 履	残存長 7 cm　最大幅 5.9cm	浅黄橙 10YR8/3		普通 良好	人物埴輪の履
215	Ⅲ区周溝内	人物 頭部	残存長 5.9cm　最大幅 5.3cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	人物埴輪の被物
216	Ⅲ区周溝内 U－44	人物 靫	全長 16.2cm　最大幅 10.3cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	普通 良好	人物埴輪に付属する靫か
217	Ⅱ区周溝内 S－36	人物 頭部	残存長 19.5cm	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5YR8/4	普通 普通	赤色顔料 力士の頭部

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
218	Ⅱ区周溝内 S－36	人物頭部	残存長 22.6cm	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5YR8/4	普通 普通	力士の頭部
219	Ⅱ区周溝内 S－36	人物鼻	残存長 7 cm　最大幅 3.8cm 高さ 2.8cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	力士の鼻
220	Ⅱ区周溝内 S－36	人物胸部左腕	左腕長 17.5cm　最大幅 4 cm	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	力士の背部 左腕
221	Ⅱ区周溝内 S－34	人物右腕	残存長 14.7cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	力士の肩から右腕
222	Ⅱ区周溝内	人物脚部	残存長 46cm　脚部長 30cm以上 脚太腿部径 13.6cm	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	黄橙 7.5YR8/8	普通 普通	力士の両脚
223	Ⅱ区周溝内 S－37	人物基底部	残存長 25cm	浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 10YR8/6	普通 普通	力士の基台
224	Ⅱ区周溝内 R－34 ～ 36	人物頭部	頭部径 17cm	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 やや不良	力士の頭頂部
225	Ⅱ区周溝内	人物美豆良	残存長 5.7cm　最大幅 5.6cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6		普通 やや不良	力士の美豆良 中実造り
226	Ⅱ区周溝内 S－35	人物頭部耳	残存長 8.3cm	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 やや不良	力士の耳
227	Ⅱ区周溝内	人物肩部		浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 10YR8/6	普通 やや不良	力士の右肩
228	Ⅱ区周溝内	人物	残存長 7.2cm	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	力士の肩から左腕
229	Ⅱ区周溝内 P－39	人物肩～左腕		浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	黄橙 10YR8/6	普通 やや不良	力士の肩から左腕
230	Ⅱ区周溝内	人物まわし	残存長 12.8cm 最大幅 4.2cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6		普通 やや不良	力士のまわし
231	Ⅱ区周溝内	人物まわし	残存長 15.3cm 最大幅 5.2cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6		普通 やや不良	力士のまわし
232	Ⅱ区周溝内	人物頭部～胴部	残存長 29.6cm　最大幅 25.2cm	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	弓をひく人
233	Ⅱ区周溝内	人物腕	残存長 13.8cm　最大幅 6 cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 やや不良	腕先中実造り
234	Ⅱ区周溝内 U－33	人物指	残存長 5.9cm　最大幅 3.3cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	指を表現
235	Ⅱ区周溝内 U－34	人物指	残存長 5.3cm　最大幅 3 cm	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	
236	Ⅱ区周溝内	人物男根	残存長 11.8cm　最大径 3.9cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6		普通 やや不良	男性器を表現　中実造り
237	Ⅲ区周堤外側	人物	残存長 70.3cm　最大幅 43.5cm 頭頂部径 21.3cm	橙 5 YR6/6 にぶい橙 5YR7/4	橙 2.5YR7/6 黄橙 10YR8/6	普通 良好	盾持ち人　基底部欠損
238	Ⅱ区周堤外側	人物	残存高 31cm　最大幅 27.5cm	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	盾持ち人 頭頂部と基底部盾部欠損
239	Ⅱ区周溝内	人物	残存高 37.5cm　最大幅 23cm	浅黄橙 7.5YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	盾持ち人 頭部と基底部欠損

表７　動物埴輪観察表

挿図番号	出土地点	器種部位	法　　量	色　　調		胎土焼成	備　　考
			（）は復元長	外面	内面		
240	Ⅲ区周溝内 W－46	鳥 全形	全長 45.2㎝　器高 37.5㎝　底径 18㎝	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	鶏形埴輪
241	Ⅲ区周溝内 W－47・48	鳥 頭部～体部	残存長 41.5㎝　残存高 29.8㎝ 復元長（49.5㎝）	浅黄橙 7.5YR8/4 ～8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 良好	鶏冠の表現 基底部欠損
242	Ⅲ区周堤外側 ２F～２G－41	鳥 頭部～尾部	全長 64.5㎝　頭部高 48㎝ 尾部高 47㎝　底径（20㎝）	浅黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	鶏形埴輪
243	Ⅲ区周溝内 W－46	鳥 頭部～体部	残存長 56.4㎝　最大幅 25.5㎝	浅黄橙 7.5YR8/4 ～8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	鶏冠の表現 羽毛を逆立てる
244	Ⅲ区周溝内 W－46	鳥 尾部	残存長 22.8㎝　尾径 13㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	鶏の尾
245	Ⅲ区周溝内 W－46	鳥 羽 止まり木	残存長 25.5㎝　最大幅 21.4㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	羽を別造り
246	Ⅲ区周溝内 W－47	鳥 羽	残存長 21.5㎝　最大幅 8.5㎝	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	鳥の羽　別造り
247	Ⅲ区周溝内 W－47	鳥 羽	残存長 20.7㎝　最大幅 10.3㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	鳥の羽　別造り
248	Ⅱ区周溝内	犬 全形	全長 54㎝　器高 47㎝　最大幅 21.5㎝	にぶい黄橙 10YR7/2 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	犬形埴輪
249	Ⅱ区周溝内	動物 頭部～体部	残存長 38.7㎝　最大幅 17.6㎝	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4 ～8/6	普通 普通	犬か猪？
250	Ⅱ区周溝内	動物 頭部	残存長 14.6㎝　最大幅 8.7㎝	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	犬か鹿？
251	Ⅱ区周溝内	動物 脚部	残存長 16.4㎝　底径 6.3㎝ 脚部径 4.8㎝	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	
252	Ⅱ区周溝内	動物 頭部	残存長 17.9㎝　最大幅 15㎝ 器高 15.2㎝	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	鹿の頭部
253	Ⅱ区周溝内	動物 頭部	残存長 13.8㎝　最大幅 10.5㎝ 器高 14.5㎝	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	猪の頭部
254	Ⅲ区周溝内	動物 鬣？	残存長 27.7㎝　最大幅 4.2㎝	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	馬か猪の鬣？
255	Ⅱ区周溝内	動物	残存長 8.9㎝　最大幅 3.7㎝	浅黄橙 10YR8/4		普通 普通	
256	Ⅲ区周溝内 T－44・45	動物 頭部	頭部最大幅 15.3㎝	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	馬の頭部
257	Ⅱ区周溝内	動物 頭部	残存長 13.5㎝　最大幅 7.4㎝	浅黄橙 7.5YR8/4 ～8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	馬の頭部
258	Ⅲ区周溝内	動物 馬具	残存長 8.3㎝　最大幅 8 ㎝	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	輪鐙か
259	Ⅲ区周堤外側 ２H－45	動物 馬具	残存長 9 ㎝　最大幅 6 ㎝	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	障泥の一部か
260	Ⅱ区周溝内	動物 馬具	残存長 10.9㎝　最大幅 6.1㎝	浅黄橙 7.5YR8/6		普通 普通	障泥の一部か
261	Ⅱ区周溝内	動物 馬具	残存長 26.4㎝　最大幅 16㎝	淡黄５YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	馬鐸か
262	Ⅲ区周溝内 T－43～45	動物 馬具	残存長 25.8㎝　最大幅 21.5㎝	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	鞍

挿図番号	出土地点	器種部位	法量	色調		胎土焼成	備考
			（）は復元長	外面	内面		
263	Ⅱ区周溝内	動物	残存長 25.6㎝　最大幅 22㎝	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	動物の体部
264	Ⅱ区周溝内	動物 脚部	残存長 28.9㎝　脚長 24.5㎝ 脚底径 9.7㎝	浅黄橙 10YR8/3 ～ 8/4	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	動物の脚部
265	Ⅱ区周溝内	動物 脚部	残存長 32.3㎝　脚径 10.7㎝	褐灰 10YR6/1 灰白 10YR7/1	にぶい橙 7.5YR7/3	普通 普通	馬の脚部
266	Ⅱ区周溝内	動物 脚部	残存長 69.5㎝　残存高 55.3㎝	褐灰 10YR6/1 にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR7/3 浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	馬の脚部

表８　須恵器観察表

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
267	9 T		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	暗オリーブ灰2.5GY4/1	灰白N 7/1	普通やや不良	
268	10 T	坏蓋	天井部	10%以下			外面は回転へらケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 7.5Y5/1	灰 N5/	普通やや不良	
269	10 T	坏蓋	口縁部	10%以下		口縁部先端を丸くおさめる。	内外面とも回転ナデ。	灰 7.5Y5/1	灰 N5/	普通普通	
270	10 T	坏蓋	口縁部	10%以下		口縁部先端を丸くおさめる。	内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰2.5GY5/1	オリーブ灰2.5GY5/1	普通普通	
271	10 T	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高0.9㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰 7.5Y5/1	灰 N5/	普通普通	
272	10 T	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高１㎝	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰オリーブ7.5Y6/1	灰 10 Y 6 / 1	普通普通	
273	10 T	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高1.2㎝	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰オリーブ5Y5/2	灰 5Y6/1	普通普通	
274	10 T	坏身	口縁部	10%以下		口縁部は内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	普通普通	
275	10 T		頸部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	灰 7.5Y5/1	灰オリーブ7.5Y6/2	普通普通	
276	12 T	小型壺	頸部～肩部	10%以下			外面は回転ナデと櫛描文。内面は回転ナデ。	灰 N5/	灰 N5/	良良	
277	14 T	壺か	口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	暗灰 N3 ／	明オリーブ灰2.5 G Y 4/ 1	やや不良普通	
278	10 T		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	オリーブ灰2.5GY5/1	緑灰 7.5GY7/1	普通やや不良	
279	Ⅱ区	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高1.1㎝	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰 N5/	オリーブ灰2.5GY5/1	良良	
280	Ⅱ区	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高1.1㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰2.5GY5/1	オリーブ灰2.5GY5/1	普通普通	
281	Ⅱ区	甕か壺	口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	灰 7.5Y5/1	灰オリーブ7.5Y5/2	普通普通	
282	Ⅱ区	高坏	頸部	10%以下			外面は回転ナデ。内面にシボリ痕。	オリーブ灰2.5GY6/1	オリーブ灰2.5GY6/1	普通普通	
283	Ⅱ区			10%以下			内外面とも回転ナデ。	暗灰 N3 ／	暗オリーブ灰2.5GY4/1	普通普通	
284	Ⅱ区		口縁部か	10%以下			外面は回転ナデと櫛描波状文。内面は当具のちナデ。	灰 N6/	灰 N7/	普通普通	
285	Ⅱ区		頸部	10%以下			外面はタタキのちナデ。内面は当具痕。頸部は回転ナデ。	灰 N5/	灰 N5/	普通普通	
286	Ⅱ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	灰 N6/	灰 N5/	普通普通	
287	Ⅱ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当て具痕をナデ消し。	暗灰 N3 ／	緑灰 10GY5/1	普通普通	
288	Ⅱ区		頸部	10%以下			外面の頸部は回転ナデ、肩部は平行タタキのちナデ。内面は頸部がナデ、肩部は当具痕。	オリーブ灰2.5GY5/1	暗緑灰 7.5GY4/1	普通普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
289	Ⅱ区	横瓶	胴部	20%	胴部径 37.7㎝		外面は格子ふうタタキ。内面は当具痕。	灰 N5/ オリーブ灰 2.5GY6/1	灰 N6/ ～ 5/	普通 普通	
290	Ⅱ区	甕か壺	胴部～底部	20%	胴部径 48.3㎝		外面は格子ふうタタキ。内面は当具痕。	灰白 2.5GY8/1 灰 N6/	灰白 5GY8/1	普通 不良	
291	Ⅲ区	坏蓋	口縁部	10% 以下		天井部から口縁部にかけて緩く屈曲する。	内外面とも回転ナデ		灰 N5/	普通 普通	
292	Ⅲ区	坏蓋	口縁部	10% 以下		天井部と口縁部の境に浅い沈線を設ける。	内外面とも回転ナデ	オリーブ灰 2.5GY5/1	灰 N6/	普通 普通	
293	Ⅲ区	坏蓋	口縁部	10% 以下		天井部から口縁部にかけて緩く屈曲する。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白Ｎ７/	灰 N6/	普通 やや不良	
294	Ⅲ区	坏蓋	口縁部	10% 以下			内外面とも回転ナデ	灰 N5/	灰 N6/	普通 やや不良	
295	Ⅲ区		口縁部	10% 以下		口縁部先端を鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ	灰 N6/	明オリーブ灰 2.5GY7/1	普通 やや不良	
296	Ⅲ区	坏身	口縁部	10% 以下	たちあがり高 1.2㎝	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY5/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	普通 普通	
297	Ⅲ区	坏蓋	天井部～口縁部	10%	（口径 13㎝） （器高 3.5㎝）	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から１/ ４までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ ４/	灰Ｎ ４/	普通 普通	
298	Ⅲ区	坏身	口縁部～体部	10%	（口径 13.2㎝） たちあがり高 0.6㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から１/4 までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ ４/	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 普通	
299	Ⅲ区	坏蓋	天井部	10% 以下			外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY4/1	オリーブ灰 2.5GY4/1	普通 普通	
300	Ⅲ区	坏蓋	天井部	10% 以下			外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	緑灰５Ｇ５/ １	褐灰 5YR4/1	普通 やや不良	
301	Ⅲ区	坏蓋	天井部	10% 以下			外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 N6/	灰 N7/	普通 やや不良	
302	Ⅲ区		胴部	10% 以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	灰 N4/	灰 N5/	普通 普通	
303	Ⅲ区	高坏	頸部	10% 以下			外面は回転ナデ。内面にシボリ痕。	オリーブ灰 2.5GY5/1	灰 N6/	良 普通	透孔あり
304	Ⅲ区		胴部				外面格子ふうタタキ。内面は当具痕を一部ナデ消し。	明オリーブ灰 2.5GY7/1	灰白 2.5GY8/1	普通 普通	
305	Ⅲ区		胴部	10% 以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	灰 N6/	灰 N5/	普通 普通	
306	Ⅲ区		胴部	10% 以下			外面は平行タタキ。内面は同心円状の当具痕。	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 普通	
307	Ⅲ区		胴部	10% 以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	灰 N6/	灰 N6/	普通 普通	
308	Ⅲ区		胴部	10% 以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	オリーブ灰 2.5GY5/1	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 やや不良	
309	Ⅲ区	提瓶か	胴部	10% 以下			外面はカキ目。内面はナデ。	明オリーブ灰 2.5GY7/1	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 やや不良	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
310	Ⅲ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	オリーブ灰 2.5GY5/1	緑灰 10GY6/1	普通 普通	
311	Ⅲ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当具痕。	灰 N4/	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 普通	
312	Ⅳ区	坏身	口縁部～体部	10%	（口径 13cm）たちあがり高 0.5cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から１／４までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	緑灰５Ｇ５／１	灰 N4/	普通 普通	
313	Ⅳ区		口縁部	10%以下		口縁部が肥厚する。	外面の口縁部は回転ナデ。胴部は回転ナデのち斜位の沈線。内面は回転ナデ。	灰 N4/	灰白 N7/ 1	普通 やや不良	
314	Ⅳ区		頸部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	灰 N5/	灰白 N7/ 1	普通 普通	
315	Ⅳ区	坏蓋	口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY6/1	灰白 N7/ 1	普通 普通	
316	Ⅳ区	坏身	口縁部	10%以下	たちあがり高 1 cm	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 5GY6/1	灰 N5/	普通 普通	
317	Ⅳ区		口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	暗灰 N3/	明オリーブ灰 5GY7/1	良 良	
318	Ⅳ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキを一部ナデ。内面は当具痕	オリーブ灰 2.5GY6/1	明オリーブ灰 7/1	やや不良 やや不良	
319	Ⅳ区		胴部	10%以下			外面は平行タタキを一部ナデ。内面は当具痕	紫灰 5RP6/1	暗青灰 5B4/1	やや不良 やや不良	
320	Ⅳ区		胴部～底部	10%以下			外面は底部付近が回転ヘラケズリ、胴部は回転ナデ。内面は回転ナデ	灰 N5/	灰 N5/	普通 普通	
321	62 号墳周溝	壺	頸部～胴部	10%	頸部径 8.4cm	肩部が体部の最大径となる。	外面はカキ目、口縁部は波状紋を施す。内面は当て具痕をナデ消し。	灰白 2.5ＧＹ８／１ オリーブ灰 ５ＧＹ５／１	灰白 2.5ＧＹ８／１ 灰 7.5 Ｙ５／１	普通 不良	
322	62 号墳周溝	壺	口縁部～胴部	10%	口径 16cm 頸部径 9.2cm	口縁部は外反、外傾しながら立ち上がる。	外面は口縁部に波状紋。胴部は叩きのち、沈線を施す。内面は当て具痕をナデ消す。	灰白 2.5 ＧＹ８／１	灰白 2.5 ＧＹ８／１	普通 不良	
323	62 号墳周溝	鉢	全形	40%	口径 10.4cm 器高８cm 底径 3.4cm	平底を呈し、口縁部はほぼ真っ直ぐ立ち上がる。	底部から１／３が回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。胴部中央に斜めの刺突紋。内面は回転ナデ。	灰５Ｙ６／１ 灰白５Ｙ７／１	灰オリーブ ５Ｙ６／２ 灰白５Ｙ７／２	普通 やや不良	
324	62 号墳周溝	坏蓋	全形	80%	口径 14.6cm 器高 4.1cm	天井部から丸みを帯びて口縁部へと至る。	外面は天井から２／３までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰 7.5 Ｙ６／１ 灰Ｎ６／	灰 7.5 Ｙ６／１ 灰Ｎ６／	普通 普通	
325	62 号墳周溝	坏蓋	全形	40%	口径 14.4cm 器高 4.2cm	天井部は歪みがあり、丸みを帯ながら口縁部へ至る。	外面は天井から１／２までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰５Ｙ６／１ 灰 7.5 Ｙ５／１	灰１０Ｙ６／１ 灰オリーブ ５Ｙ６／２	普通 良	
326	62 号墳周溝	坏蓋	口縁部～体部	10%	口径 15cm	体部と口縁部との境に段を設ける。	外面は天井部付近が回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 7.5 Ｙ６／１	灰 7.5 Ｙ６／１	普通 普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
327	62号墳周溝	坏蓋	ほぼ全形	30%	口径 15㎝ 器高 3.5㎝	体部と口縁部にかけて緩く屈曲する。	外面は底部から1／5までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰N 4／	灰N 5／	普通 普通	
328	62号墳周溝	坏蓋	天井部	10%			外面は天井部付近が回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデと天井部が指ナデ。	灰 7.5 Y 5／1	灰 7.5 Y 5／1	普通 普通	
329	62号墳周溝	坏身	全形	70%	口径 12㎝ 器高 3.8㎝	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰 7.5 Y 5／1 灰 5 Y 4／1	灰 7.5Y 5/1 灰 5 Y 4／1	普通 普通	
330	62号墳周溝	坏身	全形	ほぼ完形	口径 12.7㎝ 器高 4.7㎝ 受部高 0.7㎝	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	黄灰 2.5 Y 5／1 灰黄 2.5 Y 7／2	黄灰 2.5 Y 6／1 灰黄 2.5 Y 6／2	普通 普通	
331	62号墳周溝	坏身	全形	60%	口径 11.7㎝ 器高 3.5㎝ 受部高 1 ㎝	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／2までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 5 Y 4／1 灰白 5 Y 7／1	灰 5 Y 6／1	普通 普通	
332	62号墳周溝	坏身	全形	70%	口径 12.6㎝ 器高 4.1㎝ 受部高 0.9㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白 5 Y 7／1 灰 7.5 Y 5／1	灰 7.5 Y 5／1 灰 10 Y 6／1	普通 普通	
333	62号墳周溝	坏身	口縁部～体部	10%	受部高 0.7㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は回転ヘラケズリ、回転ナデ。内面は回転ナデ。	明オリーブ灰 2.5 G Y 7／1	明オリーブ灰 2.5 G Y 7／1	普通 普通	
334	62号墳周溝	坏身	口縁部～体部	20%	口径 12.8㎝ 器高 3.5㎝ たちあがり高 1.4㎝	受部は高く、やや内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／4までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰白 7.5 Y 7／1	灰 5 Y 5／1	普通 良	
335	62号墳周溝	坏身	口縁部～体部	20%	口径 11㎝ 受部高 1.3㎝	受部は高く、やや内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／4までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	緑灰 10 G 5／1	灰N 5／	普通 良	
336	62号墳周溝	高坏	口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY6/1	灰 N5/	普通 普通	
337	62号墳周溝		頸部	10%以下			内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY6/1	灰 N5/	普通 やや不良	
338	209号墳周溝	坏蓋	全形	70%	口径 7.5㎝ 器高 2.8㎝	輪状のつまみを呈し、かえしがある。	外面天井部は回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 7.5Y6/1	灰 N6/	良 良	
339	209号墳周溝	甕	口縁～胴部	20%	口径 23㎝	口縁端部は球状に肥厚させる。	口縁部は内外面とも回転ナデ。外面胴部は格子ふうタタキ。内面は当具痕。	灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 7.5Y7/1	灰 N5/	普通 普通	
340	209号墳周溝	提瓶	全形	80%	口径 9.8㎝ 器高 11㎝		内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY6/1 灰 N6/	灰 N5/	やや不良 普通	小型の提瓶
341	209号墳周溝	提瓶	胴部	30%	胴部径 16.7㎝	球形の胴部を呈する。	外面カキ目。内面は回転ナデ。胴部中央を粘土板で塞ぐ。	オリーブ灰 2.5GY6/1 灰 N6/	オリーブ灰 2.5GY5/1	普通 普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
342	209号墳周溝	甕	口縁～胴部	30%	口径21.6㎝ 胴部径49㎝	肩部がやや張る。	外面カキ目と平行タタキ。内面は当具痕。	暗オリーブ2.5GY4/1 オリーブ灰2.5GY5/1	オリーブ灰2.5ＧＹ5/1	普通 普通	
343	63号墳周溝	大型甕	口縁部	10%以下	口径53.8㎝	口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部は肥厚する。	外面はカキ目のち斜位の沈線。内面はヨコナデ。	暗オリーブ2.5GY3/1 オリーブ灰2.5GY6/1	灰白7.5Y7/1	普通 普通	
344	63号墳周溝	甕	口縁～胴部	10%以下	口径19.8㎝	口縁部は短く外傾しながら立ち上がり、端部は肥厚する。	外面は平行タタキのち回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰N6/ 灰N5/	灰N6/ 灰N5/	普通 やや不良	
345	63号墳周溝	坏蓋	ほぼ全形	20%	口径14.2㎝ 器高4.1㎝	体部と口縁部との境に沈線を設ける。	外面は天井部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	暗オリーブ2.5ＧＹ4／1	灰白Ｎ7／	普通 普通	
346	63号墳周溝	杯身	口縁部	10%	口径11㎝ たちあがり高0.7㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰白10ＹＲ7／1	灰白10ＹＲ7／1	普通 普通	
347	63号墳周溝		口縁部	10%		口縁部先端が肥厚する。	内外面とも回転ナデ。外面は斜めの沈線。	灰オリーブ7.5Y 4／2	灰白7.5Ｙ8／2	普通 普通	
348	63号墳周溝	大型甕か	口縁部	10%		口縁部は外反しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面は櫛描波状紋を施す。	灰Ｎ5／	灰オリーブ7.5Ｙ6／2	普通 普通	
349	63号墳周溝	大型甕か	口縁部	10%		口縁部は外反しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面は櫛描波状紋を施す。	暗緑灰7．5ＧＹ4／1	灰Ｎ6／ 灰Ｎ5／	普通 普通	
350	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	ほぼ完形	器高5.4㎝ 口径14.85㎝	つまみは輪状を呈し返しはあさい。天井部から口縁部は緩やかに丸みをおびる。	外面は天井部から2／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ4／ 明オリーブ灰2.5GY 7／1	オリーブ灰2.5ＧＹ6／1	普通 普通	
351	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	70%	器高5.6㎝ 口径15.4㎝	つまみは輪状を呈し、かえしがある。天井部と口縁部との境に沈線を施す。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰10ＹＲ6／1 灰Ｎ4／1	灰Ｎ6／	普通 普通	
352	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形		器高5.2㎝ 口径14.5㎝		外面は天井部から1／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ4／ 明オリーブ灰2.5GY 7／1	灰Ｎ6／	普通 やや不良	
353	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	40%	器高4.9㎝ 口径15.6㎝	輪状のつまみを呈し、かえしがある。天井部から口縁部までは丸みをおび、境が不明瞭。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ5／ 明オリーブ灰2.5ＧＹ7／1	灰Ｎ6／	普通 普通	
354	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	60%	器高5.7㎝ 口径17.4㎝	つまみは輪状を呈し、低くかえしはなし。天井部と口縁部との境は不明瞭。	外面は天井部から2／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。当て具痕が残る。	灰Ｎ7／ 灰Ｎ5／	明オリーブ灰2.5ＧＹ7／1	普通 やや不良	
355	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形		器高4.9㎝ 口径14.5㎝	つまみは輪状を呈し、かえしを設ける。天井部から口縁部は屈曲し、明瞭な沈線を施す。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰7.5Y6/1 灰7.5Y4/1	灰白7.5Y7/1	普通 普通	
356	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	50%	器高5.6㎝ 口径15.3㎝	つまみは輪状を呈し、かえしは弱い。天井部から口縁部は緩やかに丸みをおびる。	外面は天井部から2／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ5／ 灰Ｎ6／	オリーブ灰2.5ＧＹ6／1 オリーブ灰2.5ＧＹ5／1	普通 普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
357	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	70%	器高6.2㎝ 口径15.7㎝	つまみは輪状を呈し、かえしがある。天井部から口縁部は緩やかに屈曲し、沈線を施す。	外面は天井部から2／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰褐7.5ＹＲ5／2 灰Ｎ6／	緑灰7.5ＧＹ6／1	普通 やや不良	
358	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	70%	器高3.5㎝ 口径16.4㎝	つまみは宝珠形を呈し、天井部と口縁部との境は強く屈曲する。	外面は回転ナデと櫛描による装飾。内面は口縁部が回転ナデ。天井部は指頭によるナデやオサエ。	褐灰10YR5/1	灰5Y6/1	やや粗 普通	
359	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	60%	器高5.4㎝ 口径14.85㎝	輪状のつまみを呈し、弱いがかえしがある。天井部と口縁部との境には明瞭な段を設ける。	外面天井部は回転ヘラケズリ。口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白7.5Ｙ7／1 灰7.5Ｙ5／1	灰白10Ｙ7／1	普通 普通	
360	209号墳周溝	有蓋高坏蓋	全形	70%	器高5.7㎝ 口径16.5㎝	つまみは輪状を呈する。天井部から口縁部は緩やかに丸みをおびる。	外面は天井部から2／3が回転ヘラケズリ。口縁付近は回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ6／	灰Ｎ6／	やや粗 普通	
361	209号墳周溝	有蓋長脚高坏	全形	70%	器高24.4㎝ 口径13.7㎝ 脚底径14.9㎝	透かしは2段3方向で、長方形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	青灰5BP5/1 灰N5/	灰5Y6/1	普通 普通	
362	209号墳周溝	有蓋長脚高坏	全形	90%	器高22.6㎝ 口径13.2㎝ 脚底径13.2㎝	透かしは2段3方向で、長方形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	青灰5B6/1 暗青灰5B4/1	灰5Y6/1 黄灰2.5Y6/1	普通 普通	
363	209号墳周溝	有蓋長脚高坏	全形	95%	器高22.4㎝ 口径13㎝ 脚底径13.5㎝	透かしは2段3方向で、上段は長方形、下段は台形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	灰白7.5Ｙ7／1 灰10Ｙ5／1	灰10Ｙ6／1	普通 普通	
364	209号墳周溝	有蓋高坏	全形	80%	器高16.5㎝ 口径15.5㎝ 脚底径14.3㎝	透かしは2段3方向で、上段は長方形、下段は台形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	灰5Ｙ6／1 灰Ｎ6／	灰5Ｙ6／1	普通 やや不良	
365	209号墳周溝	無蓋長脚高坏	全形	60%	器高20.3㎝ 口径12.6㎝ 脚底径10.8㎝	透かしは2段3方向で、長方形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。坏部には斜め方向の連続刺突文を施す。	灰Ｎ5／ 灰黄2.5Ｙ7／2	灰7.5Ｙ6／1	普通 普通	
366	209号墳周溝	無蓋長脚高坏	全形	60%	器高18.9㎝ 口径12.5㎝ 脚底径10.7㎝	透かしは2段3方向で、長方形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。坏部には斜め方向の連続刺突文を施す。	灰Ｎ5／ 灰5Ｙ5／1	青灰5Ｂ5／1	普通 普通	
367	209号墳周溝	無蓋長脚高坏	全形	60%	器高19.1㎝ 口径11.2㎝ 脚底径10.7㎝	透かしは2段3方向で、長方形を呈す。	外面は坏部の底面に回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	暗青灰5ＢＰ3／1 灰Ｎ4／	暗青灰5ＢＰ3／1 灰Ｎ4／	普通 やや不良	
368	209号墳周溝	短頸壺	全形	70%	器高8.6㎝ 口径7.4㎝	頸部は短く直立する。胴部は楕円形で緩やかに丸みをおびながら、底部にいたる。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ。上部は回転ナデ。内面は回転ナデとナデ。	灰白2.5ＧＹ8／1 明オリーブ灰7／1	明オリーブ灰7／1	普通 普通	
369	209号墳周溝	短頸壺	全形	80%	器高8.8㎝ 口径6.5㎝	頸部は短くやや内傾しながら立ち上がる。胴部は中央で屈曲し底部へいたる。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ。上部は回転ナデ。内面は回転ナデとナデ。	灰Ｎ4／ 灰Ｎ5／	灰Ｎ5／	普通 普通	
370	209号墳周溝	短頸壺	全形	70%	器高8.8㎝ 口径6.2㎝	頸部は短く直立する。胴部は中央で屈曲し底部へいたる。	外面は底部から1／4までが回転ヘラケズリ。上部は回転ナデ。内面は回転ナデとナデ。	灰Ｎ5／ 明赤灰10Ｒ7／1	灰Ｎ4／	普通 普通	
371	209号墳周溝	坏蓋	全形	80%	器高3.7㎝ 口径13.5㎝	天井部と口縁部の境は明瞭に屈曲する。	外面は天井部から1/3までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。口唇部には斜めの線刻。内面は回転ナデ。	灰7.5Y5/1 灰10Ｙ5／1	灰7.5Y 5/1 灰5Ｙ4／1	やや粗 普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
372	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 4㎝ 口径 14.2㎝	天井部と口縁部の境に段を設ける。	外面は天井部から1／2までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデと天井部は指ナデ。	灰オリーブ 5Y5／2	灰5Y 6／1 灰オリーブ 5Y5／2	普通 良	
373	209号墳周溝	坏蓋	天井部	50%			外面は天井部から1／2までが回転ヘラケズリ。あとはナデ。天井部に線刻。内面は回転ナデ。天井部は指ナデ。	灰オリーブ 5Y6／2 灰5Y6／1	灰 7.5Y 6/1	普通 やや不良	
374	209号墳周溝	坏蓋	全形	70%	器高 4.7㎝ 口径 14.2㎝	天井部と口縁部の境に凹線を設ける。	外面は天井部から1／3が回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。天井部は指ナデ。	灰 7.5 Y 5／1 灰 10 Y 6／ 1	灰 7.5 Y 6／1	普通 普通	
375	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 4.6㎝ 口径 13.8㎝	天井部と口縁部の境に凹線を設ける。	外面は天井部がすべて回転ヘラケズリ。口縁部が回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰N 6／ 灰N 7／	灰N 6／	普通 普通	
376	209号墳周溝	坏蓋	全形	70%	器高 3.8㎝ 口径 12.1㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。天井部は指ナデ。	灰白N 5／	灰白N 5／	普通 良	
377	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 4.1㎝ 口径 14.4㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	オリーブ灰 2.5 G Y 6／1	オリーブ灰 2.5 G Y 6／1	普通 やや不良	
378	209号墳周溝	坏蓋	全形	50%	器高 4.4㎝ 口径 13.7㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から1／2が回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	暗オリーブ灰 2.5 G Y 4／1 オリーブ灰 2.5 G Y 6／1	オリーブ灰 2.5 G Y 6／1	普通 普通	
379	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 4.1㎝ 口径 14.6㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。先端は外側に屈曲する。	外面は天井部から1／2までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	暗オリーブ灰 2.5 G Y 4／1 明オリーブ灰 2.5 G Y 7／1	灰N 6／	やや粗 普通	
380	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 4.1㎝ 口径 13.8㎝	天井から口縁部はわずかに屈曲する。	外面は天井部から1／2までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。天井部は指ナデ。	青灰 10 B G 5／1 灰5Y6／1	灰5Y6／1	普通 やや不良	
381	209号墳周溝	坏蓋	全形	50%	器高 4.5㎝ 口径 13.8㎝	天井から口縁部はわずかに屈曲する。	外面は天井部から2／3までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	オリーブ灰 2.5 G Y 6／1 オリーブ灰 2.5 G Y 5／1	オリーブ灰 2.5 Y 6／1	普通 普通	
382	209号墳周溝	坏蓋	全形	60%	器高 3.7㎝ 口径 13.8㎝	天井部から口縁部の境は屈曲し、段を設ける。	外面は天井部が回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ、天井部は指ナデ。	暗灰黄 2.5Y 5／2 黄灰 2.5 Y 4／1	灰 7.5 Y 5／1	普通 良好	
383	209号墳周溝	坏蓋	全形	80%	器高 4㎝ 口径 14.6㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から1／2までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。天井部は指ナデ。	灰N 5／ 灰 7.5 Y 6／	灰オリーブ 5Y6／2	やや粗 普通	
384	209号墳周溝	坏蓋	全形	90%	口径 14.2㎝ 器高 3.9㎝	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。端部はわずかに外反する。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	暗オリーブ灰 2.5GY4/1 灰 N4/	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	普通 普通	

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
385	209号墳周溝	坏蓋	全形	80%	器高5.2cm 口径14.3cm	天井から丸みを帯びて、そのまま口縁部へ至る。	外面は天井部から2／3までが回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。内面は回転ナデ、天井部は指ナデ。	灰白5Y 7／1 灰N5／	灰黄2.5Y 灰5Y6／1	普通 やや不良	
386	209号墳周溝	坏身	全形	60%	器高4.9cm 口径12.3cm 受部高0.8cm	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から3／4までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白7.5Y 7／2	灰7.5Y 6／1	普通 普通	
387	209号墳周溝	坏身	全形		器高5cm 口径13.1cm 受部高0.9cm	口縁部は内傾しながら立ち上がる。体部は丸く器高が高い。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰白7.5Y 7／2	灰7.5Y 6／1	やや粗 やや不良	
388	209号墳周溝	坏身	全形		器高4.3cm 口径12.8cm 受部高1cm	口縁部は強く内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰黄2.5Y 6／2	灰5Y5／1	普通 普通	
389	209号墳周溝	坏身	全形		器高4.7cm 口径12.4cm 受部高1.3cm	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白7.5Y 7／2 明オリーブ灰 2.5GY 7／1	灰N6／	普通 普通	
390	209号墳周溝	坏身	全形		器高4.4cm 口径11.7cm 受部高1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を鋭くおさめる。	外面は底部から1／2までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰白7.5Y 7／1 灰N6／	灰N5／	普通 普通	
391	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高4.7cm 口径12.2cm 受部高1.1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	オリーブ灰 5GY5／1	灰N4／	良 良	外面に線刻有
392	209号墳周溝	坏身	全形	70%	器高4.7cm 口径11.6cm 受部高0.8cm	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	オリーブ灰 2.5GY 6／1	オリーブ灰 2.5GY 5／1	やや粗 普通	
393	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高4.1cm 口径12.1cm 受部高1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰オリーブ 7.5Y6／2 灰白7.5Y 8／2	明オリーブ灰 2.5GY 7／1	普通 やや不良	
394	209号墳周溝	坏身	全形	80%	器高4cm 口径11.4cm 受部高1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。	外面は底部から1／2までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰7.5Y 5／1 灰10Y4／1	灰7.5Y5／1	普通 やや不良	
395	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高3.8cm 口径12cm 受部高1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がるが、先端は直立気味。	外面は底部から1／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰白5Y7／2 灰5Y4／1	灰5Y6／1	普通 普通	外面に自然釉
396	209号墳周溝	坏身	全形	60%	器高4.2cm 口径11.8cm 受部高1.2cm	口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／2までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	黒褐2.5Y 3／1 黄灰2.5Y 4／1	灰5Y5／1	普通 普通	外面に自然釉
397	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高4.7cm 口径12cm 受部高1.1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から1／2までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰黄2.5Y 6／2	灰黄2.5Y	普通 普通	
398	209号墳周溝	坏身	全形	80%	器高4.4cm 口径12.1cm 受部高1.1cm	口縁部は内傾しながら立ち上がるが、先端は直立気味。	外面は底部から2／3までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰7.5Y 6／1 黒10Y2／1	灰7.5Y 6／1	良 良	外面に自然釉

挿図番号	出土地点	器種	部位	残存率	法　量	調整・文様		色　調		胎土焼成	備考
					（）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
399	209号墳周溝	坏身	全形	80%	器高 4.4㎝ 口径 13.3㎝ 受部高 0.8㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がるが、先端は直立気味に立ち上がり鋭くおさめる。	外面は底部から２／３までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデだが、底部は指ナデ。	灰オリーブ５Ｙ６／２ 灰白５Ｙ７／１	灰５Ｙ６／１	不良 不良	外面に自然釉
400	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高 4.9㎝ 口径 13.4㎝ 受部高 1.4㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は底部から２／３までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰５Ｙ６／１	灰Ｎ４／１	普通 普通	
401	209号墳周溝	坏身	全形	90%	器高 3.5㎝ 口径 12.8㎝ 受部高 0.8㎝	口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。	外面は底部から３／４までが回転ヘラケズリ、あとは回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰Ｎ６／ 灰Ｎ５／	灰Ｎ５／	普通 良	
402	209号墳周溝	脚付壺	全形	70%	器高 23.7㎝ 口径 10.6㎝ 底径 13.5㎝	脚部には３方向に長方形の透かしをもつ。		灰オリーブ 7.5Ｙ６／２ 灰 7.5Ｙ５／１	灰 7.5Ｙ５／１	普通 やや不良	体部に線刻 外面に自然釉

第Ⅲ章　分 析

第１節　百足塚古墳ほか出土埴輪・須恵器の胎土分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

新富町に所在する百足塚古墳（新田原 58 号墳）およびその周辺の古墳より出土した埴輪と須恵器について、波長分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行った。

（２）試料と方法

分析対象は、百足塚古墳より出土した形象埴輪 11 点（分析 No.1 ～ 11)、円筒埴輪 6 点（分析 No.12 ～ 17)、須恵器 3 点（分析 No.21 ～ 23)、新田原 62 号墳より出土した円筒埴輪 3 点（分析 No.18 ～ 20)、須恵器 1 点（分析 No.24)、新田原 209 号墳より出土した須恵器 1 点（分析 No.25）の計 25 点である（表１)。埴輪はすべて穴窯焼成とみられている。また、時期は埴輪が 6 世紀前半～半ば、須恵器が 6 世紀前半～後半とみられている。

表 9　分析対象一覧

分析No.	古墳名	出土地	遺物名	注記	備考
1	百足塚古墳	Ⅱ区	形象埴輪	NY58Ⅱ-4 10	浅黄橙7.5YR8/6
2	百足塚古墳	Ⅱ区	形象埴輪	NY58Ⅱ-3	浅黄橙10YR8/6
3	百足塚古墳	Ⅱ区	形象埴輪（鳥）	NY58Ⅱ-4	浅黄橙7.5YR8/6
4	百足塚古墳	Ⅱ区	形象埴輪	NY58Ⅱ-3 23 15-3	浅黄橙10YR8/4
5	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪（家）	NY58Ⅲ-13 4-10	黄橙10YR8/6
6	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪	NY58Ⅲ	橙5YR7/6
7	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪	NY58Ⅲ 周ソト	橙2.5YR6/6
8	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪（家）	NY58Ⅲ 14 13-4	浅黄橙10YR8/4
9	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪（人物）	NY58Ⅲ-7	浅黄橙7.5YR8/6
10	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪		にぶい黄橙10YR7/2
11	百足塚古墳	Ⅲ区	形象埴輪	NY58Ⅲ	橙5YR7/6
12	百足塚古墳	Ⅳ区テラス	円筒埴輪	6区	灰白10YR8/2
13	百足塚古墳	1トレンチ	円筒埴輪	NY581トレ	浅黄橙10YR8/4
14	百足塚古墳	2トレンチ	円筒埴輪	2T	浅黄橙10YR8/3
15	百足塚古墳	9トレンチ	円筒埴輪	9T-F	浅黄橙10YR8/4
16	百足塚古墳	12トレンチ	円筒埴輪	12T	浅黄橙7.5YR8/6
17	百足塚古墳	13トレンチ	円筒埴輪	13TB	灰黄褐10YR5/2 須恵質
18	新田原62号墳	周溝内	円筒埴輪	NY58Ⅰ区	黄橙10YR8/6
19	新田原62号墳	周溝内	円筒埴輪	N62 14G	浅黄橙10YR8/3
20	新田原62号墳	周溝内	円筒埴輪	N62 17G-14	灰黄褐10YR6/2 須恵質
21	百足塚古墳	Ⅱ区周溝内	須恵器	NY58Ⅱ13 4-6	灰7.5Y6/1
22	百足塚古墳	西側周溝	須恵器	NY58Ⅴ12 49	灰オリーブ7.5Y5/2
23	百足塚古墳	Ⅱ区	須恵器	NY58Ⅱ13 4-6	オリーブ灰2.5GY5/1
24	新田原62号墳	周溝内	須恵器	21T	灰N6/
25	新田原209号墳	周溝内	須恵器	E3-7T	灰白N7/

蛍光 X 線分析には、埴輪、須恵器よりガラスビードを作製し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。まず採取した埴輪、須恵器破片を、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をセラミック乳鉢で粉末にし

て、るつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ と、メタホウ酸リチウム $LiBO_2$ を8：2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、二酸化ケイ素 (SiO_2)、五酸化二リン (P_2O_5)、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO_2)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) の主成分10元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分4元素の計14元素である。

（3）結果

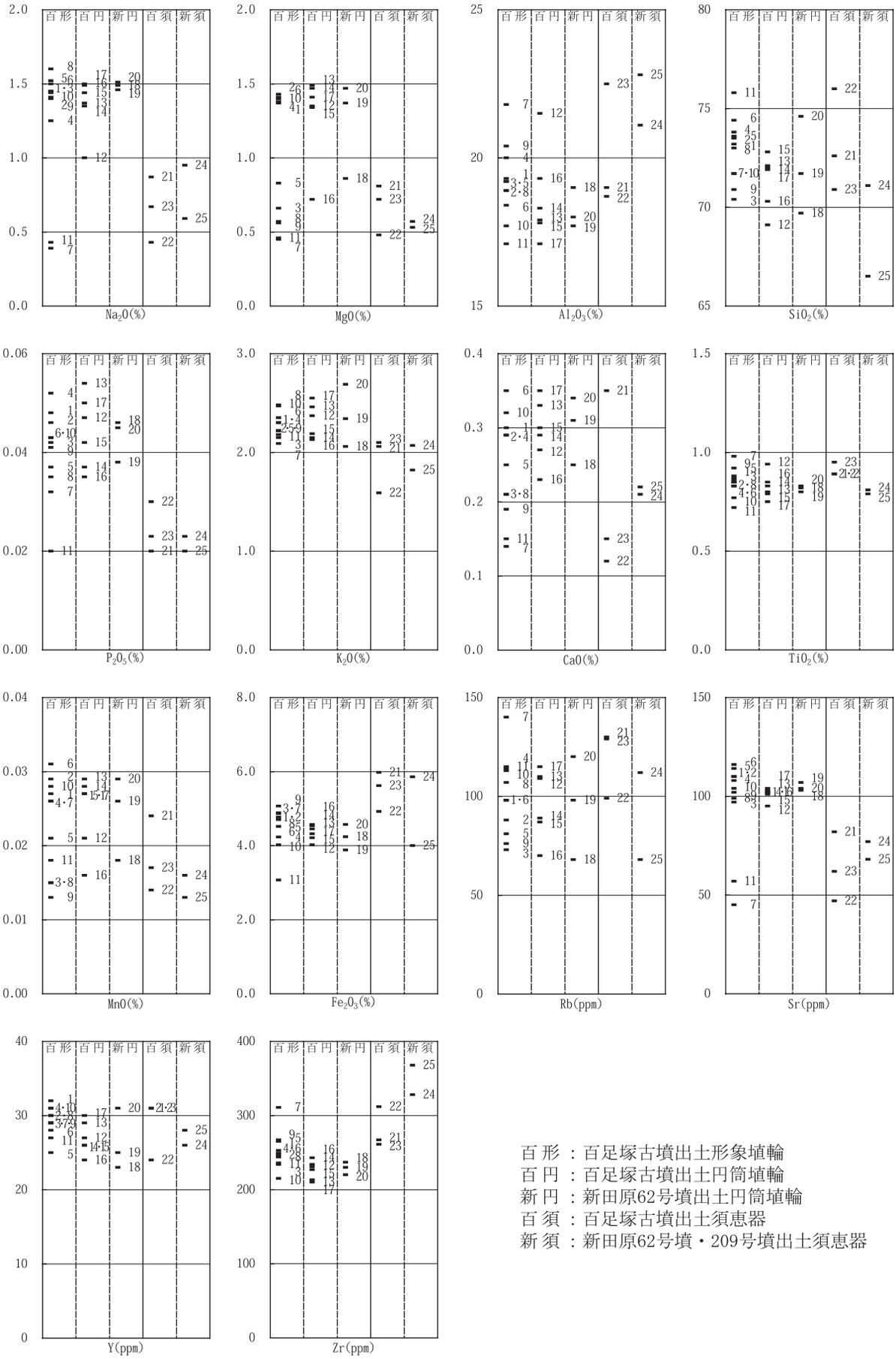
表10に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

分析の結果、Na_2O が0.39～1.60%、MgOが0.45～1.49%、Al_2O_3 が17.1～22.8%、SiO_2 が66.5～76.0%、P_2O_5 が0.020～0.054%、K_2O が1.59～2.69%、CaOが0.12～0.35%、TiO_2 が0.72～0.98%、MnOが0.013～0.031%、Fe_2O_3 が3.07～5.98%、Rbが68～140ppm、Srが45～116ppm、Yが23～32ppm、Zrが210～368ppmであった。

図版85に各元素の分布図を古墳、遺物別に示す。

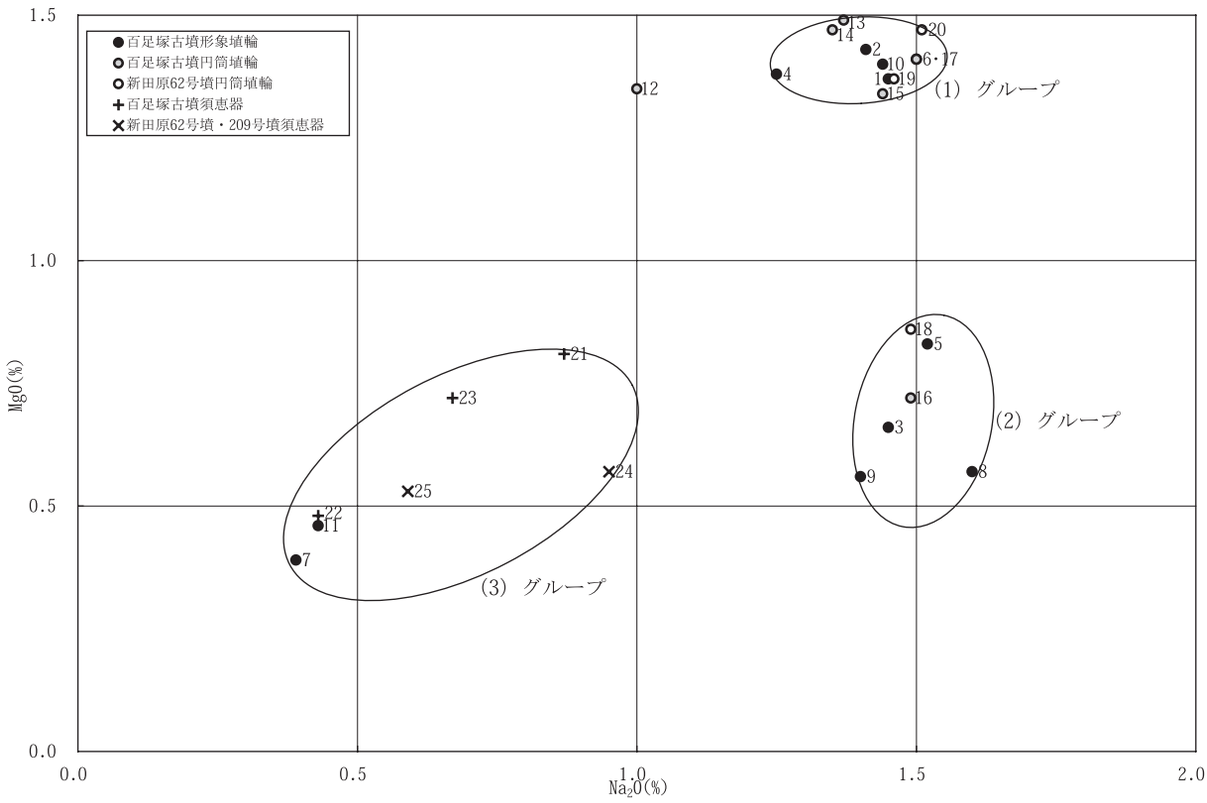
表10　蛍光X線分析結果（mass%）

分析No.	古墳名	遺物名	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	百足塚古墳	形象埴輪	1.45	1.37	19.3	73.2	0.048	2.30	0.30	0.87	0.027	4.87	103.7	98	110	32	253
2	百足塚古墳	形象埴輪	1.41	1.43	18.9	73.5	0.046	2.22	0.29	0.85	0.029	4.87	103.5	88	110	30	246
3	百足塚古墳	形象埴輪	1.45	0.66	19.2	70.4	0.042	2.15	0.21	0.86	0.015	4.88	99.9	73	97	29	234
4	百足塚古墳	形象埴輪	1.25	1.38	20.0	73.8	0.052	2.30	0.29	0.83	0.026	4.23	104.2	115	108	31	249
5	百足塚古墳	形象埴輪	1.52	0.83	19.2	73.6	0.037	2.22	0.25	0.88	0.021	4.70	103.3	81	114	25	265
6	百足塚古墳	形象埴輪	1.50	1.41	18.4	74.4	0.043	2.35	0.35	0.83	0.031	4.52	103.8	98	116	28	249
7	百足塚古墳	形象埴輪	0.39	0.45	21.8	71.7	0.032	2.09	0.14	0.98	0.026	4.88	102.5	140	45	29	311
8	百足塚古墳	形象埴輪	1.60	0.57	18.9	73.0	0.035	2.48	0.21	0.85	0.015	4.77	102.4	107	99	30	244
9	百足塚古墳	形象埴輪	1.40	0.56	20.4	70.9	0.041	2.22	0.19	0.92	0.013	5.07	101.7	76	102	29	267
10	百足塚古墳	形象埴輪	1.44	1.40	17.7	71.7	0.043	2.47	0.32	0.77	0.028	4.02	99.9	113	104	31	215
11	百足塚古墳	形象埴輪	0.43	0.46	17.1	75.8	0.020	2.18	0.15	0.72	0.018	3.07	99.9	114	57	27	236
12	百足塚古墳	円筒埴輪	1.00	1.35	21.5	69.1	0.047	2.37	0.27	0.94	0.021	4.02	100.6	109	95	27	231
13	百足塚古墳	円筒埴輪	1.37	1.49	17.9	72.1	0.054	2.46	0.33	0.80	0.029	4.45	101.0	110	103	29	213
14	百足塚古墳	円筒埴輪	1.35	1.47	18.3	72.0	0.037	2.15	0.29	0.83	0.028	4.54	101.0	89	102	26	234
15	百足塚古墳	円筒埴輪	1.44	1.34	17.8	72.8	0.042	2.19	0.30	0.79	0.027	4.21	100.9	87	101	26	227
16	百足塚古墳	円筒埴輪	1.49	0.72	19.3	70.3	0.035	2.13	0.23	0.85	0.016	4.57	99.6	70	102	24	243
17	百足塚古墳	円筒埴輪	1.50	1.41	17.1	71.9	0.050	2.55	0.35	0.75	0.027	4.32	100.0	115	104	30	210
18	新田原62号墳	円筒埴輪	1.49	0.86	19.0	69.7	0.046	2.06	0.25	0.82	0.018	4.24	98.5	68	103	23	237
19	新田原62号墳	円筒埴輪	1.46	1.37	17.7	71.7	0.038	2.34	0.31	0.80	0.026	3.88	99.6	98	107	25	230
20	新田原62号墳	円筒埴輪	1.51	1.47	18.0	74.6	0.045	2.69	0.34	0.83	0.029	4.57	104.1	120	104	31	220
21	百足塚古墳	須恵器	0.87	0.81	19.0	72.6	0.020	2.06	0.35	0.89	0.024	5.98	102.6	130	82	31	267
22	百足塚古墳	須恵器	0.43	0.48	18.7	76.0	0.030	1.59	0.12	0.89	0.014	4.92	103.2	99	47	24	312
23	百足塚古墳	須恵器	0.67	0.72	22.5	70.9	0.023	2.10	0.15	0.95	0.017	5.62	103.7	129	62	31	261
24	新田原62号墳	須恵器	0.95	0.57	21.1	71.1	0.023	2.07	0.21	0.81	0.016	5.86	102.7	112	77	26	328
25	新田原209号墳	須恵器	0.59	0.53	22.8	66.5	0.020	1.82	0.22	0.79	0.013	4.00	97.3	68	68	28	368
最小値			0.39	0.45	17.1	66.5	0.020	1.59	0.12	0.72	0.013	3.07	97.3	68	45	23	210
最大値			1.60	1.49	22.8	76.0	0.054	2.69	0.35	0.98	0.031	5.98	104.2	140	116	32	368



百 形 ：百足塚古墳出土形象埴輪
百 円 ：百足塚古墳出土円筒埴輪
新 円 ：新田原62号墳出土円筒埴輪
百 須 ：百足塚古墳出土須恵器
新 須 ：新田原62号墳・209号墳出土須恵器

図版 85　各元素分布図



図版 86　Na_2O-MgO 分布図

（4）考 察

分析の結果、25 点の試料について、Na_2O、MgO、P_2O_5、K_2O、CaO、MnO、Sr、Zr といった元素において差異がみられ、以下の 4 グループに分類した。

①分析 No.1、2、4、6、10、13 ～ 15、17

分析 No.1、2、4、6、10、13 ～ 15、17 の 9 点は、他試料と比べて、Na_2O、MgO、P_2O_5、CaO、MnO、Sr が多い傾向がみられた。これらは、百足塚古墳の形象埴輪 5 点、円筒埴輪 3 点、新田原 62 号墳の円筒埴輪 2 点であった。

②分析 No.3、5、8、9、16、18

分析 No.3、5、8、9、16、18 の 6 点は、他試料と比べて、Na_2O、Sr が多く、MgO、MnO が少ない傾向がみられた。これらは、百足塚古墳の形象埴輪 4 点、円筒埴輪 1 点、新田原 62 号墳の円筒埴輪 1 点であった。

③分析 No.7、11、21 ～ 25

分析 No. 7、11、21 ～ 25 の 7 点は、他試料と比べて、Zr が多く、Na_2O、MgO、P_2O_5、K_2O、MnO、Sr が少ない傾向がみられた。これらは、百足塚古墳の形象埴輪 2 点と、各古墳より出土した須恵器 5 点であった。ただし、このグループは他グループよりもややばらつきが大きい。

④分析 No.12

分析 No. 12 は、（1）～（3）のいずれのグループの分布とも若干異なる化学組成であった。分析 No. 12 は、百足塚古墳の円筒埴輪である。

これら 4 グループは、粘土の採取場所あるいは調製方法など、何らかの材料的差異があると考えられる。図版 86 に、特に特徴的であった Na_2O-MgO の分布図を示す。あくまでも今回分析した 25 点の範囲での分類ではあるものの、現状では比較的明瞭に傾向が分かれていると思われ、今後のデータの蓄積が期待される。

第２節　百足塚古墳出土埴輪赤色顔料分析

株式会社 古環境研究所

（１）はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS)、ベンガラ（酸化第二鉄：Fe_2O_3)、鉛丹（酸化鉛:Pb_3O_4）が知られている（市毛，1998，本田，1995)。蛍光Ｘ線分析では、水銀（Hg)・イオウ（S)、鉄（Fe)、鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

（２）試 料

分析試料は、百足塚古墳から出土した埴輪に付着した赤色顔料である（写真図版参照)。試料は№１～№14 の 14 点であるが、いずれも赤色顔料の付着が微量であるため、顕微鏡観察用の試料が採取できた№１、№２、№４、№５、№６、№10、№11、№13 の８点を分析対象とした。また、№１、№２、№５の３点については、比較試料として赤色顔料が付着していない部分についても測定を行った。

（３）分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（日本電子㈱製，JSX3100R Ⅱ）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間 240 秒、照射径 7.0mm、電圧 30kV、試料室内真空、プロレンフィルム使用である。また、光学顕微鏡下（1000 倍相当）で赤色顔料の粒子形状を観察した。

（４）分析結果

表 11 に各元素の定量分析結果（wt％）を示し、図版 87 に鉄（Fe_2O_3）の検出状況を示す。定量分析の結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記した。なお、試料が微量であり、測定に際してプロレンフィルムを使用していることから、定量分析結果の数値は必ずしも正確なものとはいえない。

（５）考察

百足塚古墳から出土した８点の埴輪に付着した赤色顔料について蛍光Ｘ線分析を行った。その結果、各試料とも鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（Fe_2O_3）の含量は、№４～№13 の６点は 16.3 ～ 25.3％であり、比較試料（非赤色部）の 5.5 ～ 6.1％よりも明らかに高い値である（図版 87)。また、№１と№２の２点でも 8.6％および 8.0％と比較的高い値である。なお、含量の高いケイ素（SiO_2）やアルミニウム（Al_2O_3）などについては、試料に付着した土壌や土器胎土に由来すると考えられる。光学顕微鏡による観察では、鉄バクテリアの生産物に由来するパイプ状粒子（大久保，2000）は認められなかった。

以上の結果から、埴輪に付着した赤色顔料はいずれもベンガラ（非パイプ状）と考えられる。

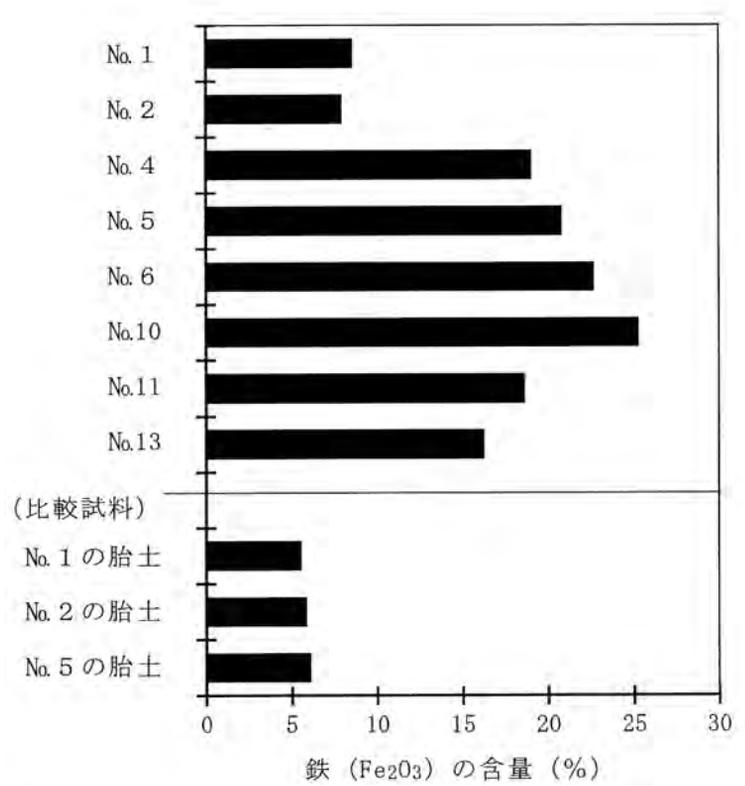
なお、地下水などに含まれる鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラをより確実に同定するにはＸ線回折分析による結晶構造の解析が必要である。

文 献

市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版

大久保浩二（2000）鹿児島県出土の赤色顔料－日本最古の赤彩土器をはじめとして．人類史研究12，p.163-169.

本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31･32，p.63-79.



図版 87　百足塚古墳出土埴輪付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果

表１１　百足塚古墳出土埴輪赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果

単位：wt(%)

地点・試料	赤色部								比較試料（非赤色部）		
原子№ 化学式	1	2	4	5	6	10	11	13	1-胎土	2-胎土	5-胎土
11 Na_2O	0.00	0.00	1.43	2.25	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11
12 MgO	1.06	2.74	1.32	0.70	0.08	0.55	0.93	1.04	0.97	1.10	0.65
13 Al_2O_3	18.31	18.35	16.87	17.59	16.76	15.83	17.55	17.25	23.62	18.96	24.14
14 SiO_2	66.67	66.26	57.15	53.98	56.28	54.09	58.26	60.32	64.51	68.39	64.91
16 SO_3	0.20	0.00	0.00	0.09	0.00	0.00	0.00	0.00	1.16	0.00	0.14
19 K_2O	2.97	1.48	2.12	2.53	2.28	2.34	2.64	2.84	2.28	3.19	2.28
20 CaO	0.71	2.21	0.64	0.67	0.60	0.55	0.63	0.67	0.57	0.93	0.24
22 TiO_2	1.28	0.78	1.30	1.19	1.12	1.11	1.16	1.34	1.09	1.42	1.17
23 V_2O_5	0.03	0.04	0.03	0.02	0.04	0.06	0.03	0.02	0.04	0.02	0.04
25 MnO	0.08	0.11	0.08	0.10	0.12	0.12	0.12	0.10	0.07	0.05	0.05
26 Fe_2O_3	8.58	7.95	19.01	20.78	22.66	25.27	18.62	16.26	5.54	5.86	6.10
28 NiO	0.06	0.02	0.01	0.03	0.01	0.04	0.02	0.12	0.02	0.01	0.02
30 ZnO	0.04	0.02	0.02	0.06	0.02	0.02	0.02	0.02	0.04	0.04	0.08
37 Rb_2O	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01	0.02
38 SrO	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01	0.02
40 ZrO_2	0.01	0.00	0.02	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.05	0.01	0.06
80 HgO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
82 PbO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

第Ⅳ章　考 察

第１節　円筒埴輪

（１）円筒埴輪の特徴

円筒埴輪の特徴については第Ⅱ章で示しているが、あらためて特徴を整理すると以下の点が指摘できる。

①すべて４条５段で製作され、２段目と４段目に円形の透孔を施す。器形はずんどうではなく、口縁部に向かって径を広げながら立ち上がる。

②焼き歪みが激しい個体もあるが、器高は 55 ～ 60㎝、底径は 20㎝前後、口径は 30㎝前後となる。

③突帯は上端幅 1.5㎝前後が多く、断面はM字もしくは崩れた台形を呈する。突帯設定技法は確認されず、段間の数値はややバラつきがある。

④基底部調整を行っている個体が多い。倒立して外面板オサエ、内面指オサエ、指ナデが主体だが、内外面指オサエや、全く行わないものもあるがごくわずかである。

⑤口縁部は摘みだしによる成形が主体で、端部がわずかに外反することもある。また、口縁端部に指ナデを加える個体もある。

⑥外面調整は一次のタテハケのみとなる。内面は口縁部にヨコハケであとは指ナデとなる。また、工具には１㎝に 10 ～ 12 本の細かい木目をもつ板が使用される場合が多い。

⑦すべて窖窯焼成で無黒斑である。

⑧×もしくは弓形の線刻を施す個体がある。またそれらはすべて５段目に施される。

⑨朝顔形円筒埴輪は、４段目まで普通円筒埴輪と同じ形状である。底部から後円部まで復元できた個体はないが、器高 80㎝、口径 48㎝前後と想定される。

以上が百足塚古墳出土の円筒埴輪の特徴である。また、62 号墳でも同じ特徴をもつ円筒埴輪が採用されている。これらは川西編年のⅤ期に相当することは以前から指摘されている。また九州内の円筒埴輪をまとめた竹中克繁編年では４期にあたり（竹中 2003）、有馬編年では日向４期に相当する（有馬 2000）。

法量や器形には一定の規格があったことがうかがえる。一方、基底部や口縁部の調整には主体となる方法があるものの、それとは別の方法を採用する場合も少なからず認められる。ただし、これは工人集団の違いとまで言い切れるほどのものではない。例えば口縁部を摘みだしではなく、ナデを行う行為や、基底部調整を行わない、あるいは指ナデだけで済ませるという行為は、製作の簡略化といえる。円筒埴輪を製作するなかで、期間内に決められた数量を確保しなければならなかった場合など、間に合わせるためにこういった行為が行われたことも考えられる。また、器形や法量には一定の決まりごとがあったが、細かい点については個人の裁量に任せられた可能性もある。

本来であれば、各部位ごとの属性やハケメなどより踏み込んだ分析を行うところではあったが、力量不足から取り上げることができなかった。試験的に行ったハケメの比較では、百足塚古墳と 62 号墳ではパターンが一致する個体が確実に存在する。また、形象埴輪とも一致する場合があるようである。また、ハケメの方向は器面に対して左上がりか真上かのどちらかで、形象埴輪を含めて右上がりは確認できなかった。これは埴輪工人が、すべて右利きだった可能性が高いこと

を示している。憶測でしかないが、埴輪製作はかなりの少人数で行われたのではないだろうか。

（2）円筒埴輪列について

円筒埴輪列については戦前からの研究があり「柴垣模倣説」、「土留め説」、「装飾説」などの論争が起こっていた。また、墳頂やテラスに密接して何重にも配置される状況から、僻邪の意味をもち「隔絶の表示」だとする説がある。しかし、調査事例の増加に伴い、並べ方に時期や地域差があることや、同じ古墳であっても、場所によって配置方法に違いがあることがあることが分かっている（寺村 2004）。

百足塚古墳における円筒埴輪は、後円部と前方部の墳頂平坦面、テラスそして周堤上に樹立されていた。テラスと墳頂には普通円筒埴輪だけでなく、朝顔形や盾形埴輪も樹立されていたようだが、割合や樹立場所は不明である。墳頂平坦面での樹立は遺存状態が悪く判然としない。テラスでは墳丘の東側にあたる８・９トレンチで、土圧で外方に傾いていたが、基底部がほぼ原位置を留めた状態で検出された。口縁部は欠損していたが、口縁部が密着するような状態で樹立されていた可能性が高い。その割合は１ｍにつき３本程度となる。テラスと墳頂で同じような割合で並べられたと仮定した場合、平成 20 年度に行った整備のときの復元案ではテラスの総延長は 177 ｍを測り、525 本の埴輪が使用されたことになる。墳頂では後円部が 35 ｍ、前方部はくびれ部のどのあたりまで樹立されたかが問題となるが、９トレンチまでは確実に樹立されていることから 65 ｍとした。これにより墳長平坦面は総延長 100 ｍとなり 300 本の埴輪が使用され、テラスとの合計は 825 本となる。

次に周堤上の樹立状況だが、15 トレンチで周堤上から転落した１個体分が検出されている。ちょうど周溝の隅角となる場所にあたり、単独樹立の可能性もある。周堤まで延長したほかのトレンチでも、周堤上への樹立を伺わせる検出例がある。ただし墳丘上のように密接状態ではなく、要所での単独あるいは数個体の配置だったと考えたい。また、形象埴輪が多数配置される西側においては、形象埴輪の破片に円筒埴輪が混在することがないため、ここでの配置はなかったようだ。いずれにせよ周堤上での配置は、「隔絶」という意味とは別の視点で捉える必要がある。

62 号墳の状況についても触れておく。62 号墳は周囲が大きく掘削され、残った墳丘も土砂の流出が激しい。整備では発掘調査のデータをもとに、段築をもたない径 13 ｍの円墳として復元した。本文でも述べたが周溝内で多数の埴輪片が出土した。普通円筒埴輪だけでなく、朝顔形円筒埴輪や盾などの器材埴輪も含まれている。墳丘に設置したトレンチでも多数の埴輪片が含まれることから、墳頂に樹立していたものが転落したと考えてよいだろう。配置状況は判然としないが、２ｍ幅のトレンチには２～４本分程度の破片が含まれており、50 本くらいの樹立があったのではないか。復元では墳頂平坦面を径６ｍ前後と考えており、近接して並べたとしたら 50 本程度の樹立があっても矛盾しない。また、62 号墳の埴輪は百足塚古墳と同規格品と述べたが、焼成の際に焼き歪みが発生し、色調は須恵器に近い褐灰色を呈し、形状が変化しているものを多く採用している。

以上のことから、百足塚古墳と 62 号墳では少なくとも 800 ～ 900 本程度の円筒埴輪（朝顔も含む）が採用されていたと考えられ、周堤上の状況によってはさらに増えることが予想される。そして墳丘と周堤上では、配置についても大きく違う可能性が高い。地域によっては、配列間隔の疎密の差が墳形や規模にも表れることから、被葬者の階層差が反映されているとの指摘や、見

た目を重視した配列との捉え方もある。しかし、15トレンチでの状況が単独樹立であればそれは「並べる」ではなく「置く」という行為になり、疎密の差はあれ、並べることに意味のあった円筒埴輪の役割が大きく変化している可能性がある。また、62号墳のなかには、自立することができないほど、形状が変化したものを採用する場合がある。円筒埴輪の配列には祭祀・儀礼という意味以外でも、見た目も重要な要素となっていたはずである。このような状況は、そこに埴輪を並べる側の人間の意識が大きく関係していると思われる。また、良質の埴輪を採用したくても、それができなかった生産体制そのものの問題もあったかもしれない。

（3）周辺古墳との関係について

祇園原古墳群のなかには、百足塚古墳以外でも埴輪を採用した古墳が複数知られる。その数は表11のとおりで7基を数える。

表12　祇園原古墳群内で埴輪をもつ古墳一覧

古墳名	墳形	墳長（m）	川西編年	形象
大久保塚（92号墳）	前方後円墳	８４	Ⅲ	
５９号墳	前方後円墳	７１	Ⅴ	鶏　人物
６１号墳	円墳	１０	Ⅴ	
百足塚（58号墳）	前方後円墳	８２	Ⅴ	家　器材 人物　動物
６２号墳	円墳	１３	Ⅴ	器材
水神塚（56号墳）	前方後円墳	４９	Ⅴ	人物
機織塚（47号墳）	前方後円墳	４９	Ⅴ	動物

古墳群内で初めて埴輪を採用したのは大久保塚（92号墳）古墳である。野焼き焼成で黒斑がある。川西編年のⅢ期に相当し、西都原古墳群の女狭穂塚古墳との関連も指摘されるが、女狭穂塚古墳の埴輪は畿内的要素が強いのに対し、大久保塚では外面2次調整にヨコハケではなく、ナデを採用するなど独自性が強く、典型的なⅢ期の特徴を備えているとは言い難い（有馬1995）。おそらく在地工人による生産が考えられるが、これに続く古墳はなかったようである。祇園原古墳群で再び埴輪が採用されるようになったのは、後期になってからである。

現在調査を行っている59号墳は、百足塚古墳の北東の高所に位置し、墳長70ｍで2段築成である。ここでも墳頂とテラスに円筒埴輪列が存在し、かなり近接して並べられている状況が判明している。ここで採用されている埴輪は実にバリエーションに富んでおり、４条５段構成を主体としながらも、３条４段から５条６段まで確認されている。最下段の突帯には断続ナデ技法をもつものもあり、突帯の位置や段間長のバラつきも大きい。ハケメに使用される工具も木目の荒い板を使用し、色調も赤褐色系が多いなどの特徴がある。複数の工人集団からなる生産体制が想定されるが、そのなかに百足塚古墳の埴輪の系譜につながる要素を現状では見出すことはできない。あえて共通点を挙げれば、基底部調整に外面板押圧を採用することだろうか。59号墳では百足塚古墳と同様に、墳丘本体から築造時期につながるような須恵器に恵まれていない。しかし、東側の周堤上に築かれた陪塚（210号墳）からは多量の須恵器が出土している。整理中ではあるが、蓋坏は田辺編年のMT15からTK10型式併行期に相当すると思われる。百足塚古墳とその周辺陪塚から出土する須恵器は大半がTK43型式で、古いものでもMT85型式であることから、百足塚古墳より１段階古い首長墓の可能性がある。

このほか水神塚古墳（48号墳）、機織塚古墳（47号墳）は、ともに墳長50ｍ前後で、後期の築造と考えられる。詳しい時期は不明だが、円筒埴輪のほか形象埴輪片も出土している。面的な

図版 88　祇園原古墳群の分布図

調査を行っておらず、破片資料が中心だが、機織塚では６条７段構成の個体がある（有馬 2000）。最下段突帯に断続ナデをもつものもあり、胎土や色調も 59 号墳に近い。

このように、祇園原古墳群内には後期に埴輪を採用する古墳が複数あるものの、百足塚古墳の埴輪系列につながる資料を見出すことができない。むしろ百足塚古墳が例外的な存在になる可能性すらある。59 号墳は今後整理作業を進め、報告書を刊行する予定である。ここで百足塚古墳との踏み込んだ比較分析を行っていきたい。

第２節　形象埴輪

（１）形象埴輪の特徴

①家形埴輪

家形埴輪は４種類６個体を掲載した。屋根の造り、身舎、高床か平屋で分類することができる。屋根には切妻、寄棟、入母屋があり、まれに片流れ式が出土する。本墳から出土したのは入母屋２個体（132・133）、寄棟４個体（134 ～ 137）で、切妻と片流れは出土していない。身舎については稲村繁が、四面すべてが入口・窓で開放されるもの、入口・窓を表現しない壁を１面以上もつもの、窓がなく入口のみ１面に表現されるものの３者に分けて、それぞれ祭殿・住居・倉庫と想定している（稲村 2000）。この分類に従えば、132 と 133 および 135 が住居となり、134 が祭殿、136 と 137 が倉庫になる。また、134 と 136、137 が高床建物で、あとは平屋建物である。詳細については本文で述べているが建物の種類ごとにあらためて特徴を列記したい。

132 と 133 は入母屋造りの平屋建物で、住居を表現した可能性が高い。上屋根と下屋根は別造りで成形された分離式と考えられるが、下屋根の受部となる箇所が欠損しており、確証はないが、上屋根の下部構造や、全体の形状が大型であることから分離式であると考えた。上屋根には剥離しているが権威の象徴ともいえる堅魚木が載り、破風の上端は千木の表現がなされていることから、身分の高い人物の居住空間であったことが伺える。身舎は２個体とも残存状態が悪い。平側には方形の刳り貫きがあり、入口の可能性が高い。また、他にも窓が１箇所以上存在した可能性がある。135 も同じく住居と考えられる。寄棟造りで特段装飾表現はないが、上部には堅魚木が載っていた可能性がある。平側には方形の刳り貫きがあるが壁の上部に設置されているため、入口ではなく窓と考えたい。入口もどこか別に設置されたはずである。

134 は四方が開放された寄棟造りの高床建物で、祭殿を表現したと考えられる。８本の柱によって支えられ、身舎は柱間が吹き抜けとなっている。この吹き抜けを観察すると、下辺の両端が高く、中央が抉れる箇所がある。この表現は出入口の表現とされ、１箇所ないし、対面同士に１箇所ずつあるのが一般的だが、これには少なくとも３面４箇所にその表現がある。

136 と 137 は寄棟造りの高床建物で倉庫を表現したと考えられる。身舎は透孔以外の刳り貫きはなく、平側についた扉は閉じられた状態である。

県内における家形埴輪については西都原古墳群出土の子持家が有名であるが、これらは５世紀の所産であり、現在のところ本墳の築造時期に近い類例は皆無である。古墳時代の建物は建築部材が残ることがほとんどないことから、家形埴輪が当時の建物の状況を知るうえで重要な手がかりになることはまちがいない。しかしながら、細かい部材の省略化や類型化が進んでおり、実際の建物のモデルと考えるには不十分である。祭殿とした 134 についても柱間は２間×２間であるが、実際の遺跡から検出されるものはそれ以上の規模が多い。また、壁は柱が表に表れない大壁

の表現となっているが、実際の建物の表現というよりも、埴輪としての表現と考えたい。

②器材埴輪

器材埴輪は盾、甲冑、大刀、太鼓が出土している。

このうち盾は墳丘上のテラスもしくは墳頂への樹立が考えられる。盾は高橋克壽氏が基本的な構造の違いから１～３類の３つのタイプに分類している（高橋 1992）。このうち３類は円筒埴輪よりも細い上すぼまりの円筒脚を作り、その上部に断面が中空の紡錘形を呈する盾面を組み上げるものである。さらに上縁が丸く突出し、左右両側縁が内湾する外形とされる。また文様は外区に粗大な鋸歯文が描かれ、内区は無文となることが多いとされる。本墳出土の盾形埴輪はこの３類に近い特徴をもつ。しかし、両側縁については 162 と 163 が内湾する形状であるのにたいし、164 は直線的な形状を呈するなど、異なった形状のものがあるようである。文様にしても外区だけでなく内区にも文様が描かれるなどの特徴をもつ。しかしながら、全体的な特徴は３類を逸脱するものではないと考える。また３類は５世紀後葉以降に登場するとされており、時期的にも矛盾するものではない。なお、62 号墳からも盾と考えられる破片が出土している。形状は判然としないが、百足塚古墳よりも小型である可能性が高い。

甲冑は衝角付冑と挂甲、草摺りを表現したものが２個体以上あったようである。150 は基底部が欠損しているが、甲冑本体が復元できた個体である。これまでの例でいくと、甲冑形埴輪は４世紀後葉に登場し、６世紀にはほぼ姿を消した可能性が高いとされる（高橋 1992）。このため現段階では本墳出土の甲冑形埴輪が下限資料となるのではないだろうか。６世紀に下る例がなかったことから、本墳のように挂甲で表現される例を管見の限り探すことができなかった。しかし、実物を写実的に表現したとは言い難く、細部の省略化が目立っている。

大刀形埴輪は柄部が欠損しており、全形は判然としない。鞘には鰭状の粘土板を貼り付け、盾を意匠したと考えられるが退化が進んでいる。

太鼓は人物埴輪とのセットが考えられるが、その大きさなどから太鼓単体で作られたと考えている。これまでは群馬県の天神山古墳出土の打鼓男子埴輪のように、人物埴輪が抱えている例はあったが、単体での出土は例がない。打面と考えられる面には装飾表現はなく、裏面に文様が描かれている。実際に音を出すためというよりも、儀礼的な意味があったのではないだろうか。

③柵形埴輪

柵形埴輪は一定の空間を囲んだり仕切ったりする遮断施設を表した埴輪である。楕円形の器形で口縁を鋸歯状にしたものである。今回は 12 個体を掲載したが、残った破片の状況から、さらに２個体程度存在したと思われる。これについては森田克行氏が分類を行っている（森田 2003）。まず平面形態から楕円形・円形・長方形の大別し、さらに突帯条数と突帯構成の要素を加味して細分している。突帯条数については３条をⅠ式、２条をⅡ式、無条をⅢ式とし、突帯構成は一条ずつ分散して配した単帯構成をａとし、数条を近接して貼り付けた複数構成をｂとした。この分類に従えば本墳出土の柵形埴輪は楕円Ⅱａ式が 11 個体、楕円Ⅰａ式が１個体となる。ただこの楕円Ⅰａ式については、Ⅱａ式の中位に１条付加しただけのもので、形状は変わらない。製作における粘土紐の積み上げや突帯の貼り付け、透孔の穿孔などは円筒埴輪の技術と同じと考えられる。基底部調整を行っている個体はなく、底面は自重により肥厚しているが、円筒埴輪より器高が低いために大きく歪むことはなかったと考えられることから必要なかったと思われる。器形と製作方法については非常に均質的であるといえるが、法量については、器高が 34.7 ～ 44.6㎝の範

囲内にまんべんなく存在しており、底径を含めて法量からまとまりを設定することは困難である。配置に際して何らかの意図があった可能性も否定できない。鋸歯数についても 12 ～ 16 個とばらつきがある。

④人物埴輪

人物埴輪については復元資料のほか、多数の破片資料を掲載した。個々の特徴については既に述べているので、ここでは器種や個体数の整理を中心に行っていきたい。

復元資料は８個体である。このうち女性は３体で、肩巾をかけ性器を露出させる女１体と、袈裟状衣を着る女が２体ある。破片資料を含めて女性埴輪はこの３体とみてよいだろう。性器を露出させる女は、右手で上衣の裾を捲りあげる仕草で、天宇受売が神懸り為て胸乳を掛き出て裳紐を番登に忍し垂れ舞い踊る姿を彷彿させるものである。また、袈裟状衣を着る女のうち１点は両腕を前に出して器を捧げ持つ仕草である。この食膳奉仕については采女の役割とされるが、いわゆる御酒御饌の共饌で宗教的側面をもつことになる。残りの１点は両腕とも欠損しているが、残存部分の状況から同様の仕草と考えたい。よって女性埴輪３点は何らかの儀式を司る役割を担っていたと考えられる(1)。

残る５体はいずれも男性である。193 は跪く人、194 ～ 196 も男性埴輪だが 195 以外は腕が欠損しており、所作は不明である。195 は右手を上に上げており、馬を曳く仕草と考えられる。237 は盾持ち人である。

次に破片資料を整理して、残りの人物の把握に努めたい。まず頭部がある程度復元できた資料が５点ある。198 は鍔付きの帽子を被っている。197 と 199 は頭巾状の被物をしている。200 は顔に線刻を施し黥を表現している。201 は顔面の一部で、鍔付きの帽子を被っているが、鼻筋や鼻孔の表現も明瞭で、鼻上から額そして頬にかけて赤色顔料が極めて良好に残っている。これと同一個体の可能性があるのが、202 ～ 206 にかけての資料である。202 は衣服が表現された胸部で、203 と 204 は腰帯をまいた胴部、205 と 206 は草摺状の衣装である。また、履と考えられる 214 や靫（216）もこれに加わると考えられる。これらの共通した特徴として、赤色顔料を塗布し、調整、胎土、焼成ともに良好である。また、沈線の施し方も他の資料と比べて明らかに丁寧に行っている。以上のことからこれらの資料は貴人を表現していると考えたい。確実なのは１人だが、腰帯をまいた胴部資料２点は別個体と考えられることから、２人以上の可能性もある。また、205 と 206 の状況からこの人物が座位であった可能性が高い。

217 ～ 231 は力士と考えられる資料である。２体あるのは確実で、うち１体は頭部から基台までの破片を確認したが、要所の接点を欠いているため全体の復元には至らなかったが、おそらく器高は 120㎝以上になることが予想され、人物埴輪のなかでは最大となる可能性が高い。

232 は頭部から上半身の一部が残存した資料で弓を引く所作と考えられる。男性器を表現した 236 はこれまで紹介した個体とは別になる可能性が高い。このほか盾持ち人と考えられる資料が３個体ある。

以上のことから人物埴輪の個体数をまとめると、総数 19 体を数える。性別では女性３、男性 16 となる。女性は神への儀式を司る役割をもつ巫女と考えられる。男性は貴人、跪く人、馬を曳く人、弓を引く人、力士２、盾持ち人３、男性器を含めた所作不明７ということになる。

⑤動物埴輪

形象埴輪で表現される動物は大きく鳥、獣、魚に分けられる。このうち魚は関東地方に限られ

本墳でも出土していない。

鳥は復元品４体のほか破片資料の状況からもう１体の存在が考えられる。また、明治 32 年に坪井正五郎が祇園原古墳群から採集したとされる動物埴輪を実見する機会を得ることができた(2)。資料紹介では猪形埴輪としていたが、鳥形埴輪の頭部である可能性が高い。調整法や色調から本墳出土の形象埴輪と考えてよいと思われる。これにまちがいなければ鳥は６体ということになる。鳥形埴輪の基本的な造形は円筒形の基台の上に胴体を載せる作り方にある。本墳出土の鳥形埴輪もこれに倣うが、基台と体部との境が不明瞭となっており、突帯の存在によってかろうじて区別できる状態である。また尾を円筒状に仕上げるという特徴がある。さらに 241 と 242、246 は止まり木に止まった状況を表現している。

鳥の種類すべて鶏と考えられる。鶏冠の表現がある 242 や 244 はすぐ鶏と判断できるが、長いくちばしをもつ 243 は水鳥の可能性もある。しかし、非常に長い尾は水鳥にはほとんどみられない表現であることや、頭部には耳羽と考えられるボタン状の粘土塊を貼り付けることから、やはり鶏と考えるべきだろうか。244 は鶏冠をもち羽毛を逆立てて威嚇する様子を表現しているが、逆立ち方向が実際とは逆である。動物埴輪の多くは実物の動物をみて作るのではなく、動物埴輪を手本にして作るといわれており、この製作者も実物をみることはなかったのだろう。

次に獣類だが、犬、鹿、猪、馬のほか獣種を特定できなかったものがある。

249 は復元でできた犬形埴輪である。脚が直立状態ではなく、後ろ脚に体重をかけ飛びかかるような仕草を表現している。251 と 252 も獣類の頭部で犬、猪、鹿の可能性があるものである。253 は両耳の間に角と思われる欠損箇所があり、鹿であることは間違いない。254 も鬣の存在や顔の表情から猪だろう。257 ～ 267 は馬と考えられる資料である。馬は２体存在することが確実で、馬具を装着した飾り馬と裸馬と考えられる。

以上のことから動物埴輪をまとめると、鶏が最大で６（掲載分５体）、犬、鹿、猪、馬２、獣種不明が２の合計 13 体ということになる。

（２）形象埴輪群の配置状況について

これまで、それぞれの埴輪について種類ごとにその特徴や、個体数の整理を行ってきた。個体数についてもう一度確認すると家６、盾３、甲冑２（ないし３）、大刀、太鼓、柵 12 以上、人物 19、動物 13 となり、総数 57 体を数える。

形象埴輪群を検討する場合、出土した埴輪の種類や所作を明らかにする必要がある。そしてもっとも重要なのが、それらの埴輪がどのように配置されていたかを復元することである。しかし、百足塚古墳では、すべての埴輪が原位置を留めていない。とくに西側周堤上にあったと思われる形象埴輪群の場合、まず周堤そのものが大きく掘削され、埴輪は周溝もしくは、周堤外側の外周溝に転落している状態で検出されている。個体のよっては、破片がひとかたまりとなって出土することもあるが、数メートル以上離れている場合や、周堤外側と周溝内同士の破片が接合できることも少なくない。自然転落だけでなく人為的な遺棄行為も想定されている。そのような制約があるのは承知の上で、転落位置が樹立位置に近いという想定のもと、可能な限り配置復元を試みてみたい。

①西側周堤上の状況について

西側周堤上の形象埴輪群は、横穴式石室へと伸びる土橋から南へ 40 ｍにわたって続くと想定される。ここは畑の耕作による影響で、北側ではとくに攪乱が深く残存状態が悪いが、南へいく

ほど影響が少なくなり、遺存状態が良くなる。図版 86 で示すように出土傾向から、南側では「家と人物」の空間、北側では「動物と人物」の空間に分類することができる(3)。

まず「家と人物」の空間からみていきたい。家形埴輪は群の南端に集中しているのが分かる。周溝内と外周溝に分かれているが。入母屋造の２個体はいずれも外周溝から、倉庫と思われる高床寄棟造の２個体はその逆の周溝内からの出土となる。平屋寄棟造は破片がかなり散乱しているが、周溝内が中心のようである。四方吹き抜けの高床寄棟造は、周溝内と周堤外側に分かれて出土しているが、周堤外では入母屋造の破片と混在し、周溝内では倉庫の破片と混在する。このため、家は群の南端に集中し、同じ種類同士が隣接して配置されていたと想定される。

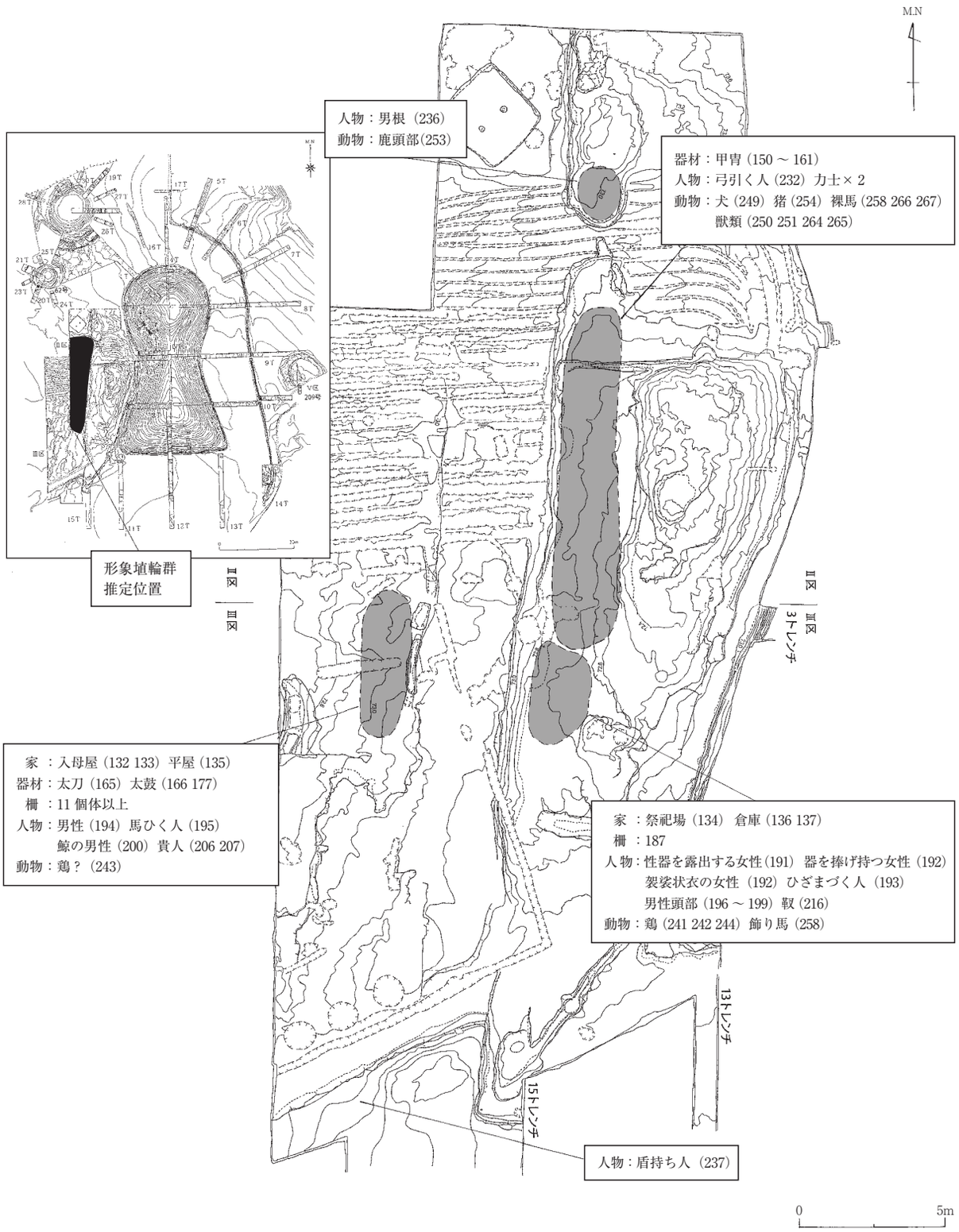
次に家の破片と混在しているのが柵形埴輪である。家よりやや北側まで広がるようだ。特筆すべきは１個体を除いてすべて外周溝からの出土となる。柵形埴輪は、全部で 13 個ほどあったと思われる。埴輪群すべてに並べるには少ないことや、出土の偏りから判断すると、家形埴輪の外側に配置された可能性がある。

これに続くのは人物埴輪と動物埴輪となる。人物埴輪は３体の女性と跪く人の破片が主に周溝内から出土し、周堤外の外周溝からは、両腕欠損の男性と馬曳く人、それに貴人の可能性がある個体が出土している。動物埴輪では鳥が中心で、周溝内には２ｍの範囲３体が近接して出土している。破片もかなりまとまっており、樹立位置に近いと想定される。鳥のもう１体は外周溝からの出土となる。また、馬具を装着した馬もこの空間からの出土である。破片は広範囲に散乱しているが、馬を曳く人とのセットが考えられる。

器材埴輪は、大刀と太鼓が外周溝内から出土している。甲冑も出土しているが、破片の散乱は広範囲に及んでおり想定が難しいが、151 はⅡ区の周溝内で石室へとむかう土橋近くで破片がまとまっているようだ。太刀と太鼓は人物埴輪片と混在しており、太鼓は何らかの人物とのセット関係が考えられる。

次に「動物と人物」の空間である。ここは攪乱の影響が大きいため、復元できた個体が少なく、出土位置の絞込みが難しい。人物では２体の力士と弓を引く人、それに男根がある。力士は空間の南側に集中し、「家と人物」、「動物と人物」との中間に位置する可能性がある。それに続いて弓引く人があり、男根は群のもっとも北側から出土している。動物は犬、猪、馬、鹿のほか獣種不明が何体か存在する。犬は弓を引く人に近く、鹿は男根に近い位置からの出土となる。犬は首輪をつけており、飼犬と思われる。

以上のことから、ここでの樹立状況を復元すると、まず南側から６体の家と、柵形埴輪が並べられたと想定できる。家は祭殿、住居、倉庫がセットとなっていることから、首長の居館を再現した可能性がある。それに続くのが人物と鳥となる。人物は、性器を露出させる女性や、器を捧げもつ女性など３体の巫女と跪く人、馬を曳く人、貴人の存在がある。馬を曳く人の傍には馬の破片があり、馬具を装着した飾り馬だったと思われる。４体の鳥形埴輪のうち鶏と考えられる３体（241・242・244）は転落位置から、近接して樹立された可能性がある。また、このうち２羽は止まり木にとまった状況をしめし、１羽は頸の羽毛を逆立てた表現をあらわしている。鶏が止まり木にとまるのは夜の時間をあらわし、羽毛を逆立てるのは昼の鶏の表現といえる。唯一外周溝から出土した 243 は、口元の形状から水鳥の可能性もあると先に述べている。長い尾や耳羽の表現は鶏固有のものだが、出土位置の違いから、先の３羽とは違う種類も考えられよう。動物埴輪全体にいえることだが、製作者が実際の動物を観察して作っているとは到底思えないものが存



図版 89　形象埴輪出土位置

在する。244 のように羽毛の逆立て方が反対というのは、一番分かりやすい例であり、それは製作の簡略化とはまた別問題である。このほか器材埴輪には、太鼓や大刀があり、これらの組み合わせから、何らかの祝祭空間を示しているとみてよいだろう。

これより北側は埴輪片が少なくなり、出土位置も判然としないが、まず２体の力士があり、それから弓を引く人や犬、それに猪や馬、獣種不明の動物埴輪が数体含まれると想定される。弓を引く人や犬の、猪の組み合わせは狩猟場の表現を想像させる。さらに埴輪群の北端で、鹿と男根が出土している。鹿は狩猟対象物でもあり、儀式の際の神使いともいえる存在である。男根については体部が確認できないため詳細は不明。

②盾持ち人

盾持ち人も西側の周堤上に樹立されたと考えられるが、状況がほかの埴輪と異なる。238 は周堤のもっとも南側の隅角付近からの出土であり、239 は百足塚古墳の北西側からで、62・63 号墳との間から出土している。周辺からほかの埴輪は出土しておらず、単独樹立であった可能性が高い。240 はⅡ区の周溝内からの出土となる。

③墳丘上の出土状況

墳丘から出土しているのは盾形埴輪のみである。円筒埴輪列のなかに樹立されたと考えられるが、どの程度の割合で立てられたかは不明である。

第３節　百足塚古墳の築造時期について

百足塚古墳は古墳時代後期の日向地方を代表する首長墓といわれている。本稿で掲載した円筒埴輪の形状などからも、古墳時代後期築造ということに疑いはなかろう。しかしながら、さらに詳細な時期を検討するにいたって困難が生じている。その理由として、百足塚古墳本体から、築造時期を反映するような須恵器の出土に恵まれていないことにある。墓道近くの周溝内からは、甕や横瓶の出土はあるが、口縁部が欠損しているうえに、埋葬行為に伴うものか判然としないため、年代決定の決め手に欠ける。これに対して、まとまって須恵器が出土しているのが陪塚と考えられる 62 号と 209 号である。

62 号墳は、百足塚古墳と同規格の円筒埴輪とともに須恵器が出土している。原位置を留めていた資料はないが、墳丘からも破片が出土することから、埴輪列の前後に供献されていた可能性が高い。このうち蓋坏は TK43 ～ 209 型式に相当する。

209 号墳は墳丘が完全に掘削され、周溝のみが検出された径 12 ｍの円墳である。埴輪を伴わず須恵器のみが多数出土しており、このような状況は現在調査中の 59 号墳でも確認されており興味深い。出土数は 50 体以上に及び、蓋坏のほか、有蓋と無蓋の長脚２段透かしの高坏が中心である。法量や形状にややバラつきはあるものの、MT85 ～ TK43 型式に相当すると考えられる

以上のことから、本墳よりも陪塚が先に築造されることはないと考えるならば、百足塚古墳の築造時期は MT85 型式併行期前後に求めることができよう。

第４節　まとめ

今回の調査では、西日本でも有数の形象埴輪群や、県内最古級の横穴式石室の発見など大きな成果があった。形象埴輪については調査当時、西日本で後期の形象埴輪が大量に出土した例がないため、同時期の埴輪が多い東日本との関係を指摘する意見もあったが、大阪府高槻市今城塚古

墳での埴輪群像の発見によって、西日本でも大王墓を中心に、有力首長墓での形象埴輪の樹立が明らかとなった。

百足塚古墳と今城塚古墳は形象埴輪群の樹立位置や、埴輪の組成などで類似する点が多いことから、その関係性が指摘されている（高橋 2004）。今城塚古墳から出土する須恵器の多くがTK10 型式であることから、築造時期からも矛盾はない（白石 2006）。しかしながら、過去に今城塚古墳の埴輪を実見したことがあるが、埴輪工人の派遣など、直接的な影響があったとは考えにくい。百足塚古墳の埴輪は、今城塚古墳をモデルとして、その情報を知りえた地元工人による製作と考えたい。

県内には 2000 基以上の古墳が存在するといわれるが、埴輪を採用した古墳は 50 基前後を数えるに過ぎない。定型化した埴輪の採用についても、端緒となったのは西都原古墳群の女狭穂塚古墳であり、中期前半の築造とされている。資料についても表採品が多いことから、比較検討が難しいのが現状である。そんななか、祇園原古墳群には埴輪を採用する古墳が複数存在する。現在はその一つである 59 号墳の調査を行っており、次年度以降に報告書を刊行する予定である。59 号墳の築造時期は百足塚古墳より古い可能性が高い。先述したとおり、円筒埴輪はバリエーションに富んでおり、そのなかで、百足塚古墳の埴輪に繋がる系譜を見出せるかが重要となろう。また、埴輪窯や粘土採掘跡の発見にも期待したい。

【註】

（1）器を捧げるという食膳奉仕は御酒御饌の共饌であり、宗教的側面をもつことから、本墳出土の女性埴輪をまとめて呼称するときは巫女とする。

（2）西都原考古博物館の特別展にて実見させていただいた。

（3）この分類は有馬義人が以前行っているものである（有馬 2005）

【参考文献】

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』

山内英樹 2003「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16

森田克行 2003「今城塚古墳と埴輪祭祀－継体陵論の道程」『東アジアの古代文化』117 号　大和書房

有馬義人 1995「児屋根塚・大久保塚古墳の埴輪」『宮崎考古』14 号　宮崎考古学会

有馬義人 2000「宮崎県の埴輪－その導入と展開－」『第 3 回九州前方後円墳研究会　九州の埴輪その変遷と地域性』九州前方後円墳研究会

有馬義人 2001「日向地方における埴輪の導入と展開」『平成 15 年度宮崎県地方史研究紀要』第三十輯

有馬義人 2005「百足塚古墳」『平成 17 年度秋季特別展王権と儀礼（埴輪群像の世界）』大阪府立近つ飛鳥博物館

竹中克繁 2003「九州における埴輪生産の受容と展開」『第 52 回埋蔵文化財研究集会　埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析発表要旨』埋蔵文化財研究会

忽那敬三 2001「鶏形埴輪の変遷と性格」『考古学研究』第 48 巻 3 号 考古学研究会

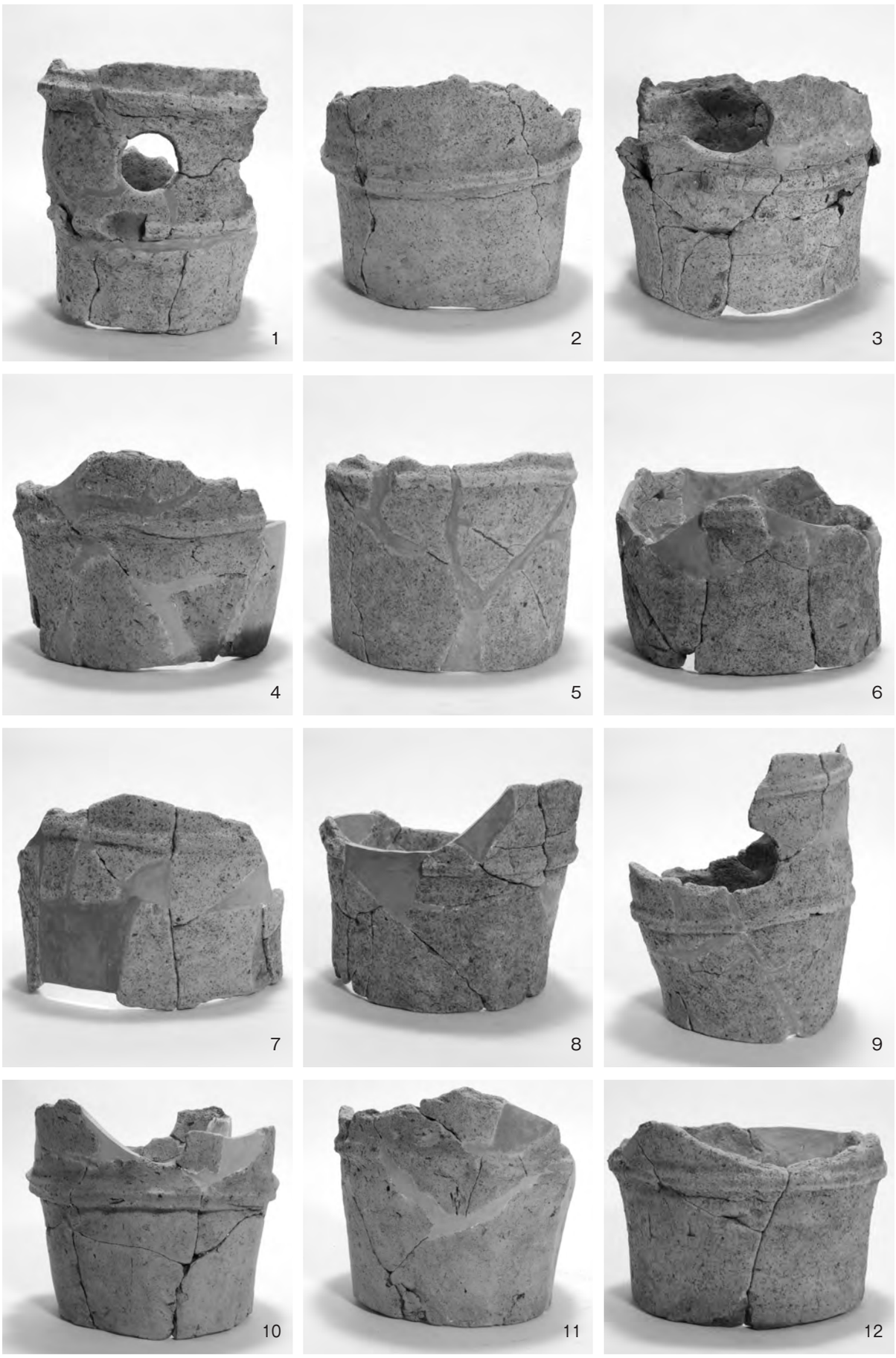
塚田良道 2002「人物埴輪の展開」『考古学研究』第 49 巻 2 号 考古学研究会

寺村裕史 2004「円筒埴輪列の変遷とその意義」『考古学研究』第 51 巻 2 号 考古学研究会

高橋克壽 2011「形象埴輪と葬送祭祀」『古墳時代の考古学 3　墳墓構造と葬送祭祀』同成社

高橋克壽 1992「器材埴輪」『古墳時代の研究』 9 雄山閣
高橋克壽 2004「埴輪まつりのうつりかわりと今城塚古墳」『開館 1 周年記念特別展発掘された埴輪群と今城塚古墳』
高槻市教育委員会　高槻市立しろあと歴史館
稲村繁 2000「家形埴輪の研究」『埴輪研究会誌』 4 埴輪研究会
一瀬和夫・車崎正彦編 2004『考古資料大観』 4 小学館
白石太一郎 2006「須恵器の歴年代」『平成 17 年度冬季企画展重要文化財指定記念　年代のものさし－陶邑の須恵
器』大阪府立近つ飛鳥博物館
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
宮崎まゆみ 1993『埴輪の楽器［楽器史からみた考古資料］』三交社
八木奘三郎 1899「埴製兎鶏猪」『東京人類學雑誌』第百五十九号　東京人類学
かみつけの里博物館 2008『第 17 回特別展　力士の考古学』
下関市立考古博物館 2013『平成 25 年度特別展　くらしとまつりの家－弥生時代から古墳時代の建物』
大阪府立近つ飛鳥博物館 2008『埴輪群像の考古学』

写真図版１　円筒埴輪①



13

14

15

16

19

17

写真図版３　円筒埴輪③

20

24

21

23

22

25

26

31

35

36

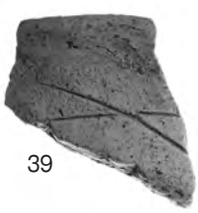
37

32

33

34

38


39

40

43

44

45

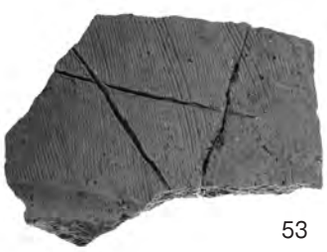
41

42

46

49

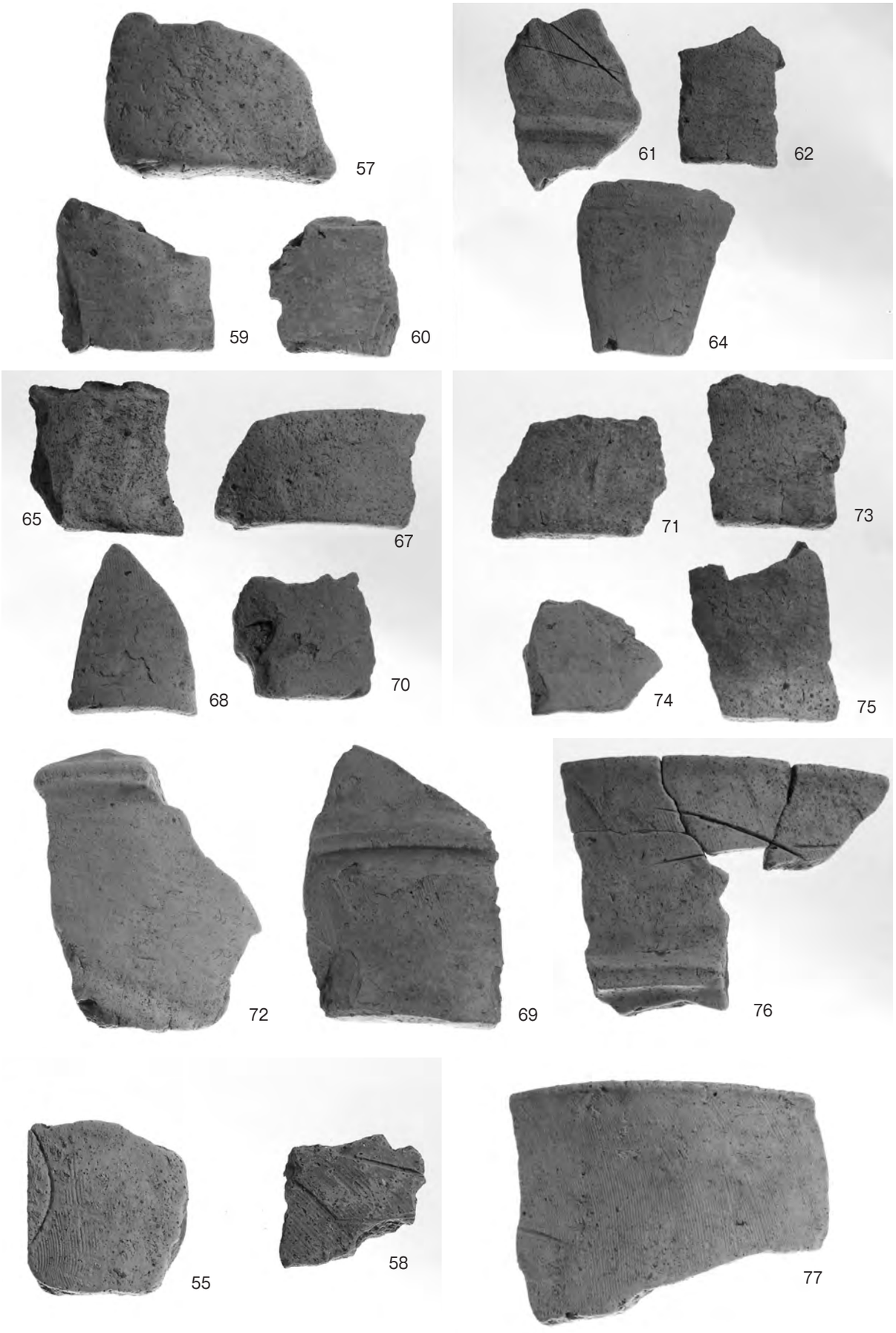
50

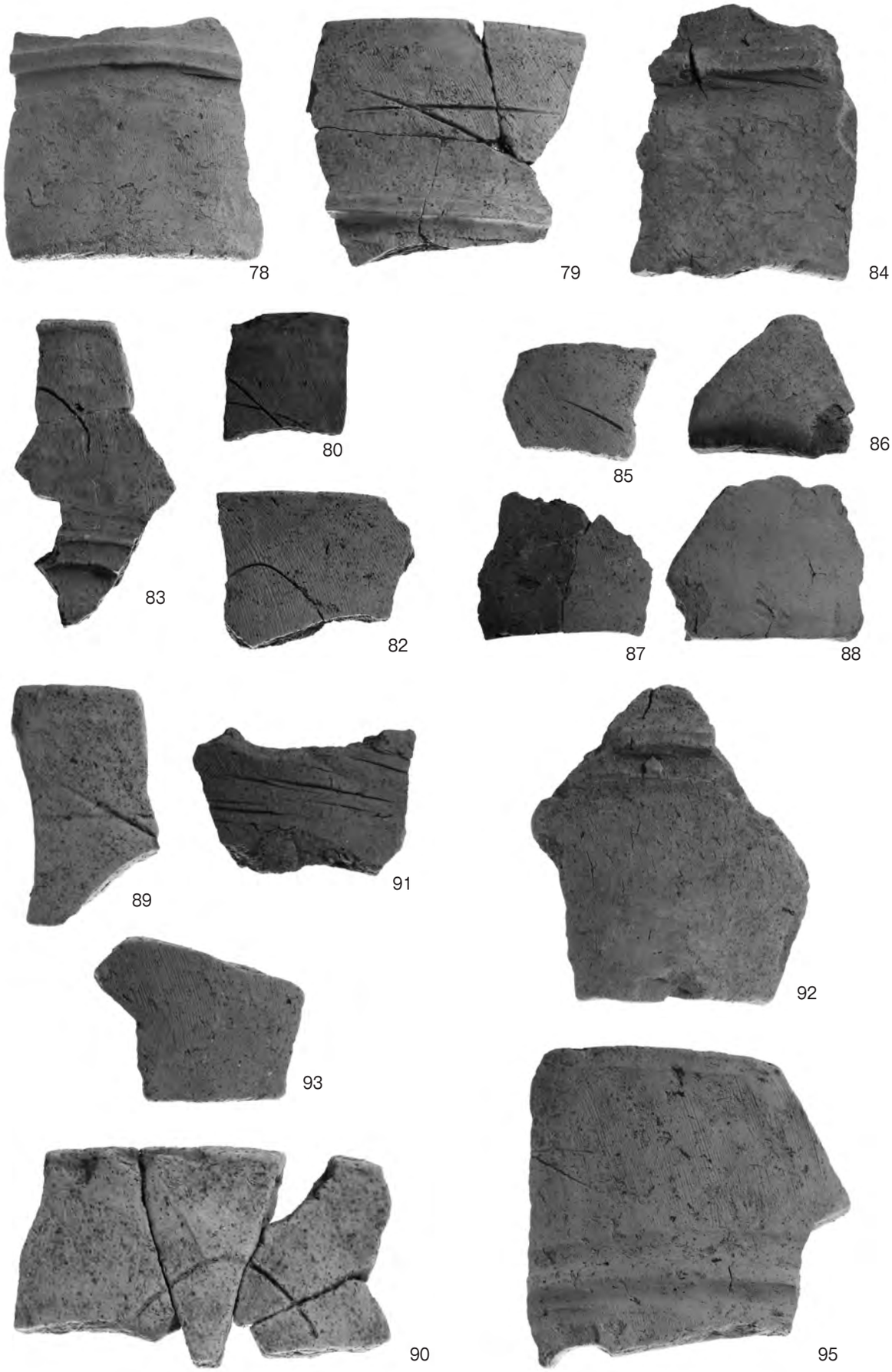

53

56

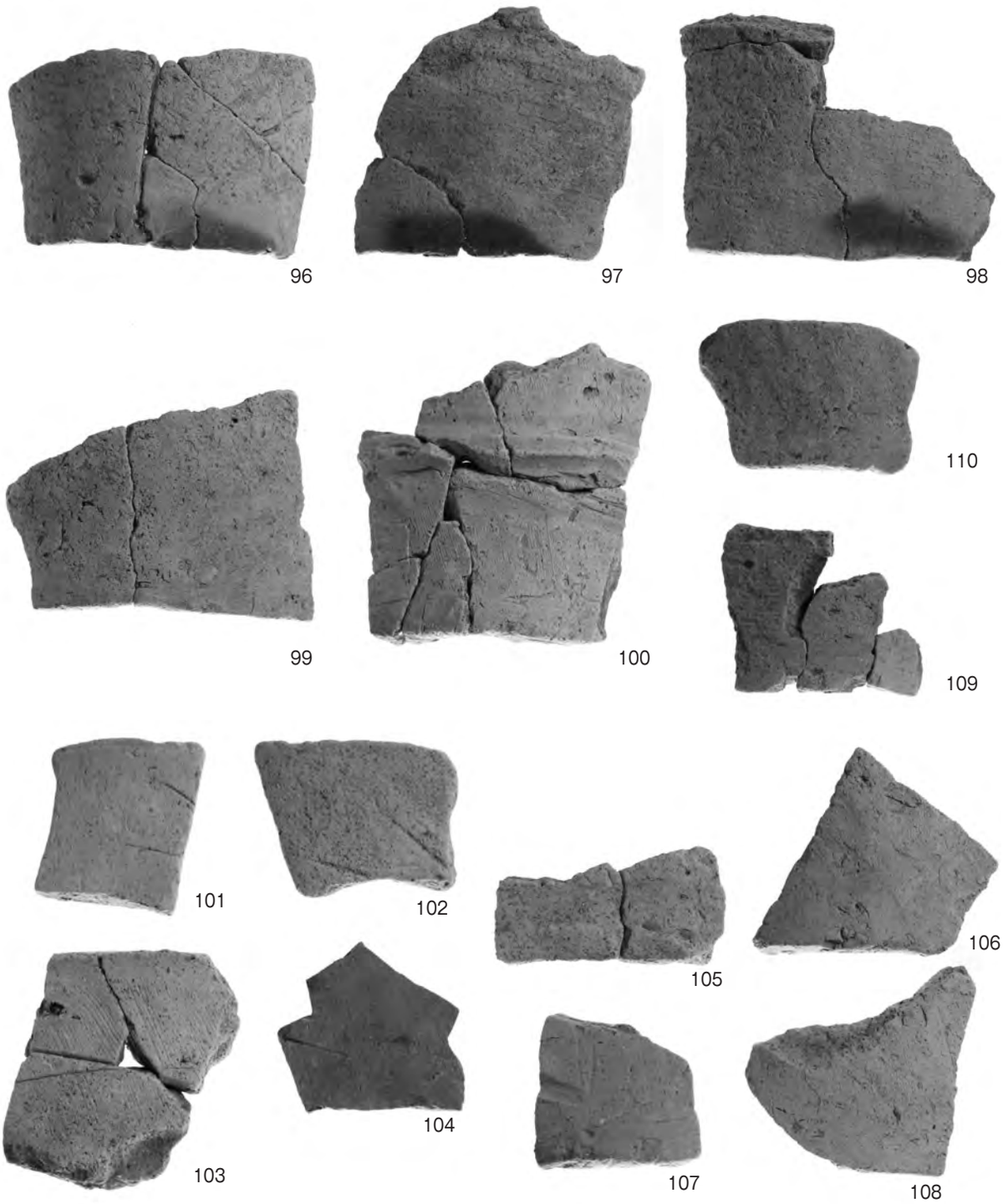
54

写真図版５　円筒埴輪⑤




78
79
84
80
85
86
83
82
87
88
89
91
92
93
90
95

写真図版７　円筒埴輪⑦



111

113

112

114

写真図版９　円筒埴輪⑨

115

116

116

121

124

122

123

125

128

129

126

117

130

131

118

120

119

写真図版 11　家形埴輪①

正面　136

右側面　136

後面　136

右斜め前　136

正面　137

右側面　137

右斜め前　137

写真図版 13　家形埴輪③

正面　134

右側面　134

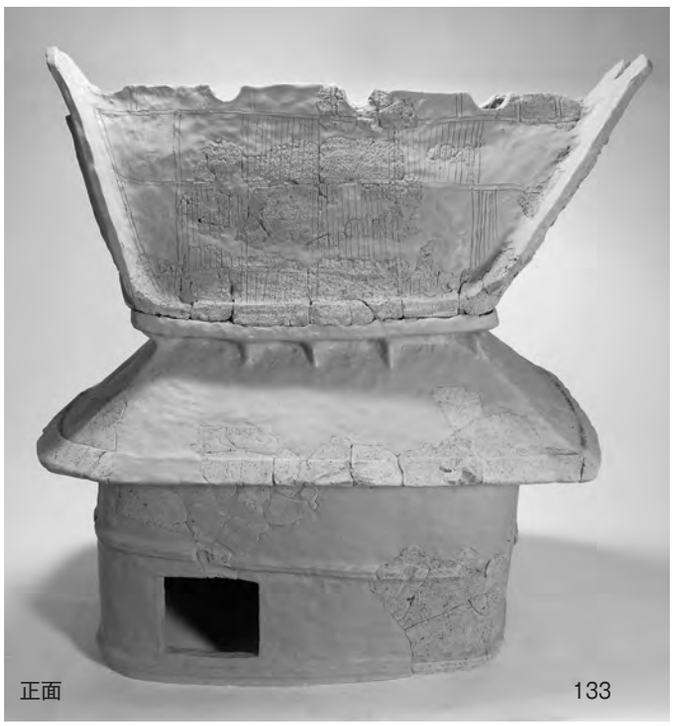
左側面　134

正面　132

右側面　132

右斜め前　132

写真図版 15　家形埴輪⑤



正面　133

右側面　133

右斜め前　133

正面　135

右側面　135

右斜め前　135

堅魚木

写真図版 17　器材埴輪①

正面　164

左側面　164

後面　164

正面　163

右側面　163

後面　163

正面　162

右斜め　162

後面　162

正面　150

左側面　150

後面　150

写真図版 19　器材埴輪③

正面　165

左側面　165

151

151

152

153

155

154

156

160

161

157

158

159

167

166

168

169

170

171

172

173

174

175

177

176

写真図版 21　柵形埴輪①

180

180

180

181

181

181

179

179

179

178

178

178

184

184

184

185

185

185

写真図版 23　柵形埴輪③

182

182

182

183

183

183

186

186

186

187

187

187

188

188

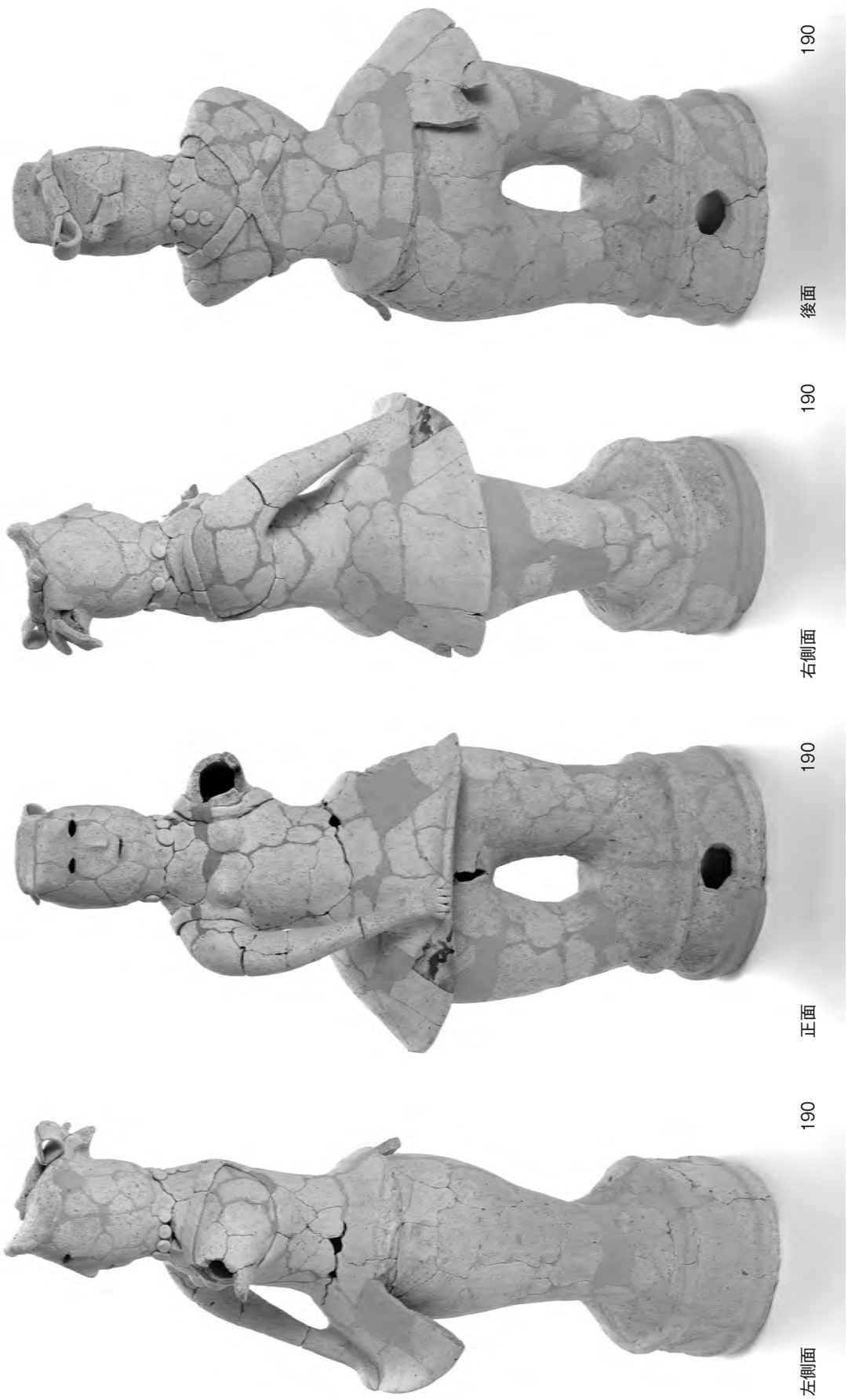
188

189

189

189

写真図版 25　人物埴輪①



左側面　191

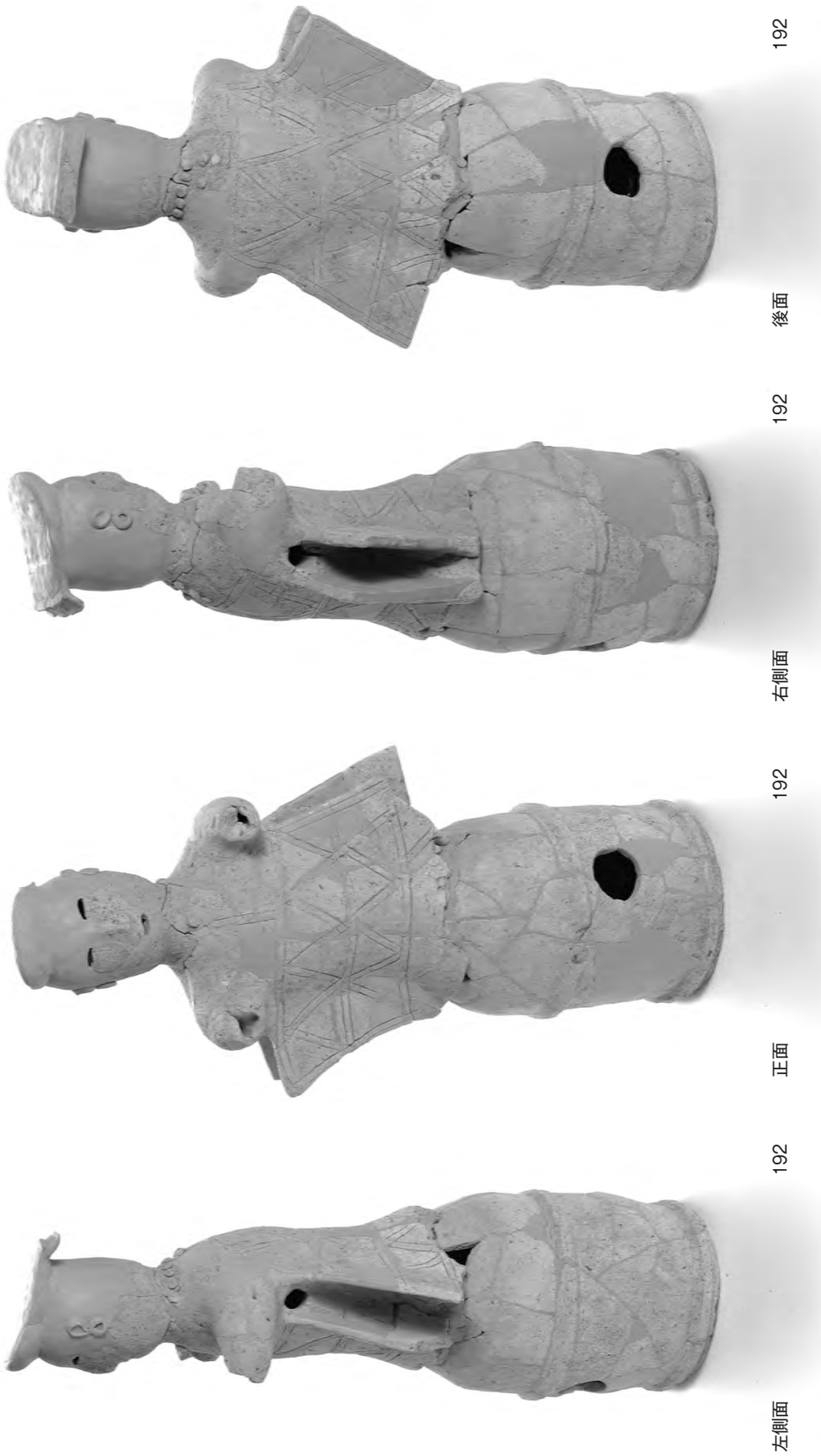
正面　191

右側面　191

後面　191

写真図版 26　人物埴輪②

写真図版 27　人物埴輪③



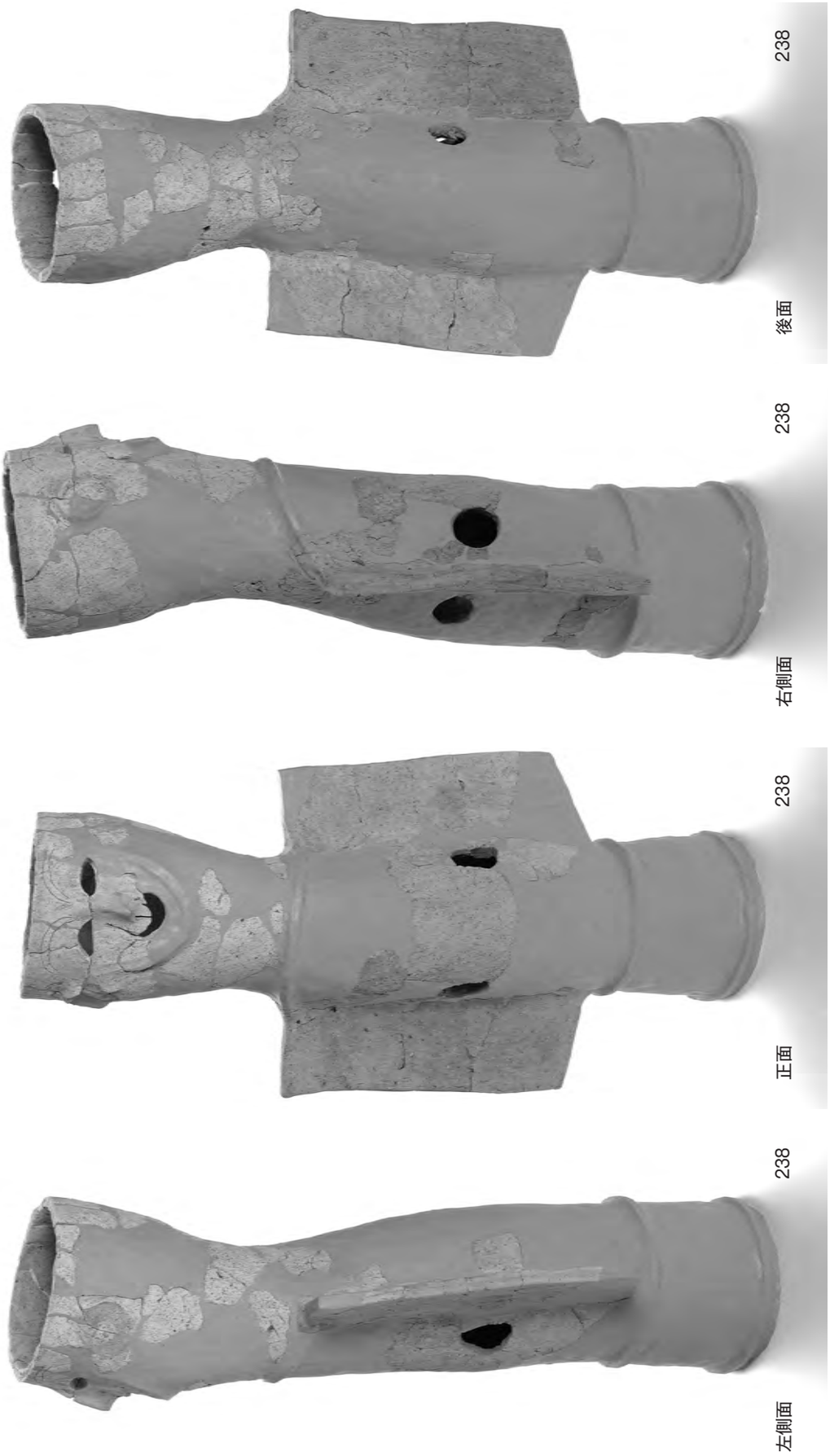
194 後面

194 右側面

194 正面

194 左側面

写真図版 29　人物埴輪⑤



正面　193

左側面　193

後面　193

右側面　193

写真図版 31　人物埴輪⑦

右側面　193

正面　193

後面　193

右側面　195

正面　195

後面　195

正面　239

左側面　239

240

202

199

201

207

上から　206

正面　206

写真図版 33　人物埴輪⑨

203

211

214

204

208

210

205

215

213

210

212

正面　217

後面　217

216

正面　218

左側面　218

219

221

222

225

232

231

220

230

229

227

226

写真図版 35　人物埴輪⑪

233

235

236

234

237

左側面　242

正面　242

左斜め前方　242

右斜め前方　242

左側面　241

正面　241

左斜め前方　241

右斜め前方　241

写真図版 37　動物埴輪②

左側面　243

左斜め前方　243

正面　243

左側面　244

左斜め前方　244

246

245

表　247

裏　247

表　248

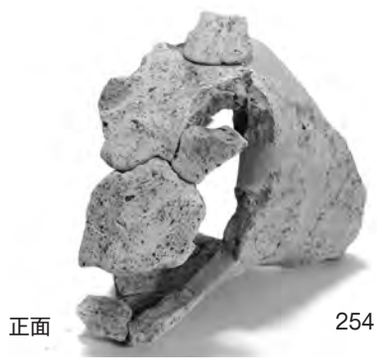
裏　248

写真図版 39　動物埴輪④

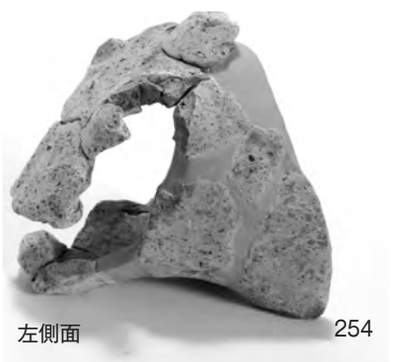
左側面　249

右斜め前方　249

後面　249



正面　254



左側面　254

251

253

253

左側面　257

上から　257

262

263

266

265

写真図版 41　須恵器①

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

365

363

364

367

366

368

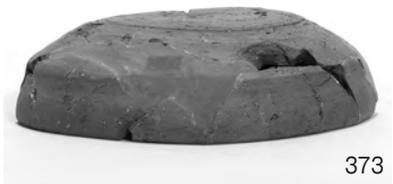
369

371

370

371

372


373

374

376

377

378

379

380

384

382

383

384

385

386

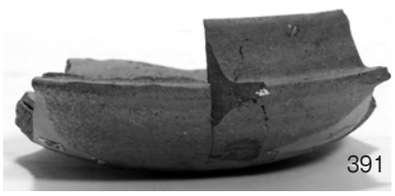
387

388

389

390

写真図版 43　須恵器③


391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきにゅうたばるこふんぐん　むかでづかこふん（にゅうたばるごじゅうはちごうふん）
書　　名	史跡新田原古墳群　百足塚古墳（新田原 58 号墳）
副 書 名	国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査報告書
巻　　次	2
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第７０集
編 著 者 名	樋渡将太郎
編 集 機 関	新富町教育委員会
所 在 地	〒 889-1403　宮崎県児湯郡新富町大字上富田７４９１番地 ℡ 0983-33-1022（直通）
発行年月日	２０１５年　3月２０日

所収遺跡・地区名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
むかでづかふん（にゅうたばるごじゅうはちごうふん） 百足塚墳（新田原 58 号墳） にゅうたばるろくじゅうにごうふん 新田原 62 号墳 にゅうたばるろくじゅうさんごうふん 新田原 63 号墳 にゅうたばるにひゃくきゅうごうふん 新田原 209 号墳	みやざきけんこゆぐんしんとみちょうおおあざにったあざひがしまた 宮崎県児湯郡新富町大字新田字東俣	47	1001	131° 25′ 39″	32° 6′ 9″	19970931 ～ 20120331	3000㎡	史跡整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
百足塚古墳 （新田原 58 号墳）	古墳	古墳時代	横穴式石室　周溝　周堤 円筒埴輪列　テラス	形象埴輪　円筒埴輪 須恵器　土師器
新田原 62 号墳	古墳	古墳時代	周溝	形象埴輪　円筒埴輪 須恵器　土師器
新田原 63 号墳	古墳	古墳時代	周溝　二重目周溝　テラス	須恵器　土師器
新田原 209 号墳	古墳	古墳時代	周溝	須恵器　土師器

概要

百足塚古墳は推定墳長 82 m、２段築成前方後円墳。今回の調査で大規模な形象埴輪群や横穴式石室の開口部を確認した。形象埴輪は人物、動物、家、柵などで主に西側周堤上に並べられ総数 60 個体を数える。また、墳丘のテラスや墳頂には円筒埴輪が高密度で並べられていた。横穴式石室は開口部のみの調査だが、県内最古の可能性が高い。

62、63、209 号墳はいずれも円墳でその位置関係から百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。62 号墳からは百足塚古墳と同規格の円筒埴輪が出土。63 号は埴輪の樹立は確認されていないが、２段築成であることや、一部に二重目の周溝が巡ることを確認した。209 号墳は墳丘が消滅し周溝のみが残存している状態だったが、周溝内からは 60 個体に及ぶ須恵器を検出した。

新富町文化財調査報告書７０集

百足塚古墳（新田原 58 号墳）
新田原 62・63・209 号墳

発行年月日　２０１５年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　有限会社　宮崎新生社印刷